
どこまでも。それが約束

エーベルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どこまでも。それが約束

【Nコード】

N3860S

【作者名】

エーベルト

【あらすじ】

ネギま！の二次創作。

もし原作以前から存在する「人」がいたら
どのように生き、生き続けるのか・・・
そんなよくあるオリジナル主人公ものです。

独自の解釈・理論が多々登場します。

駄文雑文誤字脱字、そんな文才のない初心者による拙いものです。

ステータス的なものなど <http://ncode.syosei.tu.ac.jp/n9235v/>

始まりの始まり（前書き）

原作キャラは当面出ません、原作までいくらかかかります。

始まりの始まり

ふと、何とはなしに目が覚める。

夜、寝ているとたまにある事だ。

何かの影響なのか、満月が近付くとそうなる。

魔力が高まり自然と高揚する。

神経が研ぎ澄まされるような、そんな感覚で目が覚める。

ふと古い記憶が蘇る。

自身と言う存在を認識したのは1歳の頃だったと思う。

あの頃はまだ何も知らなくて、ただ両親と使用人に囲まれて幸福の中にいた。

家は当時のイングランドに居を構えるエルレイアという小貴族だった。

私が親から与えられた名前は「ファーガス」

私はこの名前が嫌いだ……。

両親は二人ともブロンドの髪を持っていた。

私の髪も似たような金色をしていた。

父が青で母は緑の目をしていた。
私の瞳は母譲りの緑だった。
温かくて優しいそんなどこにでもありそうな家。

自我の目覚めから数カ月。
よくは覚えていないが経済的な状況な悪化で家を取り上げられることになったらしい。

後で知ったがこれは当時の戦争が原因であったようだ。

そして両親は決めた。

私を手放す事を……。

私は都合よく修道院に預けられた。
育ての親となるのは一組の男女だった。
修道士である二人に子供はおらず、尚且つ子供が欲しかったらしい。
エドワードとアンナ二人は実の子のように私を育ててくれた。

自分で言うのもなんだが当時の私は聡かった。
連れられて行った村で会った同年の子より早く歩き出し、喋り出した。

そんな私を二人はよく褒めてくれた。
神の加護があるなんて言ったりもしていた。

七歳の頃ふと私は二人がたまにコソコソとしているのに気付き始めた。

それに気付いた時は何故今まで気づかなかったのかとも思ったが、人には秘密の幾つかなどあって当然のものだと勝手に思っただけにすぎないようにした。

十二歳の時、決定的な言葉を聞いた。

『魔法』『魔力』

世俗と隔たりがある神の家と言える修道院にあってなお異端な言葉だった。

扉越しに聞こえたそれが私は気になってしかたがなかった。

だがここで私が出ていっても聞き間違いか何かだと言われるのが関の山だと考えた。

証拠を探そう、そう決めた。

十五の時、これもなぜ今まで気づかなかったのかと思うようなことに気付いた。

この家には私たち三人しか基本的に住んではない。

なのに、綺麗すぎる。

掃除した後は砂どころか埃一つない、明らかに『過ぎる』

私の知らないところでそのような魔法が使われているのだと知った。掃除のたびに私は二人のところに戻るタイミングをずらして行動した。

三か月、不意打って戻った時遂に私は目にしたのであった。杖を持ち風を起こす二人の姿を……。

「なんとなくバレてしまうんじゃないかと思ってたけどまさかこんな風に見つかってしまおうとはな……」

「でもやっぱり隠しごとをしないで済むって言うのは良い事だと思うわ」

それが二人の反応だった。

教えて欲しいと言えば、

「それはかまわないぞ、でもな」

「私たち才能ないのよね……」

悲しそうに、すまなさそうに二人は言った。

この年から魔法使いになると言うのは珍しいという。

魔法使いの家に生まれた人間は幼い頃から魔法に触れて生活するらしく私みたいな例は多くないのだそうだ。

魔法を知らない一般人が知ってしまった場合記憶を改竄され元の生活に戻るが最悪の場合殺されてしまう、という事も過去にはあったという。

魔法使いは幾つもの国に秘かに存在しておりこことは違う【魔法世界】と言う場所を本拠地としているらしい。

【魔法世界】には純粹に人間ではない人『亜人』が存在し、こことは違う生態系を持つ場所であるとのこと。

魔法を扱う為の魔力は血統、ひいては個人で差があるものであり生まれながらに有無が決まり人として成長すると共に増え続ける。

私の魔力は二人よりも、一般的な魔法使いより多めだと言う。

そして先に行ったように二人は「才能がない」

以前は二人とも研究者をしていたらしく知識はそれなりにあるという事で座学と二人が使えると言う基本的な術を教えてもらう事になった。

教わる年齢が遅かったのが大きいのか私はなかなか魔法が使えずにいた。

才能がないわけではないらしい。

ただ魔力と言うものを感じるのに時間がかかった、それだけだ。

十七の頃。二人の使える魔法は全て、練度の差や『属性適性』の違いなどがあつたが使えるようにはなつた。

それからはそれらの練習と二人が持っていた教本の類による座学。ちなみに二人のもつ本はほとんどが魔法世界の生物に関するものだったので魔法を扱ううえではあまり役にはたたなかった、読むぶんには面白かつたが……。

そしてそれらを踏まえた上でのオリジナルの魔法づくりを始めた。口に出すのは簡単だが実際やってみるとこれが難しかった。

既存の魔法を自身が使いやすいようにアレンジするのはそこまで難しくはなかったが自分の思いを一から形にするのは至難だった。

せつかく出来たと思って見てもらったら、

「そういう魔法は既にある」

そんなことがしばしばである。

自動で整理整頓する魔法は便利だと思ったのだがな……。

当時の私は戦闘する気など全くなく日常を豊かに、便利な生活魔法ばかり考えていた。

「武装解除」の応用で花や野菜などから虫を飛ばす「除虫魔法」や家中の窓や扉を一斉に開け閉めできる「開閉魔法」などいろいろ考へ魔法の道具、文字通り魔法具も作ろうとした。

浮遊魔法を組み込み自動で水をまく如雨露や燃え続ける蠟燭など、まあ火事になりかけたりするなんていう「些細」な失敗もあったがそのおかげで掃除魔法の強化・応用で「焦げ跡消し」や「煤落とし」ができる魔法もできたりもした。

こんな他愛も無いような生活が実はとてもかけがえのない幸福であるなんて事は後になって知るのである。

それが二十三、になる前の頃だった。

唐突にこの日常という幸福は終わりを告げたのだった――――

始まりの始まり（後書き）

週一で更新出来たらいいなあ……

エルレイア家

イングランドに居を構える小貴族の家系、元はフランドル伯ボード
ウアン4世からの某流である。

当家三代目嫡男としてファーガスが誕生。

彼が一才を過ぎたころ経済状況の悪化に伴いやむを得ず彼を手放し
一家離散。

ファーガスの両親

両親と言うポジションなのに名前さえない完全なモブキャラ。

執事、使用人を数人雇っていた。

金銭問題において子供、食い扶持を減らすのは常套手段。

修道院・教会

田舎にある森に囲まれた教会。

そこそこ近くに町がある。

孤児院と言うものが無い時代子供を置き去る事が出来る場所など現
代以上に限られる。

魔力は生まれながらに有無が決まり

嘘。確かに血統に大なり小なり左右されるが先天的に零、というの
はない。

魔力を発現できるかできないかで周囲の認識が変わる
そのため魔法関係者は触れ合う機会が多いため自然と発現するが一般人はそうならないため基本的に魔力がないと思われる。
他にも説はあるがエドワードとアンナはこれに倣っているためファ
ーガスもそう思っている。

現年代ではそういう設定。

エドワード

エドと言う愛称がある。

元研究職の魔法使い。

ファーガスの魔法的才能を認めている。

アンナ

元研究職の魔法使い。

夫婦ではない。

ファーガス・エルレイア

自称聡い子供だった金髪碧眼。

エルレイアの事は僅かしか覚えていない。

魔法を知った。

炎と鏡

暗雲が立ち込め星空を隠す。

そびえる修道院は空を焦がすように炎に包まれ暗雲をより濃く深める様に黒い煙を上げていた。

そんな燃える教会の中を一人の青年が駆けていた。

「エド、アンナ。どこだっ」

寝室に二人はいなかった、調理場にも姿はなかったし裏口は鍵が閉まっていた、何故か鐘楼は既に火の海のようなだったのが見えたし残るは……、

「礼拝堂かつ！」

礼拝堂へ続く回廊を駆ける。

「二人ともっ」

扉を抜けた先は既に炎が上がっていた。

長椅子や壁のタペストリーは燃え盛り天井の高い身廊を舐めるように炎は上がりまるで包まれているようだ。

「来てしまったのか……ファীগス、アンナを頼む」

そう言って抱えていたアンナを私に預けエドは前にいる男に向いた。そう、男が一人いた。

旅人然とした風体だが片手に赤い液のついた、そう血のついた短刀を持った男だった。

「ごめんねファギー、ちょっと動けないの」

私の視線を惹くようにアンナは私に身体を傾けると咳をして静かになった。

良く見ると服の右胸は血でべっとりと濡れており、咳をした口からは血が出ていた。

私は何が何だか分からず全く動けなかった……。

「一撃で終わらせる予定だったのにな、それにもう一人いるとはね。前情報とは違うけどまあ実験材料って事で持って帰ろう。うん、それがいい」

そう言って男は笑った。

「それでカーシー君。君が、いや君らが今更私たちに何の用だ」

エドは静かに男、カーシーに向かって魔法銃を向けながらそう言った。

『魔法銃』

一度だけ見せてもらった事がある。

魔法の射手を圧縮し弾丸とすることで通常よりも高い威力と低コストを両立できる良い物だ、と自慢げに言っていたのをよく覚えてる。

それを構えていた。

カーシーと呼ばれた男は血濡れた短刀を片手で弄びながら。

「いやあ、それがですね最近ウチの施設に賊が入りましてね。何人か逃がしちゃったんですけどね、反面何人か捕まえましてね、そいつらが盗もうとしたのが魔法生物関連の資料やらサンプルやらで無くなってるのもその辺でしてね。もしかしたら元ウチの職員が関係してるのか、関係してなくても出た人間は少なからず情報を持ってるわけですしね。とりあえず怪しいところは全部消しちゃおうって所長の判断でてね……、こういう訳です。ご理解いただけましたかね、先輩方」

そう締めくくり笑顔を崩さずカーシーは口を閉じた。

「わかってると思うが私たちの持っている情報は二十年以上も前のものだぞ」

「所長が全部って言ったんですからね、僕のせいじゃありませんからね。ちなみに僕の回るところはここで最後ですからね。最後というより最後まで残したんですけどね」

「相変わらず面倒な奴だ、いいからさっさと言いたい事があるなら言え」

「いえいえ、ただちょっとした余興ですよ。最後に先輩たちの研究に関わった者として、ね。さて最後に楽しくお話もできましたし、

お土産もソコにいますしさっさと死んでくださいね、全部後腐れなく燃やしてあげますからね」

笑ったままカーシーは短刀を手にエドへと向かい走り出した。

そこからは断片的で、はっきりとは覚えていない。

射出される弾丸。

避け、時には炎で止めエドへと近づくカーシー。

気づけば魔法銃が壊れエドの右腕が燃えながら宙をまっていた。

炎で刀身を増した短刀がエドを裂こうとした時、私の腕で静かにしていたはずのアンナがいつのまにか飛び出ていてカーシーに飛びかかっていた。

その体は咄嗟に返す炎の刃で無情にも切られ炎上した。

それと同時にエドの左腕が突きだされカーシーの体に吸い込まれた。

「がつ、はは、は。流石だなあ、戦闘要員でもないのにね。でも、残念でしたー」

突きだされた左腕、その手に持たれた包丁のようなナイフは確かにカーシーのわき腹に刺さっていた。

それなのに笑みを崩さないカーシーの姿が酷く……。

「すまん、ファギー」

そう言ってこちらを振り返ったエドの顔は申し訳なさそうな笑顔だった。

「こんなでもお前を愛して……」

その身を炎が包んだ。

「んぐっ、流石に、痛いな。まあなんとかなるだろうしね。さあいこうかお兄さん」

カーシーは一度傷を、自分に刺さったナイフを気にすると何事もないかのように燃えるナイフをエドから抜くとそのまま私に向かってきた。

「お、お前、何して……」

「んー？何って聞いてなかったんですかね」

「うああああああああっ」

「全く、勝手に盛り上がらないでくださいよ。めんどうですね。ちよつと寝ててくださいね」

そこで私の意識は無くなった————

次に目覚めた時そこは牢の中だった、正確には檻なのかもしれないが……。

手足には魔力封じが掛けられた枷を付けられてそこが地獄の中だと言うのはすぐに理解した。
させられた、と言うべきか。

最初にあったのは投薬実験だった。

投与され生き残るたびに元の部屋、檻に戻された。

部屋と実験室を行き来する間は悲鳴やうめき声に泣き声、人以外の動物の声も聞こえた。

ある程度投薬が進むと次は火・水・雷など各魔法による実験が行われた。

生き残れば前と同じように部屋に戻れた、そこだけが唯一気を休められる場所だった。

危険な状態になると再び薬を入れられ体を作り変え、それで生きていけばまた戻された。

そんな時、移動中に一人の少女を見た。

来たばかりなのかまだ髪は艶がありふわふわで温かみのあるいくらか年下の少女だった。

目が合った瞬間彼女はおかしそうに愛おしそうにそして狂おしそうに笑った。

その瞬間感じた「アレは違う」と。

見た目も性別も年齢でさえ違うのに鏡をみているような、全く知らない別人なのに自分だと錯覚させられる、そんな存在。

不思議と嫌悪感を抱きはしなかったが気分がおかしくなるのは当然だった。

不幸中の幸いとも言うのかこの日は薬を入れられた後魔法陣の上に立っているだけで終わったのだった。

部屋で一人、久しぶりに口を開いて出たのはうめき声でもなく悲鳴でも鳴咽でもない。

「気味／君が悪い」

そんな言葉だった――

炎と鏡（後書き）

魔法銃

作中通り、魔法の射手を圧縮、弾丸化し撃ち出す。

原作でネギが使用した際アンティーク扱いされていたが作中では現役、最先端技術と言える

エドワード

魔法銃は趣味の様なもの。

戦闘は強い、のではなく上手い。

アンナ

なんとなくのほほんとしていそうに見えてしっかりした人
無言で死へと立ち向かった。その心境は如何なものなのか……

カーシー

旅人の様な格好をした炎使い、ナイフを所持

常に笑顔絶やさない

語尾に「〜ね」が特徴

気味の悪い少女

印象として自分であって自分でないような気味が悪さ

ファীগスと何か関係があるもよう？

ファーガス

全てを失った

生死を掛けた実験という地獄の日々

謎の少女と出会う

変生

気味の悪い体験をした数日後。

まあ数日も何も連れて来られてどれだけの時間が過ぎたのかわからないのだが……。

とりあえず実験は次の段階に入ったらしい。

どうやらここまでもつ被検体は少ないらしく研究者は嬉しそうだ。

と、他人事のように無機になった目でファーガスは周りを見ていた。

薬が投与され痛覚を麻痺させるとか言う魔法を掛けられた後、私は寝台に寝かされ固定された。

そして腕や足など体を切り開かれた。

自分では見えないがそう言う事らしい。

よく聞こえなかったが魔族や竜族などからこの魔獣かわからないようなものの血液等の体液などを入れたりそれらの細胞、因子を組み込んでいる、とかなんとか。もうどうでもいい……。

終わると切られた部位は閉じられそのまま放置された。

体のそこらじゅうで熱を持ちそれぞれの因子が反発しいがみ合っているような酷い感覚。

気分は最低最悪だった。

そんな事をされはじめもう三度目、まだ三度目。部屋には戻されない。

魔法円やら触媒が並べられどうやら大がかりな儀式をするらしい。朦朧とする意識の中で普段より多い5、6人の魔法使いに囲まれそれは始まった。

何かが至る所から染み込み浸食し蝕まれ自分という存在を喪失しそうになる。そんなふざけた感覚の中で突然、

「いや——ッ」

悲鳴が聞こえた、ような気がした。

ただ、それだけでここ数日失いかけていた意識ははっきりした。一度も聞いたことも無いのに———

彼女の声だ。

そう思った。

それと同時に事は起こった。

これまで反発しあっていた体中の細胞が一つになるようにドロドロと溶けあい周囲の魔力や触媒も全て引き寄せ混じり合う。

体は異常に暑くて、熱くてどうしようもないのに背中が、心がゾクゾクするほど冷えていく。

「ぐ、ぎい」

声とも取れないうめき声が出る。

今にも気が狂いそうなのに、狂ってしまいたいのに彼女の声が、叫び声が頭の中を巡るとそれを拒んでしまう。

気づけば胴と腕の拘束具を容易く引きちぎり自分で体を抱きしめていて。

「いやだいやだいやだいやだ……」

目は見開かれ歯はガチガチと鳴っている。そのはずなのに、周りで騒ぐ声なんて欠片もわからないのに自分の声だけはしっかりと聞こえてしまう。

「い、やだっ」

そう叫ぶように呟いた瞬間。

私を中心にあふれ出た魔力が、

中心に向かって、

爆発した———

私に魔力が集束すると同時に魔族や竜族、その他の魔獣や亜人といった私に埋め込まれたありとあらゆる生物が腕や牙、翼や爪となって体を突き抜け出現し、
周囲の人間全てを、

惨殺した。

羽が突き刺さった者、腕が押しつぶした者、翼や爪に断たれた者、牙や尾が突き抜けた者など多様な死に方をそこに晒し血だまりに沈んでいた。

一本の赤い、朱い竜族のものか、鱗を纏い鋭利な爪を持った腕が血に触れた瞬間

鱗を輝かせるかのように血を吸い上げ始めた。

「吸って……飲ん、でる……？」

眩くと同時に、

ド、クン、

体が大きく喜ぶかのように脈打った。

「はぁっ、何だ、これ……」

枯れた大地に水が染み込むように血をくみ上げるたび心が、体が潤うのがわかる。

酔ったような高揚感、気分がいい。
力が溢れる。

「ああ、私はいったい……」

陶醉感が高まってきたころ、

ビービー、と音が鳴り響いた。

《第五実験区画にて異常発生、隔離します》

それと同時に扉の上から覆うようにより強固そうな壁が降りる。

「第五っていうのがここって事か……」

そして足の拘束を容易く千切り取り台から降りた。

「力が上がってる、のか？」

同様に魔力も以前とは比べ物にならない程に増えているらしい。
そして次に思ったのは彼女の事だった。

「彼女……どこだ」

歩こうと思ったところで気づく。

この体から突き出ている腕などはどうすれば、と思ったらズルズル、
グチュグチュと生々しい音を立て全て引っ込んでしまった。

「実験のせい、か……？」

そう呟いてみるが私は気にしてもしようがない。

とりあえず部屋を出るために壁の降りた扉の前に立つ。

「殴ればいけるか？」

そう思い拳を握り魔力を込め思い切り殴りつけた。

ガッ、ダァーン

とでも言って表現すればいいのかけたたましい音と共に扉は吹き飛んだ。

それを一瞥し

「こっちか」

適当に歩き出した。

これまでの痛みや疲れなどないように私は歩き始めた。

どうやらこの区画が一番奥らしく道は自然と外側に向かっているらしい。

幾つかの扉を破って中を見ては少女を探す。
角を曲がったところで

「お前か、化物め」

そう言って杖を持った魔法使いが魔法を放ってきた。
以前とは違う初めての実戦と言える状況。しかし私に恐怖は無かった。

何気なく迫る魔法に手をかざすと、
パンッ、
軽い音を立て魔法は霧散した。

「馬鹿な！？私の『白き雷』が……！」

白き雷という魔法は男にとって自身があつたらしく何度も放ってくるが、

「鬱陶しい」

全てを打ち消し接近する。

武器がないな、と持った時には既に爪が鋭く伸びて刃のようになっていた。

それをそのまま突き刺し一閃。

男は首を落として倒れた。

そこで違和感、

初めて人を殺したのに何も、罪の意識も、高揚感も殺したと言う実感も何も感じないただ、

「ああ、殺してしまったか」

それだけだった。

「これも何かの影響か……？」

そう決めつけ私は再び歩き出した。

流石に六人目となるといういろいろ考える余裕が出てくる。

彼女はどこか？

面倒と感じるということは感情がないわけではないが殺す事にはやはり罪悪感も何もないらしい。

彼女を見つけたらどうするか。

この体はどこまで耐えられてどんなことまでならできるのか。

彼女の悲鳴はなんだったのか。

彼女の名前は何だろう。

まあ概ねこんな風に彼女ことを「多め」に考えていた訳である。

そんなこんなで現れる魔法使いを蹴散らす事十数人。

私は第二区域に到達していたらしい。

壁にそう書いてあった。

不意に、ピン、と糸／意図が張るような感覚がよぎる。

「こっちか」

直感的にそちらに彼女が居ると私は判断し進む。

どうやら近づくほどに位置がわかってくるようだ。

更に角を三つ曲がった先に今までのものよりも重厚に、堅牢に、そびえる様に閉ざされた扉が現れた。

「この向こうか」

試しに軽く爪で突いてみるが小さく傷が出来る程度だった。

なら……、

「ふっ」

ガアアンツ、

殴る。

「ふっ！」

ガアアンツ、

ガアアンツ、

殴る、殴る。

何せこれを打ち破れるような魔法を知らない以上私にはこれしかできないうのだから。

「はぁッ」

バァァーーン。

輝がはいる、が手の感触がおかしい。

目を向けると何故か腕が黒く禍々しい姿に変化していた。

「ん？まるで悪魔の腕だ、けど便利だ」

思ったのはただそれだけだった。やはり何かおかしい気がする。

更に数度の殴打の後に私たち二人を隔てる壁は音を立て崩れ落ちるのであった――

変生（後書き）

だいたい文字数決めているので中途半端に感じてもしかたがない。

擬音難しい

『白き雷』の魔法使い

詳細不明

雷特化の体質。程度は高くない

狭い通路内である事を考え『白き雷』を無詠唱で乱射するが変生したフアーガスの前に敗れた

フアーガス

体中から色々飛びだして引っ込んだ

結果的に全部混ざってしまった

深層心理下で望んだとはいえ勝手に手が変わったりするなど制御できている。

無意識で張っている障壁もそれなりに堅い様子

意識に大きな変化があるらしい

少女のいる方向を無意識に察知した

再会の鏡・炎再び

ガラガラと音を立て扉が崩れ落ちる。

その向こうで彼女は待っていたかのようにこちらを向いて立っていた。

そして、

「その腕、かっこいいね」

ふわりと彼女が最初にそう言った。

「君は、なんなんだ」

「わかってるでしょ、鏡だよ」

「それは魔法……」

ではないと直感的にわかってはいたが聞いてしまう。

「じゃないよ、私は貴方、貴方は私。生まれが違っていたら立場が逆だった、それ以上でもなければ以下でもない」

「同一の存在」

「そう、でもだからって片方死んだらもう片方も死ぬわけじゃない。それだったら貴方はとくに何度も私のせいで死にかけてることになるけど」

「私にそれはなかった。死ねば片方が虚像となっていなくなる。そう言う事か」

「そういう事」

「ふうん、じゃあ行こうか」

「どこに？」

「どこでも、どこまでも行けるところまで。とりあえずここから出よう」

そう言って私と彼女は自然と手をつないで歩きだした。

「そう言えば髪、白いね」

言われて初めて気づいた。

確かに金色だった髪は色が抜けたように真っ白になっていてやたら長くなっていた。

首ぐらいまでだったのが腰程にまで伸びている。

「多分実験のせいだ」

「そう、長くて素敵」

「素敵……。そう言えばなんで死にかけたりするって」

「先天的な魔法関係の病氣らしいの」

「そう、いつまで持つの？」

「わからないの、いつ死んでもおかしくないそうよ」

「ふーん、じゃあなんであの時叫んだの？」

「質問ばかりね、まあいいけど。そんなつもりじゃなかったのよ。

ただ貴方が気になって、声を出そうと思ったたらああなったのよ」

「そう。けど助かったよ。それで……」

私が肝心な事を聞こうと思ったところで。

「いたぞ、少女と一緒にだ」

そう言って四人の魔法使いが駆けてきた。

「戦いはお願い」

「任された」

私は繋いだ手を離し前に出る。

一人の男が剣で切りかかってくるのを片手で止めもう一方の手で突き刺し。

「一人」

「な、素手で剣をつ、化物めっ」

何度目かの「化物」という言葉。

「まあ否定はしないけど」

この状態になってからいやに落ちついている、以前だったらもっと直情的というかそんなはずだった。

一気に近づき、

「二人、三人、四人」

放たれた魔法は片手を上げる間もなく近づいた時点で消えてしまった。

どうやら能力ではなく障壁らしい。

以前の実用性のない不安定な障壁ではなくなったようだ。

そんな事を考える余裕を持って三人を地／血に沈めた。

「強いね」

「実験さまさま、だ」

少女の目から見ても私は強かったらしい。
そして再び私たちは歩き出した。今度は手を繋がずに。

出てくる人間や魔獣の悉くを血／地に沈め歩く事数分。
通路が広くなってきたことに気づく。

「もうすぐ」

「出口かな？」

そう呟き角を曲がると上に伸びる階段が一つ。

「ここは」

「地下だったのね」

互いに頷き合った時。

「その通りなんですよね。暗くてジメジメして鬱陶しくてしょうがないですよね」

フードローブにナイフ、前回と似た出で立ちで階段横から出てきたのは、

「カーシー……」

「おや、名前を覚えていてくれたのですね。嬉しいですね」

笑顔を崩さない、忘れるはずのない男だった。

「この階段の先は地上ですよ。そして、なんとこの施設にいる人間は僕たちだけなんですよね」

「要するに」

「ここから出たければ私を倒していけ、ってことですね」

「なんで」

「いやあ、いろいろ調べさせてもらったんですよね。先輩方に子供は無く貴方は養子、しかも魔法を教わった。そして今、ここから出ようとするだけの力を得た。なら気になるじゃないですかね」

「どういう……」

意味なのかさっぱり分からない。が、私に執心と言うのは確かなのだろう。

「あの二人による最初で最後の研究であり実験で生まれた僕と、あの二人に育てられ、そしてここで生まれ変わった貴方、どちらがより優秀なあの二人の作品／子なのか、ね」

「エドとアンナの……？」

「そう。あの二人はここで働く僕の先輩であり、二人の『人の超常化』要するに人を精霊に近づけようとする実験の為に選ばれ、そしてつくられた私と言う存在の親でもあるんですよね」

「人を精霊に……」

そんな事が可能……いや、それを目標としてこそその実験なのか。しかし何故そんな……、

「この施設で行われる実験の本来の目的は「不死」なんですがね。世界に満ち、消える事のない存在であるつまるところの「精霊」それになれば……。という主題だったようですがね。最初で最後の実験体が最も身近と言える火の精霊に近づけようとした僕。結果として失敗とも言えず成功ともいえないこの研究は次に持ちこされるこ

とになり僕を残し二人はここを去った。簡単に言えばそう言う事です
ね」

「それで、だからあんたは二人を笑いながら殺したのか」

理由は失敗し自分を捨て置いた事への復讐だっと言うのか……？

「いえ、こうなってから人が、物が焼け落ち、崩れるのが楽しくて
ね」

「だけどエドとアンナはっ」

「この体になってからはそれなりに楽しいですしね。二人を殺したのは以前言ったように命令です。まあ既にその命令を出した人は真っ黒焦げでいないんですけどね、あははははははは」

「お前は……」

「さあ、あの二人の子でこの研究ほぼ全てを土台に生まれたと言ってもいい貴方と、初期の作品でありあの二人の子である僕とどっちがより高みにいるか競いましょうかね」

今までと違うニィ、と嫌な笑みを浮かべながらカーシーはナイフに火を灯した。

ナイフから繰り出される斬撃の炎が飛来する。

それに対し胸の辺りから生やした翼から羽を飛ばし撃ち落とす。

「羽がそんなところから生えるなんて面白いですね。私にもできませんかね？」

そういつて胸に手を当てると。

「はっははは——」

笑い声と共に炎の翼が生え炎の羽を噴出させる。
炎の羽と魔獣の羽による弾幕が通路を塞ぐ。

「ふふ、不死の少女は大事ですか？」

そう言ってカーシーは羽の横合いから彼女を狙って斬撃を飛ばす。

「く、そが」

身を呈し彼女を守る。

だが障壁で減退するも突破され私の体が焼ける。

「あはは、それでは私があつという間に勝ってしまいますよ。もっと楽しませてくれないんですかね」

そう言うナイフからの斬撃をやめ今度は鞭のようにしならせはじめる。

悪魔の腕で鞭をつかみ無理やり引き押せ、そして、

「あは、そうでないかね」

その笑いを崩さない顔面に拳を打ちこんだのだった――――

再会の鏡・炎再び（後書き）

地下研究施設

最奥は第五区、地上への階段は一つ

人の変革、変生、等といった人の超常が目的

一環として純粋な人間の一時的、ではなく恒久的な精霊化実験があった。

最初で最後の例がカーシーであり責任者は当時在籍していたエドワードとアンナでありこの実験の後に離れている。

カーシー

笑みを崩さない狂人

実験半精霊体。属性は火

ファーガスに運命を感じている

少女

不死らしい

同一にして異なるという矛盾を孕んだ存在
写し鏡

ファーガス

髪が長くなり白い色に変化した

魔獣系の因子により胸から攻撃翼を出した

沈む炎・約束（前書き）

偶然でも見てる人がいるとか、こわい

沈む炎・約束

炎が踊り周囲の壁をも溶かし始めた熱気の中

カーシーとファーガス、そして彼らを見守る少女がいた。

細工でもしたのかいつのまにか後ろには新たな壁が出現し下がる事ができなくなっていた。

元より下がると言う選択肢などファーガス達にはないのだが……。

守る物のないカーシーと背に少女を守るファーガス。

二人の戦いはファーガスが守るために移動ができないという不利の中で悪魔の腕を利用し炎を掴む。

と、言う暴挙によりカーシーを引っ張り込み一撃を加えるという策とは言えないような行動が成功する。

悪魔の腕に殴られ地面を二転三転と転がったところでようやく止まったカーシーに私は近づく。

「あの夜、修道院で槍のように伸ばす炎は見た。炎を飛ばすのも羽を出すのも似たようなものだ。しなる炎は掴めた。後は、なんだ」

呼吸を落ちつかせながら竜の爪を彼の首筋に当てる。

「ははは、悪魔に殴られるのは初めてですね。それで、次、ですか」
カーシーは腫れた顔でも笑いながら喋る。

「ないのなら私の、私たちの、勝ちだ」

「誰も終わりだなんて言ってないんですけどね。完成であり失敗、この矛盾した存在である僕は基本的に何かなければ炎を操れない。そう、ナイフだ。でもね、もう一つ炎を操れる物があるんだよね。それが……」

途端に周囲の炎が勢いを増しカーシーの体さえ飲み込む。

「この、体だ。僕はこの体と自分がまき散らした炎を操れる」

炎の中から声が響く。

「さあどうする、この空間の炎全てが僕だ」

炎が人型をとり両手を上げ叫ぶ。

「僕は炎だ————切れず穿てず砕けないぞ！」

後ろを振り返ればすぐ後ろに彼女がいた。

「どうするの？」

「……倒せないなら」

「「逃げるっ」」

そう同時に言うのと彼女を先に私達は階段に向かって駆けだした。

彼と言う炎は階段の下までしか伸びていない。なら上に出てしまえば人の体に戻すか時間をかけ炎を延焼させ範囲を伸ばすしかないはずだ。

「逃がすと思ってるんですかね」

走るように炎が地を舐め横に並ぶ。

「思う訳ないだろう」

そう言って私はわき腹から、腕から魔獣の口を出し大量の水を撒き散らす。

「く、けどどね、彼女はどうするんだい」

ドーム状に火が広がり彼女を包む。

「もう、目の前で助きたい人を殺さやしないっ」

私は水を撒き散らしながら炎に突っ込んだ。

「すぐ助ける」

「ありが、とう」

短い間だったが既に息も絶え絶えになりながら彼女は答えた。
この過酷な環境でいつ死んでも可笑しくない体、そしてこの炎、
彼女は限界だった。

「どんな毒でも怪我でも死なないと言われる君も流石に焼け焦げれば死ぬんですかね、息が出来なくなったら死ぬのですかね、あはははは」

笑い声を見殺しし水を一点にあてドームを打ち破り再び私たちは駆けだした。

「先に行つて」

「どうするつもり」

彼女を先に階段を上らせ地上へと出す。

「こうするんだ」

地上に、彼女に背を向け私は、

「ありったけの魔力をくれたやる」

言うと同時に上半身を割るような首から腰までを裂くような、巨大な魔獣の口を開き、

「さようならだ、カーシー」

体にある魔獣たちの力と自身の魔力を振り絞り洪水とも言える濁流を放出させた。

「何を……」

手を伸ばすが炎はここまで届かない。

「お前は炎なんだろう、なら水の中じゃ生きられない」

「だが体を戻せば……」

「だから、さようならだって言っただろう」

今元に戻っても炎は、体は階段の下だ。

「間に合わないさ」

そう言って私は水を撒き散らしつつ地上に転げ出ると同時に、ただ簡単に入口たる扉を閉めた。

「空気がなきゃ炎じゃなくなっても息ができないだろ」

そう言って扉から手を離し私は立ちあがり、

「自分で言っただろ。出来るまでの過程は同じようなものだけど、お前は初期型で私は最新型なんだ。お前が私に勝てる道理なんて最初からなかったんだよ……」

ふっ、と笑みともため息ともとれる息を吐き、文字通り力を使い果たした私はフラフラと先で待つ彼女の元に歩いていった。

「終わった、んだよね？」

「そう、だな」

私たちは二人して寄り添うように木に背中を預けていた。

「これからどうしようか」

「どう、って一緒に行くんだろ」

「うん」

「何処までも行くんだ」

「うん、そうだね」

「世界を回ろう」

「うん。私、海が見てみたい」

「海か。それはいいな、私も見てみたい。でもその前にエドとアナの墓を建てよう」

「……うん」

「どうかしたのか」

唐突に、

「私、一緒に行けないかも」

彼女はそう言った。

「何があっても死ねそうで死ねない不死なんだろう」

「そのはずだったんだけど、さ……」

「おい、冗談は……」

「気づいてる、でしょ」

「何に……？」

「私は、貴方に会う為だけに生きてたんだよ。貴方がいたから、私は生きていられたんだよ」

「私たちは、鏡なんだろ？」

「言ったでしょ死んだら片方は虚像、なんだって。消えるだけなんだよ」

「せっかく会えたのに」

「だから。私はそれで満足、しちやっただよ」

「私は、満足なんてしてないぞ」

「知ってる、鏡なんだから、分かるよ」

「お前がいないと私はどうしていいか……」

「私の分まで生きなよ」

「私の分って、お前は死なないんだろう？」

「じゃあ、ずっと生きないと、だね」

そう言ってから彼女はこっちを向いた。

その顔には笑顔が広がっていた。

「無茶を言うなよ」

振り絞る様にそう言った私の顔は酷く歪んでいる事だろう。

「私とファーガスは鏡なんだから、同じなんだからできるよ」

「虚像として、消えるんだろ」

「いつも一緒にいるから。ずっと、ずっとずっとずっと嫌だって言っても私がずっと一緒にいる。寂しいなら貴方を抱きしめ続けるから」

そう言って彼女は私を抱きしめた。

「だからファーガスも、私を、抱きしめて」

「……ああ」

私は何も言えずただ抱きしめ返す事しかできなかった。
しかし不思議と涙は出なかった。

「そうだ、名前を聞いてなかった」

重要な事を聞いていないことに今更ながら気づく。

「そう、だったね。私の名前聞いてくれる？」

「何度でも聞くから」

「うん。私はクレマンسだよ。忘れないで」

「絶対に、忘れないよ。クレマンス」

「約束、私はずっとファーガスと一緒にいて抱きしめ続けるから」

「約束だ、私はクレマンスの事を忘れないしどこまでも、最後まで生き続ける」

「ありがとう、またね」

「ああ、また会おう」

一度笑いあって、

そうして彼女は静かに息を引き取ったのだった――――

沈む炎・約束（後書き）

戦闘とか無理すぎやで……

「私は、炎だ 切れず穿てず碎けない」
某獅子心剣の台詞

カーシー
お気に入りのおもちゃの一つ触媒にすることで体外の炎を操る事が出来る
触媒はナイフ
始まりの初期型

クレマンンス 私のイメージは某ギロチン娘
ちよと幼い感じ、実際は不死の影響で老化が遅いだけ。年齢はさほど変わらない
生死の境をさまよう事が多かった為ファergusに比べ鏡度が高い
ファergusと出会い互いに話し合い時間を共有した事で全てに満足してしまった。

ファergus
結局何も手に入れられない
ある意味全てを失い続けている
クレマンンスと共有した時間が全て
欠けているわけではないが満ちてはいなかった、それが満たされた
意味深な言い方をすれば1+1が1であり3

終わりにして最新

クレマンスが面と向かい手を重ねる位置ならカーシーは正反對の離れた位置、対極で背中合わせ

月夜からの始まり（前書き）

原作まで程遠いな・・・

月夜からの始まり

施設を脱出し彼女と「別れて」から三日。

この三日は施設のあった森林を抜けるために費やした。

その間に白かった髪は一部がだんだんと赤黒く染まり斑になったかと思えばそのまま全体を黒く染め上げてしまったのであった。

翼があるなら飛べる。と、思ったがどうやら水流を発生させるのに力を使いきってしまったらしく体中を渦巻いていた数多の魔力は無くなってしまったらしい。

以前に比べ増大した魔力は回復したがそちらは回復する気がないようでどうやら異種族の肢体はもう使えないらしかった。

更に都合が悪い事にどうやら魔獣なり何なりの因子のせいか日中は行動がほとんどできなくなってしまった。

日光を少し浴びただけで体が焼けただれてしまうのだ。

幸い手の甲だけだったからよかったが全身だったらと思うと背筋が寒くなる。

その反面、夜は五感が研ぎ澄まされ日中以上に力が増えるらしい。そんな発見と増えた力に慣れるための力加減を覚えつつ日が沈んでから行動していた。

森林を抜け、夜な夜な歩き私は村を見つけた、五日目の夜だった。ここまで食べるものなど見つからず魔力で腹が膨れるはずも無く流

石に私は困憊していた。

そしてたどり着いた村は運の良い事に見知った場所であった。見知ったと言ってもエドの付き添いで数度来た程度なのだが建物の場所はだいたいわかる、そんな場所だった。

どこかの家に泊めてもらう、とも考えたが日中は外に出る事が出来ない以前に室内でも日の光を避ける私は不審に思われるだろう。そう思った私はとりあえずこの時間でも人がいる場所としてこの村唯一の酒場に向かった。

その途中、酒場にほど近い路地に一人の若い男が塀に背を向けて座っていた。

どうやら喧嘩のあとか何からしく気を失った男の頬は腫れ痣ができ口の端は切れて血が滲んでいた。

そして額からは血が流れ出ていた。

そう大した出血ではないがそれを見た瞬間私の意識は変わった。

血、まだそう時間が経っていないのか固まっていない血、血、血、血、赤い血、僅かに射す月光で紅く輝く血。

鋭くなった嗅覚がうったえる鉄錆のような血のニオイ。

私はソレに魅せられたように一歩、男に近づいた。

「うっ、いてっ……」

私の気配で起きたのか男はうめきながらこちらを見上げた。

「ああ、アンタ悪いんだがよければ水をつ、うあ……何だお前……」

恐ろしいものでも見る様に男は体を震わせた。

「な、なんなんだよ、はは、まだ俺は寝てるのか」

自身に言い聞かせるような声を無視して私は男を覗き込んだ。

「っあ……やめ」

月光があるとは言え暗がりだが私の目には男の目に映る私の姿が良く見えた。

暗く赤黒い中に猫のように縦に割れた瞳に牙のように鋭く伸びた歯を生やした私がそこには映っていた。

それを気にも留めず私は男の口に手を当て黙らせると無理やり地面に押し倒した。

もごもごとわめきながら男は手足を振り回すが私にはそれらが当たったところでなんの痛みもない。

暴れる男を無視し私は男の頸筋に歯、牙を突き立てた。

あふれ出た血を口に含んだ瞬間この体となり竜の腕が血を吸い上げた時と同じような高揚感。

素晴らしく甘美、これまで飲み、食べてきたものの中でこれ以上はなかった。

まさに最高にして至高ともいえる味わい。

喉を潤わせ空腹感をも満たし幸福感がこの身を包む。

私は必死に、貪るように血を飲んだ。

少しして男の抵抗がやみやがてびくびく動いたかと思うと終には指一つ動かなくなった。

その時になってようやく意識がはつきりする。

既に男の瞳は虚空を見つめ何の意思も映さなくなっていた。

それを理解した瞬間、

絶望した。

殺した事などではなく牙を突き立てた私が喜々として男の血を私の口で自らの意思で啜り飲んでいた事に絶望した。

これではまるで前にも言われた、

「化物じゃないか……」

呆然とするのを許さないかのように人の気配が近づいてくるのを感じ取った私は先ほどの高揚が嘘のように気を静めその場を後にした。

騒がしくなる村を抜け回復した体力を使い私は修道院から近い森に身を隠した。

水の音を聞き取り川まで来た私は口に付いた血を落とすと水面を見つめた。

既に目は元に戻り牙も消え黒い髪の方が映っていた。

「本当に私はもう人間ではないのか……」

今更自覚し認識し実感した真実だった。

「それでも私は生きないといけない、いや生きるんだ。そして何処までも歩き続ける、そう誓った」

両手を握りしめ、

「それにアイツはあの、悪魔の腕をかつこいと言った、アイツが認めてくれたなら、それでいいじゃないか……。私は何を言っているんだ、本当に今更じゃないか」

水面に映る私は泣き笑っているかのような酷い顔だった。

「こんなんではアイツに笑われてしなうな」

そう言って顔を上げたその時、
風が吹き、

———しっかりしなよ———

そう言われた気がした。

「そうだな、一人になって不安にでもなっていたらしい。悪いな、心配かけた」

胸に手を当てそれだけ言った私は立ち上がり、

「もうすぐ日が昇るか」

日差しをしのげそうな場所を探しに森に入っていた。

再び日は落ちて私は再び修道院へと帰ってきた。

既に面影はないようなもので焼けて、廃墟と化していた。

石造りの壁などは残っているものの黒く焼け焦げ木製のものは消し炭と言っていい状態だった。

エドとアンナの体は案の定骨だけとなっていたが確かに二人はそこ

にいた。

「二人とも、ただいま」

膝をつき二人を引き寄せ祈るように手を合わせた。

瓦礫を使って穴を掘り二人を埋め墓標には焼け残った十字架をたてた。

「今までありがとう。私は幸せだったから、今を生き続けるから、安らかに眠ってほしい」

そう告げた私はひき返しそれぞれの部屋があつた場所に向かい残っている物を探す。

見つけたのは幾らかの金銭と端が焦げススだらけだがなんとか残ったフードロブ、それとアンナが予備にでも持っていたのだろう鈍く金に光る指輪型の魔法発動体、それだけだった。

月の光がちょうど十字架を照らしていた。

「勝手に形見として持っていく事を怒らないでほしい、けど私は忘れたくないんだ。だから許してくれないか？」

答えなど返ってくることなく、ない。
わかっている。

「私は、いくよ。ありがとう、さようなら。大好きだったよ」

振り返る事なく静かに私は夜の中に歩き出したのであった――

月夜からの始まり（後書き）

【二つの魂】

同一存在の消滅により本来持ち得ない魂を二つ持っている。魂の加護。真理／心理障壁を発生させる。Bランク（中級）以下の精神・意識誘導、干渉系の魔法を無効化する。

Aランク（上級）以上のものは大幅な抵抗・減退がかかる
対象は自身に掛る全て。よほど強力なものでなければ効果は期待できない。

【肉体操作】

他種因子効果
使用頻度の高かった「爪」の伸縮を可能とする。

【肉体再生】

他種因子効果
強力な治癒力。瞬時に回復するわけではない。
健康な状態への回復再生。

【感覚強化】

他種因子効果
日没後に限り五感に対し＋補正がかかる
心身の調子が向上する、身体能力は変化しない

【日光障害】

他種因子効果

日の光を浴びると損傷を負う。年月と共に減退、無効化。

フアーガス

自動で上記の能力を保持

髪が白から赤黒い斑に、それが広がり黒に。光に透かせば赤く見えなくもない。

殺す事に忌避感は無くても吸血には感じるらしい

指輪（前書き）

歴史等の知識はWikiさんを参考にしていきます。

指輪

全ての別れから五年。

私は老いることも無く病めることも力を失う事も無く転々と場所を変えつつ生きていた。

少なくとも死んではいなかった。

この五年で分かった事は彼女のせい、おかげなのかそれとも私の「中身」の問題なのか自分がどうやら不老であるらしいと言う事だ。

いや彼女は不死だったのだから中身の問題か……。

そしてずっと日の光には当たれないものだと思っていたが三年もたつ頃には浴びても火傷ですむようになったりしている。

それとあわせる様に切り傷などの治癒速度まで上昇している。

こちらが彼女の影響かもしれない。

更に魔族の因子の影響か破魔の力を持つものに弱くなった。

破魔効果のある呪具や銀で出来た物などに触れると痛みを生じたり火傷したようになるなどの傷害を負う。

五年たった今、日の光はほぼ克服したと言える状態であり長時間浴びない限りは異常をきたさなくなった。

フードを被っているおかげで長時間浴びることもないのだが……。

そして私がかつて最初に一度だけ嫌悪した血を欲し吸う【吸血衝動】はどうやら精神・魔力的、肉体・体力的な限界が近いほど抗いにくくそれ以外では自制ができるものだと分かった。

日の下を移動できるようになった私は流れの傭兵として商隊の護衛などをしたりしている。

ここ最近我らが国王陛下たるウィリアム二世は遊びが過ぎるらしくそれにより治安が低下してきているという事実に基づく仕事である。この遊び、乱心は大司教の死が原因であるようだが王は司教の死後司教座の財を押さえ次の司教を指名せず空座のままにしているらしい。

このままでは教会と対立するのが目に見える、と修道院で生活をしていた身としては何とも言えないが今の私にはどうでもいいことである。

この数年で私は以前と同じように魔法研究に手をだしているが以前と違い生活魔法ではなく戦闘魔法を研究している。

題材は「音」である。

楽器、音楽、声。

ありとあらゆる場所に存在する音、騒ぐという行為それだけで煩いものだが大型兵器による攻撃のような大きな衝撃音は扉や窓を揺らし水面さえ波立たせる。

発した声などが相手に衝撃を与える事が出来ればそれだけで大きな武器となる。そう考えた。

剣技や武術など知っているわけもなく教えてくれる伝手もない私は自身でつくるこれを武器にしようと考えている。

この仕事はそのための資金集めのようなものだ。

大きな街に行けばだいたい魔法使いがいるようで料金さえ払えばちやんと材料などを売ってくれる。

魔法のいくつかはそれで買った本で覚えた。

ただ最近周囲をうかがうような輩がいる事から私という特殊な存在にどういう訳か魔法使いが気づき始めているのかもしれない。

彼女との「海を見る」という約束の為に現在の住処も引き払う必要があるそうだ。

以前とは違う海の見える街の外れを住処として、音魔法の研究を始めてから五年ほど、ある程度形になってきた時。

音魔法だけを研究していたわけではなく通常の属性魔法も研究や訓練をしているのだが……。

どうやら海の向こうでは教皇が「聖地奪還」を掲げ軍を起こしたらしい。

「聖地」魔法的にも重要な場所である。

彼らの言う「聖地」はキリストが死した場所であり彼の有名な術師であり王、ソロモンの神殿があった場所でもある。

「行ってみるか」

そう思い私は初めて海を渡った。

船は酔う、覚えておこう……。

そこには教会騎士だけではなく一般市民や商人など様々な人間が揃っていた。

異様な熱気に包まれ士気は高い。が、先行したという市民軍は壊滅したと言うのだから市民には厳しい旅になるのだろう。

物資は補給がされずそのせいで進行した町では略奪が横行し、更には暴力や陵辱、虐殺などといった行為に加え奴隷商による人攫いなどが起き駐留した町では反発による暴動なども起こり進軍は難航した。

「正義など何処にもない。まるで魔物だな」

などと化物である私が言うのも変かもしれないが人間の性は化物より醜く汚い化物らしかった。

二年以上、三年に及ぶ進軍の末に遂にエルサレムを攻略した人々は

異教徒と言う名の市民を次々に虐殺して回り聖地奪還を果たした。

惨憺たる光景の聖地とやらを目にした私はソロモンの神殿跡へ向かった。

この身になった時点でキリスト、神など信じてはいない……。

「ここも、か」

既に虐殺の後らしく死体が積み上げられ床は池のように血がたまっている。

本来は神聖な魔力で包まれていたのだろうが今は酷いものである。そんな光景を横目に神殿跡を歩き始めると

「ん……これは」

右人差指にはめた形見の発動体の指輪
その指輪が、

キン。

小さく震えたかと思えば熱いと言うほどではないが熱を発し始めた。

「なんで……指輪が」

そう思うと同時に私は引き寄せられるように一つの場所へ歩き始めた。

「はいは……」

すぐ近くに死体の山があるだけで注目するようなものがあるとは思えないそんな何処とも似たような場所であるが、

「床が……」

そこだけが他と違い血に濡れてはいるがたまってはいない。ここだけどこかに流れてしまったかのように……。

「地下が、あるのか」

そう言って私は床の石板に指をかける。

「確かに、これでは見つからないだろうな。これは普通の人間では動かせないだろう……」

石板をどかすと案の定地下へ続く階段がそこにあった。

キン、

再び指輪が声を上げた。

どうやら私を導いてくれるらしい。

「お前はソロモンの指輪なのか……?」

疑問に答えてくれない指輪から視線を外し私は地下へと降りて行った。

光のない一と言っても私の目にはだいたい見える一階段を下りついた先は全面が地上と同じ石でできた小部屋だった。

降り立つと同時に天井に付けられた魔力灯らしきものが光り部屋を明るくし全体を照らし上げる。

そこに現れたのは床と壁に書かれた大小様々なペンタクル、魔法円と隅に置かれた机。

そしてその上に置かれた一冊の小冊子だった――――

指輪（後書き）

不死と傷の治癒を「彼女の力」だと思っているが再生能力は前話後書き通り他種因子である。

彼女の力は再生力ではなく高い「不死身度」である。

影の精、影精って言葉は出てきたけど音の精という語は出ていない。唯一関係がありそうな調の「狂気の堤弦」は特殊な音波攻撃、となっているので魔力を使うとしても「音魔法」ではない、とする。

【被退魔効果】

破魔・退魔効果のあるものに接触することでダメージを負う年月と共に減退。完全な無効化不可

【吸血衝動】

自身の精神・体力が低下した際に発生する。
低下レベルが高いほど抗えない

【吸血】

力、主に魔力を回復する
ある程度お腹も膨れる

遭遇（前書き）

ルビ機能を使用。人によっては窓の変更をオススメ

遭遇

降りた先にの小部屋には数多の図と一冊の本。

いつからここにあり、いつ描かれたのかさえ定かでない。

そんな一面の図式の中にはいまだに存在を誇示するかのように淡い
燐光を纏ったものも存在した。

惹かれるようにその一つに近づいた。

素人目でもわかる緻密さ、この図がどれだけ精密に計算され文字が
配置され描かれているか。

逆に言えばその程度しか分かる事はないのだが、私が無性に興奮し
感動しているのは確かだ。

「凄い、今までの本にはこんなもの載ってなかった……」

私は感動も一入にそっと図から離れると隅にある机、本へと向かっ
た。

「これは……崩れてしまいそうだな」

一目でボロボロなのがわかるが試しに端に触れると不思議と崩れる
様子はなくむしろ見た目以上に丈夫そうな感触をかえしてくる。

それを感じ私は大丈夫だと信じて何も書かれていない表紙を思い切
ってめくった。

開くと同時に指輪が更に熱を発し一瞬だけ輝いた。

何かと思い指輪に目をやるが何事も無かったかのように静かに冷たくそれは指にはまっている。

指輪の存在を疑問に思いつつ私は本を、羊皮紙でできたそれを見た。

どうやら中身は以前に数度見た事がある古ヘブライ語かそれに類するものであるらしい、当然読めるわけがないのだが……、

「意味が、わかる……いや流れ込んでくる……？」

読めはしない、だが意味はわかる。

どうやらこの部屋は彼の有名なソロモン王の七十二柱の魔神喚起なしそれらから賜った術、魔法の研究をするための部屋だったようだ。

そういう説明書きである。

そこまで見た私は再び周囲の図を見渡す。

すると今度は先ほどと違い本と同じように意味が分かるようになっていた。

原因は……、

「これしかないか……」

ソロモン王で思い当たる指輪など私には一つしかない。

【真鍮と鉄の指輪】

真鍮の部分と鉄の部分、二つで一つの指輪、悪魔と天使、魔神を役するための神の印章。

それが、これか？

確かに黄金とは言えない金の光沢を放つこれは真鍮製かもしれないがそれでは真の指輪とは足りえない。

私は指輪を外し初めて形見としてではなくそれ以外の何かとしてそれを見た。

だが生憎私にはこの指輪が真鍮以外になにできていいのか知る術などない。

分かるのは両端に溝のような線がうつすらと入っており裏側の一部が黒ずんでいると言う事だった。

指輪は帰ったら調べればいい。

仮にこれが例の指輪だとしても二つに分かれるようには見えないのでここでもし魔神喚起の方法が分かっても召喚はできないのだ、と一人納得させた。

指輪をはめなおした私はもう一度図を見渡してから本を更にめくった。

結果としてこの本に載っていた事は魔神に対する護符と喚起陣、各魔神による恩恵や効果、魔神や護符と対応する占星術の魔法円や効果、と言ったところだ。

そして部屋全体の図のほとんどは護符や魔神の力を魔法として利用するために研究された術式であるらしい。

光を発し起動しているものを良く見たところ外界からの捜査封じ、部屋内の環境維持、外部からの魔力転送、魔力灯のスイッチ、そして移動用の転移術式である。

どうやら転移術式は生きているものの対応する移動先がないために効果を発揮しないようだ。

他のものはどれもこの部屋の為の術である。

生きていない図を見ると多くは本にあった通り魔神の力である大規模な魔法効果の再現を行うためのものと占星術のものであるようだ。

そしてそれ以外の図は精霊召喚といった今の魔法技術にも通じるものである。

そういった事がこの薄い本にはびっしりと、余ったスペースには補足や余談的な事が書かれている。

ページによってはゴチャゴチャでありよくわからないが……。

そして本の最後には、

『再び神の印章を持つものが訪れるまでこの場所が開かされることはない』

読むことはできない、だが私にはそう認識できた。

入念な事に印章を持たない物がこの本を持ちだすと本が崩れる術式が刻まれている。

どうやら不完全、片割れと思われるが、この指輪は確かに神の印章らしい。

その確信を得ただけでも私は満足でもあり、更にこの部屋の知識、即ちこの本まで手に入れる事が出来たのはこの約三年間の行軍生活で唯一得た幸福、僥倖と言える。

本を懐へ丁寧にしまい下手に扱われれば大災害を起こすような術式が書かれた図を幾つか消すと私は地上に戻るため階段へと向かい歩き出した。

同時にコッソ、と靴音をたてて一人の男がこの部屋に舞い降りた。

「妙な魔力と階段があるから来てみれば……、アンタは？」

そう言って男は杖をこちらに向けた。

それに応える様に一步下がった私は、

「クレス……。貴方は？」

『クレス』

クレマンスと共にある事を忘れないため彼女の名前から一部をもらい新たに自身に付けた今の名前である。

「クレスさん、ね。俺はカミーユ。カミーユ・オリヴィエ。職業は考古学者兼『偉大なる魔法使い』^{マギステル・マギ}だ。こんなところにいるんだ、アンタも魔法使い、だろ」

質問ではなく確信を込めカミーユは言っている。

「『偉大なる魔法使い』^{マギステル・マギ}ですか……。いや偶然この上だけ血がたまっていない事に気がつきまして、調べたら階段があつてここに繋がっていたんです」

「なるほどねえ、見たところここはソロモン王関係の場所ってことでいいのかね？」

「確かにここはソロモン王の神殿があつた場所ですからね、しかし見てわかるなんて考古学者とは凄い」

「まあ、ありがとよ。で、アンタがここを見つけた時に誰かいたかい？」

「いえ、誰もいませんでした」

ふと、オリヴィエの纏う空気が重くなった。

「じゃあまた質問で悪いんだけど。アンタがこの階段見つけた時は入口は閉まつてた、であつてるんだよね？」

これが本題、そう彼の顔は言っていた。

「ええ、それが？」

なぜか不意に背中を冷たい汗が流れるのを感じた。

「アンタさ……人間か？」

『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』カミュー・オリヴィエは目付き鋭くそう言った――

遭遇（後書き）

クレス・エルレイア

主人公、人外

旧ファールガス・エルレイア

クレマンス（C l e m e n c e）の名を継ぎクレス（C l e c c e）と改名

カミュー・オリヴィエ

二十六歳、人間

職業 考古学者兼『偉大／立派な魔法使い』

考古学の功績によりマギステル・マギになった人物

自身の戦闘能力は高くなく戦闘はパートナー任せ。

パートナーは現在入院中

罪火（前書き）

ルビ

ビバ通常更新

罪火

「アンタさ……人間か？」

カミーユ・オリヴィエは静かに、はっきりとそう言った。

「どういう、意味ですか？」

「俺は上にあった入口の石板を調べた。厚さが1 f t、幅が3. 3 f t、長さは倍近い6 f tほどだ。まあだいたい6 9 7 0 1 b t ってところだと思う。それに重力魔法による加重で1. 5倍相当で1 0 4 5 5 1 b t (約4 t) ってことだ」

「……………」

「ぱっと見で力があるようには見えないお前さんが身体強化の術を使ったところであんなものをはたして持ちあげられるのかね？ 少なくとも俺には無理だ。本来は専用の術式かなんかがあるんだろうが俺は気づかなかったしアンタにここの知識はないようだからな、知ってるとは思えない。で、さっきの質問だ」

入口を閉ざしていた石板は自ら「普通の人間では動かせない」と断じたと言うのに自信の迂闊さを呪いたくなる。

「私が、人間でなかったらどうなのですか？」

「いやまあ、どうこうってわけじゃないがね。【向こうの世界】には亜人も相応にいるしな。問題はだ、普通は滅多な事じゃ旧世界にいるわけがない亜人がこんなピンポイントな場所で何をしてるか、だ。見た限り机があるって事は何か、引き出しがないってことは置

いてあったか書いてあったはずだがそれが見当たらない。それにそこらの術図は幾つか消されているがその痕跡が妙に新しく見える」

この洞察力、伊達に『マギステル・マギ偉大な魔法使い』を名乗っているわけではないらしい。

「……それで？」

「あんたはそこにあつた何かを取るなり消すなりをした。更に重要な魔法的遺産を損傷させた。要は、犯罪者ってことだっ」

そう言うやいなやオリヴィエは杖から魔力による刃を発生させ斬りかかってきた。

「つく、生憎捕まるわけにはいかないのでね」

瞬時に爪を伸ばし魔力を込め受け止める。

「はっ、アンタ何の種族だい？角もなけりや尻尾もないようだし毛皮ってわけじゃない」

「言うと思うかつ」

力を込め弾くと同時に蹴りを放ち狭いながらも距離を取る。

「もう後ろはないんだぜっ？」

そう言いニヤリと彼は笑った。

確かに距離は10ft程度。

強化した足なら二秒もかからないだろう。

「タン・レスタン・アルター・アンタレス 響け我が声、音の精――」

「――」
「させるかよっ」

詠唱を阻止しようとオリヴィエは駆け出しすぐさま刃を振るう。

「我が声数多の波動と――」

「何かわからねえが、遅ええんだよ」

狭い部屋の中、避ける事はできず詠唱を止めることのできない私は迫る魔力刃に対し

「なっ」

驚愕の声。

「腕をっ……」

ただ左腕を差し出した。

強化したとはいえ痛いものは痛い。

しかしここで集中を途切らせるわけにもいかず皮膚を、肉を裂く刃を骨で受けとめ断たれる前に無理やり彼を横へ押し流し再び距離を取る。

当然詠唱は止めない。

「――なりて敵を討つ『私言の散弾』」

オリジナルにして最初にして試作の魔法はここに成った。

「ちっ、腕を犠牲にするなんてな……だが何も……」

「私の勝ちだ」

「な、ぐうっ」

彼は突然顔面を殴られたかのように倒れた。
倒れながらも杖をこちらに向け。

「くらえっ 『魔法の射手・炎の三矢』^{サギタ・マギカ セリエス・イグニス}」

障壁だけでそれを受け止め。

「その杖、邪魔だな」

言うと同時にパァン、と彼の手に衝撃が走り杖を飛ばす。

「何、しやがった」

「気にすることはない、お前は死ぬだけだ」

私が喋るたびに彼は殴られたような衝撃を受け倒れる。

「魔法、なのか……？」

掠れた声で彼は呟くように呻いた。

「ああ、実験につきあってくれてありがとう。存外『偉大なる魔法』^{マギステル・}使い』も大した事ないな」

これが感想だった。

「俺は考古学の……っ」

「正直魔法を使うほどでもなかったな。ふむ、効果が切れたか。まあいい」

声の衝撃が止まった事に気付いたのかオリヴィエは必死に手を伸ばし杖をさがす。

「すまない、君には飽きた。もう眠れ」

私は何の感慨もなく爪を彼の頸に突き立てた。

「はあ、アレ以来の戦闘は初とはいえ、何とも言えないな」

自身の拙さ、相手の強度、何とも言えない結果である。

「さて、ここにもう用は無いし外に出るか」

死体には見向きもせず私は階段を上がりはじめた。

周囲に誰もいない事を確認し私は地上に出る。
そこには相変わらず死体の山がそびえていた。

「面倒なことになるのも、な……」

呟きつつ私は石板を再び元の位置にはめ込み入口に蓋をする。

「いい棺桶だろう、カミュー。盛大に吊ってあげよう」

私は死体に火をともし神殿跡を後にした。

数分する頃には神殿跡の「死体山」は炎を上げ空に黒煙を流していた。

それに呼応するかのように聖地のあちこちで炎が上がりはじめた。

用の無くなった私は喜び騒ぐ兵士等をしり目に街を抜けた。

再び船酔いに苛まされながらも三年かけた道程を六ヶ月で帰ってきた私は以前寢床としていた町はずれの小屋へと向かった。

魔力を込めた要を置き人がよらないように意識誘導の魔法を張ってはおいたが三年経っても効果があつたらようだ。

埃が積もっている以外は概ね無事であった。

食料は全滅だが……。

新たな街に入った私は適当な宿屋で部屋をかり荷物を置くと指輪を調べてもらう為に魔法使いの経営する店を探した。

持ち帰った本に『ソロモンの書』と適当な名を付けつつ裏路地に入るとちょうど一軒の家からローブを来た男が出てくるところだった。どうやらあの「民家」が店らしい。

民家に近づく、『占い・開店』とだけ書かれた看板が掛けられていた。雰囲気などからいってどうやら当たりだろう。

入ると同時に香の甘い香りがし、

ゴォォーン。

何処からか重い鐘の音が響く。

すると奥のカウンターに一人の女性が現れた。

「いらっしやい、初めましてだね。何を占う？」

真っ直ぐにそう聞いてきた。

「悪いが占いじゃなくてコイツを調べて欲しい」

「あん？ 占いじゃないってウチは……」

「発動体なのだが何で出来ているのか調べて欲しい」

「発動体」と要するに魔法使いだと伝える。

「……分かったよ。ちょっと時間掛かるかもしれないからその辺で座ってな」

そう言うと魔女はカウンターを出ると表の看板をひっくり返した。
その後こちらに近づくと私の手から指輪を奪うように取りさっさと
カウンターの奥へと下がっていくのであった————

罪火（後書き）

f t II フォート

l b t II トロイポンド

ヤードにしようか迷ってフォートに統一

計算間違ってるかも・・・まあいいか

床にある指がやっと入る程度の隙間にはめ込まれた約4トンの石板を壊さずに抜き取る、というのは無理だろう

クレス・エルレイア（2）

ちよつと遊んだと言える行動の結果怪我。すぐに完治。

船酔いは治らない、一生付き合う。

「ああ、実験に」のあたりから「カミーユ」と名前で呼んだりと街を出るまで若干テンションが違う

「いい棺桶」発言は考古学者への賛辞／皮肉。「もう眠れ」の辺りも含め後に黒歴史化することうけあい。

カミーユ・オリヴィエ（2）

死者。所詮学者。

熱くなりやすい。

得意属性は風と火。相性がいい。

魔力刃は風だった。

発言にある【向こうの世界】＝魔法世界である
ちなみにパートナーは水。相性がいい。二人とも魔法世界人

「魔力の刃を」

某なんとかの使い魔で言うブレイド

お香と鐘の音

お香、意味がないわけではない。アロマアロマ
鐘の音に意味はない

【強化身体】

身体強化ではない。

速度や腕力等の機能が上昇しているだけで防御はさほど変わらない。
三話の「力が上がった」発言はこれのこと

原因は他種因子であるが力を使い果たした悪魔の腕等の肢体能力ではなく根底に根付くものであり消えることはない。

身体強化の術をかければ今回のように嵌めこまれた4トンの石板を抜き剥がす事もできる。

気合いでバグの人には勝てない

『私言の散弾』

詠唱は「響け我が声、音の精、我が声数多の波動となりて敵を討つ」
ついに出了音魔法。レベルとしては『魔法の射手』と同じ。

魔法の射手違うのは「音の精」を介して任意で自身の発する音を飛ばしているため○○柱と指定がない事。

詠唱も術式名も声／言となっているが術者が発した音ならなんで飛ばす事が可能。

当然見えないし真空では使えない。

音の精

空気中の魔力を一定の仕組みで作用させ動かすと誕生する不思議存

在。

不思議存在であるがやっていることは他の精霊と変わらない。

音の魔法化に取り組んだ末に見つけた。

わかる人にはわかる言い方だと某生まれた意味を知るRPGで言う
第七音素とローレライみたいなもの

逃避行（前書き）

ザ・急展開

逃避行

店内に入り甘い香にさらされる事十五分近い時間が経った時。

「随分古い物みたいだけど過去に火事とか暖炉に入れたとか、なんか長時間火にあてた事ないかい？」

戻ってくるなり店主はそう切り出した。

「わかるのか？」

「ああ、まあね。元は半分が鉄で半分が真鍮。それが熱で溶けて真鍮が周りを、鉄を覆っちまったのさ。こっち側が溶け広がった分薄いだらう？」

そう言って彼女は指輪の上半分を示す。

「コッチがとけて残りを隠す、もともとの継ぎ目みたいなのがうっすら残ってるし、裏側は覆いきれなくて残った鉄の部分が黒く錆びてるだろ」

ホラ、と今度は裏側を示した。

「それ以外には？」

「他？んー、何か術式みたいなのが刻まれてたみたいだけど溶けて

くつついたせいか、単純に時間が経ち過ぎたのか、はたまたその両方なのか、術式は修復とか言えないくらいに壊れちゃってるね。残滓を読み取るのも難しいくらいさ」

そう言うとき彼女は指輪を私へと投げた。

「まあ発動体としては悪くないものだよ」

「そうか、ありがとう。代価は？」

「ん？んー……銀貨一枚、といたいけど特別にただにしてあげてもいいよ」

「あげてもいい、とは？」

「理解があつてよろしい」

彼女はカウンターに肘をつくと笑いながら、

「お兄さんの秘密、一つ教えとくれよ」

大した事を言った風など微塵も感じさせずにそう言った。

「なに？」

「いやいや、警戒しないでよ。だだちよつと普通じゃない風なお兄さんは何者なんだろうなー、とか思っただけだから」

「どういう、意味だ……」

その言葉に私は目を細める。

「怖い顔しないで。私はね『目』が良いんだよ」

自分の目を指しながら店主は、

「私の家系はね代々透視や千里眼、霊視なんかや見た物を発火させ

たりする所謂【魔眼】てやつを必ず持つて生まれる一族だね。私はちょっとだけど未来視ができるのさ。これ秘密だからね」

だから占い屋なのさ、といったずらでもするかのように口を歪めて彼女はそう言った。

「その未来視がなんだと？」

「いやあ、自分を『視る』っていうのはホントはダメなんだけどやってみたくなくてね。んで、ちょっと面倒な事が起きるみたいでね……。それでちょっとね。で、お兄さんて強いのかい？」

「強いかどうかはわからないが貴方の言う「普通ではない」というのは当てはまる」

「うん。まあわかってると思うけど私が『視た』中にお兄さんみたいな人がいたってことなんだけど……助けてくれないかな？」

「は？」

「私追われるらしいんだよね」

あはは、と渴いた笑みで彼女はそう言った。

「なるほど連続して魔眼が生まれる家系を異常と「異端」と定められる、か」

「そうそう、いきなりで悪いと思うけど。だから私……」

「私はね、店主殿。今は気づかれていないようだが私という存在が異端だね。いつかは追われると確信している。今はそのためにいろいろ考えている途中、といったところなんだ。だから……」

「よしわかった。じゃあ店のものは自由に使っていいよ」

「む、それは……」

かなり助かる申し出ではあるが……、

「だからさ。私と、逃避行しようじゃないか！」

満面の笑みでそう言った。

なんだこの女、厄介だ。

それ以上でも以下でもない、厄介だ厄介事の塊だ。

「何故そうなる、協力するぐらいでいいのではないか」

「私は弱い、アンタは強い、なら一緒の方が私は安心できる。西は海しかないからね東へ行こう」

「おい、待て。私はまだ……」

「いいだろう？ 行こうじゃないか。どこでも、どこまでも行けるところまでさ」

「『どこでも、どこまでも行けるとこまで』か……」

その言葉は私に『彼女』を、半身を幻視させた。

そんな私の心中など無視して、

「うん？ そうだよ目指すは東の果てだね」

そう言った彼女は『彼女』と似ても似つかない顔で笑っていた。

「どうかしたのかい？」

「……いや、行ってやろう、どこまでも」

そうやって私は『彼女』と別れて以来心から笑えた気がした……。

「なんだい、そんな顔もできるじゃないか。その方がいいよ」

「ふん、どうでもいいさ。それより何処までも一東の果てまで行くのだろうか？その言葉忘れるなよ」

「いいのかい？自分で言うのもなんだけどよく信じたね？でも、嬉しいよ」

「確かにそうだが気にするな。私にも思う事があるのだ。ああ、私はクレス『対外的』にはファーガスだ。よろしく頼む」

「そう、まあいいさ。私はドロシーだ。こっちこそ頼んだよ」

そうして私たちは手を握り合った。

「それで、これからどうなるのかわかるのか」

「うーん多分十日かそこらの内に一回教会関係の魔法使いがくると思うんだけど……」

「ではその翌日の晩に旅立つとしよう、私は町はずれの宿にいる。それでいいか？」

「アンタがそれでいいなら私はいいさ、ついてただけだからね」

彼女、ドロシーは軽くそう言ってのけた。

「ではその時に」

「ああ、頼りにしてる」

そうして私は彼女を一瞥して店を出た。

彼女と別れた私は一人町の外、林に隠匿結界を張りソロモンの書を開く。

「不完全とは言え指輪の力があればある程度……」

魔神召喚はできなくとも喚起陣と魔法円を使う事で魔人の力、またはその恩恵効果を得ると事ができれば、と私は考えていた。もともと書かれている図、魔法円は恩恵の再現を目的としているため不可能ではないとふんでいる。

【本物の指輪】なら陣は反応するはずである。だが二つにわかれぬ指輪で召喚はできない。

そこに魔法円を組み込み召喚することなく力の一部を汲み上げる、それが目的だ。

ただ問題は、

「魔神がそれを許すか」

である。

仮にも「神」という存在である、中途半端に力だけ寄せこせというのを許すか……。

半分。いや、ほぼ全てが魔に属するであろうこの身ならば、と考えるがどうなるかは試さなければわからない。

これが無理ならば魔人の力に頼らない魔法円の力だけ会得すればいい。

魔法円による再現した場合の効果・効率は格段に下がるだろうがデメリットはないはずだ。

それでも

「可能性があるなら……」

どこまでも行き、生き抜く、そのためには力が必要なのだ。
そして魔法円と喚起陣、二重の円に魔力を注ぐ。

夜の静寂、その中で円は静かに回転し輝き始めるのであった――

逃避行（後書き）

原作までは程遠い

【魔眼】

遠くを見たり見透かしたり。魔法打ち消したり吸収したり解析したりコピーしたり。死を見たり歪曲させたり。呪力の流れを読んだり心を読んだり。幽霊見たり石化させたり、とかまあたくさんあるやつ。正直数多くてやってられない

『指輪』

神の印章？

効果は備えているらしい

真鍮が熔けた残念な子

本物かコピー品かの真偽は結局不明

異端（目）

魔眼。魔法的に単独で未来視、千里眼などなら許容されるし突然変異などの説明で許される。が、今回のように生まれる子皆が発現し発火なども備える場合があるのはアウト。

どう見てもどこかに魔族か何かの因子が入ってる。

凶れええええ。とか言うのもアウト

魔法関係じゃないとどれでも魔女とか言われてアウト、だと思う

異端（身体）

主人公の事

他種の肢体など身体から出すのはどう見てもアウト
不老不死、不死身というのもアウト

ドロシー

ドロシー・ホワイト 人間 二十ピー歳

職業 占い師

この時代ではいき遅r

最大で十日近い未来までを視る事ができる。

見える未来は最も確率が高いと言うだけで絶対ではない。

ソロモンの書と指輪を使った術式(仮)

十全でない指輪で召喚はせず(できない)に喚起陣を起こし恩恵を
齎す魔法円で魔神の能力だけ引っ張ろうと言う無茶な行為。

当然リスクが伴う

読む人にとっては話の都合上どうあっても成功する事がわかっ
ている詰まらない代物

詳細は次、かもしれない

渡航（前書き）

後書きの説明なんているのだろうか……
長いけど一話使いたくはないよね

渡航

彼女、ドロシーが現れたのは七日目の夜だった。

「どうしたんだい？ 顔色が悪いようだけど何かあったのかい？」

来るなり彼女はカバンを下ろしそう言った。

「いくらか魔力がない程度だ。大丈夫さ」

原因は【魔神術式】だった。

七日前に試した喚起陣と魔法円の複合魔法に安直だがそう名付けた。

「魔力が、って……。まあアンタが言うならそうなんだろうけど、
行けるのかい？」

「ああ、問題無い。さっさと行こう」

足早に私は部屋を出た。

【魔神術式】についてこの七日分かった事は

急速な魔力の消費、これは初回だけであり会得し自身の内に刻まれたものならば二度目からの魔力負担は大幅に、格段に減っている。
そして「王」ではない私には従えず扱えないものがあると言う事なのか魔力を取られるが何も得られない事があると言う事と『魔族化』

である。

魔神に感化されているのか初めて起動する魔法円の場合失ったと思っていた魔族の身体の一部が現れるのだ。

全てが出現するわけではないし時間が経てば元に戻る。が、再び自分の意思で出す事が出来ない状態にまで戻る。

それを繰り返している。

改善できそうな部分の式は変えているが現状効果は出ていない。

そしてこの七日で得た魔法は大雑把に言うと、

『水上を移動する力』『言語を操る力』『国家・都市間を移動する力』『不可視にする力』

この四つである。

町を出た私は彼女を連れ先日も術式を研究・練習した林へと入った。

「今私が思い浮かぶ道、選択肢は三つだ」

指を三本上げそう宣言する。

「三つもあるのかい？」

「そうだ。船で海を渡る、私に抱えられ今すぐ海を渡る、そして空間転移により海を越えて大陸へ向かう。この三つだ」

「空間転移？そんな高度なことがえきるのかい、ならそれで……」

「ただ問題は今の万全でない魔力量では海を渡った先、フランス王国まで飛んで私は一度倒れるかもしれん」

「え……、あーなら船とアンタならどっちが早いんだい？というか海渡って倒れたりしないかい？」

「安心しろ海を渡るのは転移に比べたら大したことはない。万全ではないとはいえ船を待つことも考えれば私の方が早く料金もかからんぞ」

「じゃあそれでいいよ。倒れられても私じゃアンタを運べないだろうしね。それで襲われでもしたら大変だ」

「了解した。では行こう。どこまでも」

「ああ、どこまでも」

そうして私たちは漆黒の海へと向かった。

「本当に海なんて走って渡れるもんなんだね、しかもこんな早く走れるなんて」

感慨深そうに彼女はそう呟いた。

「それに私を、人一人抱えてだなんて……」

「ふ、私の秘密を知りたいのだったな」

私は彼女と彼女のカバンを抱えつつも風や水しぶきを防ぐために簡易障壁を張りながら海上を走っていた。

「え？ ああ、そうだけど別にいいよ」

「いや、言っておこう。どうせいつか知る事だ」

「そうなのかい？ なら聞くけど」

「私は不老不死だ、人間ではない」

「は？ 不老不死？ 人間じゃない？」

「そうだ、正確には不老不死身だが」

「は？え、な……」

驚くのは当然か……。

「襲ったりはせんよ、これでも人間でなくとも人であると思っている」

「あ、いや……」

人間だと思っていた男が実は化物でした、とはやはり怖いものなのだろう……。

「怖くなったか？安心しろ、別れるにせよ向こうまではちゃんと連れて行くさ」

くくく、とまるで悪人のように喉を鳴らしてみせる。

いや、既に悪人なのか……。

「う、馬鹿にしてるね？ふん、いいさ別に、女に二言はない」

どうやら多少なりとも調子を取り戻したているようだ。

「勇ましいことだ、まあ着くまで辛抱しろ」

「言っただろ二言はない、ってさ。一緒に行くよ」

「一か所に長くは留まれないぞ」

「もともとそのつもりだろう、違うのかい」

「……そうだな」

「アンタ実はいくつなんだい？」

「三十……五ぐらいか」

「三十五！？うわー……、私より年上だったのかいお兄さん。お兄

さんって年じゃないね」

何がおかしいのか彼女はクスクスと笑いだした。

「何だ？」

「だってまるで詐欺じゃないかどう見たって二十歳そこそこののに実は高齢者に片足突っ込んでますって。なのにお兄さんだって」

「お前がそう呼んだんだろう。それに肉体的には二十二、三の時のままだから別におかしくはない」

「はいはい、お兄さんだものね」

「二十二、三の私より年上のお前が何をいつているのやら」

「女に年を聞くのかい？そりゃどうなのよお兄さん」

「ち、煩い奴だ……。静かにするなり寝ろ」

「はいはい、アンタはどうするんだい？」

「私は、この体は夜の方が調子がいいのだ。気にするな」

「そうかい、じゃあ頼んだよ」

「ああ、頼まれた」

彼女は静かに目を閉じた。

それに合わせる様に私は速度を落とした。

辺りにはただ波の音と水面を蹴る軽い音だけが響いていた。

海を渡り情勢不安なフランス王国を足早に抜け一月近く、私たちは神聖ローマ帝国領にいた。

「大丈夫なのか？」

「何がだ？」

「何って、まあ休まず走り続けたりした割に顔色はよくなってるみたいだけど」

私が毎夜彼女と荷物を抱えてここまで走り続けていることを彼女なりに心配してくれているようだ。

「今更だけどアンタ荷物とかぜんぜんないんだね」

「まあ死にはしないだろう。魔法関係のものと衣類が何枚か、この鞆で事足りる」

「そんなもんかねえ。……で、これからはどうするんだい？」

「いくらか留まって移動、を繰り返すだけだがここにもう二、三日いるつもりだ」

「もう二、三日？もう四日もいるのかい？」

「ああもう一つくらい使える魔法があればいいと思ってな」

「そんな簡単に覚えられる魔法があるのかい？」

「特殊なものがな、興味あるのか」

「ないわけじゃないさ。一応私だって魔法使いの端くれだしね。まあ魔法なんて『魔法の射手』と障壁を張るくらいしかできないけどね」

「見学くらいならいいさ」

「ふーん、そんなもんかい。で、それはいつ頃なんだい？」

「夜中だ」

「夜中？！おいおい、ちょっと待ちなよそれじゃあアンタは良いかもしれないけど……」

「言っただろう、私は夜の方が調子がいい、とな。それに、だから出発を延ばしたんだ」

「ぐ、そう言う事かい。はあ……、勝手におしよ」

宿の一部屋に彼女の疲れたような声が響くのであった――

渡航（後書き）

うまーくいけばストック調整で次は二話かなー

前回忘れた事

「対外的にフアーガス」

クレスの名は公には使わない事にした結果
これから殺しなどの際はフアーガスを使用
地下でのあれが唯一の例外

『魔族化』

六話のどこかにも書いたが力が無くなっただけで因子まで失ったわけではない。

感化され出現するがそれだけ。力が戻ったわけではない。

「く休まず走り続けたりした割に顔色はよくなってく」

ただ走ってるだけなら魔力は徐々に回復するくらいに体力はある
最低限の睡眠でも支障はない
減っていた分が回復しているのだから顔色も良くなる

【魔神術式】

（仮）だったもの。安直な名前なのは仕様。音も「音魔法」だしね。
以下三項目は会得する時の初回時のみに発動。これらの試練に耐えられなければ会得は出来ない。

一、大量の魔力を消費する。消費量は術式の難易度、魔神の階級などにより増減。

二、他種因子が反応し身体から突き出る。何が出るのかは使用する

術式、魔神に左右される。時間経過と共に元に戻る。

三、得ようとする術式、魔神のレベルによっては顕現していても妨害、攻撃を仕掛けてくる場合がある。

会得した術式は身体の内、魂レベルで刻まれる。会得した後、術の消費魔力は魔法によるが基本的に上級魔法前後。

自身との属性による相性で得手不得手はほとんど存在しないが会得可、不可は左右される

魔力が減るだけで何もないのはこれが原因

『水上を移動する力』

魔神キマリスの水上を迅速に移動できる力。
一定時間毎での消費有り。消費は中位程度。

『言語を操る力』

魔神ロノウエの言語に関する知識を術により適応した。
常時消費無し。消費は中位。
使えばホンヤクコンニヤクの効果が（

『国家・都市間を移動する力』

魔神バティムの人を国から国へ移動させる力。
ただし術者が行った事のある場所に限定される。
転移魔法。瞬間消費のみ。消費は高位。

フランスまで行こうとしたのはこれ
本来倒れる程消費はしない。

四つの内最後に会得したのがこれであり前日に会得したため回復しきれていなかった。連日の疲労と消費の中で会得の際に残存魔力の七割を持っていかれた。バラムに耐えられたのなら残りの魔力でも行けると大公爵を侮った。バラムの時点で一般的な魔法使いなら死んでいてもおかしくはない。

『不可視にする力』

魔神バラムの人を不可視にする力。透明マント、足音などまで消せるわけではない。

一定時間毎での消費有り。消費は中位程度。

最初に会得したのはこれ。万全で挑んだが力強き王による魔力搾取は一日を無駄にさせた程。

ちなみに、ドロシーの来た七日目からは事前の情報が十日くらい、というのと魔力問題もあり何もしない予定だった。

魔神の力

神聖ローマ帝国領とある町、その隅、塔の陰になる一角。
そこに一組の男女がいた。

「ふむ、この辺でいいか……」

表から見えない一角。

そこで男、クレスは隔離のために結界を使う事にした。

「ここで？」

「ああ、少しでも人気がないほうがいいだろう。無論結界は張るがな」

既に日は沈み路地裏には人気など有るはずもなかった。

結界を張った彼は懷から一冊の古ぼけた本を取り出し丁寧に開く。

「なんだいこの古ぼけた本？ 図式がたくさん載ってるね。読めるのかい」

横から覗きこむなり女、ドロシーそう言った。

「読める、という訳ではないが意味が自然とわかるのだ。私はソロモンの書と呼んでいる」

「ソロモン……？確かアンタ鉄と真鍮の……まさか魔神を？！ちょっとそんな危なそうなものに私を巻き込むのかいっ！？」

彼女は騒ぎながら二歩、三歩と後ずさる。

「コイツは完全じゃないと知っているだろう？魔神は召喚できん」

自分が指輪を鑑定したのを思い出したのか彼女は冷静さを取り戻したようだった。

「それでこれはいつ使うんだい？」

そう言って彼女が取りだしたのは一つの小瓶だった。

「今少しもらう、残りは後だな」

そう言って私は小瓶を受け取り中の液体、【魔力強制回復薬】を少しだけ飲みこむ。

この薬は文字通り一時的に使用者の魔力を無理やり回復させるものである。

この場にくる前に彼女にあるなら持って来て欲しいと頼んだものだ。消費する魔力量にもよるだろうが魔力が回復すれば一晩に二つの魔法が習得できるかもしれない

私はそう考えた。

「一応劇薬指定の逸品だからね、そんなに数もないし。残り全部いっぺんに飲むとかするのはやめときな。どうなっても知らないよ」
「劇薬？ふむ、心得た。……さあ始めよう」

ここ数日全快になることのなかった魔力が強制的に、一時的に戻るのを感じながら私は図式を地面に書き始めた。

一つ目『変身の魔法』は比較的簡単にそれほど多くの魔力を消費せずに会得した。が、魔神オリアスの力と呼応したのか腕と顔の半分が蛇のような鱗に覆われた。

「な、なんだいそれ?! へ、蛇? どうなってるんだい……アンタ」

「……私は人間でないと云ったろう? 普段は意識しても出せないが私の中にある人ではないものの力が魔神に感化され呼応するようだな。少しすれば収まる。それと葉をよこせ」

「あ、ああ……はいよ。背筋が凍るかと思ったよ。とんでもないね……」

彼女が寒そうに腕をさすった。

「毎回何が出るかわからん。そのへんは気をつけろ」

「はいよ」

私は再び葉を口にとると新しい図式を書き始める。

返事をした彼女は身を守るためか数歩さがりそこで真剣な顔をして佇んでいた。

これまで会得できなかったものを含め計六回。

推測では階級の高い魔神ほど吸われる魔力が大きいということと発

生する異常もそれに比例するということだ。

即ちこれから疑似的に召喚する魔人は最大級の試練。

「一応私の後ろで防御の準備をしておけ。ああ、あまり近づくなよ。あと魔法薬をこっちにわたしてくれ」

そう言うのと彼女の行動は早かった。

ささっと小瓶を三本渡したかと思えば同じようにささっと私の真後ろ3ydほどのところに下がった。

書いた図式に魔力を注ぎ式が輝き回転を始めた。

ゴウーッ

突如私を中心に竜巻のように風が吹き荒れ皮膚を切り裂く。

風、暴風が吹き荒れる中で式からは細い雷の槍が迸り簡単に障壁を貫き体を焼く。

魔力が減る中で体からは無数の虫の脚が皮膚を突き破り突き出る。

「ッあ……まさか攻撃を仕掛けてくるとは……なんていう……くうッ」

障壁が貫かれてはそれを塞ぎ、体が傷つけば自動で治る、それを凄まじい速度で繰り返す。

それに加え魔神による魔力吸収が魔力の減る速度に拍車をかける。片手で障壁を張り続け片手で小瓶を二つ掴みその中身を一気に飲み干す。

一瞬で高まり限界を超えた魔力が暴走を起こすような感覚に襲われるが

「二本でも、足りない、のか……?」

それだけの魔力でさえどんどん減っていく。
三本目を出そうかと思った時左手で張った障壁が砕け葉を出す事を
断念する。

突きだしていた左腕は回復速度を超えた攻撃にさらされているらしく
指は折れ爪は剥げ酷い有様を晒している。

それでも嵐は止むことなく未だに魔力も減り続け既に残りは四割を
切り後から出した右腕も損傷が大きくなる。

衰える事を知らないかのような嵐。

これが顕現してもいない魔神の力なのか、と驚嘆するしかない。
急速な魔力減少に足が僅かにふらついたその時。

ふ、と唐突に雷と暴風の渦はその姿を消した。

「ツア……ハッ、ハッ、はっ……なんとか、なったか……」

見渡せば私の左右の地面は戦争でもあったのかと思うほどに壊れて
いる。

後ろの彼女はどうかと振り向けば……

「なんとまあ……無様だな」

ひっくり返り気を失っているではないか。

「だが、これで……」

【東を統べる大いなる王】の能力、私が求めたのは同一とされる雷
と嵐の神の力。

それを得る事ができたと言う訳だ。

確認するように自身の内を覗くように目を閉じ術式を思い浮かべる。

「なんだ、これは……？」

内に視たのはこれまで自身が会得した術式と今回得た新たな術式が三つ。

「どういうことだ……」

『変身の力』『雷と嵐の力』そしてもう一つ新しいものがある。
ソロモンの力で読み取れると言う事は魔人関係である。
それは当然のように認識し理解される。

本に書いてあった事を思い出す。

曰くバアルは「剣の達人」であるらしい。

『剣撃強化』それが三つ目の効果であるのかもしれない。

「わからん。が、害はないならそれでいいか……。おいドロシー起きろ」

ようやく治癒の始まった腕で彼女をゆする。

「ううん？　くれます？　……っ、大丈夫かいアンタ？　！　雷が前から……っ痛い」

起き上がると倒れた時にぶつけたのか手で頭を押さえ

「まったく、なんだいアレは……って酷い有様じゃないか」

「ああ、ホントに。生きていて良かったよ」

「ああーもう服まで、って何だいそれ虫の脚かい？　気味悪い」

「もうすぐ戻るさ。そしたら肩を貸してくれないか。魔力は少し余ったが体力が、な……」

「はいはい。その様子なら成功なんだろうね。全く世話が焼けるよ」

うんざりした、と立ちあがった彼女は苦い顔をしながら腕を組み私を待っていた。

「やはり出発は三日後、で正解だったな」

肩を貸されるという情けない恰好で私は、私達は歩き始めた。

「そうだねえ、服もダメにしちまったし。散々だよ、ありや何を呼びだしたんだい？」

「呼び出した、まあ間違いではないか。バアル、という魔神だ」

ふと、たわいのない話が出来るのは良い事なのかもしれないな。などと思ってしまった……

「は、バアル？バ・ア・ル？アンタそれ私でも名前くらい知ってるよ。東の王とか言う魔神だ……——」

「東に行くんだ、加護があるかも……——」

「あんたいきなりそんな呼びだすとか……——」

「悪かったな。もし次があったら……——」

騒ぐ彼女に体を預けながら私は「戦場跡」から宿へと帰っていった。

翌朝町の裏側が一部滅茶苦茶になっていると「噂」が流れるのは当然だった——

魔神の力（後書き）

【魔力強制回復薬】

そのままの名前。あえて言えばタイトルとかも考えるの苦手。

またの名を強制開放薬。当然個人差があるのでどの程度と一概に言えない

最初に有る程度飲んでいるが約三割回復した、かもしれない
リリカルで言うカートリッジみたいなもの

用法容量は守りましょう。二本も飲んだらオーバーロード

副作用は自由に妄想すればいい↑

『変身の魔法』

魔神オリアスの力。内容は文字通り変身する。

ただしかけられるのは「人」限定。変身できるものも「人」限定。
岩とか木とかにはなれない。

間隔広めで一定時間毎での消費有り。消費魔力は中位程度。

『雷と嵐の力』

魔神バアルの力。作中通り嵐と慈雨の神、雷鳴、と呼ばれる方の力
攻撃魔法。詳細は使用時に。次話には出ない。

顕現してないのに攻撃してきたお方。東統べる王は伊達じゃない
魔力だけで言えばネギや木乃香であっても厳しい、と言うか多分足りない。

仮に魔力が何とかなっても障壁抜いてくる攻撃にさらされて死ぬ。
魔力、体共に回復がないと耐えられない。

他者の助力、替わりに壁を張る等があった場合試験失格。アイテム

やAFは可。

『剣撃強化』

魔神バアルの力。

文字通りの効果。刀剣類を持った場合に限り戦いの歌等とは別で剣速や力に補正がかかる。

常時消費。消費量は下級程度。

接敵（前書き）

今更だけど国とか合ってるのかわからn

接敵

神聖ローマを出発した私たちはハンガリー王国に入り数日の内に東ローマとの国境近い町にいた。

「このまま東ローマに入って大丈夫かね？」

イングランドに端を発したとはいえ魔法使いは教会関係者を装い迫るはずである。

なら教会の本拠地であるローマからさほど遠くないこの地に追手が来ていてもおかしくはない。

むしろイングランドから近づいていることになるのだから……

「いい加減追手が来ているはずだ。ここでお前の姿を一回発見させる」

「はあ？何言ってるんだいアンタ？」

「姿のバレていない私が変身をかけてお前と共に逃げる。キエフ、ルーシの方向へな」

「それでどうするんだい？見つかる前に逃げれば……」

「まあ聞け、私の空間転移なら東ローマの首都まで飛べる」

「は、ちよっと何言ってるんだいそんなことしたら倒れ……」

「追手のほとんどはキエフ方面に向かうはずだ。さらに姿を変えれば私たちだと気付く事はないはずだし万全の状態なら倒れはしない」

「なる、ほど……？それでそのまま東ローマを抜ける、ってかい？」

「そのままセルジュークに入り抜ければ教会の力も弱くなるはずだ。単純だが効果はあるはずだ」

「へー……、考えるもんだね」

「いつか追われると思っていたんだ考えはするさ」

無論即興だった……

だが別段おかしなところはなはずなので文句はないだろう。

「うん。他に思いつきそうにないしそれでいいよ」

うむ、文句がないのはいいことだ。

「なら準備をして発見されるまでのんびりしよう」

「そうさね、そうしよう」

そうして私たちは小さく笑い合った。

私たちは一旦東ローマに近い町から離れ北、キエフに近い町へと移動した。

この男、クレスと出会って何日だ……

まあそれなりの時間が経ったわけだが、わかっているのはコイツが人間じゃないってのとお人好しってこと。

あと結構な無茶をする。

正直なんで自分でもこんなにあっさり一緒にいるのかわからないけ

どコイツは信じてもいいと勘が、占い師としても女としても、そう言ってる。

「へえ、髪の色を変えるだけで随分と印象が違ふもんじゃないか」

買い物を終えて宿に戻った私が見たのは髪を金色に染めた、正確には幻術をかけたクレスだった。

「ふん、この身体になる前はこの髪色だったよ」

この身体、話してる間に何度か聞く言葉だけどこまで踏みいつて聞いているものかわからない……

「そうなのかい？まあこの辺で黒い髪なんてそんなにいないからね。で、アンタは何をしてるんだい」

そう、この男が帰ってきたって言うのに振り向きもせずになんと机に向かって何かしてやがる。

「ああ、術式の研究をな。羊皮紙の空きに纏めている」

「術式って魔神じゃないだろうね？やめとくれよこんなところで」

気絶していたとはいえあんな、魔力が渦巻いてよくわからない重圧に押しつぶされそうになって更に嵐が吹き荒れる中にいるのなんてのはもうご免こうむるってものだ。

「こんなところではやらないさ。それに今は休息が第一だからな。オリジナルの術式さ」

「オリジナル？そんなの作れるのかい」

「他にやるのがなかったのさ。『音』魔法だ、私がつくっている

のはな」

「音？」

「音。声や何かを相手にぶつけるのさ。何もしなくても口を開けばそれが衝撃となる」

「結構えげつないじゃないさ」

「それでも約に立たなければな、今はその改良だ」

「やるのはいいけど私には使わないでくれよ」

そんなことまで出来るなんて、本当にコイツは……

そうして私は彼の隣で『音講座』を聞きながら買ってきた物の整理を始めた。

「ッ……」

「ん、どうしたんだい？」

不意にクレスが動きを止め部屋の中を、周囲を気にしはじめた。

「音が……」

「また音の話かい？」

「音がしない、少し離れたところに魔力だ。どうやら結界のようだ」
「なっ、遂に来なさったわけだ」

「の、ようだ。すぐに片付けろ、出るぞ。打ち破る」

「はいはい、ちゃんと守っておくれ」

この町に留まり三日、遂に追手が私たちを見つけたらしい。

「障壁を張っておけ」

宿を出てすぐ路地に入った彼はそう言った。

「タン・レスタン・アルター・アンタレス 出でよ無音の守り手、我らに及ぶ悪意を阻め『冠音障壁』」

「何の魔法さ」

「衝撃みを拡散する障壁を私たちに張った。防げるのは衝撃のみだ、攻撃は避ける事に専念しろ。当たらなければそのまま切り抜けられる」

「私の薄っぺらい障壁じゃもともと避けるの前提だよ」

「そうか、それは……、近いな。気をつけろ」

そう言って新たな角を曲がったと同時に

「いたぞっあの女だ！男が一人一緒にいるが殺してかまわん！」

ローブに杖、いかにも魔法使いです、といった男が叫ぶ。

その後ろから剣を持った騎士が二人、魔法使いの前へ出る。

「タン・レスタン・アルター・アンタレス 敵を打ち砕け、覇道の波よ、我が音にて響きその道を開け『破音の鎚』」

唱え終わると同時にクレスは足を強く踏み下ろした。

ダンッ

音が響いたかと思えば鎧の一部をへこませ騎士が声を上げずに倒れる。

これが音魔法……見えないって言うのは嫌だね。やっぱりえげつない。

「ぐあッ、何だ……今のは？」

騎士の後ろで助かったのか魔法使いは体をふらつかせる程度に留まる。

「ちっ、威力が弱かったか」

「何の魔法かわからないが残念だったな」

倒れる騎士の後ろで男は

「くらえ『魔法の射手・光の九矢』サギタ・マギカセリエス・ルーキス」

無詠唱で魔法を放つ魔法使い。

「どうという事はないな」

そう言ってクレスは何もせず男に近づきながら魔法障壁だけでそれを受け止める。

「何、私の魔法がっ」

驚く男に近づいたクレスは

「寝てろ」

腕を振り翳し男を壁に叩きつける。

壁に輝を入れた男はズルズルと壁に背を預けそのまま地面に落ちた。息はしているらしい。

「雑魚だな、先へ行くぞ」

大した事でないようにクレスは振り向きそう言った。

「頼りになるってわかって良かったよ」

無駄に緊張してた私が馬鹿みたいだった。

そうして再び私たちは町の中を脱出に向けて動き出した――――

接敵（後書き）

ホントにタイトル苦手・・・

年齢詐称葉とかエヴァ様の幻術とか変身しても特定の姿しか出てこないけど基本固定、ということにしておこうかな・・・

クレス（幻術V e r .）

金髪碧眼。『本来』の姿。年齢は同じ約二十三

『冠音障壁』

詠唱は「出でよ無音の守り手、我らに及ぶ悪意を止め」

音魔法。低級

あれは衝撃のみを拡散するバリアーね、スピリッツが（（（
作中通り衝撃を拡散するのみの音魔法のベール。風魔法なんかには
滅法強いが地や氷などの物理的な破壊力を持つ技には弱い

『破音の鎚』

詠唱は「敵を打ち砕け、覇道の波よ、我が音にて響きその道を開け」
音魔法。中級程度

『私言の散弾』が弾丸、点ならこれは面。板、壁ではない板。
足を強く踏み込む程度で鉄板を曲げる意外と凶器
当然不可視。

エヴァ様が大战起こるところでやめようかな・・・
原作入ったら好き勝手出来ない分絶対止まるのわかるし・・・

脱出（前書き）

感想怖い

脱出

私達は騎士達を蹴散らし再び逃走を開始した。

「そう言えばクレス、アンタ実戦経験あるんだね」

キエフのある方向、北の門へ向かう中、彼女はそう聞いてきた。

「さっきので実質三度目だ」

「はあ!?!」

「強敵と言えるのは最初の一度だけだ」

「ちょ、アンタそれでよく自信持って守るなんて言えるね」

「騒ぐな、見つかる。それにお前が勝手に私を「強い」と決めたんだろう。それに死なない私が守るのだ、盾としては十分だろう」

「あーもうっ……そうだけどね、コッチとしては……」

「声がしたぞっ。向こうだ、行けっ」

「見つかったな」

「う、悪かったよ……」

バツが悪そうに彼女は口を閉ざした。

「いたぞっ!こっちだ、残りを呼べっ」

騎士が一人現れ増援を呼び始める。
私はそれを止めることなく静観する。

「どうしたんだい、みんな呼ばれちまうよっ」
「一掃する。こっちだ」

彼女の手を掴み私は走り出す。

「え？きやつ……ちょ、ちよっとつ、確かそっちは……」

そう少しひらけてはいるが

「行き止まりだよっ、どうすんだいっ」

壁際まで言ったところで彼女の手を離すと彼女が目を吊り上げ詰め寄る。

「一掃すると言ったんだ」

「どうやってさっ」

「単純に集まったところで呪文をぶつければいい。そのために広いここがいいんだ」

円形に壁で囲まれた袋小路。

ここなら音が、声が響いて反射する。

「待つつて言ってもすぐには来ないし呪文で言っただけですぐに出せないだろう。遅延呪文を使えるのかい？」

「そんなものは使えん。魔法で姿を消して待つ、そこにいろよ。それと敵と真正面から相対するなよ。タン・レスタン・アルター・アンタレス 大いなる王 力強き王バラムよ今その賢しき力を、人を

惑わし戯れる王の力を持って勝利を我に与えたまえ『王の隠れ蓑』」
詠唱が終わると同時に魔法陣が足元に広がり私の姿を不可視のそれとする。

「まっ……て、勝手に消えるんじゃないよ。馬鹿っ」

その声を無視し私は彼女の隣から離れる。

「いたぞっ！女がっ……」

ドサッ

ちようど一人で入ってきた男に一撃入れ気絶させる。

「向こうだっ！声が途切れたぞ。固まって動け、注意しろ」

その声と共に幾らか立派な鎧に身を包んだ長と思われる男を筆頭に騎士が五人、魔法使いが三人小路へと入ってくる。

騎士の一人が先ほど気絶させた男を起こすなか

「隊長、袋小路ですよ？」

「ふん。女、ドロシー・ホワイに間違いないな。男はどうしたのだ？」

不用意に近づかず一定の距離を保ち「隊長」はそう聞いた。

「知るかいっ！あの馬鹿ならどっかいったよ」

袖から携帯杖を取り出し構えながら一人残された彼女は応えた。

「逃げた……いや、隠れているのか？不意を打つつもりか」

「知らないよ。アンタらがぞろぞろと気やがったせいで今頃逃げてるんじゃないのかね」

「ふん、それはありえん。我々が全員ここにしようとも魔術師殿達が掛けたこの結界がある。出られんよ」

「全員？御大層な事で」

「ふん、我々にはお前を捕まえろとの命令がある当然の事だ。さあ大人しく掴まるといい。異端の魔女を捕まえろ。術師殿達はもしものために周囲の警戒をお願いいたします」

そう言う二人の騎士がドロシーへと近づく。

魔法使いは自分たちを囲むように障壁を展開する。

それを待っていたかのように

「タン・レスタン・アルター・アンタレス 来たれ雷、吹き荒べよ嵐——」

「詠唱だと、どこだっ」

必死に声の主を探すが姿を消したそれは元から見えるはずもなく声は反響し位置を惑わす。

「——四方の一角を統べし大いなる王のもとに——」

「く、止められんか全員防御陣形。円陣だ、どこから来るかわからないぞ」

「——その雷鳴を轟かせ敵を穿つ槍となれ『魔人射る雷嵐の槍』」

必然、ここに詠唱は完成した。

防御を固める八人。

その足元

カッ——

光と共に魔法陣が展開される。

「ッ、散か……——」

散開、その言葉が紡がれるよりも早く

轟、と言う音と共にバリバリと雷鳴が響く。

暴風と雷による轟音が彼らを貫いた。

中心にいた隊長と呼ばれた男の鎧は鎌風と化した暴風にギヤリギヤリと削り切られ、幾条にも走る雷に焼け焦げ煙を上げ男自身は完全に炭と化していた。

その周りにいた人間も隊長ほどではないが鎧や服がそこらじゅう切られ焼かれていた。

雷嵐の過ぎたそこに意識がある等と言う前に無事である人間などいるはずがなかった。

動くものがない事を確かめ私は姿を現しドロシーに近づくが

「あ、ああああ……」

完全に腰を抜かし座り込み口を広げていた。

「大丈夫か？」

しゃがみ込み彼女の目の前で手を振ると

「ちよちよちよ……」

「落ちつけ」

「落ちつけるかいっ」

ばしっ、と良い音で頭を殴られた。

何故だ……

「やめろ。何だ、怪我でもしたのか？」

「それはしてないけどね。ちよっと今の何なんだいっ、死ぬかと思
ったよっ！」

騒いで幾らか落ちついたのか彼女はなんとか立ちあがる。

「殲滅のためにバアルを使った」

殲滅級の呪文などそれしか知らないのだから他に選択の余地などない。

「バアルってあれかい、あの時の」

「そうだ、あの時のだ」

「凄いもんなんだね。偉そうな隊長さんだって何も感じずに死ねた

だろうよ……」

死ねた、と言うところで少し顔を下げ声が落ちる。
このような経験など当然ないのだろう……

「……これでもコイツらだけに範囲を絞ってお前に被害がないように加減したんだ」

「加減？」

そう言っただけで彼女は若干下がっていた顔を上げこちらを見つめ

「これで？ あんた悪魔か」

「まあ、似たようなものだな」

「そういう意味じゃ……。はあ、なんか疲れたよ私は……」

がつくり、と彼女は肩を落とした。

それを待っていたかのように町を覆っていた結界が解かれる。

「ふむ、結界も解けたようだな、外に向かおう」

「でも全員倒しちゃったけどいいのかい？」

「キエフに向かったということを誰かに見られさえすれば別にコイツらでなくとも構わないだろう」

「まあ、それもそうか……」

「だからと言って『コレ』を見られるのは良くない。人が来る前に表に出るぞ」

「はいはい。はあ、早く休みたい」

「今朝まで休んでいただろう」

「そうだけどさ……。そうだとクレス、あんた魔力は残ってるんだろうね？ なんなら休憩してもいいんだよ」

「当たり前前の事を聞くな、今の大呪文を含めいくら使ったとはいえ余力はある。十分さ。なくてもまだアノ薬が一つ残っているだろう」

「ああ、そうだったね……」

「休憩したいならそう言えば……」

「ばっ、私は別に自分の為じゃなくてあんたの事を思ってたねっ」

「そうかそうか」

「ちよっと、ちゃんと聞いて……————」

——
そうして私たちは人が戻り始めた表通りを歩き始めるのであった——

脱出（後書き）

『遅延呪文』

使用難度が高いらしい

ネギぐらいしか使っていない

魔法世界でも使う人がいないらしい

魔法使い達が防御の為に全員を囲むように障壁を展開したため外への被害は最小限。

放出される雷が外に漏れなくなったため逆に仇となったと言える。

【魔神術式】（2）

発動時に必ず魔法陣を展開しなければならない。

発動が早いものでなければ感知されるという欠点。

『王の隠れ蓑』

詠唱は「大いなる王 力強き王バラムよ今その賢しき力を、人を惑わし戯れる王の力を持って勝利を我に与えたまえ」

11話で出た魔神バラムの『不可視にする力』

書いてあった通り音までは消す事ができない。

『魔人射る雷嵐の槍』

詠唱は「来たれ雷、吹き荒べよ嵐 四方の一角を統べし大いなる王

のもとに　その雷鳴を轟かせ敵を穿つ槍となれ」

12話であった『雷と嵐の力』魔神バアルの力。

風最大の突貫力らしい『轟き渡る雷の神槍』には劣るがかなりの貫通力を発揮し、それに加え暴風による裂傷とスパークを引き起こす。ネギで言う『暴風の螺旋槍』のようなもの。

消費は大。通常の魔法で言えば古上位級、最大レベルの呪文であるが消費魔力は魔神術式特有の低さ。

というか会得する際の方が圧倒的に多い。が、普通は会得できない・

$$\vdots$$

最大出力で放つ事はまずない。

追跡の影（前書き）

見なくてもいいとうてもどうでもいい回

追跡の影

ハンガリーでの一件以来私たちを追う者の姿は見えなくなった。

私は姿を戻しドロシーは姿を変化させ無事コンスタンティノーブルまでの転移に成功。

一日休みを入れ翌日十字軍遠征の時に長き攻城戦をした地アンティオキアまで再び転移した。

ここから東の都市には行った事がないために転移は不可能だ。

二人で歩いて行くほかない。

幸いこの都市からは東へ交易のための道があり迷う事はないだろうがここからは砂の多い厳しい土地が続く。と、行商人から聞いた。

ただ現在は十字軍の通った影響が未だにあり東への道に行く人は殆どいないらしい。

そんな事を気はせず私たちは水や予備のローブ、いくらかの物資を補給し『王の隠れ蓑』で姿を消し誰にも止められることなく静かに出発した。

季節が幸いしたのか気温はそれほど高くもなく予想より少ない消費で砂地に行く事一月以上。

ハザール海という巨大な湖を過ぎた私たちはエステラバーと言う町にたどり着いた。

「ここからはどうするんだい？」

「流星にここまで来るのは私も初めてだからな。情報が欲しい」

「なら定番は酒場かね？」

「ああ、それにたまにはしっかりと寝たいだろう。できれば何日か滞在したいが……」

「なんだい、そんなこと言うなんて珍しいじゃないか」

「お前の事を考えてやっているんだよ」

「はっ、なんだい今更そんな事言っつて。まあありがたいけどね、泊まるにしてもそろそろ何か売るでもしないとお金がなくなるよ」

「ふむ、それもそうだな……。ここが酒場のようだな」

会話を切り上げ私たちは扉をくぐった。

店内は昼間にしては賑わっているようだ。

「初めて見る顔だね、お客さん。ご注文は？」

カウンターへ近づくなり店主らしき壮年の男はそう言った。

「東に行く途中なんだ。水の補給がしたい、いいかな？」

そう言っつて水草を取り出す。

「ああ、大丈夫さ。しかし東とはね。最近は少ないんだよ」

水草を受け取った店主はこちらを見ずそう言った。

「最近は何事がありましたから……」

「ちよつと、そんな事より……」

「ああ、わかった。それで店主殿、何か路銀を稼ぐのによさそうな話を知りませんか？」

「金かい？ そうだね、少し前に傭兵やら何やらが人を探してるとか言ってたよ、賞金が出るとか言ってたね」

「賞金？ 罪人かなにかですかね」

「そこまでは知らないけどね。多分また夜にでも来ると思うから来たらいよいよ」

「そうですか。ではまた夜にでも来させてもらおうとして、それまでは宿でもとって休むとしようか」

「私はそれで構わないさ、少しはゆつくりしたいもんさ」

「そうかい、じゃあ夜には何か飲んでってくれよ？ はいよ、これ」

満たされた水革を受け取り私たちは店を出た。

酒場を出た私たちは最低限の買い物をするまじの地への情報を集めつつ宿を探し歩き始めた。

「賞金、だとさ……。夜にもう一回行くのかい？」

「ああ、確認は必要さ」

「で、当たりだったら？」

「そのまま出るか日を置くのどちらかしかないだろう」

「行き当たりばったりってことだね」

「臨機応変と言え」

「はいはい」

「傭兵のようだと店主が言っていたが……」

「じゃあ魔法使いはそう……————」

町は何事も無いかのように賑わいを見せている。

「おや、来たのかい。何にする？お連れさんもどうだい？」

「一番安いのを」

「私はいらないよ」

私たちは再び酒場にいた

「それで例の人達というのは？」

「ああ、いるよ。あの隅に固まってるのがそうさ」

「そうか、ありがとう。お代と情報代だ」

「おや、いいのかい？」

「ああ、いいさ。受け取ってくれ」

少し多めに出された硬貨に店主は声を上げるがそれに短く応え私は残った酒を飲み乾し器と一緒にけなしの金、銀貨を数枚置くとドロシーを後ろに隅の一団に向かった。

「失礼」

一番手前、横顔から髭をたくわえているのがわかる男へと話しかける。

「あ？何だお前たち」

「賞金がでるとかいう話を聞いてね、ここの店主殿が」

そう言って後ろを振り向くとカウンターの店主はコチラに気付いたのか軽く頷いてくれる。

「なるほどな、お前さん達はそれを聞きたいってことか」

「おい、話してやれ」

そう言うのと左に座っていたこの中では一番若いと思われる男が喋ろうとこちらに向き直った。

命令するところをみるとどうやらこの男がここのリーダー格であるようだ。

「へいへい。実は一月以上前からあのローマのお偉いさん方が一人の女を探してるのさ」

「女？」

「そう。金の髪に青い目のよくいる見た目なんだが教会様が言うには異端な奴らしい。で、今も逃走中」

「異端とはどうして……」

「んな事は知らねえよ。ただ連れの男が一人いるらしくてな、そいつがくせものらしい」

「と、言うത്？」

「騎士を含めた追っ手の教会関係者を十人近く皆殺しらしい」

「皆殺し？それは……」

私が殺したのは最後の団体だけなのだがな。

「それ以来どこにいるのか全くわからない、って話さ」

「その男女がここに？」

「いや、それはわからねえ。でだ、教会様は遂に二人に賞金をかけて世間に助けて、って言ったのさ」

「馬鹿、そんなこと言って教会にでも聞かれでもしたらどうすんだ」

幾らか不穏当な発言にもう一人、長髪の男が若いのを諷めた

「悪い悪い。けどこんなとこにいないだろ」

「そりゃそうだ」

そう言って男二人はげらげら笑い出した

「で、賞金のほうは？」

「殺したらどっちも金貨15枚。生きてれば女なら金貨50枚、男は金貨80枚だ」

「それは……」

始末したのが私とは言え目的であるドロシーより高いとは……

「良い話だろう、たった二人殺しても金貨30枚だ」

「ですな、しかし何処にいるかわからないとなると私たちに縁はなさそうだ」

なあ？とドロシーを見れば

「ん？終わったのかい？」

いつの間にか椅子に座り男たちの肴を勝手に食べながらくつろいでいた。

「ああ、終わった。私たちに縁がなかったよ、だから勝手に食べるをやめろっ」

食べさせるのをやめさせ彼女をたたせる

「はいはい、話が長いんだよ」

「勝手に申し訳ない。少ないがこれで……」

「あーいいさ。なかなか強かな姐さんだ」

はっはっはっ、と笑う。

どうやら許してくれるようだ。

「では、良い話ではあるが私たちは」

「そうかい、まあ気をつけな」

そう言ってヒラヒラと手をふる男たちを背に私たちは再び酒場を後にした。

「当たり前だったねえ。で、いつ出るんだい？」

「ちゃんと聞いていたのか……。ん？ああ、明日の昼間にでも何事もなかったかのように何か売って出発すれば問題ないだろう」

こちらまで私達の話が流れている事を確認できた私とドロシーはいつものように他愛のない話をしながら宿へと帰る

その翌日追手から逃げるため静かにエステラバーの街を去った――

追跡の影（後書き）

ハザール海

今で言うカスピ海

いろいろ合ってるのかしら・・・？

水草

Ⅱ 水筒

ドロシー・ホワイト

予想外に大胆、と言うかなんとかそんな一面が明らかになった
「姐さん」である

暗殺者

エステラバーを何事もなく出た私たちは何事もなく巨大都市メルヴェへとたどり着いた。

そこで私たちが見たのは町の外に捨てられた十字を持った騎士の死体。

そうローマから来たのだろう騎士達の死体だった。

「どういう事だい？」

「私を知るわけないだろう」

「危ない所に来ちまったんじゃないのかい？」

「そうかもしれないが騎士を殺したと言う事は上手く動けば味方になるかもしれないぞ」

「そうかもしれないけどさ……。まあ、頼んだよ」

「ああ、ちゃんと守るさ。まずは情報収集だ」

私は彼女を安心させるため手を握りながら街の中へと歩き出した。

一日クレスに引っ張りまわされて分かった事は

この辺りには「ハッシューシ」と呼ばれる教会関係者、主に指揮官クルスの騎士などを殺す「暗殺集団」がいると言う「噂」だった。

そう「噂」だ。

だれもそれを見たやつがいない、騎士達やローマから来た人間はほとんどが怯えているらしい。

実際ローマからの人間はほとんどおらず騎士もこの都市に来ては殺され捨てられる、といった状態らしい。

ここ数年ローマに奪われた町などを取り戻しているがその裏にはその集団の力があるらしい。

どれも「らしい」と噂の域をでないが……

「ここまで言われているんだ。そういう人間がここにはいるのだろうな。魔法が関わるかどうかはわからないが」

それがクレスの意見だ。

「それでどうするんだい？ すぐにここを出るかい？」

「できれば見て回りたいが……、一日様子を見るのはどうだ。暗躍が得意な組織なのだ、今日来た私、はともかくお前の髪などを見ればもとはローマ側から来た事くらいわかるだろう」

「反応を見るって言うのかい？ まあ死なないでちゃんと先に行けるなら私は構わないけど……」

そう、危険でもちゃんと私を守ってくれるなら構わない。

それが私の今の思いだし、コイツならちゃんと守ってくれるという信頼も今ならある。

「ああ了解だ。まかせるといい。それには巨大な図書館があるらしい、新しく魔法なり「暗殺術」なりを得られそうじゃないか」

そういったクレスの顔はどこか楽しそうだった。

「起きろドロシー。早く」

「んー？なんだいままだ夜だろう」

こんな時間になんだって……

「どうやら「ハッシューシ」とやらのお出ました」

「はっ……」

叫ぶ寸前でクレスの手が私の口を塞いだ。

「静かにしろ、迎撃しつつ脱出する。準備をしろ」

「透明化は？あの便利な魔法は？」

「気づいてないのか？ハンガリーでやった時に詠唱が聞こえただろう？アレは音までは消せないんだ」

「でも見えないなら、それに音は……」

アンタの分野だろう、というのに

「音が、声が出なければいざという時に詠唱ができないだろう、無音にはできん。そして奴らは暗殺専門らしいからな僅かな気配や音には敏感だろうさ。位置がばれている以上見えなくなったところで意味がない」

冷静でいちいち正論っぽいこと言って憎らしいったらありやしないよ。

「そうかい、ならちゃんと守りな」

つい顔を顰めちまうが信賴してるんだよ？言わないけど。

「極めて了解だ」

返事が来た時

キィ――――

小さい音をたて扉が少しだけ開いた。

私の口はとっさに出されたクレスの手のおかげで声を出さずにすんだ。

そのままクレスは私を壁によらせると体をずらし私を隠すように立つ。

キィン

甲高い音が聞こえた時には扉が開け放たれ黒尽くめの男をクレスが壁に、ちょうど外から影になる位置で抑え込んでいた。

「何の、用だ、侵入者」

クレスは黒尽くめに質問するが何故か苦しそうだ。

「く、教会だかローマの狗にお前みたいなの「もの」がいるとはな」

相手はあっさりと口を開くがそれは

「か、勘違いだよ。私たちはそういうのから逃げてきたんだ」

咄嗟にそう口から出した私によって遮られた。

「なら何故我々の事を探った」

どうやらこの街に入った時から見られてた、ってことかね？

「そりゃ街の外に死体が、私たちを追ってる人間の死体があれば気にするだろ」

「……それが事実かどうかはわからない」

「わ、私はドロシー、ドロシー・ホワイト。奴らが追ってる賞金首だよ」

「ドロシー……！」

「見た目が違うな……」

「クレス」

「だがっ、ここで殺しておけば……」

「無駄だ、私を殺したところで第二第三の刺客が向けられる」

「頼むよ、クレス」

「ちッ。……これで、いいか」

「その髪……なるほど魔術というやつか」

「ぐ、うっ……」

「クレス？」

「剣を抜いただけだ、解毒剤もある」

そういつて黒尽くめは小さい袋を取り出した。

「飲め、でなければ死ぬぞ」

クレスは男を睨みながらもその手を離した。

「ちょっと、毒ってその剣かいっ!？」

苦しそうなのは毒のせいらしい。

「我ら特性の毒が仕込んである、常人ならばもう死んでいるぞ」

そう言って男が見せた短剣の刀身は真黒らしくこの暗闇ではよく見えない。

それが見えないところでクレスに刺さっていたらしい。

「くそっ、毒は……多分、初めてだ……」

「早く飲みなよ、死んだらどうするんだい」

「死んだら、ではない。飲まなければ「死ぬ」これは決定だ」

「これが毒でも変わらないか……」

負け惜しむようにクレスは小袋を拾い上げ中から丸い粒を取り出すと一気に飲み込んだ。

「まずい」

「まずいに決まってるだろう、薬だぞ」

「味なんてどうでもいいから、傷は大丈夫なんだろう?」

「深く刺した、すぐに治療を……」

「大丈夫だ、もう塞がった。毒も大丈夫なようだ」

その言葉に男は絶句しているようだ。

当然だ「私の」クレスはその程度に傷なら瞬く間に治る、毒ももう大丈夫とは恐れ入るってもんだ。

「ま、まあ魔術が使えるならその程度の傷はだ、大丈夫だろう」

こんどは男が負け惜しみじみたことを言いだしたよ。
いやだねえ男ってのは。

「それで、私たちの安全は保障されるのか？」

再び私に「変身」を掛けたのだろう

小さく私の足元で魔法陣が輝き体が魔力に包まれるのを感じながら
私は静かに腰を下ろし事の成り行きを見守る事にした。

「ああ、一度我らの頭領に会って頂く、そこで話してくればいい」
「そうか、今すぐいいのか？ドロシーいいか？」

「終われば安心できるようになるんだろう？なら行くよ」

寝たいところだが頭領とやらが許せばこの街で誰かに襲われる心配
はなくなるんだらうからね。

「では案内しよう我らが「教団」の頭領ハサン・サツバーハ様のと
ころへ」

そうして私たちは宿を出て男の先導で夜の街の中を歩きだした――

暗殺者（後書き）

手繋ぐのかよっ?! の回↑

キャラの容姿が「不鮮明」なのは仕様
その内説明が・・・?

「第二第三の・・・」魔王とかじゃない

暗殺教団

十字軍を恐怖させた
麻薬、大麻を意味し蔑称たるハシユシ、ハシユーシと呼ばれる
それをもとに暗殺者、アサシンという単語が生まれる

暗殺者 A 名前はまだ n（

年齢 不明 人間

暗殺教団所属

クレスを人間じゃないと見抜いた何気に凄い人
でも出番は・・・

クレス・エルレイア

毒耐性が微妙な事が明らかになる

本人の知らないところで物扱いされた人

ドロシー・ホワイト

つんでれ？

いつのまにかクレスを所有物にした人

ハサン・サツバーハ

次回明らかになる、はず

喜屋難砂（前書き）

一応ルビ

前回の終わりの感じを全く受け継がない話

喜星難砂

ハサン・サツバーハ

聖地エルサレムを奪（・）っ（・）た十字軍の人間等を暗殺し私たちがこの街で争った男の属する「暗殺組織」「ハッシューシ」の頭領である人物。

それが今私たちの前にいた。

「話はわかった、いやすまない。こちらも生死のかかった戦いをしてるんでね、許してほしいとは言わないが理解してくれるとありがたい」

鷹揚に彼はそう言った。

私とドロシーを除き彼を含めた「組織」の人間全てが目以外を覆う黒尽くめであり目の前の彼だけが白い仮面を付けていた。

「ああ、むやみやたらと顔を出せない立場なんだ、これは許してくれ」

これ、と仮面を指しそう言った。

「できれば何日か滞在したいのだがその許可を……」

「いいぞ、欲しい物があれば揃えるし教える。それくらいのこととはさせてもらう。その代わり、と言ってはなんだが……」

一度間を置き顎に手を当てる様にして

「魔術について教えて欲しい」

そう言った。

「問題無い。が、私たちはあまり使える方ではないから過度の期待はやめてほしい」

「あー、構わないさ。どういうものかわかってこちらで手が打てればそれでよい」

「ローマ側からの人間は……」

「あーそれもよいよい、もとより不審な人間の始末なんかはこっちでもともとやってた仕事だから、気にしなくて結構」

「ありがとうございます」

「いやよいよ、それよりなんで追われてるんだ。金貨何十枚も掛けられて」

「追手を何人か消した事と彼女の特殊な家系が問題なのだ」

「ふうん、まあ俺等に関わらん事ならよい。こちらで一人付けるのでな、何かあればそ奴に言ってくれ。ではそういうことで」

解散、あっさりとそう言って彼らは消え私たちはもと来た道に戻り始めた。

その後私とドロシーは魔法の基礎的な事を彼らに教えつつも彼らの持つ戦闘術や隠密技能などを教えてもらう事にした。

ちなみに彼らは幾つかの町などを拠点としているらしく頭領であるハサンは常にこのメルヴにいるわけではないのだと言う。

私たちがあの夜に会えたのは他の町の情報などから私たちがここに来ると見越して警戒していたらしい。

ここで意外だったのだが

「ははっ、どうだいクレス？なかなか様になってきただろう」

そう言ってドロシーは指の合間や服の袖、髪などから短刀や針などといった小さい暗殺向けの得物を次々と取り出している。

「ああ、君にそんな才能があったとは驚いているよ。だが武器はちゃんと使えなければ……」

「わかってるよー」

上機嫌な彼女は彼ら暗殺者の使う武器隠し、収納の技能を瞬く間に習得してみせた。

彼女ほどではないが私も幾つかはできるようになった。

私はそれよりも気配を消す技術の方に適性があるらしい。

彼らの使う隠密術は気配を周囲と同調させることで自身の気配を消す。というものでなかなか高度なものだ。

未だ拙い私のレベルでは本職である彼らにはわかってしまうようだが。

既に六日、ここ最近では最も長い滞在期間である。

安全なこの街にもう少しの間滞在する予定だが残りの魔力回復薬が一つという事と後日に影響が出ると困ると言う理由から新しい「魔術式」の習得はできない。

だが音魔法の訓練はかかしていない。

更にこの街には図書館がある。

何とはなしに、あわよくば新しい魔法の発想は無いものかと足を運

ぶ日々だ。

天文台もあるこの街には星々の動きに関する書籍も多く占星術等に関する……

「星、か……」

「は？星？いきなりどうしたんだい？まだ昼間で星なんて見えるわけないよ……おーいクレスー？」

どうやら少しぼうつとしていたらしくドロシーが目の前で手を振っている

「占星術とソロモンの書にある星々の力を使った魔法円、これ等を使って星の力を使う魔法を考える」

「星、魔法？」

「おお、そうだ「星魔法」だ。有り難うドロシー、星魔法、そう星魔法だ、音に続いてこれの研究をしよう」

安直だが変に捻るよりましと言うものだ、他のも魔神術式や音魔法と言っているし、わかっているじゃないかドロシー。

「いや、有り難うって言われてもね……」

「ふふふ。これが「血が騒ぐ」と言うやつか。なかなか楽しくなってきたぞ」

クレスが「星魔法」とやらを研究しだしてから三日。

私がハシューシの連中と魔法のことやら向こうの技術の訓練なんかをして疲れて戻ってみれば。

「ふふふ、という事はこの土星の魔法円を利用すれば……」

「クレスー、お腹減ったよー」

私が「星魔法」とか言ったせいかね、こりゃ……

「クレスー？クレスさーん？聞こえてるかい？おーい」

聞こえてないのかね？

「こんのおっ」

「った、どうしたドロシー、私は今……」

「どうしたもこうしたも、人の事無視し続けたくせに何言ってるんだい」

「む……それは、悪かった。それで話とは？」

「私、お腹、減った」

「んむ？自分でつくれば……そうか分かった。しかし作る準備をしていないんだ……。うん、たまには外に行こうそれでいいだろう」

早口で、しかも若干顔が引きつってるけど理解はしてくれたらしい。

「よろしい、さっさとそれを片づけな」

「ああ、わかった。わかったよ。だからそう不機嫌そうな顔をするな、どうしたらいいか困る」

「はん、知らないよ。まったく……いつまでこの街にいるんだい？もう明日で十日になるよ」

「そう、だな。いい加減先に進もう。ここで甘えてばかりもいられ

ないしな」

「はあ……あんたが準備できれば私は明日にでも出れるよ」

そう、出発する準備だけならとづくにできてるのさ。

「そうなのか、では明日。明日は確かハサンもここを出ると言っていたから挨拶していこう」

「そうか、魔術師殿達も今日ここを発つのか」

「ああ、ハサンも今日出ると聞いてな。それで挨拶に」

「それはありがとう。いやこちらも世話になったし。全て、とは言
い切れんが追手なりはこちらで今まで通り始末する」

「ああ、それではな『暗殺者様』」

「はっはっはっ、ではな『不死者殿』と『未来視殿』」

「知っていたのか」

「最初に「刺した」という報告もある、それに「観察」と「諜報」
は得意なんだ。どうやら本当らしいな」

鎌をかけた、という事か。

「ふ、そうか。……生きていればいつかまたここを訪れるかもしれ
ん」

「そうか、その時俺がいるかは疑問だが……。では縁が合えばまた
会おうぞ」

こうして滞在十日目にしてメルヴを私たちは後にした。

「また砂かい……」

「言うな、戻りたくなるだろ……」

この先も当分は砂地らしい……――――

喜星難砂（後書き）

本当に題名困る・・・
ルビをひらがな入れて一文字ずつ当てたいな・・・

【武器収納】

後の世に言う暗器術とかそういう系統
見た目不可解な武装の収納を可能とする
当然個人差が有る。練度によって数が変わる。
気にならないような措置がとられているがちゃんと重量は増している
あまり多く持ち過ぎると転び方などにも気を使わないといけなくなる

【気配遮断】

周囲の気配と自身の気配を同調し紛らわせる
草木一本動物一匹いないような完全に何も無い空間では効果がダウ
ンする。
個人の練度に左右される。

『星魔法』

安直シリーズ第三段
大別的には光属性であるがそれよりも難度の高いもの
星の精を行使する。

ハサン・サッバーハ
暗殺者 人間

某運命の夜に登場するアサシン
その初代。見た目はそのまま
最後にクレスを不死者だとか言って鎌をかけるとか言うレベルじゃない事をした人。
今後の出番は・・・ない

ドロシー

気配遮断スキルは難しいからやめた人
武器収納スキルが無駄に高い

クレス

武器収納スキルと気配遮断スキルを会得した
星魔法研究でちょっとマッドになりかけた

遠当て（前書き）

ただストックが減るだけ誰得の二話更新
ここから更に無理な超展開が続く

遠当て

メルヴを出た私たちは追手に追われることなくサマルカンドそしてコーカンドを超えた。

ついにセルジュークを出た私たちはアクスという地に入るがここからは国が変わったせいか文字大きくかわっており国号を「大夏」というらしい、しかし魔神ロノウエの言語魔法はこの地でも無事作用した。

そしてこれまで無かった山間部という地形には私もドロシーも苦勞させられた。

苦勞の末なんとか無事に敦煌へとつく事が出来た。

どうやらこの地が東から西へ行く場合の出発点ともいえる場所とのことだ。

この地から大きく三つの道が出ているという。

要するに交易道の終点である。

ここから東には「宋」という大国があるそうだ。

数日の休息を取ると新たな変身魔法をかけ敦煌を後にした。

そして安西を經由し宋へ入ると武威、長安、洛陽そして首都である開封へとたどり着いた。

開封、城壁で囲まれながらも中を運河が通ると言う規格外の都市だ。これまで見たどの町よりも活気があり騒がしい、夜になっても人々は眠らず喧噪は収まらない不夜の街それが開封だ。

思いのほか早くついた、のだと思う。

ここまで半分以上の道を私が常人の倍以上の速さで走ってきたがそれでも二百日はかかっているはずだ

目的地はもうすぐと言ってもいい。

だが彼女は疲れているはずだ。

私のような者と慣れない旅、それも過酷と言う言葉がつく。

今更だが人が死ぬのも初めて見ただろう。

やはりここで一度大休止をとる……

「なあクレス」

不意に話しかけてきた彼女は何故かちよつと不満そうな顔である。

「ん、どうかしたか？」

「いやさ、ここにはもう五日もいるのに何かする様子もないし、いつまでいるのかなあ、と思ってね」

「目的地が近いなら一度ここで休んでおいても構わないだろう」

「そうだけどさ、こんな大きな街に来たって言うのになんか……なんだろう、静かって言うかさ」

「ふ、む。静か、ね。街は……」

「街じゃなくてアンタだよ」

「私が……？」

「そう、さっきだってなんかぼーつとしてさ。どうしたんだい」

お前の事を考えていた、など言う訳なく

「すまん、少し気が抜けていたのかもしれない」

「護衛としての自覚が足りないんじゃないのかい？」

「ふむ、では久しぶりに外の散策でもするか」

「なんで護衛が散策になるんだい」

「不審な人間がいらないか調べられる」

「はぁ……はいはい」

「なぜ投げやりなんだ」

「いや、なんか心配して損を……」

「心配してくれたのか」

らしくない言動について口を歪めてしまう。

「っ、うるさいよ。もう、さっさと行くよっ！」

顔を赤く染めながら部屋を出て行く彼女はいつも通り騒がしかった。

「この国に魔法はないみたいだがその代わり妖術や仙術なんてものがあるようだな……」

「魔法じゃない力、ね」

「詳しくはわからんがこの国には魔力を持った人間が少ないから技能、技術か何かじゃないか？」

「ふうん、覚えられるかね？」

「それはわからんがその前にこの人の中からそれを使える人間を探すのが大変だぞ」

「あーそうだねえ……夜の方がいいのかな？」

「あまり変わらんとと思うがな」

そんなこんなで夜を待つこととなった。

「人にぶつからないだけ昼よりましじゃないか」
「まあそうだな」

日が落ち幾許か、再び私たちは部屋を出て街中を歩いていた。
唐突にドロシーが私の袖を掴んで立ち止まり

「クレス、あれ。あの男……」

道の反対側を指した。

「男？。剣を背負っている奴か。どうかしたのか？」

「仙術だか妖術使ってやつだ」

「わかるのか……？」

「まあ見てなっ」

そう言った彼女の顔は真剣にその男を見ていた。

男は少し前で倒れていた木板を立てなおした後に元の、剣が置かれた位置に戻りそこから板に向かって思い切り拳を突き出した、そのすぐ後だ淡い光が飛んだかと思えば

パタン

板が倒れた。

「どうだいあれ」

「なんだ、あれは」

「妖術だか仙術だろ」

「あ、いや……そうだろうな」

「どうしたんだい？」

「いや、気にするな。少し驚いただけだ」

正直なところかなり動揺した。

見た目では大して魔力を持たないだだの男が届かない位置にある板に拳を振るったら板が倒れるなど……

「ならいいんだけどね、行くよ」

「おい、護衛対象が自ら進むんじゃない」

私たちが近付くと不思議と男の周りから人が消えていく。

そして誰もいなくなったためすぐ後ろまで近付いた、その時

「何のようだい？」

振り向きざまに剣を突き付けられた。

「っ、気づいておられたか」

「よくわからん気が近付いてきたらだれだって気にする」

「き？」

「気だよ気、そんだけの気がありゃあ……なんだ、ぼやける？はん、そりゃあ本当の姿じゃねえな」

男は目を鋭く光らせると同時に変身を見破られた私はドロシーを抱え後ろに跳ぶ。

「っ、お前、術者か」

「術者？んだそりゃ、俺は仙人だよ」

「仙人？仙術とやらを使う存在か」

「あん、なんだ？なんか噛みあわねえな」

「私たちは訳あって西から来たものだ」

「西？はあ、そうかい、そりゃあ知らないわけだ」

そういつて男は剣を収め板を拾うと

「いいぜ、ついて来い」

そういつて歩き出した。

「どうするんだい？」

「行くしかあるまい、気とやらが何か分からないのでこれから動きようがあるまい」

街の外れ、そこに彼の家、という小屋はあった。

「俺は、まあ「呂さん」とでも呼びな、しがない仙人さ」

「私はクレス、彼女はドロシー。これが本来の姿だ」

「おう、こりゃまた……。西って吐藩より、山脈より向こうかい、ごくろうなこった。まあいいさ、とりあえずお前さん等が見たのは

「遠当て」さ」

「遠当て？」

「見えるかい？これが気さ。これを飛ばすことを遠当てと言う」

「呂さん」の右手にはうっすらと光の膜のようなものが覆っていた。

「気とは普段は見ることもなんてないがこの世全てのものがもつ存在の力だ、生命の息吹」

「存在の力……」

「そう、だから兄さん。お前さんに聞くよ。あんた何者だい？」

お前は何か

それは、十年ほど前に地下で死んだ男を思わせる言葉だった――――

遠当て（後書き）

もうすぐ逃避行編も終わりだ・・・
ドロシー

と言う事はもうすぐエヴァンジェリンさん、なわけがない
今1100年なんだよ？エヴァさん生まれるの1400年前後なん
ですよ？

ラカンさんの強さ表だとまだ1000にもなってないんだよ？
手段選ばなければイージス艦沈められるけどさ・・・

『遠当て』

気を体外に放出する

原作で言う「漢魂」や「烈空掌」

クレス

意外と事あるごとに動揺したり何も考えたりしてない人

ドロシー

この姉さんは軽くツンデレなんじゃないだろうか・・・

呂さん

職業不明 自称仙人

遠当てした人

標準装備で剣を背負っている

次回の超展開の原因

気仙（前書き）

はい超展開

駄話

気仙

私が何者であるか。

ドロシーには自分で言った。

【ハッシューシ】のハサン等には知られていた。
聞かれるのは十年振りだ。

「私は……、私という人間を基礎として数多の生物を取りこんだ末にできた「人」でありたいと思う化物だ」

「ふっふん？なるほどね、一つに見えてバラバラ、バラバラに見えて一つなのはそう言う事か。姐さんは知ってるのか？」

「私がコイツに頼んだからここにいるのさ。知ってるに決まってるだろ」

「そうかいそうかい、ならいいさ。まあ俺くらいの奴じゃないとア
ンタの気がおかしいなんて気づかないからな、誰も気づかないと思
ってくれていいぜ」

「そう、ですか」

正直この「呂さん」がどの程度なのか私にはわかりかねるのだが……

「俺は仙人として上から数えた方がと自負してるぜ？」

心を読んだのか？

「あー別に心の内を覗いたとかそんなことじゃないからな」

「……。それで気とは何が出来るものなんでしょう？」

「何が出来るか、ねえ。自身の生命力を高め傷の治療を促進させる事も、身体能力を強化する事もできる。獲物に込めれば強く頑丈にもなる。とかまあ後はあれだ、拳や技に乗せて飛ばすのが遠当てだ。街では板倒しただけだが本気でやれば河を割れるぞ」

「私たちの使う魔力、魔法とは違うのかい？」

「魔力、ね。そりゃ多分だが俺達で言う外気だな、それを使うって事はあんたらは妖術使いに近いものかね。気は内気、とも言うんだ。どちらも森羅万象この世全てのものが持つ力だ。世界に満ちる外気と体に満ちる内気」

「この世全てのものが持つ力……」

ふむ、どうやら昔教わった「魔力は生まれで有無が決まると」言うのは間違っていると言う事だ。知らなかった……

「外気を使える人間って言うのはこの国じゃかなり珍しいがそっちのお国じゃ進んでるって事か。ここの国じゃ見かける事なんざほとんどのないぜ」

気楽に話す呂さんの話を聞き私達は翌日また来る事を伝えその場を後にするのであった。

「人でありたいと思う化物」

なかなか面白い事言う男だった。

人でありながら自身を化生と言う。

一人でありながら複数の気を持つ。

そして、一人でありながら「二つの魂」を一つとしている。

「何だアイツは、かははは。面白いな、これだからやめられない。

一緒にの女も普通じゃないようだしな」

あいつらは明日も来る、久しぶりに楽しい一日になりそうだ。

まさかあんな存在がいるとはな……

人生わからんものだ。

「まず、この国には陰陽思想というのがある。この世の全て、それを太極と言う。太極は両儀を生ずる、二つに分かれるってことだ。

天と地、光と陰、男と女、生と死、今の俺達で言えば外気と内気だ。外気を体内に取り入れ精神で扱うのがお前たち。で、俺は体内から生命力を燃やし扱う、それが内気。精神力と体力と言えば分りやすいか。んで、あんたらが知りたいのは内気だ。まずは俺が気を流してやるからその感覚を掴んでみる。外気と内気は元が同じとはいえ相反、反発するもんだ、外気は極力抑えな」

そう言って呂さんは私とクレスの背に手を当てて気とやらを流し始

めた。

「これは……なんとも、むず痒いものだ」

「確かにね、でもなんか暖かい感じだよ」

温かい膜に包まれてる、まさにそんな感覚。

「これを自分の中から引っ張り出すんだろ……」

こりやなかなか時間がかかりそうなこった。

「へえ」

思わず声を上げちゃったがこいつら意外と

「わっ、わっ、こりやどうすりゃいいんだいっ」

「体の回りに纏わせるように意識しな、垂れ流して倒れても知らないぞ」

「ちょ、そう言うのは先に言っておきなよ」

文句言いつつもちゃんとこなしてやがる。

この姐さんもやっぱり何か違うな。ぱっと見で見えないって事は血か何かかね？

そういう一族、血族ってか？

どういう組み合わせなんだか……

「兄さん、あんたは体に幾つも違うもんが混じってる、それが邪魔をしてるんだ。それを先に把握すりゃあ……」

言い終わる前にはそれをやってやがるってんだからふざけたもんだ。

「これを武器とかに込める事ができるんだろ？」

そう言うや姐さんはどっから取りだしたのか短剣に気を流そうとしてるし……俺必要か？

「これで、いいのか」

「ああ、早いな。早すぎて妬ましいくらいだ」

兄さんも混じってるものと完全に一つになってやがるし……才能ってやつかね？

「気ってのは極めればいろんな事が出来る。気を体に張り巡らせる事を行気といいそこから気を操作、運用することを気功と言う。体の内で回し操作する内気功。それにより癒す気功を軟気功。元は一つという概念から外気と入れ替えるように気功を行い気をより高めようとする外気功、そして通常よりより戦闘、護身に重きを置いた硬気功。そして……」

驚かせてやるぜッ。

ザ————ッ

「っ、消え……」

「はッ、これが縮地だ」

奴らの後方1丈。

この位置ならのいいだろ。

「魔力も使わずに転移したってのかい!？」

「いや、今のは……」

「兄さんには見えたようだな。そこから一步踏み込んだだけさ」

「そんな……」

「いや、確かに一瞬だが私とお前の間を通った。ように見えた」

「足に気を込めて踏み込む。地脈を縮めたかのように移動する、故に縮地ってな、瞬動とも言うが。こんなこともできるぜ」

そう言っただけ俺は体から気を放出し

「と、飛んだ……。いったいなんなんだい……」

兄さんの方もいつもの無表情が崩れて口を開けてやがるし、これだからやめられないな。

「そこから、こうだっ」

次は宙を蹴る。

「これが空縮地「虚空瞬動」だ」

空を一回りして最初の位置へと「軽やかに」着地する。

「どうだい？水の上だって立てるし歩けるぜ？」

「これが氣ってやつのかい……」

「元は同じ、一つ、と言う事は魔力でもできるのか……?」

「代用は可能だろうな。もうひとつ、取っておきを見せてやるぜ。よく見ときな」

右に内気を左に外気を、これを合わせて咸気となす。

後に究極技法と謳われる強大な力をもたらすそれがそこにはあった

気仙（後書き）

次一氣に二話でこの「逃避行」も終わりを告げるのさ

呂さん

未だに謎の仙人

超展開の原因

更なる超展開を呼ぶ

クレス

氣を習得しようとしてる人その一

一話から続く「魔力は生まれで有無が決まる」が間違いである事を遂に知った人

氣同様魔力も全ての人が持っている。

が、それを発現できるかどうかは人次第であり基本的にここまでクレスが大きく関わった人間が全員魔法関係者⇨魔力発現者だったことがこの盛大な思い違いを實現させた。

ドロシー

氣を習得しようとする人その二

武器収納術の練度は上昇中

究極技法

アルテマアート、咸卦法

終点の地へ（前書き）

ご都合主義な超展開全開

終点の地へ

———右に内気を左に外気を、これを合わせて咸気となす———

「よく見ておけ」

そう言って呂さんは右手に気を、左手に魔力を乗せ静かに手を合わせた。

「反発するんじゃないのかい……？」

確かに彼女の言う説明を呂さんはしていた、だがこれは……

「これが陰と陽を合わせた太極の力の一端。咸気または神気、神力とも言われるそれだ」

一目でわかる気でも魔力でもない強大な力「咸気」

呂さんを包む濃密な力の膜がそこにあるだけでこちらを圧倒するようだ。

「しかしそれは……」

「説明と違う？ そうだな確かにその通りだ、やってみればわかるが普通ならば外気と内気は反発しあい相容れない。だが自身を「無」

にした時それはなる」

「無？」

そう聞き返せば

「そう。無だ、そこに有ってそこに無い。何処にでもいて何処にもいない。己を空にする」

咸気を解きその力を霧散させながらそう答えた。

「太極の力って言ったけど太極はこの世の全てなんだろう？なのになんで……」

「だからこそ、一端の恩恵とはいえ世界そのものへと至るのだ。物を背負い詰まった者に扱えるほど世界の力は甘くはない。無を持つて有へと至る、無極の技。それが咸気だ」

「全然分かんないけどアレが凄い事だって言うのはわかったよ」

腕を組み何故か満足そうにドロシーが言った。

「まあ仙になるわけじゃないお二人にはここまでばっぱと教えたけどな。後は自分たちで研鑽しな」

「は？なに言ってる……」

ふわり、と呂さんは浮かび上がる。

「俺は行く、どこかにな」

「どこかって……」

「気や咸気なんて使って疲れたのさ。あんたらのおかげで後百年は楽しく生きられそうだ」

「不死者なのか」

「仙人ていうのはそういうものさ。生きてりやまた会う事もあるだ

ろうよ」

そう言うのと呂さんは剣を持つ。

「俺は純陽子。嘘ばかり言ったが教えた事は本当だぜ？」

かはは、と満足そうに笑いながら彼は溶ける様に消えていった。

私たちはただどうすることもなくただそれを見つめていた。

「どういう事なのさ、嘘ってなんなのさ？」

「まて、考えているだろ」

純陽子、嘘、本当。

純陽子、そのままとらえれば純な陽の子。

陽、即ち外気。

外気は魔力……

「そういう、事、なのか……？」

「一人で納得してないでわかったなら教えておくれよ」

「彼は純陽子と名乗った。そのまま受け取るなら彼は「陽」すなわち外気しか使えないと言う事だ」

「は？でも内気を、気を使ってたじゃないか」

「外気を、魔力をあまり知らないような事を言っていたのが嘘だ。名前の通りなら彼は内気を使えない、逆に外気に関しては達人など言うものを超えた存在と言う事だ。しかし私たちに教えた事は、私たちが行える時点で本当。「嘘ばかり言ったが教えた事は本当」と言うのはそのままそういう事だろう」

「だからってなんで消えるのさ。それになんで最初の時に内気で板を倒したのさ？」

「それは……わからん」

「あーもう意味がわかんないよ」

「私だってわからなさ」

「あいつもわからないけどアンタはあんたで何拗ねてるんだい」

「すねっ、拗ねているとはなんだ、そんなことはない」

「そうかい？ それにしちゃあ何か残念そうな、悔しそうな顔してるよ」

くそ、なぜこいつはニヤニヤしている。

「く、意味が分からない。何故私がそんな顔をしなければならぬ」
「こつちが聞きたいよ、純陽子の奴もアンタも私にはさっぱりだ」

やれやれ、と手をあげながら彼女が歩き出す。

「おい、まだ話は……」

「さっさと戻って東へいこうじゃないか。そしたら存分に悩んで拗ねればいいのさ」

「だから私は……————」

「純陽子事件」から数日。

この辺にある五行思想やら陰陽思想やらを調べた後私たちは再び東への旅を始めた。

開封を惜しみつつ私たちは上海鎮へと入った。

「ここを渡れば終わりなんだね」

「ああ、そうだな。こちらの土地に入ってから追手は来ていないようだし。安心できるだろう」

「ハシューシの連中が上手くやってくれてるのかね？」

「それもあるだろうがここまでの道程の険しさもあるだろう。私のようにはいかんさ」

「頼りになる護衛だ事で。安全安心ってかい？」

「事実だろう。それから自分の事を占うのは、視るのはもういいんじゃないか」

「知ってたのかい？」

「まあ偶然だ。知ってしまったら楽しみも半減だぞ」

それに視続けていたらいずれ己の死期を知ってしまうだろう……

「そうだね、もともとあんまり先は見えないんだし。変わらないかね……」

「それで、いつ行くんだ」

「夜に見つからないようにアンタが連れて行ってくれるんじゃないのかい？ 最初みたいになさ」

「それでいいのか？ 海を渡ったりするのはもうないぞ」

「最後だからだよ。わかってない男だね」

「そうか、なら一生わからなくてもいいな」

「はん、そうかい。……じゃあとつと行っつのんびりしようか」

その夜私たちは海を渡った。

扶桑、日本へと渡った私たちはその後も東へ、できるだけ東へと進み続けた。

この国の首都、京と呼ばれる地の整えられた地を見れば次へ。

この国一と言われる富士の山を見れば再び東へと進んだ。

東海道は武蔵国まで来た時だ不思議な神木があり普段自然と人が「集まらない」無人の地域があると聞いた。

その地域全体を真秀等、その神木がある場所を真秀という一等の霊地であるそうだ。

その木は一定の周期で発光をするとまで言われている。
そして来年がその発光の年であると。

「で、このでかい木が光るっていうのかい？」

私たちはその噂の神木を前にしていた

周囲の大木と呼べるものからさえ優に二回り以上の大きさを誇る巨木である。

「そう、らしいな」

「あのさ」

「うん？」

「私は木が光るって言うのも見てみたいよ」

「ふむ、それは確かに私も見てみたいな」

「追手はいないし、ここには最初から人がいない地域なんだし軽く結界でも張っておけばわかる奴しか入って来れないんじゃないかい」

？」

「そうだろうな……まさか」

「わかったかい？そう、ここに住もうじゃないか」

「最初の時もそうだがお前は発想が突然で突拍子もない」「一緒に逃避しよう」だったか」

「あんまり言わないでくれよ、それはちょっと恥ずかしいんだから」

ちよつとなのか……

「はぁ……この神木を起点にこの地域一帯を覆うぞ、家はそれからだ。いいな？」

「ああ、もちろんさ。流石クレスだねっ」

「それは褒めているのか？」

「当ったり前じゃないか。さあ、とつとと始めるよ」

そういつて彼女は張り切って前へと歩き出した。

「はぁ。ああ、夜には終わらせたいな」

最初にいきなり旅だと振り回されて最後にまた振り回される、これはこれで……

「ふん、悪くない」

かも知れない。

「何か言ったかい？」

「なんでもないさ」

——
そう言って私は振り向く彼女に並び作業のために歩き出した——

終点の地へ（後書き）

有限と無限

全は一、一は全、等と言ったりもする

この世のすべて

解釈は人による

場合によっては「」と表現する。かもしれない

呂さん

仙人 呂 洞賓

号を純陽子と言う

トレードマークは剣

前話で魔力を気として扱う外気功、と書いたがその逆、気を魔力へと変換して扱う人、と言う設定

魔力は人並み、だけど気が魔力となる。そのかわり純粹に気を使う事が出来ない人

そのような制約故に「」に至った

最後は制約を破った（咸卦法のため気と魔力をそれぞれ別々で使った）ため世界へとけて消えた。

何かしらの事象として世界には存在し続ける「後百年は楽しく生きられそう」は有る程度意思を保てる、と言う意味。かもしれない

神木

でっかい木

名前はまだない

光るらしい

命の光（前書き）

ルジあるよっ！

命の光

日本に着いてからいろいろな事があった、そういういろいろな事が。

真秀の地に、神木のある土地に住み着き結界により俗世間と文字通り隔たれ一年が経てば

「凄い、本当に木が光ってるよ」

「これは……魔力を放出しているのか」

神々しく輝く木に圧倒された。

近年ついに私は太陽を完全に克服した。

気づいた理由が畑仕事をいっていて、というのはただけだが……

それからは少しずつ外に出てこの国の情報を調べ、集めながら研究や研鑽を積んだ。

そしてたまには、という事でふらふらと旅に出て京の都に行けば

「その気、只者ではおまへんどすな」

刀剣を持った武士や呪符を持った巫女に囲まれ

山の何もない開けた場所まで案内され

「うちらはこの京の都を裏で守護する集まりなんやけども、そない

な気持ちった人今まで見たこともないわ」

「あんたら、何者なんどすか？」

「あんたたちがよければ手合わせお願いしたいんですけど、いかが？」

穏便そうに聞こえるが実際のところ私もドロシーも剣を突き付けられていた。

そして強制的な手合わせが行われる事となった。

「ほっほ、そないにいっぱい武器を持つてるとは驚きや」

剣士はドロシーが次々に武器を取り出すのに感心するが

「うっさいね、好きで出してんじゃないんだよ」

彼女はいつも通り騒いでいるし

「兄さんもなかなか面妖な術を使いになるな。声、どすか？」

私の使う見えない『私言の散弾』を呪符による攻撃で綺麗に撃ち落としながら巫女や宮司が周りを囲むと言う状態がしばらく続いた。

「どうにかなんないのかいつ？」

「この状態で殺さないというのはなかなか難しいな……、知っているだろう私は殲滅系の魔法しか覚えていない」

集団に対応できる制圧系は持ち合わせていない。殲滅ならできるのだが……

新たに習得した『星魔法』は威力が高いのだ、そう異常な程に……

「あーそうだったね……。私は疲れたよ、参った参った」

武器が尽きたのか彼女は両手を上げて降参した。

「後は兄さんだけや。どうしはります？」

「彼女がやめたんだ。私に戦う理由はない。そちらもないのだろうか？」

向こうもこちらをどうしようと言う訳ではないのは戦っていて気付いた。

最初に言っていた通り「手合わせ」だったのだ。

「その武器を隠す技に符も使わない妙な術、あんさんらこの国の人間でおまへんやろ？」

それからは簡単だった私たちの事情説明に始まり変身魔法を解く。しばし混乱があったが大筋の事情を説明した後彼らは私たちを寛容に、大らかに受け入れてくれた。

害意も敵意もない私たちだから、と言うが向こうでは問答無用だったことを考えれば「文化の違い」と言う事なのだろうか……

ただこの国でも私たちのような、特に髪の色まで違うドロシーは目立つため変身魔法は掛けたままがいいとのことだ。

私たちはここまで来て初めて近接戦闘の手ほどきを受けることになる。

陰陽道による呪符、呪術を使う陰陽師。表では「陰陽寮」と言われる機関に属しているらしい。

その陰陽師の前に出て守る「神鳴流」の剣士。その剣士たちによる指南だ。

鬼などの魔物に対する「退魔」の流派であり刀剣はもちろん無手での戦闘、矢や術による飛来物への対処など様々な事が想定された剣

術である。

ちなみにこの陰陽師や神鳴流剣士等に今まで出会わなかったのは彼らの人数がそう多くないものであり都とその近隣を守るのに手いっぱいであるからだそうだ。

全ての合間のついで、と言ってはなんだしついでとも言える事ではないが私はしばしば彼女を連れたり連れなかったりしつつ転移により西に行っては追手の動向を探り、時には戦っていた。

私たちが西にいると思わせるためだがこれは意外と功を奏しているらしく一度ハサンに会った時私たちを追い東に行く人間は減っているとのこと。

賞金は上がっているそうだが……

時が進み変われば人間もまた変わる。
再び神木が発行する時がやってきた。

「なあクレス。あんたは変わらないね」

光る木を見ながら彼女はそう切り出した。

「私は不老不死だからな、と前にも言ったな」

「ふふ、そうだね。……私はもうおばあちゃん、て言われてもおかしくないような年だよ」

「それでもお前はお前で変わらないだろう」

魔神術式を使えば疑似的とはいえ不死者にすることもできたはずだ、

だが彼女はそれを望まないとそう思い言いだせなかった……

「そうさ、そんなのわかってる。……でね、私は考えてたのさ」

「そうなのか？で、何を考えていたんだ？」

たまに何かを考えているのは知っていたが……

「どうしたら、私が死んでもあんたが前向きに生きていけるかな、ってさ」

「お前が死んだら私が落ち込んだり後ろ向きに考えたりすると言うのか？」

「はん、どうせ「私はなぜあの時不死にならないか、と言えなかったんだ」とか考えるに決まってるよ」

「それは私の真似か？不愉快だぞ。それに決まってるとはなんだ」

「似てないのは悪いと思うけどね。私はあんたとずっと一緒にいたんだ、それぐらいわかるってもんさ」

「はあ、そうか。で、何を考えたんだ」

「あんたが前を向いてどこまでも行ける様に一言置いて、逝こうかと思ってね」

「効果があるのか？」

「そりゃわかんないけどさ、これだけの魔力が溢れてるんだ。お呪いには多すぎるくらいだよ」

そう言って彼女は横にしていた体を起こした。

「無理をするな」

「いいから聞きな」

ふう、と息を吐く彼女は光に照らされながら笑っていた。

「私は先に天に召されて逝っちまう。けど私は上からあんたを見続けてやる、見守ってやる。だからあんたは私があんたを見つけられるようにずっと終わらない音を響かせてな、その音を頼りに私はあんたを探すから。ずっとずっと音を奏で続けな、あんたが私のところに来るまでずっとだよ。明るい宙そらじゃ星魔法の光なんて見えないからね」

「音をずっと、だな」

「ああ永遠に、頼んだよ」

「ああ、頼まれた。だから私を見つけてろ」

「当たり前だろ、あんたも忘れんなよ」

「いつまでも、どこまで行っても忘れないさ……」

「ああ、約束だよ。じゃあね最愛クレスなる人」

「ああ、約束だな。さよなら親愛ドロシなる友」

彼女は笑いながら、神木の強烈な光に吞まれるようにその命を全うした。

「そうか。殺す事に哀しみは感じなくても誰かが死ぬことに哀しみは感じるんだな、私は」

強烈な光を収めた神木は役目を終えたかのように静かに光り続けていた――

この年にハサンも死んだ事を知るのはしばらく先の事だった――

命の光（後書き）

神木

光った

名前はまだない

『星魔法』

出番は当分ない

京の都を守る人たち

しんめーりゅーとおんみょーじ

京言葉が分からない・・・

相変わらず無茶な展開だった

疑似的な不死

魔神の力とクレス自身の血などを使えば不可能ではない、と思われる
当然危険もある

ドロシー・ホワイト

この世を去った

クレスは白馬の王子様の存在だった

クレス

神鳴流に世話になった

哀しみを感じる事はできるらしい

新世界（前書き）

原作の都合もあるし一話ずつでの更新しかできないな・・・

新世界

【魔法世界】

それは異界。

人間世界とは別の場所にあるもう一つの世界。

一般的な魔法関係者は話程度しか知らないお伽噺のようにさえ言われる場所。

幸い、と言うのか生憎と言うのか私の育ての親は知っていたし私が二十年以上前に殺し地下で眠る『偉大な魔法使い』は「本国」「亜人」「旧世界」と言っていた。

私の身体をつくった人間たちも「魔獣」や「竜種」といった人間世界にはいないような生物の欠片なりなんりを持っていた。どういふ事かと言うと

「世界創造の神の末裔が治めるという地、か」

浮遊大陸ウエスペルタティア王国首都オスティア。

そこに私はいた

日本から長距離転移と休息を行い三日で私は懐かしのイングランドへと赴くと三カ月ほど情報を集め隣のウェールズへ。

そこから二週間ゲートを探し更に二週間ゲートが開くのを待った。

魔法世界へ到着後メガロセンブリアから東へ約560リーグ。

そこにこの空中都市はある。

目的は興味本位の観光だ、現在滞在して三日目。

日本での別れから二年半以上が経っていた……

「そこのお前、ここに何の用だ」
「ん？」

警備兵が二人近づいてくる

「ここから先は王宮区だぞ。用がないのなら立ち去れ」

「ああ、それはすみません……そうだ、今朝から兵士の方々が忙しそうです何かあったのですか？」

今朝から既に何度か街中で兵を見かけている、昨晚まではそんなことなかったのだが……

「貴様に答える事など何もない。さっさと去らねば捕えるぞ」
それは何かあったと言う事だ……

「そうですか、では失礼」

そくさくと私は撤退する。
こんな所まで来て面倒はご免だ。

「ふん、賊でも入ったか？ いや、なら噂話の一つくらい出るか……。なら何か探しているのか？ 物が勝手に消える事もないだろう。なら誰かがいなくなった、ということか。罪人ならもつと騒ぎになっていてもおかしくない、賓客、王族、候補はいくらでもあるか……」

面倒になる前にここを出るとしよう。

「騒がしくなる前に南のヘラスかアリアドネーでも……」

どうやら既に遅かったようだ。

表に出ればバタバタと人が中には兵士も混じり走っているし露店などは次々と閉める準備をしている。

「くそ……、遅かったか」

悪態をつきながらも人通りのない路地裏を選びながら先に進む。

路地の角を曲がったところで隣の角から走り出てきた人とぶつかった。

「大丈夫か？」

とっさに受け止めてしまうが。

「いたぞ、何としても連れ戻すんだ」

どうやら兵士が追っているのはこの「彼」らしい。
そこでふと閃くように気付く。
これは痛い失態だ、と。

選んできた道は「人通りがない」ではなく「誰も通りたくなかった」と言う事だ。

地元の人間が一人も通らない、即ちそのまま行けばその原因が、騒動の中心が移動するという予測をもとにこの道を誰もが回避した。と言う事だ。

私は自ら騒動に突入した事になる。
しかも

バチッ

「なっ」

音を立てて変身魔法が、掛け続けていた幻術が解除された。

「幻術ッ。バカな仲間がいるなんて」

それを見た兵士が声を上げるがその存在よりも問題は

「く、解除された！？どういう事だ……」

ありえない、と言う事は無いのだろうか人とぶつかっただけで魔法が、魔神術式が消されるなどありえないとしか言えない。

「男も捕えろっ。下手に手を加えるんじゃないぞ」

応、という掛け声とともに通路を挟んで兵士が剣を構え向かってく

る。

後ろ、来た方向からは増援が来るようだ、なら

「進むしかないか」

袖から刀を取り出し

「くれてやる『破音の鎚』」

無詠唱が可能になった『破音の鎚』を後方に放ち足止めをすると同時に

「奥義『百花繚乱』」

前方の兵士を吹き飛ばし道を開く。

どうやら「彼」も一緒に来るようだ、同じ方向は勘弁してほしいところだが……

「く、何をしている追えっ！」

「タン・レスタン・アルターアンタレス 雷精召喚 雷の槍兵 7 柱」

後方へ放った雷精に足止めをさせそのまま走り抜ける。

通路を右に左にと突き進むがここに来て一日二日では全てを把握などできるわけもない。

「ここは……」

左か直進か左からは兵が来る

「前しかないか、だが……」

この先は覚えている。

先ほどいた場所

「王宮区に向かう大通りに出る道か。いいようにやられる……」

そのまま路地を抜ければ当然

「そこまでだ。大人しく捕まればよし抵抗すると言うなら無理にでも捕まえさせてもらう。王女殿下もよろしいですね」

待ち伏せられるわけだ、しかし……

「王女殿下？」

その言葉に後ろを振り返れば。

「バレてしまった……」

そう言いながらフードを取る「彼」ではなく「彼女」がいた。

「おい。お主、なんとかしろ。このままでは捕まってしまうぞ」

「王女殿下、その男は何者ですか」

「知らぬ、先ほどそこで偶然出会ったのじゃ」

「一般人……ではないな。わざわざ幻術を使っていた。お前何者だ」

「私はファーガス・フェイタラスタ。先日こちらに観光でやってきた者です」

「殿下、一先ずお下がりがください。御身に何かあられては困ります」
「大丈夫じゃろ」

そう言って「王女殿下」は私に近づいてきた。

「殿下、何故です。お下がりを」

「勘じゃ。それでお主な姿を変えておった」

「見ての通り向こうの世界から来たもので。不審に見られるのではないかと……」

苦しい言い訳だがこちらの世界では珍しい黒髪を指し刀を見せる様に軽く振り袖へとしまう。

「おお、旧世界からかの!？」

旧世界の人間はやはり珍しいのか彼女は青と緑の目を輝かせながら「おい、こやつを私の客人として招くぞ」

囲む兵士へと言い放った。

当然兵士達が色めきだつた

「でなければこやつがお主らを排除し私と共にどこかに行ってしまうぞ?」

笑顔で迷惑な事を付け加えて下さるのであった――――

新世界（後書き）

【魔法世界】

お伽の国

最序盤からそれっぽいワードは一応出ている

自称「聡い」クレスさんなら確証を持って当然、なのかもしれない

「誰も通りたくなかった」

地元の人が「アレ？騒ぎこっちにくるんじゃね？ならあの道はだめだ」と思い通らなかった

その道をクレスさんは駆け抜け抜け騒動に突っ込んでいった

奥義『百花繚乱』

日本で習った神鳴流

雷精召喚 雷の槍兵 7柱

中位精霊召喚、原作でも風精や火精が出ている
形状は何があるのか良くわからない

『王女殿下』

彼じゃなくて彼女だった

青と緑のオッドアイ

なかなかいい性格

ぶつかった際に無意識の内に身を危険から守るため周囲の魔法を打ち消した、そのためクレスの幻術が消えた。と思われる。

魔神術式でさえ打ち消す脅威の力

ファーガス・フェイタラスト

主人公クレスさんの新しい偽名

ころころ名前が変わったが多分もう変わらない

本名はファーガス・A・T・エルレイアとした

アバイディング トーン
AbidingTone

不変ないし永遠の音色

ドロシーとの約束、なかったことにしてはいけない。

全ての頭文字をとるとFATE、運命となる。

ファーガス、とは勇気ある者などを意味し転じて英雄、勇者と言う意味もある。

自身の存在と重ねた上でこの名が嫌い、と第一話

運命の英雄、と言うのを皮肉り終わり、最後を意味するLastを付け加えフェイタラスト(Fatalaste)とし「ファーガス・フェイタラスト(終わる運命の英雄)」と名乗る、みたいな裏話

己が力とは

王女の起こした離宮脱出（脱走）作戦に巻き込まれ王宮へ。
しかも王女の住まいである離宮に引っ張られ既に六日。

「……と、言う訳です」

久しぶりに毎日、長時間にわたり話続けたせい咽喉が痛い。

「なるほどのお、お主なかなか辛くもあるが面白い生活をしてきたのだな、しかも『偉大なる魔法使い』を殺めたとは……バレたら大問題じゃぞ」

うんうん、大した風でなさそうに亜麻色の髪を振り満足そうに頷くのは

「アテナ・イエルセルラ・エクステルミーナ・エンテオフュシア第二王女」

「どうしたのじゃ？いきなり名前を呼んだりして」

「いえ、ただ旧世界において罪人である私がこのような場所にいるのが未だに信じられず……」

「敬語禁止。と、申したであろう」

「ああ、すまないな」

無論わざとであるわけだが……

最初の命令が「敬語禁止」で、その次が「お主の事を、旧世界での事を話せ。包み隠さずじゃ。でなければ牢に入れる」だった。あの神殿地下での事だって最初は初つもりはなかったのだが困ったことに下手にはぐらかそうとしたり隠したりするとどういう訳か気づかれてしまうのだからこの第二王女相当に曲者である。

「しかし私なんかと二人でいて大丈夫なのか？」

「問題無い。兵には喋らぬように言い聞かせておるし、父上は知らんはずじゃ」

「それはそれで問題だろう」

広い部屋で二人だけ、呼べば給仕が来るし部屋の外には護衛の兵がいる、とはいえ

「最初に話しただろう。私は罪人だぞ」

「ここでは密入国だけじゃ。そう恐れる事もなかり、同じ手順を踏めば帰ることもできよう」

ニコニコと楽しそうに笑う。

「それにじゃ、お主なかなかの力を持つておろう？魔力ではないぞ、戦闘力じゃ。うちの兵士どもをまあよくも……」

「私のせいではない。それに力がなければ何もできなかったからな……」

でなければあの地下施設から出る事さえできなかっただろう。

「なあクレス……」

そう彼女だけは私の本当の名前を知っている。言わされた、が正し

いのだろうが……

「力とはなんじゃ？」

真面目な、王女としての顔でそう言った。

「敵を倒し、守りたいものを守るためのものだ」

「何を基準として敵とする」

「私に、私の守るべきものに害をなすかどうかだろう」

それ以外に何があると？

「妾はの、お主のように殺し殺されるという戦いを知るわけではない。だがの、この宮中では謀略計略と言った事が日常に行われる。これも一種の戦いじゃ。妾が守りたいのは民じゃ敵はそれを虐げ蔑ろにする馬鹿共。そんな妾の力とは何じゃと思う？」

「……王女としての権力だろう」

「そうじゃな。だがそれでも全てを守る事は叶わなんだ。兵を用いてもいかにせん数が多すぎる。お主もこれから長きを生きる中で守るものが増えるだろう、いや必ず増えると妾は思っておる。その時お主は妾のように必ず誰かを取りこぼす事になるであろう」

「それでも私は……」

「守りたい、救いたいと思うのは妾とて同じじゃがの、それはできません。妾とお主は種類は違えど強い力を持っておる。しかしたとえ強力な力があっても全てを救い守るなんてことは出来ぬ、そして力を持つ者には相応の責任がある。それをお主にわかってほしい」

彼女の言う事は確かに正しい、認めたくないが事実である。

そしてそれをわかっていながらも私がその事実から目を逸らそうとしている、これもまた事実。

それを彼女は教えてくれている……
だが、それでも……

「それでも諦められるわけがない」

「下手をして失敗すれば全て失うぞ」

「必ず成功させればいい」

「何故言いきれる、物事に絶対はないのじゃぞ」

「ぐ……なら、どうしろと言う」

諦めろと言うのか？

「妾はも考えたのじゃ。酷かもしれんが力を、責任を持つ者として

「選ぶ」と言う事を」

「選ぶ？何を？」

「何を切って切らぬか、と言う事じゃ。一部の民に苦痛を強いて敵を切れるなら民の罵声を浴び罵られようとも妾は敵を討ち今を生きる民の為にその力と責任の全てを注いでみせる、と言う事じゃ」

「それでは諦めると同じだろう」

「そうかもしれん酷いと言われるかもしれん。じゃが、守るべきものを守るためには何を犠牲に切ればよいのかそれを『考え選り実行する勇気』それが真の力じゃと妾は思う」

「考え選り実行する勇気……屁理屈だな」

断じてみる。

すると彼女は子供のように口を曲げながら両手を腰に当て胸を張って
「これでも一生懸命なのじゃ」

そう満足げに言った。

いや、王女とはいえ子供なのか……

そんな子供の意見は屁理屈じみている。
しかし

「だが……嫌いじゃない」

「そうじゃろ？ いいじゃろ、かつこいいじゃろ」

満面の笑みで嬉しそうに笑う、が

「今の言葉で台無しだな」

「む、そうか。なら真面目な感じで言えば」

「今更私に取り繕っても意味がないだろう。それにな」

「どうかしたのか？」

「私に守るものが増えると言ったがそう増える事もないだろうさ。
言っただろう私は……」

「なら妾を守れ。妾は民を守る事に専念する。そして妾はお主も守る、と言いたいが兵を付けるわけにもいかんので。お主は自分自身も守れ、よいな」

「お前を？ ふん、何度も言うが旧世界の人間、しかも不法入国・『偉大なる魔法使い』殺害・逃亡者の幫助。普通ならとくに捕えられて処刑されてもおかしくない罪人に守れとは何を言い出すのやら」
「よいのじゃ、このまま今まで通り妾の話し相手としてこの離宮におれ」

「私を客としてもてなすなんて常軌を逸したとしか言えない事をする王女は後にも先にもお前だけだろうな」

「何じゃ、褒めてるのか？ それとも捕えて処刑してほしいのか？」

「首を刎ねられた事がないからそれで本当に死ぬかわからんがね。それにそう簡単に捕まるわけには、増して死ぬわけにはいかないんだ。私は」

「約束なのじゃろ、女達との」

そう言うと彼女は立ちあがると柵の中から一本の横笛を取り出す。

「これをくれてやる。以前倉庫に忍びこんだ時に見つけての、妾は笛が吹けんからな」

「窃盗の罪も増やす気か？」

「誰も気づいておらんよ。その笛で音を奏でてやれ」

「……ふん」

貰っておいてやろう……

「コソコソしているから何かと思えば。くくっ、これはいいことを聞いた。まさか旧世界の罪人を客として連れて来ていたとは」

王女の部屋の扉の前で一人、男が聞き耳を立てていた。

その後ろから

「おや？ ラグラス宰相閣下、姫様のお部屋の前で何かありましたかな？」

見回りの兵が二人

「ああ、いや姫様に用があったのだがな他の用事を思い出してな。また後ほど失礼させてもらう」

そう言ってウェスペルタティア王国宰相ヨハネス・ラグラスは足早に立ち去った。

「ふん、客人が罪人とわかったただけ良しとするか、しかも不死者。」

さっそく旧世界で調べさせなければ。今に見ているアテナ姫……」

宰相の暗い笑い声が誰もいない廊下で静かに響いていった――――

己が力とは（後書き）

どうせなら適当にやってエヴァンジェリンとの別れが最終話でもいいか・・・

アテナ・イエルセルラ・エクステルミーナ・エンテオフユシア

人間 ウェスペルタティア王国第二王女

ちよつと「遊び」に出たところクレスと遭遇する

その後私的な客人として「ひっそりと」招き入れた

年齢は十八であるが高い直感スキルと幼いころより計略などで磨かれた心眼（政）スキルにより嘘を見抜く

心眼は（武）と（政）がある

名前の解説は、いいか・・・

ヨハネス・ラグラス

人間 ウェスペルタティア王国宰相

年齢四十二歳

二枚目半の見た目とそれなりの知性を持った人物であるが事あるごとに黒い噂が流れる人物。

貴族派の支持が高い、改革派ならぬ革新派。

『考え選び実行する勇氣』

作者的な事を言えば某運命の物語、運命を解き放つ物語に出る空気が王とか言われる人が言っていた

「考えて、考えて、ひたすら考え抜く、答えが出るまで
そして、出した答えは何があっても最後まで貫き通す
それが決断をゆだねられた者の負うべき責任だと私は思う」
というのを真似た物

アテナ的な事を言えば最後の

「決断をゆだねられた者の負うべき責任だと私は思う」
が当てはまる

(王女とはいえ子供なのか)

クレスさんの方も言っている事は子供じみている

『横笛』

式典などで使われるはずの格式ある物であるがアテナ姫が倉庫から
気まぐれで持ち出した。

予備を含め数が多く全てが使われることなどないため一本無くなっ
ても気づかれない。

姫が笛を「拝借」した理由としては暇潰しであり容易に持ち出せ尚
且つバレなさそうなのが笛しかなかったため。

会談／階段

クレスがファーガス・フェイタラスと名乗り離宮に滞在する事、既に十日。

魔法世界に来てからならば二十五日。

ウェスペルタティア王国首都オスティア官庁区、その区画の一室にヨハネス・ラグラス宰相の姿はあった。

そして光源から投影された立体映像により魔法使いらしきローブ姿が一つ。

「旧世界での報告ですが。ここ数年、数十年旧世界で行方が分からない『偉大な魔法使い』は「カミュー・オリヴィエ」ただ一人であり最後の情報は二十七年ほど前となります。当時彼のパートナーは病の為旅に同行していなかったようです。該当する人物が他にいないため殺害されたのは彼だと思われます」

「二十七年？ 奴の見た目は二十代前半だぞ。不死でありさらに不老か……？」

その報告にラグラスは考え叩くように言う。

「二十六年ほど前、オリヴィエを殺害した翌年と思われませんが、金髪碧眼の男が賞金首として手配されています。当時の情報ですがファーガスと連れの女と呼ばれていたようです」

「金髪碧眼のファーガス……離宮にいるファーガスも金髪碧眼らしいが幻術と最初の報告で上がっている、本来は黒髪に碧眼だとか……。ふむ当時から幻術を使っていたと言う事か？それで女は？」

「女はドロシー・ホワイト。特殊な魔眼血族の女で異端認定され旧世界で処理されるはずでしたが先の目撃情報からも「ファーガス」と共に逃走したと思われる以後に何度か補足したようですが最後は足取りが掴めなかったようです。報告は以上です」

「ああ、後でより詳細を含めた報告書を出しておけ。下がっていいぞ」

「了解。では、失礼します」

男が礼をすると映像は消え去った。

「不老不死、死んだ事はないといっていたがああの声音からするに不死身に近いはず……。不老不死身の人間という異常性と罪状を持つてすれば……」

ラグラスは一人になった室内で考えに耽る。

話があるとアテナに呼ばれて来てみれば

「宰相の動きが怪しい？」

「そうじゃ、ここ最近妾の周辺を探っているらしい。先日もお主と話している時にこの部屋の前で目撃されておる。もしかしたら話を聞かれたかもしれん」

「おい、それでは……」

「最悪お主のマズイ事がいろいろバレて私を追い出しにかかるやもしれんぞ」

「大丈夫なのか？」

「妾として以前から奴の不正を暴こうと動いておる。既に幾つかの証拠も集まっておる。そう遅れはとらん」

「ふむ、いざとなれば私は……」

コンコン、と扉を叩く音が響く。

「なんじゃ」

「殿下、ラグラス宰相がお呼びです」

「……わかった、すぐに行く。で、どこじゃ？」

「それが……」

「なんじゃ？」

「ファーガス氏を連れて正面ホールへ来いとの……」

「ちっ、……ホールじゃと？ わざわざ妾を呼び寄せてその上正面ホールなどと奴は馬鹿にしておるのかっ」

「しかし……」

「あゝ、もう。わかっておるわ。行くとっておろう」

「は、ではお願いいたします」

「お主の存在は気づかれておったな……。しかもホールだと？ 何の為にそんな……」

「私が抵抗した際に広い方が何かと便利だろう」

「まさかお主……」

「場合によるがな、もしもの際は私の話に合わせろ」

いいな？ と睨むように目を合わせる。

「わ、わかったのじゃ。お主に任せる」

「証拠はすぐに出せる様にしておけ」

「うむ。大丈夫、大丈夫……」

言い聞かせるように彼女は頷いていた。

彼女の準備が出来るのを待ち彼女に近づき過ぎないように言ってから変身魔法をかけファーガスとなり部屋を後にした。

正面ホール階段上

アテナとクレス、その二人と対するように反対の通路から宰相とそれを取り巻く人間が出てくる。

「おやおや、姫様、ご機嫌麗しゅうございますな」

「ふん、こんな所に呼びだして話とは何の用じゃ」

互いに睨みあった。

「まあそう気を立てずに。それと、初めまして。私この国で宰相を務めさせていただいてるヨハネス・ラグラスと申します。以後お見知りおきをファーガス・フェイタラスト殿」

「ああ、自己紹介は要らないようで。よろしく宰相閣下」

胡散臭くはあるが表面上はにこやかに事は進む。

「で、何の用じゃ？」

世間話もそうそうにアテナはそう切り出した。

「焦らずに。いえね、簡単ですよ」

ラグラスがすつ、と手を挙げる。

すると彼の周りにいた護衛の騎士が剣を構え更には階段の下に十人以上の黒い重装を纏った騎士が、更にはアテナ達の後ろから数人の、同じく黒い重装を纏った騎士が現れる。

黒の重装騎士、これが意味するのは……

「貴様っ、誰の命があつて近衛騎士を動かしておる」

「国王陛下の許しは得ております故」

「何のためじゃ？」

「姫殿下、貴方は御存じのはずだ。その男が重犯罪者であることを」「何を言っておる、こやつが犯罪者などと……」

そうアテナは弁明しようとするがそれを遮りラグラスはアテナへと近づき囁くように

「証拠がないと思いで？」

手に持つ球を見せる様にアテナにそう言った。

「ぐ、貴様……」

「貴女は終わりだ、アテナ姫」

そう言い終わると微笑を浮かべ元の位置へと戻る。

「姫様には国家反逆罪の疑いがある、二人を捕えろ」

命令を下すと同時に騎士が数人二人へと近づき始めた。

「きゃっ」

短い悲鳴と共にアテナはいつのまにか壁を背にした「ファーガス」に引き寄せられる。

「くれ……ファーガス何をする」

その声を無視しクレスは袖から取り出した刀を彼女へと突き付ける。それと同時に身の危険からか発動した彼女の「魔法無効化能力」により幻術による変身が解除される。

元の姿に戻った彼は

「それ以上近づくと第二王女を殺す」

そう宣言した。

「なっ……!？」

誰が言ったかその声と同時に騎士達は近づくのを止めた。

「何をしている、捕えるんだ」

「しかしアテナ様がっ」

「反逆者だぞ！」

「しかしっ……」

「騒ぐな、こいつを無事に解放してほしければ道を開けろ」

そう言って軽く刃を首に当て薄く皮膚を切る。

「いっ……どうするつもりじゃ……」

その声を無視しクレスは周囲へ目を向ける。

「貴様、姫様を……」

「道を、開けろ、そう言った。聞こえなかったのか？」

彼が姫を後ろ手で捕まえたまま一歩進めば騎士達が一歩下がる。

「さあ、どけ」

そうして階段を下り始めちょうど半ばへと迫ったところで不意に立ち止まる。

そして階段の上のラグラスを見つめ

「奥義『斬岩剣』」

刀を振るった。

目標は見つめた先、ではない。

足元の、足場である階段に向かいクレスはそれを放った――――

会談／階段（後書き）

最近全く書いてない事に気づいた。

ストックがあるからいいのだけれど・・・

このままだとやはり原作入らず終わる予感がひしひし

カミュー・オリヴィエ

懐かしの人

地下生活は変わらずの「故人」

やはりパートナーに出番はない

証拠の球体

オリジナル記憶媒体

大きさは大きい物で某七つ集めるとなんとやら程度

小さい物だと少し大きいビー玉程度

近衛騎士

オリジナル存在

黒で揃えられた重甲冑が目印

アテナ・イエルセラ（ry

人質

人質とは無事であってこそ意味がある

ラグラス（ry

ぱ）と行動を起こした

旧世界で行動できる優秀な部下がいる、が出番は（ry

『魔法無効化能力』

読んで字の如く、原作同様

アテナは有る程度制御できているが不意、不測時にオートで見境なく発動

防御としては優秀であるが仮に混乱等している場合回復魔法でさえ無効化してしまう欠点がある

奥義『斬岩剣』

原作でお馴染みのやつ

階段を斬った

選択の末

———奥義、斬岩剣———

その言葉と同時に振られた刃は足元の階段を見事に斬り壊しガラガラと音を立てながら崩れ落ちる。

「階段を、切っただと……」

「崩れるぞっ」

階下で騒ぐ騎士達を気に留めずアテナを抱えたまま虚空瞬動によりラグラスへ近づく。

「空中跳躍までっ」

「宰相を守れっ」

通常の騎士が二人、重装の近衛が三人。

「奥義・斬鉄閃」

鎧ごと纏めて斬り伏せそのまま近づく。

「やあ、ラグラス宰相閣下」

「く、貴様っ！リ・ディクルディ・ルルディ・ルルディアス 来たれ精霊 風の精———」

「遅い。奥義・百烈桜華斬」

後ろから囲むように迫る騎士ともども切り刻む。

「が、あ……」

ラグラスは血を流しながら倒れる。

同時に証拠が入っているらしい球がその手からコロコロとこぼれ落ちる。

それに刀を突き立てれば思いのほか容易く刃が入りパキリ、と割れる。

「クレス、お主……」

「黙っている、後で解放する」

何か言いたそうなアテナを半ば無視しクレスは周囲の様子をう窺う。どうやらこの間に階下の騒ぎは沈静化してしまったようである。

「各分隊、姫様を傷付けるなよつ。捕獲術式『輝く帯牢』同時斉射」

十五人による魔法の同時発射が放たれる。

アテナを地面に転ばせると即座にもう一振り刀を出し

「二刀連撃、百花繚乱」

気の放出により魔法を打ち消し再び刀をしまうと転ばせておいたアテナを抱き上げ階下の騎士達を超えるように跳躍、そこから虚空瞬間動。

「飛んだっ!？」

「外へ向かうぞ、追えっ!」

そのまま外へと飛び出るが後ろの追手は未だ十五人、否さらに増えているようだ。

離宮正面ゲートには既に配備がされているらしくざっと見ただけでも兵数は三十を超える。

「チィ、死んでも恨むなよ。タン・レスタン・アルター・アンタレス 集え星光、星の精、全てを貫く星の瞬き、天を穿ち地を断て光の波動、薙ぎ払え『星の鋒光』」

放たれるは束ねられし極光。

星魔法による光の帯が掲げた手から放たれ前方の集団を門ごと薙ぎ払う。

「何だあの魔法は、上級魔法クラスだぞ」

「至急残りを集めろ、アテナ様が捕えられたぞ」

「アテナ様に反逆罪というのは……」

「馬鹿か、今はそれどころではないっ」

「各島に緊急配備、往來の禁止。市街島に屋内退避命令を出せ。空港島にも連絡を入れろ」

出力を下げて撃ったためか倒れ伏す騎士達の中からか幾人かの残った者達の声上がる。

運よく生き残った者達が次々と指示を出していくのを目の端で捉え、運悪く生き残ってまった者と死した達の事は気にも留めず速度を落とさず門を突破し大通りへ出る。

「クレス、何処に行くのじゃ」

「……宰相の持つ証拠は壊した。生きていたら不正の証拠を突き出してやれ」

「何を言っておる？」

「お前は私に脅されたでも何でもいいから潔白を証明しろ」

「それではお主がっ……」

「考えて……」

「え？」

「考えて選んで勇気を出して実行した、そういう事だ。後悔などない」

「お主……どういう意味じゃ」

「二人とも死ぬか、二人とも犯罪者として逃げるか。そして、お前は国を、民を守り私は歴史に残るような犯罪者になる。このどれかから選んだ結果だ」

「だから、それではお主が……」

「私は選んだぞっ、この力を使う代償、事の責任としてお前を守り私は悪となる道を。お前はこうする、国を捨てるのか、アテナっ」

「……妾は、国を、民を守る」

「そうだ、それでいい。もしまた会う時があればそれは私が処刑される時だ」

「時が違えば我らは良き友となれたであろうな？」

「ああ、なれたさ」

「うむ、ならよい。お主は好きに進め、妾も精一杯生きる。約束じや」

「ふん、何処までも笛の音を響かせていってやるさ」

「お主と約束するのは妾で三人目か？」

「そうかもしれないな」

だが、一人は自分自身と言える。

「ふふ、全員女じゃな」

「言うな、女運の無さに泣きたくなる。……と、そろそろ抜けるな」

真っ直ぐ大通りを抜けた先は本来なら人が大勢おり賑わっているであらう断崖の広場。

「ここで蹴りをつける」

そうして足を止めしばし待てば……

「追いつめた、もう逃げ場はないぞ。アテナ様こちらへ引き渡せ」

「姫様、ご無事ですかつ！」

「早く助けぬか馬鹿者どもがつ」

ここにきて初めて騎士達へとアテナが口を開いた。

「早くせよ、妾はこの男とラグラスを牢にぶち込まんとな気が済まぬぞ」

「ふん、うるさい王女様だ、寝ている。……じゃあな」

「ああ。生きろよ、クレス」

小さく交わされた言葉は静かに宙へと溶ける。

瞬時に気絶させた彼女をゆっくりと地面へと寝かせた。

「貴様、姫様に何をっ……」

「寝かせただけだ。さて、お前たちを全員倒せばいいのだろうか？」

集まったのは近衛騎士が十五人といったところか。
一振りだけ再び刀を取り出し構える。

「ふざけるなっ、敵は一人だぞ。かかれっ」

「精鋭たる我ら近衛騎士団を舐めるな」

その一言を引き金に向こうも私も同時に駆けだす。

「奴を引きつけろ」

「我らは姫様の回収する」

響くと同時に速度を上げる集団から騎士が二人離れて動き出す。

すぐに二人に彼女を回収し後ろへ運んで行った。ならば魔法は気にせず撃てると、言う事だ。

人数も減って十三人。

「タン・レスタン・アルター・アンタレス 来よ終焉たる氷結 白銀の翼 我が内より出でて形なせ 飛べよ銀羽 氷牙となりて敵を討て『氷翼の弾雨』」

詠唱が終わると同時に剣を持っていない方、左の胸から氷でできた翼、片翼が現れる。

元となったのは私の最初の戦い、炎の魔人。

手足でない第三の手段による攻防。

奴は炎だったが私は適性上氷のほうが扱いやすい。

翼がはためくと同時に氷羽が散乱され目の前から左にかけての敵を襲う。

「奥義、斬光閃」

右で光となた気を飛ばし左は氷の羽を乱れ撃つ。

「氷の羽っ、下手な障壁では止められんぞ。回避しろ」

氷の羽は魔法の矢に比べ魔力密度が高く氷という物体の形を取っているため魔法、物理どちらの障壁にも止められにくいという利点と一本一本出さなくてはならない矢と違い翼、羽という多数を前提に出現するため魔力を注ぐ限り自動で撃ち続けるという利点がある。が、必要分のみ展開する魔法の矢に比べ常時展開し続けなければならぬ分燃費が悪く出現した場所の後ろ、この場合左後方の確認ができないという欠点が存在する。

逆に言えば……

「回り込んだ後は左後ろから来る、ということだっ」

身体を回転させ

「我流奥義、氷舞百烈桜華斬」

翼自体も氷で形成されているため剣と翼そして射出される羽の三つを同時に扱う改造奥義。

後ろに三人前方に四人、計七人を一度で切り刻む。

「くそ、なんて奴だ。囲め、何としてもここに留めるんだ」

その事で幾らか動揺したのか騎士達は動きが鈍っている。

「六人で私を止められると思っているのか？それとも、終わりか？」

「我らは増援が来るまで持ちこたえればいいのだ」

そう言って剣を突き出し囲むが威勢のいい言葉とは裏腹に捕獲魔法

さえ撃とうとしない。

氷翼を消し新たに刀を取り出し二刀状態へと移行する。

「終わりなら私は行かせてもらおう」

特に動きの鈍い騎士二人の間を瞬動と共に駆け同時に剣を振りながら通り抜ける。

ドシャ、と瞬時に刻まれた二人が崩れ落ちる音を背にそのまま駆ける。

後ろからわめく声が聞こえるがやはり魔法は飛んでこない。

私は拍子抜けという気持ちを抱えながら王都オスティアを後にするのであった――――

選択の末（後書き）

ホント題名とか技名とか・・・

原作技はカットカット

捕獲術式『輝く帯牢』

オリジナル光系捕縛術式

光弾を射出する。対象に着弾すると光の帯で拘束し牢を展開する。

『星の鋒光』 ほしのほうこう、と読む

やっと登場した星魔法

呪文は「集え星光、星の精、全てを貫く星の瞬き、天を穿ち地を断て光の波動、薙ぎ払え『星の鋒光』」

有る程度わかりやすく説明すると某魔法少女のディバインバスター、いや星光さんのブラストファイアーか・・・

『氷翼の弾雨』

オリジナル氷系攻勢魔法

詠唱は「来よ終焉たる氷結 白銀の翼 我が内より出でて形なせ飛べよ銀羽 氷牙となりて敵を討て『氷翼の弾雨』」

氷の翼が生える、が飛べるわけではない。

氷という特性上物理的な攻撃力が高い

作中通りあまり燃費が良くない、が大きさの調整が有る程度できる

ためそれにあわせ燃費も変わる。

氷翼は防御にも使える。

炎使いカーシーの炎翼を再現。

もともとのイメージは不死鳥の型をもつ某炎術師が使う「翹炎」

我流奥義、氷舞百烈桜華斬 ひょうぶひやくれつ と読む

刀による斬撃、氷翼による半斬半打撃、氷羽の射出による射撃の三撃を同時に全包围へと展開する攻防一体の技

氷翼の大きさを変えることで有る程度なら射程範囲を広げられる。

ヨハネス・ラグラス

始動キーは「リ・ディクルディ・ルルディ・ルルディアス」

死んだかどうか・・・

もう出番は（ry

アテナ（ry

新たに約束（？）した人

本人の出番はもうない（断言

クレス（ry

ある意味女運がない

姫様の配下を除けばほとんどの「本当の姿」の目撃者を殺害しただろう人。生きてる目撃者が哀れである

賞金首（前書き）

後書きが長くなってしまった。とかいう前書きは一体何なんだろう
か．．．

賞金首

ウェスペルタティアは王都オスティアの王宮区離宮を襲撃、第二王女の誘拐未遂、宰相殺害さらに離宮では逃走の際複数の騎士を殺害、魔法世界には不法入国。

過去には犯罪者の逃走幫助と偉大な魔法使いの殺害、それ以外にも複数の殺人を犯したとされる重犯罪者。

黒髪碧眼が本来の姿であり金髪碧眼は幻術による変身という話もあるが報告数は少なく金髪碧眼の姿が圧倒的に目撃され重視されている。

特殊な剣術と魔法を駆使する。

少なくともA級ないしそれ以上の能力者である。

不老であり高い不死性を持つと思われる。

生死問わずの賞金50万Dp

これがオスティアを、ウェスペルタティアを離れ三日で魔法世界に広がった私の情報である。

明確な「悪い魔法使い」と言う訳だ。

転移と透明化の情報が出ていないのは助かる、まあ使っていないのだから当然なのだが……

アテナの事は攫われたが途中で私が逃走したため無事であった、との事しか言われてはいないため無事であるようだ。

一度旧世界に戻ろうかとも思うがそう簡単に何度も行き来できるわ

けではないのでここは……

「アリアドネーにでも行くか」

南にも北にも属さず中立を保ち続ける学術都市国家。

学ぶ意思さえあれば犯罪者や死神でさえ受け入れ逮捕しないという国である。

とはいえ流石に私のような者を受け入れるかはわからないが。

「行くだけ行くとするか……」

現在ウエスペルタティアの西端15リーグあたりの荒野である。

幻術による姿は金髪碧眼のままであるが魂を、起源を同じとする者としてクレマンスになる事が出来る私は彼女の姿で旅をする事にした。

「素性がばれそうな音と星は使えないな、剣も厳しいか……」

魔法は他の、一般的なものを使えばいいとして問題は近接である、神鳴流しか学んでいない私には新しい武器が、技術が必要だ。

「ふむ。しかし、女性の身体とは慣れないな……」

自身が女であると言う意識が難しいのである。

この感覚を修正するには女性体をやめるか自意識を変化させるかのどちらかしかないだろう。

女性体を今はやめるわけにいかない、なら道は一つ。なのだが……

「意識誘導のような魔法は効き難いのだがな。どうしたものか」

どういふわけか一般的な認識阻害などに始まる意識誘導、精神干渉系の魔法のほとんどを無効化してしまう。中級以下であれば無効化、上級魔法でも抵抗が掛かるのである。

「精神干渉で効果の高い魔法、か……。シャックスの知覚支配があるいは……」

魔術術式の一つ知覚支配は対象の知覚を奪う事も強化する事もできる強力な魔法であるが対象は一人であり自身にはかけられない、という制約がある。

「いや、やってみるか……」

知覚支配に意識誘導を組み合わせ女、クレマンズと言う本来の虚像には満たないだろう完全な名ばかりの他者を作り上げる。

肉体を共有した別存在と位置づける事が出来れば自分に魔法をかけられるはずであり、魔術術式という破格のものを元にする以上無効化はされないはずである。

幸い当面大きな街は無いはずであり周囲は荒野。

人通りは限りなく零であり道とも言えない道を外れば実験はし放題と言える。

実験五日目。

「遂に完成したね。クレマンズ……家名はどうしよう」

《エルレイアを使えばいい》

「いいの？」

《ああ、気にするな》

「流石クレス。いいねクレマンス・エルレイア、それで行こう」

《ああ、後は頼んだ》

「じゃ、お休みなさい」

どうやらクレスは眠ったみたい。

私、クレマンスに課せられた使命は私を犯罪に関わらせない事、荒事はクレスの領分だから。

基本的に魔法は風と火をメインとする後衛型であること。

近接は神鳴流を使わない、武器はナイフだけ。

新しい近接戦闘法を考える事、これはクレスと一緒に。

人前で人外能力は使わない。

の六つ。

「さて、行きますか。でもアリアドネーって言ったら……」

地図を取り出して眺めるけど……

「今だいたいこの辺でしょ？ってことは真っ直ぐ行って1500リ
ーグぐらい？遠くない？途中で村くらいあるだろうけどさ……」

一応足を伸ばして準備運動。終わったら強化を施して。

「さあて本気で走っちゃおうよー」

ダッ————ン

砂埃を巻き上げたただ真っ直ぐ愚直にとてつもない速さで駆け抜ける。谷があれば勢いよくジャンプして虚空瞬動、それを繰り返す。

村を、人をその高い視力で捉えれば速度を落とし相手がこちらを認識できる頃には歩き出す。

そしてたまにガラの悪そうな人たちがいればクレスに替わって姿を見せる。

賞金稼ぎ等を倒して名を、あえて悪名を広げる。

強化に縮地、場合によっては透明化をかけそして今まで出した事のない全速力という超スピードで走り途中魔物と戦う事丸六日と数時間。

彼女／彼は無事アリアドネーにいた。

「戦わなかったら二日は縮まったよ」

宿をとってすぐ図書館へ行き借りてきた本のページを捲りながら私は独り言のように呟く。

《やることをやったらまた移動するんだ。全力を出し続けて倒れても困る》

私にしか聞こえないクレスの声はいつも通り静かで平坦だ。

「それもそうだけど……。これで最後？」

《ああ、返すのは明日でいいだろう》

魔法薬学書が三冊、既に読んだ後だ。

「で、どうするの？」

《ドロシーの持っていた魔力開放薬を作る》

「あー、あれを？何で？」

《これから必要になる》

「そうなの？まあいいけど」

《アリアドネーをお前の、情報収集の拠点として私はエルジウム大陸の密林かどこかを拠点にする。行き来をして戦闘までした場合魔力が足りなくなる恐れがある、その為だ》

「ああ、なるほど。まあ向こうに戻るためにはここからMMへの長距離転移も必要だし結局薬はいるもんね」

《そうだな、術式も増やしたいし様子を見に一度日本へ行きたいし。予定はたくさんあるぞ》

「上手い事動いてもすぐにゆっくりはできそうにないのかな」

《戦闘は私が出るんだ、お前はゆっくりできるさ》

「クレスが休めなきゃ私も休めるとは言えないんじゃないの？」

見た目が違うとは言っても元は同じ体なんだからもう少し気にして欲しい。

「そう言えばクレスが寝てる間に凄い事を知ったよ」

《凄い事？》

「ファーガス・フェイタラスタの賞金が80万に上がったらしい」

《それはまた……》

自業自得かもしれないけど……

「《迷惑な事だ》よね」

溜息をつきながら私たちは魔法薬の材料を買いに街へ繰り出して
いった――

賞金首（後書き）

王都襲撃・・・重犯罪者

ほとんど本当の事、第二王女の力が幾らか働いている

A級、ネギが虚空瞬動したらA級って言われてた

宰相は死んだらしい

Dρ

ドラクマ、魔法世界の通貨

エルジウム大陸

ケルベラスやグラニクスがある飛ばされたネギや茶々丸達が最初にいた大陸

M M

メガロメセンブリア

本国や首都、と呼ばれるがどこの首都なんだか・・・
魔法世界の首都？だったら南北で対立しないか・・・

仮想鏡面人格「クレマンズ」

魂の記憶と思いで具現。女性体を使用する際の弊害、問題を解消するためにつくられた。

魔神術式をベースにし他の術式を組み合わせ精神魔法耐性の高いクラスにも通用する程の作用を持った術式によりもう一つの人格を形成した。

過去記憶、身体技能を共有、共通のものとしている。

交代時に回復されていない肉体損傷は修復されるが消費した気や魔

力は引き継ぎされる。

念話と同じ要領でクレス、クレマンズ間での意思の疎通が可能。（念話が外（他人）に向けてのものならこれは独り言、内（自分）へ向いてのもの）。

意識の切り替えにより女性体と男性体を使い分ける事が可能になった。

男性体と女性体でのスペック差や身長差等は当然存在する。が、基礎が人間とは違うので実際にはそれほどスペック差に意味はない。

女性体の方が若干リーチが短い、等はそれぞれ補うしかない。

表（体を使用している方）が気絶したからと言って裏（体を使用していない方）まで気絶するわけではない。また逆も然り。

それぞれ独自に己の意思と思考をもっているが、同一存在であり有る程度の意識共有もあるため考えがずれたりすることはあっても行きつく結果は同じになる。

十全全て隠すことなく互いの心内が分かるわけではないが所詮「自分」が考えている事なので予想などはついたりする。

ちなみにシャックスの魔神術式は対象が他者でなくてはならない（自己強化はできない）、と本分に有るがそれに加え「一人」でなければならぬ、と言う人数制限も存在する。

複合とはいえ術式の「一部」をこの『クレマンズ』へ使っているためシャックスの術式を使う事は不可能である。また『クレマンズ』を解除すれば使用は可能。

命散る島

指名手配を受けて既に六年。

旧世界に戻ったのは一度だけ。

魔法世界にいる間は各国を回り悪名を響かせてきた。

ケルベラスの北、海上にある孤島に魔神マルファスの術で城を建て根城とし日々訪れる賞金稼ぎなどの侵入者を討っている。

もつとも最近はその島を覆う森林を魔神アムドウスキアスの魔術により迷宮化し、元々いた魔獣がそのまま徘徊するように放たれている。

さらに周囲の海域には魔神フォカロルの風と海を操作する術式をかけ、島自体には新たに作り出した強力な特殊結界を張り上陸した侵入者を次々と自動で処分している。

もう何年かすれば誰も寄り付かなくなると思われる。

ほとんど城を留守にするようになってからはアリアドネーでクレマンスとなり研究生を送る日々。

アテナから貰った横笛は魔力を通す事で自動的に簡単な音魔法を発動する術式を刻みこんだ。

『装剣』の魔法のように普段消しておき必要な時に瞬時に展開できるようにしようと思いい試しに魔力に馴染ませてみたところ、気や魔力での強化効率が上がるという事や、空気中にある魔力のように見えないほどに分解しそれを腕などに付着させておく事で呪文を唱えなくても展開が可能になる、と言った事がわかった。

またそれに伴い魔力で出来た、または魔力を大量に含む物体は笛と同じように魔力素へ分解、再結合させる事ができる事もわかった。

一度旧世界、日本へ戻った時『鳴弦』という弓の弦を弾き鳴らすことで魔を祓うという新しい退魔術を教えてもらった。

弦、糸を使うと言う事に着想を得て糸を研究したが術の為の触媒と言うよりも武器、武装として適性があるようだ。

音魔法の応用で糸に振動を付与し振るったところ音を発する事はないがより大きい振動を与えることで高い切断性を持つことが分かった。

更に対象の四肢に括りつける事での人体操作に単純に縛る事での捕縛、拘束など用途が幅広い。

糸でなくとも毛髪でも代用がきくという高い代替性も持ち合わせている。

問題は強度である、細すぎるために強化術式を刻む事が出来ないのである。

気などで強化を施しても元の強度がそこまで高くないため長時間の戦闘のような過酷な使用には耐えられないのだ

それでも有り余る代替性を考えれば十分なのは確かであるが……。

リーン、とアリアドネーの借り部屋、その一室に鈴のような音が響いた。

「ん。クレス誰か来たよ？」

この音は島の森林を超える者が現れる兆しを知らせるものだ。
城、島に不在でも深部、城まで訪れる侵入者を迎え撃つための警戒
音。

《ん？ そうだな。なら替われ》
「うん」

ピシッ、と小さく輝の入るような音と共にクレマンズの姿は歪みク
レスが現れる。

「森を超えてくるか。初めてだな」
《強いとは限らないよ？》

「弱いとも限らんさ」
《それはそうだけど、それに結界は順調に機能してるよ？》

島に張られた結界は侵入者の命に多大な影響を及ぼしかねるものな
のである。

「あまり待たせては私の出番がなくなってしまうか」
《出番、って……自分でそう設定したくせに》
「気にするな、行くぞ」

そして彼は敵が訪れるだろう城へ、森の出口へとに転移した。

森の出口、そこに一人の男がいた。

「よくぞ森を抜けたな。しかし一人か」

警戒音は人数まで教えてくれるものではない。

「仲間は全員死んだ。……お前がファース・フェイタスタか？」

思いいのほか結界が効いていないのか相手は元気そうだ。

「ああ、良く来た侵入者。全ての障害を超えここまで来たのは君が初めてだ」

「そうかい、ならアンタを殺すのも俺が最初だっ」

雷撃武器強化の呪文か、振りかざす剣は雷を帯びている。
すぐさま刀を取り出し添える様に受け……

一瞬の抵抗と共に

「っ!?! 何だ、それは……」

刀を断ち切りそのまま身体を斬られただと？
断たれた刀を捨て新たに一振り刀を取り出す。

「はっ、どうやら効くみたいだな」

切れた事を確認し男はもう一度雷剣で斬りかかってくる。

「ちいッ、どうなっている」

上から迫る雷剣は私の刀を今度は無視するかのように通り抜けにそのまま肩を切り裂いた。

「ッ、なるほど実体がない雷の剣。その刀身、幻だろう?」

最初に刀を切ったのは対物変化させた雷を属性特有の速度で切った

というところか。

「見抜いたところで対応できまい」

幻の刀身が消えたことにより雷だけで刃を形成しているのがよくわかる。

「くそがつ、ホントに不死身なのか？」

既に傷がない体をみて男は毒づいた。

「自分で確かめてみる。しかし厄介なものを『破音の鎚』」

無詠唱で衝撃を放ち怯んだところで距離を取る。

「逃がすかよっ」

当然追いかけてくるが……

「ぐおっ、何だ、何をした!？」

最近使い始めた糸による捕縛術、まだ一本しか扱えないが足を絡めるのには十分だ。

「タン・レスタン・アルター・アンタレス 慟哭せよ咎人 振り下ろすは執行者 罪を斬り業を祓え 処断の剣 魂に刻む 穢れなき断罪の刃 全てを虚空へ帰せ『断罪の剣』」

刃の形を取っていると言う事は障壁で受け止めるのも難しいと見るべきである、なら同じ魔力で出来た刃を形成すればいいだけの話。

顕現した極低温の刃が空気を冷やす。

「くそがつ」

足の糸に気がついたのかそれを切り立ちあがる。
その瞬間を狙い腕を切り落とす。

「なんだ、寒い、腕が……」

切られ宙に飛んだ腕は塵と消え切断面は凍りつく。
落とした事で刃が消えた剣、柄を男は残った手で拾い上げた。

「動けるのか？さすがに最低限の出力では死なないか……？しょうがない、ならば」

出力を上げるまでである。

断罪の剣の出力を上げた事により周囲の温度が更に低くなる。

「くそっ」

「お前、さっきからそればかりだな。まあいい、その怪我なら何もしなくても死ぬだろうが私が殺してやる」

「力が、入らない。抜けていくだと……」

何もしなくても怪我を負った時点で結界の餌食になるのは確定している。

「気にするな、すぐ気にならなくなる」

なんとか振り絞ったのだろうナイフ程度の刃を向けるが届くはずもなく、私は断罪の剣を

「くっそがあああっ」

「さよなら、お別れだ」

振り下ろした。

切り裂くと同時に胸に衝撃。

「がッ、あ？」

理解が追いつかない。

男は既に身体の半分を塵と化しているのになぜ私が声を上げる？
胸に衝撃？何をされた？わからない。

「なん、だと……」

胸を見れば雷の刃が槍のように伸び私の体を突き抜けていた。

「馬鹿な……」

僅かな笑みを浮かべながら消える男の残骸を見つめると同時に刃は
消え柄だけが地面に落ち乾いた音を響かせた。

「っ、ふぁ？」

口に手を当ててみればボタボタ、と血が落ちる。

《クレス！？》

「があ、っは、心臓を貫いてるのか。初めてだぞ、こんなの……」

ゲホゲホと咳が出る、そのたびに口から血が飛び散る。

「大丈夫だ、げほ……もう、治ってきてる」

致命傷でも治るか、流石に血までは戻らないようだが。

「血が足りないな。しかし後は首を刎ねられてみない事にはわからないな。ゲハっ、げははは……」

血が出ているが気にせず何故かこみあげてくる笑いとともに城へ向かって歩き出す。

《血吐きながら笑ってないで早くどうにかしてよっ》

「ああ、面倒だ。今日は外に食べに行こう。明日にでも結界の調整だ」

《そんな事いいからはやくどうにかして、替わったら周りが血まみれとか私やだよ》

彼女が静かになるのは血を洗い流し着替えた後だった――――

命散る島（後書き）

決して十全無敵の最強ではないと言う話。

島と城

ケラベラス北、地図で言えば下の無人島。

周囲の海域を魔神フォカロルの術式結界による荒波と竜巻の嵐が、陸上の大半を占める森林部には魔神アムドウスキアスの術式による変化し続ける森林迷宮が、そして島全体を新たな特殊術式による結界が、三重結界が覆いその中心たる城も魔神マルファスの術式によってできている。

まるで要塞島である。

特殊結界についてはその内。

ちなみに「力が抜けていく」は効果の一部である

笛の分解、付着、再結合

魔力的親和性が高い物ならたいいの場合可能。

「付着」は皮膚や服の表面などに付ける事ができ必要な時に魔力を通す事でその物の粒子魔力素を手などに誘導し再結合させる。

再結合できる範囲は自身の手足が届く範囲で結合の邪魔になるような異物がないことが条件。相手の体に直接出現させる事などは不可能。

作者的な説明をすれば某深淵の物語の登場するネクロマンサーが使う「コンタミネーション現象」

ネギまの設定上、魔法世界人はこれが適用されることになる。

『鳴弦』

日本生まれの退魔術

糸による攻撃と捕縛

現在一本、捕縛効果のみ使用可能・

音魔法付与による高周波ブレードもどき、まだ実戦で使える程練度がない。

強度による制限問題あり。

高周波ブレードという設定上高周波ブレードでしか受け止められないが振動の元が魔法なのでそれが消されれば糸本来の性能へとなる。音魔法を使うのが一人だけのため出力で負ける事等は基本的でない。そのため打ち消されないか耐久限界になるかまでは強力な武器となる。

名も無き侵入者

人間 年齢35

武器は魔法刀

口癖は「くそっ」

仲間が風にさらわれ波に吞まれ迷宮に迷い魔獣に喰われた。

実は着ていた鎧に高度な耐魔処理がされていた。

その為特殊結界の効果が薄く、出力が低かったのもあるが断罪の剣で瞬時に分解されなかった。

魔法刀

本体は柄のみ。

使用者の使用属性により刀身の属性も変化。

「刀」とつくが力量次第で有る程度の形状変化も可能。

某死んで霊界探偵とかやる漫画に登場する霊剣を思い浮かべれば簡単か・・・

刃の形を取ってゝ

刃と言う性質上斬る事を前提としたものであり障壁破壊（切断）能力があると推測された。

雷の「兆速」という効果は先の音魔法による高周波ブレードと違い魔力による超振動ブレードに近い枠である。

魔力形成、物体透過という仕様であるため対物変化効果である「兆速」は常に発動しているわけではない必要な時に発動できるがその分消費魔力も増える。

炎なら「燃烧」水なら「流動」が対物変化効果である。

砂なら某超電磁砲のように砂鉄の剣のような流動的な可変性、氷なら通常状態ではば実体という仕様である。

『断罪の剣』

エヴァンジェリンほど高位な術者でなければ（ry とされるほど高度な魔法らしいが原作で一度も詠唱されない。なので詠唱は頑張った考えた。詳細は原作12巻の巻末を。

「慟哭せよ咎人 振り下ろすは執行者 罪を斬り業を祓え 処断の剣 魂に刻む 穢れなき断罪の刃 全てを虚空へ帰せ『断罪の剣』

クレス

血を吐きながら笑う危ない人

出血より夕食の事が気になる精神具合。

心臓を貫かれても時間をかければ再生するらしい。だが血までは戻らない。

再生能力の検証としては首を刎ねられてみなければあとはわからない。

廃墟（前書き）

始めてもう三カ月か……。まあ定期だしこんなものだよね。

二話同時更新とかもやっただし満足

新キャラ登場、さあ脳内補完の時間がやってきた……

廃墟

島を覆う結界の調整を終えてから、心臓を突かれ血みどろになって早七年。

島への侵入者は減り森林を超える者も出ない。

どうやら調整を施された結界は揺らぐこともなくその機能をはたしている。

展開した内部空間において術者の意を元に敵を喰らい展開し続ける牢獄結界。

侵入者から強制的に生命力を吸い上げ機能し、敵の衰弱が激しいほどその効果を増し骨の髄まで搾りとり魂さえも逃がさず糧とする。

吸収した生命力を結界の最低限の維持へ使用し余剰な分は海と森、残り二つの術式へと回され稼働させ続ける。

もしも魔力が足りない場合は外の空間から自動的に汲み上げる仕様となっている。

設定を変えれば効果範囲内の「命」なら全て貪る。

魔神術式を使い完成された正しく悪魔の結界である。

ただ展開の遅さと外部から攻撃に弱いのが欠点。であるが、島の外から打ち破ろうとしても近海を支配する嵐の術式が全て遮断するようになっていいる。

手配され十三年。ファーガスとして活動は控えているものの狙うものは未だに存在する。

これも賞金が100万Dpへ上がったせいだろう。

ほとんど城を空けている状態で各地を回っているが行く場所で対応が違うのはなかなか面白いものだ。

南のヘラスへ行けば帝都守護聖獣が出迎え。

北のメセンブリーナへ行けば軍隊がお出迎え、特にウェスペルタテ
イアは熱烈だ。

アリアドネーへ行けば周囲から人が消え離れた位置で騎士団が見張っている。

流石に帝都の聖獣とは戦う気になれないためファーガスとして帝都には入った事がないがいつかはやってみたいものである。

ボレアリス海峡を超えた北極側の地域では手配はされているものの滅多に行かないため辺境部であれば警戒さえされない事もある。

出歩けば出歩いたで島へはこない賞金稼ぎ等が襲いかかってくるが最近では音と糸だけで始末がつく事ばかりである。

全て殺す気でやっている、と言う訳ではないが運良く生き残った者がいくらかいるらしく二つ名なんでものが付けられたらしい。

気にはしていないが一つ気に入って覚えているものがある。

それが

【不滅の音色】

悪名であれ「音」が認められたような思いと過去の約束を現したような呼び名であるため「お気に入り」と言うやつだ。

そんな行くあてを考えずふらふらと各地を歩き続けて更に六年。
暇つぶしに歩いて山巡りしていた時、木々に埋もれた遺跡群を見つけたのはアルシア山の麓であった。

《こんな所に遺跡？》

「MMから西は遺跡ばかりだと知ってはいたがこんなところにもあるとはな。しかもほぼ無傷でとは恐れ入る」

《どうするの？》

「無論、探索するさ。たいして強い魔物がいるわけでもないし、このまま行くぞ」

そうして私たちは遺跡へ、森の中へと進んでいった。

木の根や蔦に侵食された町並みは異様なほど神秘的で美しく魔物の姿もない。

《凄いね》

「ああ、こんな場所があるとはな」

残っている道をそのまま進んでいくが

「ここまで、か」

町はそこで途切れその先はただ森が広がっていた。

《向こう、何かある》

彼女の訴える方を向けば

「あれは、家か？」

奥の方に木で組まれた小さな家の一つ。

《誰かいるのかな？》

近づくにつれよくわかる、周囲の町に比べれば幾らか新しい建物のようだ。

「誰ですか？」

目的の家まで近付いき調べようかと思った時、家の裏側から花や草を抱える様に持って一人の女性が出てきた。

「あの？」

《クレス！》

「っ、いやその……ここに住んでおられるのか？」

「ええ、そうです。貴方は何故ここへ？」

「偶然後ろの町を見つけて歩いていたらここが見えたもので」

「……そうですか。見ての通り何も無いところですよ？」

「遺跡を見て回るのは嫌いじゃないので。よければこの事について知っているなら話を聞かせてもらえないでしょうか？」

「……………どうぞこちらへ」

しばしの沈黙の後彼女はそう言って家の中へと私たちを招き入れた。

家の中は遊びがないと、言うか機能的と言うか、質素で余分な物がない空間だった。

このような辺境に住んでいるのなら当然かなどと考えてつい、と視線が彼女を向く。

年齢は私と、私の基の年齢と同じくらいか、髪は銀とも金とも見える色で緑の多い空間のせいなのか緑に見える事さえある。

瞳は静かに全てを見透かすようでありながら何も映さないように閉ざした印象を受ける。

《クレス?》

「《何だ?》」

《……何でもない》

気になるが本人がいいと言うのならいいのだろう……

「しかし……人間ではない方が来るのは、初めてです」

意識を切り替えたと同時に静かにそう切り出した彼女であるが私が人間でないと既に断定されている。

「わかるのですか?」

「私はこの町の、森の中の事なら全て、とは言いませんがわかるのです。木々や動物が貴方は人間ではないと言っています」

「……ファীগス・フェイタラストという賞金首を知っていますか?」

《クレス?! 何で……》

内側から響く驚愕の声、だが自分でもわからないのだ。

「以前一度兵士の方々が来た際に恐ろしい存在が、と仰っていました。それが貴方だと？」

「そうだ、だが私は貴方やこの遺跡に手を出す事は無い。誓った」

「何に誓うのかはわかりませんが貴方がこの……」

「私の心に誓わせてもらう」

「……………確かに貴方がこの事を知らずに来たのならそのような事はなさらないでしょね」

「知っていれば襲うと？」

「場合によっては、です。兵士が以前来た、と言いましたが既に何度も来ています。目的は私が、我が一族がこの地で守る宝具を狙うてのことです」

「宝具？」

「この遺跡の、森の繁栄に関わるものです。過去、この町はその宝具の恩恵により栄えていましたが一人の人間がその宝具を手に入れ全てを操り支配しようとしました。結果、それは失敗し宝具が暴走。人々は町を捨て移住しました。その結果がこの異常なまでの木々の成長と廃墟です。MMは私の何代も前からそれを欲しがっています。が立場話し合いと言う姿勢を崩さず現在まで進んでいます。ですが最近兵士を出して来ていますのでいつまでそれが続く事になるのかはわかりません……」

彼女は淡々と調子を崩さず説明した。

「なぜその宝具を渡してしまわないのです。貴女一人では……」

「この地でなければ宝具『大地の心臓』は存在できません。そしてそれは我が一族にしか操る事ができない。そういう制約の物なのです。そしてそれを守るのが使命なのです」

「大地の心臓……？」

それが宝具の名らしい。

「そうです、大地を生み出し命を育む。個人に封じれば不老不死身の力を与える宝具です」

「不老、不死身……繁栄の宝具」

呟くように言うが彼女は気にせず続ける。

「そしてそれをつくったのは——始祖・アマテル。そう伝えられています」

「始祖・アマテル、だと……」

繰り返すように私の口から発せられた始祖の名。

それは家の中で木霊するような錯覚を残して静かに消えていくのだ
った———

廃墟（後書き）

島の結界その三

魂まで逃がさず喰らう牢獄結界

対象は展開時任意で設定

島に張られたものは島内へ侵入した害意ある存在が対象となっている
「害意有る」というアバウトな設定であるため大陸側から飛んできた竜種等の魔獣も場合によっては対象となる

魂を呼び寄せる魔神ガミジンの術式を流用している

城の中に陣が刻まれており城自体をを要としているため術者不在でも稼働している大規模仕様。本来はそんなことしない

ちなみにその一は海、その二は森林の結界

元ネタがあるがちゃんと登場した時に・・・

帝都守護聖獣

その内の一体として原作では龍樹のみ登場している

戦う気がないのは「今の」力量では負けるのが分かっているから

帝都

ヘラス帝国の帝都ヘラス

ファーガス「として」入った事は無い

海峡の向こう側

桃源や龍山山脈が有る

【不滅の音色】

二つ名の一つ、お気に入り

その内他にも出るかもしれない

何気に本名のA・Tの部分も表している

アルシア山

地図で言うところノクティス・ラビリンスの上か

火星の地図を画像検索すれば載ってるかもしれない

昔は町が有った模様。現在は木々に覆われている

遺跡と言えば遺跡だが廃墟と言えば廃墟

はほぼ完全な形で残っている

守人の女性 種族 人間？

職業 守人 年齢 22、3歳前後？

髪が不思議な人。人と接しないため表情が硬くなっている

一族はずっとここ（森）にいる

特殊な力が有る模様。その瞳は何をうつしているのか・・・

クレス

賞金が上がった

若干様子がおかしい

クレマンス

クレスの様子に違和感を感じている

『大地の心臓』

始祖がつくったらしい

大地創造と繁栄の宝具、人に封じれるらしい
だが一定範囲でしか使用できない模様
MMが欲しがってる

告白（前書き）

久しぶりに言おう。超？展開、であると（

単位、ヤードが久しぶりに登場

暑い、溶けそうです

何故か読む人が増えたらしい、怖い

告白

始祖・アマテル。

この魔法界を創ったとされウェスペルタティア王国の初代女王。創造神の子とも言われ特殊な魔力を操ったとされる。

彼女の血を受け継ぐアテナも「魔法無効化能力」を発現していた。そのアマテルがつくったとされる宝具『大地の心臓』

「なるほど、それは確かに欲しがるだろうな。だがこの地でしかしか使用できないのであろう？」

「個人に封じればその限りではありませんが彼らはそれ等の事を知りません」

「私に言っているのか？」

「賞金が掛けられているのなら貴方は彼らに追われているのでしょうか？なら構いません」

「ふむ、それに私は不老不死身だ。大地に心臓に興味はない。まあ全くないと言えば嘘になる……。見ることは可能か？」

大地を豊かにし取り込めば人間を不老不死身にすると言う宝具。不死研究として生まれた私にとってこれほど考えさせる物は存在しない。

「そう、ですか。いいですがもう暗くなります。今夜は泊って明日見にゆくというのでいかがでしょうか？」

「泊まる？ここにか？貴女が迷惑だろう」

「私は構いません。それに貴方がこの森へ訪れるのをもし見られると余計な災いと呼びかねませんので」

「転移魔法があるのだが……」

「この森には転移できません、外からとなります。それでは時間がかかるでしょう？」

「む……。ならよろしく頼む」

走ったところで疲れるわけでもないが歩いて五時間はかかる道程を朝からは勘弁してほしい。

「では、そちらにもう一部屋あるのでお使いください。それと……」
「ん？」

「遅れましたが私はルクレツィア、ルクレツィア・シュトラハウトです。よろしくファーガスさん」

「ああ、こちらこそ頼むよルクレツィア。私の本当の名前はクレス・A・T・エルレイアだ」

《クレス、いいの？》

「《ああ、彼女に嘘は吐きたくない》」

《……》

「本当の……？偽名、ですか。私に教えてもよろしいのでしょうか？」

「ああ、君は誰にも言わないだろう？それに心に誓うと言った手前嘘は言わんよ」

「そうですか……。わかりました、そのお名前を受け取ります。たいしたものは用意できませんがお待ちください」

彼女は薄く微笑むと踵を返す。私はその背を少し見送ってから部屋へと入った。

「これが『大地の心臓』」

「それ以上それに近づくと消滅してしまいますよ?」

「は?」

「これを近づけてみてください」

そう言って彼女が渡してきた木の枝を近づけると。

バシュツ、と音を立てて枝は塵と化した。

「資格のない者が近づけないようにするための処置です。暴走を起す前までは意識を断たせる程度でこれほど強力ではなかったそうですが……」

彼女の家から徒歩二時間そこに宝具を安置した神殿はあった。

神殿といっても階段を上がった先の部屋に『大地の心臓』があるだけなのだが。

見た目は白い球体の周りを幾つもの金属のような輪が回る浮遊物。

「大きいな」

縦横15ないし16ydといったところか。

「これが体内に入るのか？」

「このようにすれば」

そう言って彼女は近づき手を近づけ何か呟く。

その途端それは光を発し掌に収まる大きさへと変わった。

「そしてこうすれば」

それを胸に押し当てると消える様に吸い込まれていった。

「コンタミネーション現象か」

「え？」

彼女は体から取り出すと元あった場所へと掲げる様に手を伸ばした。

「魔法を使わずに魔力構成されたものを分解し吸収したりできる、元に戻す事もな。私が考えたと思っていたがこんな物を作るあたりアマテルとは天才だったのだろうか……」

「そうなのですか。一族では当然のようにできるので……」

「そう言えば一族と言うが他に誰か？」

「いません。私たちは純粋な人間ではないのです。ある程度成長し死期が近づきはじめると自然とそこに生まれるのです。そして先代を母として教えを請うのです」

宝具を元の場所へと戻した彼女がこちらを振り向きそう言った。

「精霊、なのか……？」

「わかりませんが、近いものだと言われています」

「……そうなのか」

「どうかなされましたか？」

「私と言う存在は「精霊化」を含めた「不死」への実験から生まれ
たんだ……。これがそのある種の答えになるんだろうな、と思って
な」

「あの……私の事は、お嫌いですか？」

「ん？なぜそんな事を？」

「いえ……その、この事をその方たちが知っていれば貴方はそのよ
うな……」

「いや、私はこの身体になった事を怨んでいないよ。こうなったか
らこそ今が、大切なものを得た今と言う時があるのだ。君が、レク
レツィアが気にする事じゃない」

「そうですか。すみません」

「なぜ謝る？」

「いけ、何故かそうしないといけないような気がして」

「ふっ、そうか。さて私としてはこの辺の事をもっと知りたいのだ
が……」

「はい、喜んで案内させていただきます。ここの裏手にですね……

―――」

《クレス、まさかとは思うけどさ》

《《うん？》》

《この人の事、好きでしょ？》

《《好き？確かに好ましく思っているが……？》》

《家族とか友達じゃなくて男として女の彼女を好きってこと、恋っ
て言ってもいいと思う》

《《恋をしていると？何故そんな事がわかる》》

《私は派生したと言えるけど元を正せばクレスと同じなんだから自
分で自分を客観的に見れてるって言ってもおかしくないはずなんだ
よ。その私が言うんだから合ってるはずだよ》

《《恋か、この気持ちか。ああそうか。ならこれは一目惚れと言う
やつなんだろうな。ふふ、私が恋をするだなんて思いもしなかった

》
」

「どうかしたんですか？」

「ああ。いや何、もしよければ今晚の為にその湖で魚でも捕ってこようかなと思ったのだよ」

「魚ですか。いえ、それよりお帰りになると……」

「君の為に魚を釣ったら帰るさ」

「はあ、それは有り難うございます……？」

「それとルクレツィア」

「はい」

「こんな、いつどうなるか分からない身の私だから先に言うておく事がある」

「なんででしょう」

「私は貴女に恋をした。君が愛おしい。それを知っておいてほしい」

深い森の中で木漏れ日が静かに私たちを照らしていた――――

告白（後書き）

『大地の心臓』

基本的に持ち出し不可だが個人に封じれば持ち出し可能。その辺の事をMMは知らないらしい。

取るにはなにか呪文？が必要らしい

馬鹿みたいな効果の結界に守られている

正式名称は「四次正角成中核環」と言う。訳ではない
わからない人はぐーぐる先生に「大地の心臓」と画像を探してもら
うと分かる。

コンタミネーション現象

名称が必要になったが結局思いつかなかったのだった。

森と廃都市

転移で入る事が出来ない、逆を言えば出る事も出来ない

守人の女性、改めルクレツィア・シュトラハウト

人間ではなく半精霊的存在

「私の事嫌い？」は天然

前回の説明で省いた特殊な力は宝具、ひいては森との誓約であり契約によるもの。

存在自体が力の証明ともいえる。

次代は自然に誕生する。死後は自然消滅する。先代が母、次代が子の関係。半不滅存在

懐かしのカーシー君の成功体はこういう存在だったかもしれない
一応他にも力がある。森内のいろいろな声が聞こえるのもその一つ

クレス

気づけばわかるが前回素性を明かしたところから徐々に口調を戻ってきている

一目惚れでたぶん初恋

初恋は実らないとよく言うが・・・

クレマンス

その性格上等からクレスに比べ同じ存在とは思えないほど心が豊か、
というか機微に機敏と言うか。

胎動（前書き）

相変わらずアレは怖いな・・・
三十話ですって・・・

タイトルもいまいちだけど始まりがどうもイマイチ

胎動

あれから、私のルクレツィアへの一方的な告白から既に一年ほどが経っただろう。

あの時、彼女が戸惑うように首を傾げたのを今でも覚えている。

「すみません。私にはよくわかりません」

彼女は言ったが

「ですが……はい、分かりました。覚えておきます」

小さく頷いてくれた。

この一年彼女はよく笑ってくれるようになったと私は思う。

私が言うのもなんだが彼女は出会ったときから感情の起伏があまりない。僅かに見せるそれがわかったのは彼女の元へ通い始めて少し経ってからだ。

彼女が微笑んでいると私も温かくなる、いや安心する？嬉しくなる？まあ、これが誰かを好きになると言う事なのかと実感はしている。

アリアドネーの外れにある宿の一室でクレウとクレマン스는いつも

のように話していた。

「ねえ、どうせなら一緒に住めばいいんじゃないの？」

《彼女はあそこを離れられないと言った。だからと言って私があの地にいては迷惑がかかるかもしれない、それは避けたい》

「まあ表に私は出られるから今のままでいいけど、もし何かあったらどうするの？」

《彼女の家には危険から守る木星第六の護符を引いてある。森林の精霊であり魔女でもある彼女なら時が悪くても効果が高いはずだ》
「そうだけど彼女「最近物騒だ」みたいなこと言ってたじゃない。何かあった時たまたま家にいなかったらどうするの？」

《………》

「クレス？」

《彼女のところに行こう》

「え？ちよつと、きゃ……」

パキンッ、と甲高い音が一度。

短い悲鳴と同時に彼女の姿はクレスへと変わった。

《もう、いきなり変わらないでよ》

「飛ぶぞ」

《ちよっ……》

いつの間に唱えたのか。クレマンスの声を遮るように交代と同時にクレスは彼女の元へ行くため転移した。

そして廃墟軍の森、その外縁へと転移し目に飛び込んできたのは。

《嘘……》

森が――――

「燃えている、だどッ」

森の、遺跡の入口から奥へと木々に覆われ失われていたはずの道が炎に焼かれながらその姿を見せていた。

「……ルクレツィア！」

呆けている場合ではない彼女の許に急がなくては、彼女に何かありでもしたら……

「くそっ……」

駆ける、森を炎で焼かれた遺跡の中をただ駆ける。
彼女の事だけを考えて。

まだか、こんなに遠いのか？

《焦らないで》

「わかってはいるが……私は……」

《見えたっ》

クレマンスの声に顔を上げれば確かに彼女の家が目に見える位置にある。

周囲は焼かれ壊され酷い有様だが家の方は護符のおかげかほとんど無傷でそこに建っていた。

その正面、扉の前

「ルクレツィア！」

そこに彼女は倒れていた。

「クレス、さん……。あ、私は気を……。そうだ森を、大地の、心臓を私は……」

どうやらかろうじて意識はあるようだ。
頬の擦傷を始め小さな傷が手足にある。
しかし問題はわき腹にある刺し傷だろう。服を赤く染め今もお出血しているようだ。

「喋らなくていいから、じっとしていてくれ。私が、後は守ってみせるから」

「すみま、せん……」

倒れ血を流す姿と謝罪の言葉。私に体を預ける彼女は僅かとはいえず母を、アンナを幻視させた。

「ああ、謝る事は無い」

もうだれも目の前で無残に死んでほしくない。

「これを持っている、傷を治してくれる」

彼女の手には治癒効果のある火星第二の護符を握らせる。

「有り難う……ございます」

「ああ、すぐに戻るから休んでいろ」

私は少しでも笑えていたか？彼女を安心させられたか？

《大丈夫、行こう》

内側からの声に頷き返し。

「行ってくる」

「はい、待っていますだから……」

その声を背に私は再び走りだした。

どうか御無事で……

「あれか……」

神殿を目前にその一団はいた。

光の反射を抑えるためか艶消しの施された黒い装備をした騎士達に魔法使い。

気づかれる前に先手をうつ。

「タン・レスタン・アルター・アンタレス

天にまします我らの神よ　どうかお赦してください
まさに今死ななくてはならないはずの地上のすべての罪人
たちに

今永遠の死を与える私の大罪と小罪の全てを赦し

聳え立つその城を　愚かな罪人を　微塵に砕き

その苦悩もろとも止めを刺せば

至高の光の元に永劫の円環を与え

それを私の祝福となし　私の靈魂を満たせ

私の願いがあなたの思いとなられるように

されば天主よ　その時全てを許したまえ」

———強装魔導結界———『魂鎖す悪魔の檻』———

島に施されたものと同じ全てを奪う結界、その改良版。

それをこの森に神殿を覆う形で展開した。

対象は前方の一団と木々を焼く「炎」

展開と同時に空から、木から、炎から色が失せた、が本来の効果が
出るには少し時間がかかる……

「周りから色が無くなったぞ」

「なんだ、どうしたっ」

「魔女が追って来たのかっ!？」

空間の異変に気がついたのか奴らは騒ぎ始めた。

「タン・レスタン・アルター・アンタレス 集え星光、星の精、全てを打ち砕く星の終焉——」

「後ろだっ」

詠唱に気づき一人が振り向くが呪文は既に後半へと入る。

「————人を討ち魔を滅する光の波濤、押しつぶせ『星の崩光』」

呪文の完成と同時に巨大な光球が敵を押し潰さんと放たれる。

「何の魔法だっ」

「避ける、あの魔力量はまずいぞ」

散開を促すが既に遅く五人ほど巻き込んだ光球は地面を抉り音をたて人間諸共消滅した。

「なんて威力だ、鎧には耐魔法処理がされてるはずだぞ……」

「早く行けっ！ あれほどの呪文だ連発は出来んはずだっ」

向かってくる騎士にその後ろから放たれる魔法。

威力の低い魔法は結界の力で減退し消滅するがそれでも数が多い。

近づく事で向こうの誤射を狙うか撃たせないようにするしかないか

……

接近と同時に袖から二刀を抜き迫る刃を捌き凌ぐ。

「貴様、あの魔女の仲間か」

「あれに仲間がいるなんて言う報告はないぞ」

仲間、か……私は……

「仲間？私は……彼女にとって何なのだろうな……」

「何言ってるやがる」

「ふん、とりあえず私はファーガスと名乗っておこう」

「なっ、ファーガスだど！？」

「黒い髪に緑の目、そしてあの魔法……」

「ありえん、何故貴様がこんな所にッ」

「惚れた女を守るのが男の役目だろう？」

「ふざけやがって……」

「何とでも言え。秘剣、飛燕抜刀霞斬り」

踏み込むのに合わせ二刀同時による瞬速の抜き放ちからの切り返し。自身の視力を持ってても霞むそれを神鳴流を知らない人間が初回から止められるはずもなく敵が一人地に沈む。

「ファーガス・フェイタラスト、か」

「喋る余裕があるのか？秘剣、五月雨斬り」

右手を出し細切れにしようかと思ったがギリギリのところまで後ろに引いたらしく多少の傷を負うだけですんだらしい。

「く、剣の腕も尋常じゃないぞ、気をつけろ」

そう言うときさらに後ろから穴を埋めるために騎士が出てくる。

「何人いるんだか……面倒だな」

そう思い一回距離を置こうとした時。

「今だ、消えろっ！『燃える天空』」

「ここにきて見方諸共殺す気か……。くっ、邪魔だ、どけっ」

逃がすまいと文字通り命がけで取り付こうとする騎士共を切り倒す。
轟！

巨大な衝撃音と共に味方を焼き尽くしながらもこちらに迫る爆炎

「くそっ……」

誰の声なのか、私なのか魔法を放った者なのか、どちらでもない他の者なのか。

確かなのは刀ごと片腕を持って行かれたと言う事だ。

「片腕を潰しただけでも十分だっ」

「今の内に奴を倒せ」

味方を厭わない攻撃で一度静かになったがすぐさま息を吹き返したかのように攻め立てる複数の騎士達と後衛の魔法使数名。

対するは片腕がない私。

片腕丸ごとの再生は少し時間がかかりそうだ……

さて、どう凌いだものか……

終わりの時は意外と近いのかもしれない――――

胎動（後書き）

今回も有る程度割愛

（星第〓の護符

随分前からチラチラ存在を仄めかしていたもの

星の位置等が関係するため使用する時間などにより効果が増減する
太陽・水星・金星・火星・土星そして月の護符がある

木星第六の護符

作中通り「（あらゆる）危険から身を守る」

効果は防御結界

森林の精霊的存在であるルクレツィアは同じ「木」の字を当てる木星の護符と相性が良い

火星第二の護符

怪我などの治療効果の護符

クレス等は知らないが魔法世界は火星が触媒なため旧世界で使う時に比べ火星の護符はいくらか効果が高くなり、位置や時間による効果の減少がない。

強装魔導結界『魂鎖す悪魔の檻』

詠唱呪文、長いのでカット

今まで謎だった島に張られた結界

その効果は対象の「強制的な」吸収による弱体。体力、魔力を時間と共に吸収する。対象の疲弊度、損傷具合が高ければその分効果も

増す。

今回のものはそれに加え炎や魔法のような現象でさえ魔力に分解、糧にできるようになった、が効果が出るのに若干の時間がかかる。対象を現象にまで拡大したため指定空間は色が失せる。セピアな世界。（島のものは対象が生命のみなので色が失せる事は無い）

他にも効果あり。

某「怒りの日」の創造階位以上で出る詠唱を思い浮かべていただければいい

要するに中尉の「死森の薔薇騎士」の改変

詠唱呪文は「主禱文」「ニーベルングの指環」「パルジファル」「ファウスト」やイエズスにおける崇敬、奉献の祈りなどいろいろ詰め込み改良しました。

『星の崩光』

読み方は以前出た『鋒光』と同じく「ほうこう」

『鋒光』のバリエーションであるため詠唱はほぼ同じ

詠唱は「集え星光、星の精、全てを打ち砕く星の終焉、人を討ち魔を滅する光の波濤、押しつぶせ『星の崩光』」

イメージは「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション」

全力全開である。殺傷設定なら人くらい消し飛ぶと思うのは私だけ？

秘剣、飛燕抜刀霞斬り

秘剣、五月雨斬り

神鳴流の技。ネギまではなくラブひなに登場する

一応「秘剣」にしておいたが多分「奥義」でいいのかもしれない。

『燃える天空』

原作で「超鈴音」が使ったりした
今回は見方諸共撃ってきた。広範囲焚焼殲滅魔法

MM特殊任務騎士団＋α（魔法使い）
裏方。鎧は闇夜に紛れ月光などを反射しない艶消し処理された黒の
騎士甲冑を装備。魔法を軽減する耐魔法処理もされている。

ルクレツィア
重症。木星の護符があってよかった。
火星の護符で治療中
クレスの身を案じる

クレス
無駄に初イタイ（初々しくてイタイ）人

失う事への不安感が募る。
一人奮戦中。片腕が焼失した。回復に時間がかかる模様。

クレマンヌ
クレスの内側で静かに全てを見守っている。
現状に何を思い、考えているのか・・・

ちなみに内と外で人格交代の時にあるピキッやパキンッ、という音
は精神的に二人を隔てる『鏡面』を裏と表で一度割り再び作りなお
しているために発生する効果音のようなもの。

二人の間で壁となっている『鏡』を割らなければ裏を表へと流れ出させ投影出来ない。交代毎で『鏡』を割っては直すを瞬間に行っている。

意志（前書き）

初めに

今更ですが、この小説は所謂設定クロスと言われる成分を含みます。

定期更新です。足りないところは自分の脳内で補完してください。原作は当分先です。

以上

それでも見たい方はどうぞ

ホント今更ですね

意志

腕一本の刀一振りでは残りの敵に対処できるわけがない。
なら諦めるのか？ここで？
このまま彼女を残して？
それは、そんなことは……

《《あり得ない》》

内と表の声が重なった。

《諦めたりしたらドロシーにも本当の私にも怒られるよ、アテナな
んて泣いて怒るよ》

《ああ、それに私は彼女にここから出て世界を見て欲しい》
《いいね、向こうもこっちも見て回ろう》

《それに神木の発光が今年のはずだ》

《じゃあその為にはまず》

《《こいつらを倒そう》》

「時間を稼ぐならこれで十分だ」

残った腕を振る。

ひうんひうんひうん、と音が鳴る。

空気を裂くように、唸りを上げる様に空間を揺らす。

「来い。お前らの意図を、ここで断ってやる」

使える糸は片腕の指の分、五本。

腕が再生するのが先か私と向こうどちらの糸／意図が切れるのが早いか、それだけだ。

「今の音はなんだ？」

「何もないぞっ、オリジナルスペルの音魔法ってやつかもしれない」

「見えない攻撃と言うやつか、気を引き締める。敵は180万の賞金首だぞ」

「ああ、私は【不滅の音色】だからな、気をつけろ。ただしその頃にはお前たちは八つ裂きになってるかもしれないがな」

ひうんひうん、音が空気を歪ませる。

ぶっん

「え？つぐああああ……腕がつ、俺の腕が……」

後ろに控えた魔法使いの一人から悲鳴が上がる。

腕がない、と。

「くそ、じっとしてればやられるだけぞっ。動け、攻めろ」

「やはり引かないか、ならここより先に進む事は出来ないと思えよ。愚か者ども」

振るう意図は三本。

たった三本、されど三本。

複雑にぶつかり向きを変え撥ね絡まり解け動く。

縦横無尽に空間を走る糸は敵を捉え、掛け、縛り、括り、断つ。

腕、足、胴に首、手首に耳、鼻、様々な部位を欠いて敵が倒れる、それでも彼らは止まらない、味方の体を踏み越えてくる。

「どうなってやがる、何もわからない……」

バラバラとボトボトと体を削りジグザグになる者を見て怯む者は当然出てくる。

既に十人。その身を地に沈め後は結界に力を奪われ死に至るのを待つ。

残りの二本を後方の魔法使いに向ければ杖を、ローブを、手を、足を、同じように断たれ仲間の血に沈む。

ひうん。

ひうんひうん、音は止まらない。

びいん、と音が弾めば敵の体は動きを止める。

敵が倒れる事で結界が余剰に吸収した力を具現させる。

「な、魔力？なんだあの魔力はっ」

結界が余剰な力を魔力として、光として辺りを照らす。

詠唱の一節

至高の光の元に永劫の円環を与え

この効果は循環を示す。

即ち、得た力を私へと還元し私はそれを使用する。

そして放たれた魔力や気等の生命力が、倒れた敵が、再び結界へと回され私へ巡る。

これこそが『魂鎖す悪魔の檻』

その真骨頂である。

「私」という種族としての固有スキルであるらしい【復元・再生】は一時的に魔力が枯渇しても僅かずつ確実に機能するが魔力があるほど早いのは確かである。
ならこの状況は

「腕の再生が早まるのは道理だな」

既に八割復元され、魔力で繭のように形成されている。

ピンツ、音を残して糸が二本同時に切れる。

魔力強化をしたとはいえ試作品で鎧ごと斬ってではこれが限界と言う事か……

残りは三本。

だからと言って窮地に追い込まれたか？

それはない、まだ糸は残っていおり……

「私は死なない、いや死ねない。消えるのは常に敵だけだ。怪我など飾りだ、そうだろう？」

また一本糸が切れる。

それを無視し自分に言い聞かせるように、尋ねる様に告げる。

「タン・レスタン・アルター・アンタレス 雷精召喚 雷の槍兵
3柱」

雷精召喚で敵に食らいつかさらに必要な時間を得れば

腕はここに【復元】する。

「腕はなおった。魔力はある、気だって残っている。笛も出していない。そして何よりこんな所でもたまたなんてしてられない」

私は馬鹿か？いや馬鹿だ。

まだ全てを出し切ってもいなければ絶望などと言えるような状況ではない、なのに何故一瞬でも無理だなんて考えたりする。

「私はここで勝ち彼女と共に生きる、それでいいじゃないか」

後方、最後の魔法使いは糸と共に意図を切らせた。

残るはたった三人、だが一本では流石に残る全ての騎士を止め切れない。まず一人に抜かれ突っ込んでくる。

腕一本、先の自分を再現したかのように腕一本で長物の武器を支えて突っ込んでくる。

長物、長剣か？いや槍だ、槍、彼女を刺した奴か。

「ハアアアアアー！！」

歯を食いしばり刀を掴んで腕を振り上げる。

ガイン、甲高い音を立てて男をいなす。
その気迫、突進も加えた力にくらか態勢が崩れる。
二人目は足を断たれ地面に倒れこんだ。
最後は……

「ウオオオオオオオ——」

ほぼタイムラグなし、こちらの態勢は崩れたまま。
鎧は傷ついているが肉体的な欠損など大きな傷はない。
ここまで、まさに無傷と言えるその力量は凄まじいものであろう。

まさかこの状況下、無傷でたどり着くとは……

「オオオオオオラァ——ッ」

騎士甲冑、兜に隠された口からの雄たけびと共に剣を振りかぶる
早いっ！だがっ……！

「私は、私の幸福を得るっ！」

ギヤリギヤリギヤリと耳障りな金属特有の音を立て剣と刀がこすれ
合う。

そして

ギ————イン

瞬間の摩擦音と澄んだ音。

大胆にされど静かに刎ね上げられた首が一つ。

黒く長い髪をパラパラと撒きながら静かに宙に舞った————

意志（後書き）

「前書き」って、書いておけば読む人が減ると思った（
ついでに言えば行き当たりばったりの処女作

糸、ひうんひうん、びいん

音により振動し切断力を増す。拘束も可能。

未だ強度に問題あり。

曲絃糸、ではない。あえて言おう奏糸操そうしそうだと

それぞれの字を想、死と置き換える事で「死を想う」や「死を奏でる」他にも「死を操る」等の意味も持たせた言葉遊びっぽくもなっている一品

魔力、気を用いてるとは言え各指につき糸一本の使用が現在可能
人形300体とかいうエヴァさんなにそれ・・・

結界の真骨頂

自動結界維持に必要な魔力を補っている状態で更に搾取した魔力を
余剰分として集め光として顕現させ結界内で円運動を行わせる

魔力の光が環を成し術者へ還元する↓術者はそれを使い敵を蹴散ら
せば更に搾取、吸収量が増える↓光が増す↓術者へ還元する、を繰
り返す

搾取対象がいる限り運動し続ける

【復元・再生】

六話後書きにも【再生】とあるように出来るだけ元の状態に近づける
治療ではなく「元に戻す」

回復

この辺はある意味私の感覚と匙加減か・・・
辞書なんて知らない

クレス

ちょっと高揚気味、内面とはいえやたら喋る
幸せになりたい

体勢を崩された。プランD所謂ピンチで（r y

今更な魔法適性（暫定）

光・雷 $\geq$ 闇（影）＞氷＞風＞水＞火＞＞木＞地（石・砂）

音は把握、知覚出来る者なら最低限平等に発揮する

星は光の上位

魔神術式はこれの限りではない

思いの果て（前書き）

久しぶりにルビ使ってます
ちよつと無理やり感が。まあいつも通り脳内補完してくれれば

思いの果て

——イン

静寂。

長い黒髪をパラパラと撒きながら首が宙を舞う。

そして首が

地面に落ち

「やつ……」

やった。残った三人、誰もがそれを確信する。

パキン

何かが割れるような甲高い音が響くと同時に首はそこになかったかのように霧のように虚空へ溶け消えた。
そして

「やっぱり私達の勝ちだね」

明るく場違いな女性の声。

「え？」

足を断たれ地に倒れ伏す男が啞然と呟いた。

「流石のクレスも首を断たれたらその瞬間だけでも一応死ぬんだね」

そこにいたのは金糸の髪をなびかせて立つ一人の女だった。

「なにが……」

「初めまして、私はクレマンス。貴方が殺した男の内側の存在」

そう言って女はにこりと笑みを浮かべ

「一度とは言え【私】を殺した責任とってよね」

笑みと共にいつの間にか出したのか、極低温の刃で目の前の男を突き刺した。

何が起こったのかわからない、そんな驚愕の顔を張りつけたまま男は剣を取り落とし塵と消えた空間内を漂う光の一部となった。

「な、何だ貴様アアッ！」

槍を持った男はクレマンスを取りあえず敵と判断したのか、それとも今塵となった男の仇だと考えたのは分からないが彼女に向かってその槍を繰り出した。

「あなたは最後だから」

ひうん。

空気が震え

びいん。

張り詰める音と共に男は縫いとめられたかのように動きを止めた。

「何だ、これは」

その眩きを無視し。

「先に君だよ」

足を断たれ地に伏せながらも鋭い眼光を飛ばし続ける男に向くと

「バイバイ。解放『魔の釣り鐘』」

ゴーン、と重い鐘の音が上空から響くと同時に

「まさかディレイスペ——」

言葉をさえぎり

メキ、ミシ。

「ガあッ」

ゴーン、鐘の音が響くたびに

ぐしゃ、びしゃ。

何かが男に重圧を加える。

幾度目かの鐘の音が響いた時。

ついに男を押は潰しされた。

「貴様っ、よくも我が同士を……」

「同士も何も後はあなただけだよ」

女は微笑を浮かべながらも冷たい目付きでそう言った。

「く、この拘束を解いて正々堂々と勝負しろ」

「正々堂々？彼女を襲って宝具を奪おうとするような人が正々堂々？面白い事言うね」

「我々は正義の名のもとにあの魔女がもつ秘法を取りに……」

「どうだっていいよそんな事」

心底どうでもいいように笑みすら消してクレマン스는そう言った。

「それよりその槍が彼女を刺したんだよね？」

「そうだッ、この『魔崩の槍』コントリート・ハスターの魔法突破力を持ってしても強固な結界だった」

「へー『魔崩の槍』コントリート・ハスターの魔法突破力、ね。そう……」

血が付いている。と、言う事以外見た目ではわからないがそれが一度とは言え護符の加護を貫いたと言う事なのだろう。

「さあ、私を解放しろ」

「え？それよりその槍貸してよ」

答えを聞かず髪の毛を一本ひうん、と走らせ指を落とし槍を掴み取る。

「ッア、ア、ア……」

「持ってもよくわからないな、キーワード起動言でもあるのかな？」

「ア、指が、くそつよくも指を……」

「うるさいよ、何も言わないならもう死んでいいから」

奪い取った槍で一度貫くと同時に拘束していた髪を締め手足を断つ。
支えを失った胴が地に落ちる。

数度槍で突いたあと飽きたかのように槍を振るい地面に刺す。

「至近距離で使えるのはいいけど髪が汚れちゃうな」

《遊び過ぎだ、いい加減私に代われ》

「はいはい」

再び甲高いが響くとクレマン스는消え首を断たれたはずのクレスがそこにはいた。

「く……早く戻らねば。無事でいろ……」

周囲を一瞥し生存者がいない事を確認してから結界を解くと彼はもと来た道を駆け始めた。

「ルクレツィア……」

「あ、クレスさん。御無事で、よかったです」

微動だにせず宙を見つめていた彼女はこちらを振りむいた。
その顔にあった傷は護符の力で治っていたが血を失ったせいかい
つも以上に白く見えた。

「神殿の前で奴らは全員倒しておいたから安心しろ」

「そうですか、有り難うございます。すみませんが、体を起こすの
を手伝ってもらえませんか？」

「だが、無理をしては……」

「お願いします」

「……わかった。さあ、まずは手を」

彼女の前で跪き片手を差し出すが彼女の伸ばした手は私の手を掴む
ことなく僅かに逸れて宙を切る。

「お前、目が……」

「もう、ほとんど何も見えません」

「……そうか、少し待て」

彼女を抱き抱える様に体を起こす。

「っちゃ、びちゃぴちゃ。」

彼女の体か、服から血が落ちる。

認めたくないが彼女は既に血に浸っていると断言してもいいような状
態だ……

未だに意識が有る事が異常と言えよう。

「ありがとうございます」

「気にするな。お前の願いなら何でも叶えてやりたい」

そう言うとき彼女はほとんど見えていないと言うのに私の目を真っ直ぐに見詰め

「……私は、最近変わってしまったと自分でそう思います」

そんな事を言い始めた。

「よく笑うようになったよ、ルクレツィア」

一瞬呆気にとられるもののそう言葉を返すと彼女は静かに首を横に振り

「いつも、貴女の事を考えてしまいます。今は何をしているのか、今日は来ないのだろうか、そんなことばかりです」

「それは……」

「でも私はここを離れられませんでしたが、離れられない。それでも一緒にいたいと、ここから出てみたいと思ってしまう。矛盾します」

「私もいつもお前と一緒にいたいと思っていました」

「これが好きと、愛おしいと言うことなのでしょう……？」

「そうだと、私は思う」

「よかった、貴方の気持ちに私は答えられそうです」

彼女はそこで一度言葉を切って

「クレス、貴方が好きです愛しています」

力を振り絞り精一杯の笑顔を向けてくれた。

「私もお前を愛しているよ」

「はい、嬉しいです」

抱えた彼女の体から力が抜けるのがわかる

「全員倒した、と言う事はあの槍を見たとんですね。特殊な破魔の槍、あれのせいでもう私の後は生まれません、森との契約が失われました。だから、私の残った力を貴方に……」

「そんな事をしたらお前がっ……」

「そうすれば『大地の心臓』を扱う資格が、私が貴方の中で生き続けます。だからお願いします、私と……一つになってください」

「馬鹿者、そんな事を言われたら私が断れるわけないだろう」

「永久に貴方と」

「ああ、永久にしよう」

そうして彼女は口付けと共に私の中へと、とける様に消えた。

——残された森の加護が貴方に訪れます——

《クレス？》

「大丈夫だ。彼女は私の中にいる。さあ『大地の心臓』を取りに行こう」

結界を解いてしまったが為にほとんどの死体がそのまま残っているがそれを無視し神殿へと踏み入る。

彼女を当然の如く信じ、私は彼女が言っていた「予防線」を超える。

「さあ私の許に『無垢なる愛』タットヴァ・メッター」

大地の心臓はその姿を小さく変え私の掌へと収まった。

「ルクレツィア、私と共にあれ」

そしてそれを以前彼女が実演した時のように体へと押し当てる。
如何にも機械じみたそれは音もなく体へと吸い込まれた。

「これが、大地の心臓の力……」

体は活力に満ち、温かい力に包まれる。

「さあ行こう、終わりの時までどこまでも」

力の元を失った神殿と森はこれから時間をかけゆっくりと静かに朽ちて行くのだろう……

「守るべきものを失ったモノの末路か……」

私もいつか同じように朽ちるのだろうか……？

そんな事を思いながら私は再び歩き出した。

何の偶然か既に日付の変わったこの日は旧世界での神木大発光の日

二十二年前ドロシー・ホワイトがいなくなったその日であった――

――

思いの果て（後書き）

「流石のクレスも首を」

この人の性能と再生力では本来首が刎ねられても本当に死ぬことはなく、再生までの間前話の腕と同じように魔力の繭で覆われ一時的な機能停止に陥るのであるがクレマンスという代替を宿しているが為にこれを「死」と捉え強制的に姿を入れ代えることで即時行動できるようにと本能的なものが動いた。

入れ代わった事で強制的にクレマンスに情報が書きかえられ欠損は復元され疑似的に死んだクレスも復元する意味をなくし裏で自動的に元に戻された。

本当はもう少し説明が長くなるがカット

「私を殺した責任」

型月で有名な真祖様が言った言葉を引っ張ってきたもの
流石に自分が殺されるのを見るのは気分が良くなかった

極低温の刃

断罪の剣の事

『魔の釣り鐘』

解放、の言葉通り遅延呪文にのため詠唱がない

ランクとしては上の下程度

対象の上空で鐘の音を響かせる。対象範囲は最大で幅5メートル四方と狭い

鐘の音が一つ響くたびに装備を含めた「重さ」が倍になる（2・4・8・16と乗倍）

重さに耐えられなければ潰れて終わる

効果範囲から出た場合そこで中断されるがそれまでにかけられた重さは術者が意識を失うか、解くか、または自力で解除するかするまで持続する。

「まさかディレイスペ——」

ディレイスペル、遅延呪文。

十四話後書き通り。使いどころなどが難しく使う人がいないクレマンズが行ったのは正確には「疑似」遅延呪文である

裏側にいる間に断罪の剣と魔の釣り鐘を詠唱しておき表に出た時発動させた。姿まで入れ替わるため初見の相手なら完全に不意を突ける、ある種の必殺技的なもの。入れ替わる事が出来る事を知っている相手にとってはただの変則的な遅延呪文的な扱い

コントリット・ハスター
『魔崩の槍』

「Contritio」は砕く、破壊や後悔等の意味。

「hastā」は槍、主に投げ槍を指す。

どちらもラテン語。ちまちま羅和辞典引いたりぐる先生に助けてもらったりしました。文法的なものがあるかは知りませんが当て字と作中通り魔法を打ち消し破る力がある。効果が有るのは穂先だけ。

半永続展開の護符は一度貫いても再度起動するがルクレツィアの森林契約はその代ごとに一度だけ行われるものであるため彼女は加護を失った。

次代存在の誕生も当代の契約に含まれる、ある意味欠陥的な契約だった。

案が浮かんだ当初はもつと面倒な設定だった

奏系操

二十七話当初から説明にあるが髪の毛でも当然行える、が汚れてしまう。

『無垢なる愛』 タットヴァ・メッター

大地の心臓を手におさめるための合言葉
サンスクリット語。文法などは（ry

二十九話でルクレツィアが呟いた言葉でもある

ルクレツィア・シュトラハウト

「さん」を付けず名前を呼び、最期に愛を知った
その思いは大地の心臓と共にクレスの中で生き続ける
それを良しとした人

クレス

大事な人が必ずいなくなる。もはや呪い
大地の心臓により再生力、不死度が急上昇
首が刎ねた時切れた髪は当然元通り

クレマンس

笑みを浮かべたところで「無限」や「黄金」と呼ばれる魔女とかぐ
らい口角が吊りあがった暗い笑いを想像してくれば面白い

入れ代わった時ゲッハハハー！と某装甲悪鬼の大尉みたいに笑わせようかとも悩んだ

雲上の狼（前書き）

そう簡単に時代が進むと思ったか。そんなわけないよ

雲上の狼

大地の心臓を得て戻る道すがら魔槍を拾い上げるとその柄を叩き折った。

そしてそれを手土産にMMへ向かいわざわざ返却した結果賞金が360万Dpと成った後に私は旧世界へと戻ることにした……………。

あの日から既に半世紀以上。神木の発光数で言えば三度。それだけ月日、年月が経過した。

生き続けて既に百年以上。当然多くの人が死にそれに伴い滅びる国もある

日本では将軍が政権を握り鎌倉に居を据えた。真秀から随分近くなつた。

話によればその「お武家さま」は奥州の一大勢力藤原氏を討ったとかんとか。

大陸でも平原の民族が国を起こし勢力の拡大を行っている。「夏」はもうじき滅ぶだろう。

更に西へと目を向ければ十字軍は資金不足から街を襲い結果として

東ローマ帝国の首都コンスタンティノープルを襲撃、攻略した。
これにより一部帝国側の人間が亡命したようだが実質帝国を滅ぼしたと言えるだろう。

この事によってよ帝国領は割れロマニア・テッサロニキ・アテネ・アカイアの四つの国へとなった。

アカイア公国は実質ロマニアとテッサロニキの属国とも言えるので三つかもしれないが……。

世界は変わりつつある。国が消えれば当然国が起き、人は死にだけでなく新たに生まれる。

争いは無くならない、それはこの世界でも魔法世界でも変わらない事だ。

人が、生物が生きる上で争いは無くならないのだろう。

争いのない平和、次の争いまでが平和。

なら真に恒久的な平和とはどんな世界なのだろう、わからないがなんとなく気味が悪い。

そんな現実逃避染みた事を考えながらただただ雪を踏みしめる。

雪、空から降る氷の粒。

それが降り積もり一面の白、白い世界。雪原。

私と言う人外でさえ魔法が無ければ寒いと感じる、そんな場所。

天へ続く山、文字通り天山。

いくらか前までは西遼の国土だったはずだが今は平原の民、モンゴル国の国土だったか……よくわからないな……。

わざわざこのような前人未到の地にまで登山をしに来たわけではなく、

「どうでもいいが本当にいるんだろうな。いや、どうでもよくない

な……」

《いてもらわないとここまで来たのが無駄になっちゃうよ》

登山する事十二日。既に雲を下に見る事ができる位置。

当てもなく彷徨っている状態である。

どこから流れてきたのか「人狼」それを探してここまで来たのである。

もっと西の方で古代にそういう存在がいたなどと言う話や神話にも登場するが仮にも旧世界にそんなものが存在するか、と言われれば首を傾げせざるを得ない。

そんな存在である。

好奇心に負けた、と言えばそれまでなのだが……。

正直なところ何とはなしにクレマンズがどうしても、言うので探しに来た次第である。

歩き続けて数時間、唐突に温が下がる。

遠くで閃光が走る。

「稲光か……」

《え？》

雲の流れは……速い。

「……吹雪く前に寢床を探すぞ」

《ならさつき向こうに掘っても良さそうな雪壁あったよ》

「なら、そこにしよう」

良いのか悪いのか雪洞生活も慣れてきている。

《強くなってきてるよっ》

「わかっているが騒いでもどうしようもないだろう……。アレか」

予想より早く吹雪き始めて数分、確かに雪壁はあった。

しかし

《あ……》

「はあ……都合がいいと見るべきか、悪いと見るべきか……」

目の前には本来は銀か、くすんで鈍色となった毛皮に覆われた生き物が一匹。

一人と数えるべきか……？

《どっちでもいいよっ》

「しかしまあ、存在したじゃないか」

私の声が聞こえたのか、はたまた感でもいいのか、偶然なのか、
「ウウウウウ」

小さく唸りながらそいつはこちらを向き、

「ガアッ」

牙をむき出しに、爪を向け飛びかかってきた。

「ッ、早い」

咄嗟に出した小剣二本でなんとか受け止める。

「伊達に「狼」などと言う訳ではないと言う事か……」

「ガアアッ！」

「おまけに力も強いッ」

ギヤイン、剣と爪とは思えない音を上げながら受け流すと同時に蹴りを加え引き離し風上へ上がる。

手を振ると同時にひうんひうん、吹雪とは違う音が重く空を裂く。

「糸が重い……雪か」

吹雪く雪が糸に付着し重量を上げ猛烈な風が糸の意図を妨げる。

「純粋な力比べと言う事か……。それは苦手なんだがな……。『私言の散弾』」

放たれる不可視の音弾はそのほとんどを雪に防がれ狼男にはほとんど当たらない。

当たっても気にせず向かってくることから効果は期待できないらしい。

「チッ……奥義、二刀連撃斬岩剣」

小剣を刀へと持ちかえ岩を断つそれを放つが造作もなく避けられる。

「グルアアアアアー！」

単純な右腕の薙ぎ、ただそれだけで、
ピ、ピッ、はらり

掠った袖が裂かれ風に乗る。

「打つ手がないぞっ」

《魔法は?!》

「雪崩が起きればコチラとて無事ではいかんだろう！」

この状況、糸を確実に使える距離は精々1.5ft

一撃で倒せるような大魔法を使えば雪崩は必至、それ以前に詠唱も
許されるかわからない。

下級呪文は効果がないと見てもいい、なら中級呪文か……。

「いや、当たらないだろうな……」

射程内の斬岩剣を避けるのだ、直射等の融通が利かない呪文が多い
中級魔法は至近距離からでもない避けられる可能性が高い。

確実に向こうの方が力が強い、剣撃を避けられたとはいえ速度はそ
こまで変わらないだろうが負けていると考えるべきだろう。

固有能力なのか毛皮なのか魔法は効き難い。

「何なら奴に勝る……」

模索しろ、戦いに勝てなくてもいい、生き延びる方法を模索しろ。
どうすれば生きて前へ進めるか、それだけを考えろ。

《……生命力》

「なんだ？」

《生きる力だよ、再生力！傷ついても倒れない力。むこうにもあるかもしれないけど【大地の心臓】があるぶん負けないはずだよ！》

「結局力比べじゃないか……」

《だって……》

「……だが」

口角が上がるのがわかる。

私は今、

「笑っているのか」

《何で楽しそうなの……？目も反転してるし……》

「悪くない、そう言う事だろう？」

《私にはわからないんだけど……》

「ふっ、はは……ははははは————」

「ワオオオオオ————オン」

こうして化物同士による「力が尽きたら負け」という吹雪の中の戦いが始まった————

雲上の狼（後書き）

ひよ評価だと・・・怖、こっわっ
なんじゃそりゃあ・・・。と汗が止まりません
遂に1200年代。文字通り雲の上に狼。
別に何か捻ったりはしてないですが珍しく書いた時から題名はこれ、
と決めてました。

東ローマ帝国

本当に滅ぶのは二百年ばかり後

天山

祁連山。6500m級の山。山脈地帯。

ちなみに祁連は「キレン」と読む

山の天気は変わりやすい

人狼 年齢？

性別？ 種族 獣人？

俗に言う狼男、狼人間

ルー・ガルーやライカンスロープ、ワーウルフなどいろいろな呼び名がある。

狼特有の凶暴性に嗅覚等と攻撃力と速度を持つ。どうやら魔法が効き難いらしい。

基本的なスペックでは人間を遥かに凌ぐ

戦闘行為（雪山、吹雪）

雪は音を吸収するため音魔法との相性がとてつもなく悪い
糸は雨や雪などが付着することで思いのほか重量を増す

さらに強風が糸の操作を阻害する

大きな衝撃は雪崩を引き起こす可能性があるため大規模な呪文は使えない。

融通のきかない中級攻勢魔法

あまり出てこないが魔法の射手や精霊召喚のような用途を変えられる汎用性、上級呪文のような破壊力等がない。と思う

白き雷は前方直射、氷爆はたぶん有る程度小範囲の指定空間爆撃。
と、使えば幅は広がるかもしれないが・・・と言った感じ

『破音の鎚』も全包围可能とは言え指定方向にしか発生しない音の板設定ですし・・・

むしろ、だからこそ出て来ないのかしら・・・？

再生力

宝具同化の影響で原作エヴァンジェリンに並びそうな再生力になった
以前のように再生まで時間がかかる事が「基本的に」ない

クレス

高笑い。目が反転

人生初の殴り合いというシチュに燃えているのかもしれない

クレマンス

人狼に興味があった、ただそれだけ。情報の確度などは気にしてい

なかつた。
運が高いのかも知れない

奇策（前書き）

戦闘？ないよ

わかってるでしょう、私が戦闘シーン書けない事ぐらい・・・

奇策

「ハア———ッ」

互いの腕が、拳がぶつかり合い骨が軋みをあげる。

「グルアアア———」

時には爪で刺し決る。

吹雪の中、

黒衣の男と鈍色の獣人が死力を尽くしていた。

《右腕っ！》

既に何度目か、数えてなどいない。

ツシャ

嫌な音をたて右手の骨が碎ける。

僅かに繰り出すのを遅らせ治癒させる。

出来事は寸瞬とはいえ互いの攻撃速度を考えればこの一瞬だけは無防備に攻撃を喰らう。

この瞬間が、

「不愉快だ」

《そう言う問題じゃないよ……》

真っ白な世界で二人のいる場所だけがところどころ白を赤に染めていた。
吹雪が吹き荒れ雪が積もり続ける中で一瞬さえもその赤が消えることはない。

「ガァーッ」

突き出されるのは鋭く尖った爪。
捌けず決られ指が飛ぶ。

血を撒き散らし飛ぶそれは次の瞬間には吹雪に吞まれるように霞と消え血だけがその痕跡を残す。

手を見れば既に五指全てが揃っている。

指が、爪が飛んで、骨が折れても砕けてもすぐさま元に戻る。

治癒、再生ではなく復元へとその力をあげている【魔核・大地の心臓】の力。

それが不死性を底上げしている。

体に溶けているそれがドクンと脈打てばそれだけで全治する途方もない生命の息吹。

だが……、

《押されてる……》

冷静な声が響く。

相手の毛皮も紅く染まってきてはいる。

治癒速度も高くはない、むしろクレスに比べれば圧倒的に遅い方かもしれない。

それでも押されている。

《強度が違いすぎる……》

「……………」

身体強度、頑丈さ、耐久力その差が流れを人狼へと向けている。指や耳が飛ぼうが肩を抉られようが骨が砕けようが確かに治る。確かにそれは心強いが元に戻るまでもの僅かなラグ、それが差を広げていた。

いくら打ちつけても壊れない拳と壊れるが瞬後に完治する拳。

その一瞬にこの明暗。

絶対に相手の拳が壊れないと言う事はないだろうがいつ起こるかもわからない事を願ったところで意味はない。

体力が尽きれば倒れるしかない、そうなれば無様に転がるだけだ。それは許されない。

「何としても奴を先に寝かせなければ……」

《寝かせるってそんな……》

「《どうした?》」

《眠らせればいんだよ》

「《何?》」

《『眠りの霧』で眠らせる事が出来れば……》

「《あれは「霧」なんだぞ? この吹雪の中で発動したところで効果が期待できるとは思えん》」

魔力構成されているとはいえ霧という形をとっている以上凍ってしまいか吹き飛ばされるかが落ちだろう。

《んー……考えるから待って》

再び骨が折れると同時に彼女はそう言って静かになった。

なら私はそれまで戦うだけだ。

「ルアアア———ッ」

「ツアアア———」

ガン、と骨のぶつかる音と共に衝撃が空気を裂く。

やはり直接のぶつかり合いでは分が悪い。

なら……、

「流し捌けばいいのだろっ」

繰り出された左腕を弾き流すと同時に半歩前へ、更に迫る右の剛腕を左腕で絡めるように止め受け人狼の動きを止める。

「そこだっ」

左腕が戻されるより早く伸びた右腕の付け根、肩に伸ばした爪を突き刺す。

「ガアッ——」

呻くように戻し振られた左手が、爪が私の首を裂く。

プシャー——ッ

抜けるような音と共に放たれた血液が人狼と雪を赤く染める。

吹き出るたりするが当然直後に塞がる。が、腕は離してしまった。

「げほっ……。やってくれる、血までは戻らんだぞ……」

一般人に比べれば耐性があるとはいえ血を流し過ぎれば倒れるものは倒れるのだ。

僅かな空白。

首に手をあてるが当然傷は無く出た血は低い気温により既に凍っている、戦闘続行は可能。

どうやら向こうの傷も動きが鈍る程度で戦闘は続行らしい。

治癒速度が遅いと言っても時間をかければそれも治ってしまうだろう。

「やってられんど、まったく……」

肩を穿った結果の代償が一瞬の大量出血など流石に嫌気がさし早くしろ馬鹿者、と悪態が口を吐くが彼女は答える気がないらしい。

「ガアッ」

短い音と共に再び突っ込んでくる。

「しつこいっ」

咄嗟に組みあうが力比べでは勝てない。

「くそっ……」

強引に足を払い引きは剥がす。

血走る目を一瞬点にするとすぐさま転がり起き再び拳と爪のぶつけ合いとなる。

吹雪は強くなる。

既に相手しか見えないような状況だ。

まだ雪に埋もれず残っている血の跡を見るにそんなには移動してないようだ。

僅かに目を反らせば……、

「ぐあっ……」

お返しとばかりに肩を挟られる。

「は。なんだ、貴様だけ見てろとでもいうのか。鬱陶しいな」

始まった時と同様口が弧を描く。

「いいぞ、来い。悉く受け止めてやる」

嫌気がさしたとは言えこのような台詞が口を吐くとは存外未だに高ぶりは醒めていないようだ。

更に腕が折れ砕ける事七回、指が飛ぶこと四回、爪が折れ飛ぶこと九回。

その他もろもろ傷を負い続けてしばらく。

《できたよ》

やっとのことで彼女の声がした。

《なんとか体勢を崩して私を出して》

「《……できるんだな》」

《できなくてもすぐに復活するよ》

「《……了解だ》」

『仮想』とは言えもう『お前』を殺したくはないのだが……。

動きを止めるのは先ほど一度成功している。

再現するかのように左腕を流し右腕を受け、絡めとり動きを止め……、

「グラァアア——」

舐めるな、とでもいうかのような咆哮と共に再現を崩す反応と速度で左腕を、返す手首を振るってくる。が……、

「かかったな……」

びいん、

「ガウツ?!」

接触できるだけの距離。

今まで使わなかったその意図に気付かなかったのは当然だろう、なぜなら。

「切り札は最後まで取っておくものだ。出番だぞ」

相手の長い体毛は糸を通すのに役立った。

至近距離でしか使えない状況下、と言うのが逆に役立ったのである。

パキン、

「ッ!？」

「流石クレスだね『解放・試作型術式固定式（ぶつつけ本番）・眠りの霧』」

掌に魔力拘束力場を展開、本来霧状に拡散するはずの術を無理やり魔力流として留める。

そして相手の顔面へとそれを叩きつける。

バシユ———

叩きつけた衝撃で解放されたのだろう、眠りの霧が氷結し雪とは違う不思議な色合いの粒がキラキラと宙に舞う。

「ガ、アアア……」

人狼はゆっくりとその場に倒れた。

《ふう……もう殴り合いは懲り懲りかもしれん……》

意識の内とはいえクレスは溜息と共に目を閉じる。

「く、くくクレス……!」

そこへクレマンズの慌てたような声が届く。

《どうした?》

「こ、この人」

《ん、人?……おお、これは……助けるぞ。交代だ》

パリン、と再び入れ代わるとクレスはその身を屈めた。

「まったく、散々だな……」

そしてクレスたちは一人の「青年」を背負うと真秀等へ帰る為に下山、ではなく転移したのであった――――

奇策（後書き）

書いている本人でさえ良くわからない戦闘シーンですな

【魔核・大地の心臓】

取り込んだ事により同化

治癒速度の大幅な上昇をも齎しているがタイムラグが無いわけではない

復元レベル。即ち本来の状態に戻る。先天的に腕が無ければ再生どうこう以前の問題と言う事。

『解放・試作型術式固定式（ぶつつけ本番）・眠りの霧』

凄くルビにしたかったけどできなかった・・・

入れ代わりによる疑似遅延からの発生

本来放出されるはずの魔法を手に留める方法の文字通り試作にして本番

眠りの霧を留め「眠りの霧玉」にした

本来なら相手に直接撃ちこむものだがぶつかった衝撃で術式が壊れ一部が漏れてしまっている。改良の余地あり

原作ではここから「掌握」に続き「闇の魔法」へと至る

人狼

身体強度が尋常じゃない

人になった

意外と若いのかもしれない

クレス

瞬間的とは言え一方的にやられるのは趣味じゃない

以前からちよくちよく出血するが人間に比べて有る程度の量の出血は許容範囲

本来持つ再生能力と魔核は血の精製を加速させる事ならできる。が、流れた血を戻し無かった事には出来ない

食事（前書き）

一応ルビ使ってます
日常「的」な話

食事

天山での『面倒』な戦いから二日後。

連れ帰った青年は目を覚ました。

名前を王^{ワン} 雲狼^{ムンラン}

「いかにもそれっぽい名前だな」

「昔の名前は捨てたのさ」

雪山に入ったのは三カ月ほど前かららしい。

「食糧がなくなってからはホントに困った」

「下りれば良かっただろう」

「もう誰にも迷惑をかけたくなかったのさ」

見た目は十八くらいだが実際は五十を超える年齢だそうだ。

「気づいたら天山近くの村で、もうあの体で何が何だかサッパリ」

「その生まれなのか？」

「いや、記憶がほとんどなくてな」

彼はくすんだ茶色い髪をかきながら困ったように顔を下げた。

「ちなみに私は今年でだいたい百五十近い年齢になる」

「え？」

「不老不死身なのだ」

「は？ははは、は……、いや本当に有り難うございました。兄さん^{あに}には感謝してもしきれないと言うか……」

頭を下げて態度が改まった。

「王でも雲狼でも好きに呼んでください」

「それであの……姉さん^{あね}は？」

「ん？戦った時の記憶があるのか？」

最後に少し出ただけなのに彼女の事を覚えているらしい。

《姉さん、兄さんとか新しいねっ》

「いえ、意識を失う時に目覚めたって感じです」

「ふむ……《呼び方などどうでもいいさ》」

パキン、

乾いた音と共に姿が揺らぎ入れ代わる。

「おお!？」

「やあユン君、私はクレマンズだよ。いつもはクレスの中にいるの」

「あ、姉さんは兄さんで、兄さんは姉さん？て言うかユン君で……」

突然登場しいきなりあだ名を呼ぶクレマンズに幾らか狼狽する、にも関わらず、

「うん、二人で一つなんだ。それに好きに呼んでって言ったから」

クレマン스는マイペースを貫く。

「そうなんですか。有り難うございました。ああまあ、ウンでいですよ姉さん」

「いいよ、クレスの気まぐれで人狼探しが始まったみたいなものなんだし」

《気まぐれとはなんだ。それにお前の気まぐれで、楽しみにしてのもお前だろう》

「それはそうだけど……」

「はい？」

首を傾げ意識内の声が聞こえない者にとっては当然の反応を返す。

「あ、クレスからね、ちよつと小言」

「はあ……小言、ですか」

《あの時はどういう状況だったのか聞け》

「あの時、戦ってた時はどういう状況だったのかな？」

「記憶がないので何ともですが腹が減り過ぎて暴走した、ってところだと思います」

《ふむ、吸血衝動みたいなものか？何か……》

「何か食べたいとか飲みたいとかそういう衝動はあったのかな？」

「いえ、ただ腹が減ったって言うのが覚えてる最後ですね」

《飢餓感で暴走か。ふむ、なるほど》

「これからどうしようかなとかあるのかな？」

「あー、いえ特に何かしようって言うのは特に」

《飢餓以外で獣化する事があるのかどうかを……》

「お腹減った時以外で獣化することは？」

「意識すればできますよ？」

《苦手なも……》

「これは弱点、みたいな苦手なものはあるのかな？」

《……………》

「《他にはない?》」

《……………ああ、今のところない。わかってるんだろう……………?》

「うーん。ない、と思いますけど。意外と気にした事がないんでわからないです」

「そう。まあ当分は私たちもここに居るつもりだしゆっくりするといいよ」

「あ、有り難うございます」

《結界の……………》

「それとこの辺だけなら出歩いて大丈夫だからね。森の外はダメだから」

「わかりました」

《……………》

パキッ、

再び入れ代わり、

「少し出る。何かあればこの符を破け、すぐに駆けつける」

符を一枚渡し外へと出た。

見上げるほどの神木、その中ほどにある枝に腰かけていた。

《どうしたの?》

「ふと、あいつはいつまで生きるのだろうか。とな……………」

夕日に照らされた森はいつ見ても綺麗である。

《言ってる歳と見た目で言えば三分の一くらいかな？三倍……後百年ぐらいは生きられるんじゃないのかな》

「意外と百年なんてあつという間だったな……」

《私の意識だとまだ百年も経ってないけど、そうだね。あつという間かも》

「いつか別れるなら誰とも出会わなければいいと思ってしまおうよ」

《私がいるよ。偽物でも、私が、ずっといる》

「ああ、そうだな。有り難う」

《何言ってるの？まったく、らしくないよ》

「お前こそ『らしい』とは何だ。お前は私でもあるんだぞ」

《む、そう言う事言うの？せっかく慰めてあげてるのに》

「慰める？傷のなめ合いだろう？」

《あー、酷いなー。そう言う事言うんだ、もう何もしてあげないよ》
「あ、いやそれは困るぞ、悪かった。機嫌をなおせ、お前がいないと困るんだ」

《はいはい、分かればいいんだよ》

「はあ……すまない、助かる」

《いいよ。私の、クレマンスの役目だよ》

「……戻ろう。あいつの、ユンの事も考えなければな」

《うん》

そして訪れる沈黙。だが決して嫌なものではない。

しばしの間ただ夕日を眺める。

そしてその日を背に枝から落下するように飛び降り短い帰路へとついた。

「これは、兄さんが作ったんですか……?」

一通り並んだ料理を目の前に奴はそう言った。

「そうだが? 文句があるなら食べるな」

「いえ、いえいえ。そんな文句だなんて。ただ意外だったもので」

「ふん、一人の時間が長いからな。必要に迫られての慣れだ」

「そうですか、クレマンズの姉さんとか他に知り合いがいてもおかしくは……」

「クレマンズが作ったところで私と大差はないし知り合いはあまりつくらないようにしているからな」

「あ、……そうですね、すいません」

「いや。いいからさっさと食べ、冷めるぞ」

「はい、では有り難くいただきます」

東の人間だけあって箸をちゃんと使えるようだ。

私もドロシーも箸に慣れるのに十日は費やしたのを懐かしく感じる……。

「美味しいです……って、どうかしましたか?」

ふとガツガツと食べていたはずのユンが聞いてきた。

「家で誰かと食事をとるのは何年振りか考えていたのさ」

「これからはここに俺がいますって。俺もやっぱり一人より誰かいた方が嬉しいですし」

「ここにずっといるのか? 構わないが私はほとんどいないぞ」

「え？あーなら俺も一緒に行きますよ」

「まあ……《いいか？》」

《もちろんだよ》

「ふふ、いいぞ。世界はなかなか面白いんだ。何処までも行く、だからついてこい」

「はいっ」

威勢よく返事をするユンは再びかきこむように食べ始めた。

「《魔法世界に連れて行った時の反応が楽しみだ》」

《驚くだろうね、クレスが賞金首って知ったら》

「《あまり動く気はないからな、お前に任せる》」

《うん、任せて。楽しくなるよ》

「《平和ならそれでいいさ》」

目で見て話せる相手が食卓にいて一緒に食べる事ができる。そんな些細な事を幸せだと思いながら森の夜は更けていった――――

食事（後書き）

人狼が狼狽とはこれいかに・・・
別に上手くないですね、はい。出来心でした。

王 雲狼（ワン・ユンラン）

人狼 年齢 見た目は一八程度

実年齢は五十五前後 見た目の三倍程度

あだ名は「^{あに}ユン」クレマンス命名

クレスを兄さん。クレマンスを姉さんと呼ぶ。^{あね}

年上には敬意を表し義理難いという今までにいないタイプ

人の姿でも人間を超える身体能力を持つ。当然獣人化した時の方が上昇する。

飢餓感から暴走し獣人に、意識してでも可能

毛皮は下級レベルの魔法なら打ち消す程度の魔法減退効果がある。

その強靱さが射なら毛がからみ、斬なら滑らせ、打なら層が衝撃を緩和するため、それぞれ物理減退効果をも発揮する

爪牙も強化なしで薄い鉄を断つ程度に強力

毛皮の色に反して髪は茶系色

基礎スベックなら主人公より強い人

クレス

台詞をクレマンスにとられた人

ちよつと落ち込みが入った

日本に来てからドロシーと「みっちり」十日間箸使いの練習をしたことがある

クレマンス

あだ名をつけた

仮想人格としての役割をはたしている様子

面影（前書き）

そうだ、現状を維持してくれれば・・・

一応ルビ使ってます

面影

王　雲狼が山を下って八年。

真秀に滞在で一年。

旧世界を巡る事五年。

魔法世界に入って二年、計八年である。

魔法界、ヘラス帝国首都近郊。

「あ、姉さん。^{あね}あれはなん、です……？」

そう言ってユンが見つめる先にいるのは体長65ydはあるだろう
強大で金にも銀にも見える毛並みの虎が体を横にし寝ている。

「帝都守護聖獣の一体『琥坤』^{スタラム・ヴァーグラ}だね」

「い、一体ってことはあんなのがまだ他にもいるんですか？」

「少なくともあと鳥、亀、龍の三体はいるよ」

「魔法世界ってとんでもないですね……、ははは……」

顔が引きつるのを隠そうともせずユンは乾いた笑いを浮かべた。

その姿を横目に見つつクレマンスは相変わらずのペースで、

「そうだ。これつけてみて」

何事も無かったかのようにユンを無視して彼女は革製のブレスレッ

トを取り出した。

「腕輪、ですか？でもなんで……」

「まあ、いいから着けて」

「はあ……これでいいですか？」

《聞こえるか？》

「うお！？兄^{あに}さんの声だっ」

「大成功だね」

「この腕輪ですか？凄いですね」

「念話、意識通話の応用だよ。近い距離しか使えないけどね」

《その腕輪を介してるからお前から可能なはずだが外の音は元から聞こえているからお前が使う事はないだろう》

「流石伝説の賞金首ですね。で、何やったんです？」

「……………」

「あ、いやその……」

《追われたから殺して、守りたいものを守るために殺して、殺し続けた、ただそれだけだ》

「すいません……」

「いいよ、事実なんだし」

「あー、それで何でここに来たんですか？」

「あれ、吃驚したでしょ」

あれ、と遠くでその巨体を横たえ寝ている琥坤を指す。

「そりゃあもちろん……て、そのためですか？」

目的は観光。

「ちょ、え、本当にそれだけですかっ？」

《くく……ああ、そうだ》

「そうだよ？」

クレスの笑い声とクレマンスの笑顔が重なる。

「ひ、酷い……」

「まあでもこの国は亜人の国だからユン君が生活するのにも楽な場所だと思うよ」

「そうかもしれないですけど……。いや、そりゃ有り難いですよ？でも……」

「私は基本アリアドネーにいるからね、じゃあ」

《そのうち訪ねて来い》

「え？何言って、って……えー……」

既にクレマンスの姿はそこに無かった。

ちなみにユンがアリアドネーを訪れたのは二ヶ月後だった――

「しかし見事に碌なものが残っていないな」

【不滅の音色】 【黒の奇想曲】 カプリス 【魔島の主】

他にも魔王だ魔人だ何だと言われているがその魔王の根城。

エルジウム大陸ケルベラス大森林の北、海上にある孤島。
そこに当の魔王は五十年以上ぶりにそこを訪れていた。

《人が来なくなっちゃったんだからしょうがないよ》

「予定通りではあるがこうも何もないとな……」

《ほとんど食べられちゃったんじゃない？》

「ああ、それはありえるな……。少し魔獣を減らすか？」

《それもいいけど先に結界なおしたら？》

上空を超えようとした者がいるらしく当時まだ試作段階だった『魂鎖す悪魔の檻』は壊れてはいないがところどころ破れ綻んでいる。

「張り直したのはいいが出力が上がってしまつては余計生存者が出ないような気がするが……」

《その程度って事で諦めたら？》

「む、そうか？……そうだな、破った者も城までは来ていないようだし、飛竜に食われでもしたのか……」

それもそうか、と深く考える事も無くクレスは結界を新しく張り直すのであった。

渦が巻き嵐が吹き、荒れ狂う海を超え上陸したら問答無用で力を抜かれ続け、魔法による森の迷宮には魔獣が蠢き待ち伏せる。

それを超えて城までたどり着ける者が、仕掛けた自身でさえ面倒と思うそれを超えてくる者がどれだけいるのか、と言う事を二人は理解していなかった……。

「指輪型の発動体が二つ、杖剣が七本、騎士剣が六振、弓が一張り、一式揃った鎧が一領、バラバラの具足が沢山に中身のない袋が三枚……」

適当に島内を歩き回り拾い集めた物の結果である。

《どうするの？》

「……売ろう」

《え？》

クレマンズの唾然としたイメージがクレスの内を巡った。
結果、北由来の物は南に、南由来の物は北に、装飾などで見分け売りさばくことにした。

ヘラスでは文句を言いつつもしつかり手伝うユンのおかげで問題無く売る事が出来た。
だが、事が起こったのはふと立ち寄った懐かしきオスティア、そこだった……。

昼下がり、商業区は人通りの絶えない日常。

広げた露店、その前を被ったローブを風で外された女性が一人。

「アテナ……？」

クレマンズが呟いた。

《何だと？》

私の声にクレマンズが少し顔をそむけるように下げる。

「アテナが……」

《あいつはもう……》

「お主、今私を見てアテナと申したか」

その声にはっ、と顔を上げる。

「あ、いえその……」

《アテナ？ いや、目の色が逆だ……》

「って、王族がっ……」

「おっと、すまんの。今は護衛から逃げてる途中なのじゃ」

まったく謝る気などなさ気に笑顔で彼女は手をこちらの口に当て塞いだ。

「よいか離すぞ？」

こちらが頷くのを確認すると同時に口から手が離される。

「それで、お主は高祖母を知っておるのか？」

「えっと……」

《話さなくて……》

「不本意じゃが警備に突き出してもよいのじゃぞ？」

《アテナより性質が悪いだど?!》 「アテナより性質が悪いよ?!」

「あ……」

「むふふ。アテナ様より性質が悪い、のお？ふむ、普通なら不敬罪で打首にするところじゃが……？」

こてん、と可愛らしく僅かに首を傾げているがその顔にはニヤニヤとした笑顔が広がっている。

「うっ……《どうしようクレス》」

《とりあえず店仕舞いだ。上手く宿に戻るしかない》

「《了解だよ》」

「なんじゃ店仕舞いかの？そうか、部屋でゆっくり話そうと言う事じゃな？」

皇女は目をキラキラさせウキウキとしまう手伝いまでし始める。

「失礼しますっ」

「あ、待つのじゃ」

終わると同時に駆けだし路地へと入る。

「待つのじゃ、指名手配にするぞ」

護衛のことはいいのかそれとも忘れていいのか声を上げ必死に走って追いかけてくる。

《く、嫌な予感がするぞ》

オスティア

フードの人物

裏路地

オッドアイの王族

まるで九十年以上前の焼きまわしだ。

なら抜けた先には兵士が……、

「あそこが出口だよっ、どうするの？」

《そこの横道に入ってやり過ごせ》

表通りへの出口手前、横道へと咄嗟に身を隠す、が、

「待つのじゃー」

奥から声が響いてくる。

《《あの女……》》

同時に同じ言葉を呟くと、

「どこにいつ——んぎゃ」

目の前を通る瞬間手を突き出しこちらへと引き込んだ。

「何が……」

「静かにっ」

「んぐっ」

これが後にも先にも唯一「小さい音量で怒鳴る」という無駄な技能を得た記念すべきでない瞬間だった——

面影（後書き）

自分でも何コレ、的な展開になってる

琥坤

古龍・龍樹と同じ帝都守護聖獣

正確には神虎・琥坤

分かる人にわかる様に言うと毛色が違うバイフーモン

ヴリクシヨ・ナーガシヤ
龍は龍樹、あと亀と鳥がいる

久しぶりに出た単位、ヤード。体長60m程度

革の腕輪

クレス、クレマンス間の会話は通常の念話とは違う為他者は本来なら会話する事が出来ないがそれを可能にするもの

有効範囲は僅か数メートル

革製であるが様々な呪じゅが刻まれた謹製である。

王 雲狼

通称ユン君

イジられ役？

主役でないオリキャラの出番がないのはこの作品の定番

王族少女

アテナの子孫らしい

アテナとは目の色が逆で彼女よりも性格が悪い

クレス

事実自発的に事を起こした事はない

「売ろう」とか普通に言うあたり結構ずれている人
厨二っぽい二つ名が・・・

クレマンス

貫くマイペース

虚実

ウェスペルタティア王国アイナ・イエルネフェルト・エンテオフュシア。

「王女殿下、ですか」

「そうじゃ。さあアテナ様の事を話せ」

《先に『クレス』の事を聞くしかあるまい》

「……まず先にクレス、クレス・エルレイアという人物を知っていますか？」

「なぜじゃ」

「え？」

「なぜその名を知っておる？縁者か何かか？」

驚きながらも訝しむようなそんな目で彼女は私を見る。
性格にはクレマンズだが。

「似たようなものです。彼の事をどこまで知っていますか？」

「ふむ。詳しくは知らぬ、ただアテナ様の良き友人であったと伝わっている」

「伝わっている？」

「そうじゃ。当時あった『王女誘拐未遂』が起こる前に出会ったのだとな。客人として招き入れ、とても

よき友となってくれた人物、だそうじゃ。王女だけに伝わる話じゃがの」

「王女様だけに？」

「うむ、なんでも次の王女、次代を担う子にその話を言い聞かせているそうじゃ。本当に信の置ける良き隣人を、困難に立ち向かう為に力になってくれる人物を探し、得る事の大切さを母が教えてくれる。まあ、魔法使いと従者のお伽噺のような話じゃな」

友だ、と言って別れたがまさかそんな事をしてるとはあのじゃや馬王女め……。

「そう……ですか。彼について他に何か知ってますか？」

「ん？縁者か何かなのだろう？何故聞く」

「あ、いえ、それは……」

「それは？」

「一つ、彼は自分がいなくなったあとの事を気にしていました」

《おい》

「ほうほう、それで？」

「秘密にするという事だったので彼女、アテナ様が自分の事を誰かに言ったりしてないか気になったようです」

《お前……》

「なるほどの……。しかし聞いてどうする、随分昔の話じゃ、そのクレス殿はもう……」

「信じられないかもしれませんが彼は生きています」

《おいっ》

「なんとっ、……生きておるのか？」

椅子を倒さんばかりの勢いで彼女は身を乗り出した。

「事実です」

クレマン스는動じず冷静に返す。

冷静に返されたせいとその言葉を聞くとアイナは静かに椅子を戻し

考える様に座る。

「ふむ……。その話、信じてもいい」

「え？」

「母も、祖母も信じておらんかったし妾もろくに信じておらんかったがアテナ様の話しによれば彼は不死である、とされておる。彼の事を語り縁者を名のるお主がまだ生きている、と言うのなら」

信じてみてもいい。そう言って彼女は真っ直ぐに目を向けると、
「会えるのか？」

強い意志を持った瞳と口調でそう言った。

「……………」

考える様にクレマン스는沈黙する。

「おい……………」

再び王女が身を乗り出したところで、

「彼は今……………」

「む……………」

「彼は今……………罪人、犯罪者です」

「な、に……………」

ストン、と力が抜けたかのように椅子へと身を戻した。

「事情。そう、とある事情で貴女に危害を加えることはないと確約できますが……………。会いたいですか？アテナ様が信じ、今では罪人となった彼に？」

「そ、れは……………しかし……………」

その事実が衝撃的だった。

先祖が信じ今にまで伝えられる男が、お伽噺のようなその存在が生きている。それだけならいい、だが今は罪人。

生きていた事は驚いたし嬉しい、だがしかし……。

いや、まで……、

「事情と、危害を加えぬと言う保証はなんじゃ」

「言えません」

「なぜ？」

「言えません」

「まさかお主は……」

「違います。言うのもなんですが私は罪を犯したことなど、まあ……ありません」

仲間ではないが縁はあるか……。ならば、

「居場所を知っているのじゃな」

「居場所……それは知りませんが彼を呼ぶ事は出来ます」

召喚するとか……。？

「契約している、ということか？」

少し考えるようにして女、そういえば名前を聞いてもいない。

「そういう手段がある、と言う事です」

「ちっ……」

思わず舌を打ってしまうが解からぬ、どうなっている。
これでは……、

「ここで断ればもう出会う事も無いのじゃろう。なら会うしかない
ではないか……、だが……」

「契約用の魔導具を使っても構いませんよ。そんなことをしなくても
貴方の身は保証しますが」

「……わかった。それで何時？」

「こちらは今すぐでも構いません」

当人の了承が既にあるのか……？

何かを持ったり装飾があったりはしない、念話などではないのか
……。

やはり解からぬ。

「ああ、今すぐでよい。好きにしろ」

「何を見ても声を上げないでくださいね？」

「ん？わかった。心得る」

「では……」

そう言って女が目を閉じる。

パキン、

何か割れるような軽い乾いた音、それと同時に、
「なっ——」

姿が歪み思わず声を上げる。

その瞬間に口に手が当てられ塞がれる。

「んんっ」

緑の目でこちらを見る黒髪の男が目の前にいた。

「声を上げるなど言っただろう、まったく……『解放・封陣音鎖』」

呪文を発動させつつそう言う男、クレス殿？は口から手を離し椅子へ座りなおした。

「お、お主がクレス・エルレイア殿で間違いないのか、本当に？」

「ああそうだ。まあ、今は違う名前だがな。で、アテナの話でもすればいいのか？とりあえずお前は目の色が左右逆なら見た目は彼女そのものだよ」

「そ、そうなのか。そう言えばさっきの女は……というか妙に馴れ馴れしいな、いやその前に魔法使わなかったか今。じゃなくて罪人と言うのは……」

「少しは落ち着いたらどうだ？とりあえず順番に話せ」

「う、うむ。そうじゃな、うん。えっと……」

な、何から聞けばいいのじゃ……。

「はあ……さっきの女はクレマンズ。もう一人の私だ。私の裏側であり表。表裏一体の存在、二人で一つ、それが彼女」

「二人で一つ？」

「そう、今も私の中でこの話を聞いているよ。入れ替わる事で互いに行動している。だから私は罪人だが彼女は違う、意識を共有しているにすぎない」

「な、なるほどの。わざわざ連絡など取る必要がないということか……。なら次に、ふむ、今さっき使った魔法は何じゃ？」

「お前が騒いでもいいように、音が外に漏れないようにした」

もう騒ぐような事もないと思うのじゃが……と言いかやはり……、

「馴れ馴れしいのう」

「アテナが敬語を禁止と言ったんだ、やめないと牢へ入れると言われもした。もうウェスペルタティアの王族を敬う気などない。意味もないからな……」

「ん？意味もないとはどういう事じゃ？」

「言っただろう、私は罪人だと。こんな事でもなければ会う事もないしな」

「ああ、それか。で、お主は何をしたのじゃ？場合によっては……」
「私には表向きの賞金首としての名前があつてな。それを聞けば嫌でもわかるさ」

「む、無駄に自身たっぷりじゃな」

「ふん【不滅の音色】 【黒の奇想曲】 【魔島の主】 一つくらい聞いたことぐらいあるだろう」

「な、馬鹿な……アテナ様の客人であるお主があ的事件を起こしたというのか……【夜統べる王】」

「そんな名まであるのか、ふむ……」

「ふざけるな！お主が、クレス殿が最悪の賞金首だと言うのか！」

妾を馬鹿にするのもいい加減にてもらいたいのだが……。

しかし……、

「そうだ私がお前の言う最悪の賞金首ファーガス・フェイタラスタだ。これを見ろ」

そういつて彼は何処からともなく光と共に一本の笛を取り出した。

「笛？いやしかし、その横笛は……」

「公にはされていないが、お前なら知っているだろう？ファーガスがその事件の時に奪ったとされる王家所縁の物だ。私は吹けないか

らお前が、とアテナから譲り受けた」

確かにそれは王家の印が刻まれ未だ行方が知れない物と一致する。

「しかしそれが……」

「これが現実だ、認めろ」

縫る事を許さないクレス／ファーガスの言葉は冷たく彼女に突き刺さった――――

虚実（後書き）

アイナ・イエルネフェルト・エンテオフュシア

ミドルネームが思いつかなかった結果某白い閃光のオペレーターになった。

なので原作アリカにアスナや過去話のアテナのように何かしら意味があるわけではない、はず
しかしこの三人どれも碌な意味じゃないような・・・

『王女誘拐未遂』

事件名が思いつかなかった

アテナとの別離した時の事

ファーガスという賞金首がうまれた原因でもある

「王女だけに伝わる話し」

文字通り王女だけに伝わる

美化されたアテナの思い出話

クレスとファーガスは当然別人となっている

好奇心から街へと出た王女が旅人と出合い客人として招き入れる
（中略）

そして別れを惜しみつつ旅人は再び旅路へと戻った

という話し。文字数にしたら五百もいくかわからない短いお話し

『解放・封陣音鎖』

内から外への音の流れを遮る密談用結界
本来は無詠唱でも可能

クレス

実は厨二っぽい二つ名が他にもあった

クレマンス

公には、という言葉が付くが確かに罪は犯していない
露見しなければいい、という「悪」の見本のようなものである

温かき別離（前書き）

これから先、これまで以上によくわからない作品となって・・・

温かき別離

ウェスペルタティア王国は首都オスティア。

変哲のない日常、その街中にある幾つもの宿屋の中の一つ。

そこに犯罪者と王女が二人つきりと言う異色の光景があった。

王女、アイナは愕然とした気持ちでありながらただ考える。

どうして、何故彼が？

アテナ様の友人ではなかったのか？

なんで離宮を襲撃して攫おうとした？

笛は貰ったと言った。公にはなっていないが略奪されたとの見解が
されている物だ。

何を信じればいい？

今まで伝えられるクレスという人物はお伽噺に出てくるような優し
くて、いつでも助けてくれるような人物なのに……。

目の前にいる本物は最悪の賞金首で嘘みたいに冷たい。

妾はどうすればいい。

教えてくださいアテナ様……？

沈痛、ともいえる静寂が空気を占める。

それを破ったのは、

「……彼女は」

原因であるクレスがそうきりだした。

「彼女は強く、明るく、温かだった」

それは優しいながらもどこか遠くを見るそんな色のある瞳だった。

「私があいつと一緒にいたのはたったの十日ほどだったが彼女は精一杯戦っていた。守るべきものを守るために考えて選んで勇気を出して事を行っていたよ」

「……守るべきもの？」

悩むように下げていた顔をアイナはゆっくりと上げそう聞き返した。

「国は人、即ち民さ」

何かを懐かしむようにクレスはそう言った。

「国は人……」

「わからなくてもいい。……不死と言う時点でわかっていると思うが私は純粋な人間ではないし、理由はどうあれ旧世界では既に罪を犯していた。私が傍にいる事は彼女にとって害にしかならなかった。だから……」

「だからなんじゃ？それがどうアテナ様を攫う事に繋がるのじゃっ……！」

「……当時の宰相ヨハネス・ラグラスは彼女の政敵だった。私と言う存在がいるのは彼女の弱点だった、弱点でしかなかった。だから、袂を分かつ必要があった」

先ほどとは打って変わってクレスの瞳は何の色も映そうとはしない。

「彼女に相談はしなかった。良い意味で彼女は素直だったからな……」

軽く目を伏せながらそう言うのと優しく指で笛を一撫でしつつクレスはアイナに背を向ける様に窓の方を、外を向いた。そして背を向けたまま、

「次に会う時は処刑台、さらば良き友。願わくば無事に生き抜く事を」

呟くように、だがはっきりと通る声でそう言った。

「なんじゃそれは？」

「もう会わない事を誓った別れ際の言葉だ」

「……お主は」

さて、とアイナの言葉を遮る様にクレスは再び向きを変え元に向かい、と向かった状態へと戻った。その顔には小さくも不敵な笑み。

「私を捕まえるか？」

「……できるわけがないじゃろ。ここでお主を捕えるなどアテナ様のお怒りを受けそうじゃ」

「そうか、ふむ……」

溜息を吐きつつクレスは笛を消し、

「これを持っている」

アイナへと小さい指輪を投げた。

「これは？」

質素な指輪だった。

台座にエメラルドを載せたただけであとは裏側に何か文字が彫られている、それだけの指輪。

「ヘラスにいる友にくれてやるつもりだったがお前にやる。何かあった時に台座の石を砕け、助けに行つてやる。リングは目印だ、手放すんじゃないぞ」

「そ、そんな……よいのか……？」

「古き友の、親友の好だ。偶然とはいえ出会った親友の子を、子孫を見殺しなどしないさ。ヘラスの友には新しく作ればいい、そいつは亜人で長生きなんだ」

「クレス、殿……。すまぬ」

指輪を握りしめながらアイナは頭を下げた。

「なぜ謝る？」

「妾の力では貴方様の賞金を取り下げる事が出来ぬ」

「そんな事は最初からわかっているし、覚悟もある。私が選んだ道だ氣にするな」

「う、うむ。しかし……」

「こういう時は謝罪ではなく感謝をするものだ。それにそんな軽く王族が頭を下げるものではない」

再び遠くを見る様な瞳で彼はそう言った。

「クレス殿……。ありがとう」

「氣にするな。もう城なりに戻って酷く叱られろ」

「んぐっ……そうじゃった。助けてくれぬか？」

「馬鹿か貴様」

「馬鹿とはなんじゃ馬鹿とは」

「自分で抜けだしておいて私に助けを求めるなど本当にアテナにそ

つくりだ」

「なに、それはどういう……」

その言葉に応えることなくぴしりと亀裂音が響く。

「あ、お主は……クレマンズ、だったか？」

「うん。それでいきなり交代してごめんね。後に三日はいるからね？」

アテナとの目線を合わせるためかクレマンズは膝を曲げつつ頭を撫でる。

「子供扱いするなっ」

《子供だろう》

「む、今の声はクレス殿っ」

「指輪の機能だね。ある程度の距離なら念話の要領で話せるから」
「なるほどの。わかった。何としてももう一度来るから首洗って待ってるのじゃぞ」

《あとをつけられるなよ小娘》

「わかっておるわっ、小娘って言うなっ」

そう言い残しアイナは扉をボタン、と閉じて出て行った。

「ユン君に新しいの作らないとね」

以前渡した念話機能しかない腕輪に替わって緊急信号と位置を教え
てくれる機能も付け加えた指輪
予備がまだないそれをアイナに渡したのである。

《面倒だがしょうがあるまい。あの小娘が悪いのだ》

その途端、

《小娘って言うでないっ》

声が響き届く。

「まだ近くにいたのね……」

《ちょうどいい、明日は予備の指輪をつくる為にここにいないからな》

《む、まあ明日は妾も監視が厳しいじゃろうからな。心得たぞ》

それっきり彼女の声は聞こえなくなった。

それから二日後の昼過ぎ、クレマン스가アリアドネーから持ち出した本を読んでいると本当にアイナは訪れ、
「さあ話すのじゃ。お主とアテナ様の事を、包み隠さずに。でなければ兵を呼ぶぞ」

これまたアテナと同じような事を言いだした。

路地裏の出会いから城に招かれた事。

アテナとそれに近い人間しかクレスの滞在を知らなかった事。

互いにいろいろな話をしあった事。

そして宰相の企みから事件を起こし別離した事。

それらを見事に第三者視点で話してみせた。

クレマン스가、である……。

「しかしなぜクレス殿が出て来て話さぬ」

「恥ずかしいんだよ」

《おい》

「なんと、それはまた意外な一面じゃな」

《はあ、好きに言え。ただ言っておく》

「なんじゃ？」

パキッ、つと音を響かせ現れたクレスはアイナの頭に優しく手をのせながら、

「達者で暮らせ。もし指輪を使ったら新しいのをくれてやる。だが滅多な事では使うなよ」

「クレス、殿……？」

「会わない事が一番なんだ。ではな、アイナ姫『次代の子よ』」

アイナの頭を一撫でしクレスは光に包まれる。

「クレス殿っ、その……えっと……ありがとう」

ふっ、と軽い笑みを浮かべクレスは消えていった。

《あれでよかったの？》

「何がだ？」

通称【魔王の城】そこにクレスの姿はあった。

《んーん、何でもない。それより後でユン君に新しい『腕輪』渡しに行かないとね》

「ああ、完成するまでお前は寝ててもいいさ」

本来の目的であるユンの分と指輪の予備を作ろうとした際「ユン君には指輪より腕輪のままがいいと思う」というクレマンズの言葉により腕輪へと変更されたその製作、仕上げにかかるのである。

《うん。でも、もう少し起きてるよ》

「そうか。……伝えたい事は伝えられたと思っている。だからあれでいい」

《そっか》

「そうだ」

ふとクレスはクレマンズが笑っているのを感じクレマンズはクレスの口が小さく弧を描いているのを感じ取る。

普段と変わらない作業風景。

ただ今日のそれには普段よりも僅かに暖かい雰囲気が確かにそこにあるのであった――――

温かき別離（後書き）

何だろうこの話・・・

まあこんなところまで読んでる方は例の如く各自で補完してくれるでしょう

ごめんじゃなくてありがとうだ、と言ったのはどこのシェリダンめ組だったか・・・

『次代の子よ』

この台詞後からの発光（発動）↓転移

原作、ネギVSタカミチ戦のキーワードによる特殊遅延による呪文発動

原作と違って「解放」の言葉が無いのは演出だと思ってください

アイナ姫

国は人、をなんとなく理解している程度

位が高いにしては頭を下げられるイイ子に育っている

どこかアテナを思わせる言動が目立つ

最近街で知った「首を洗って待つ」が使いたかった

指輪をもらった。

『エメラルドが載った指輪』

緊急時に台座の石、エメラルドを砕くなり割るなりする。

緑の宝石は潜在的にクレスの目があるぞという意味を持ち、それにより効果を増している面がある。砕く、割ると言う行為もクレス、クレマン스間の交代時にある精神の揺らぎ模している。

これがクレスへの緊急信号となる仕組み
台座、ないしリング自体は作中通り位置の特定をするためのもの。
ユンには腕輪型

クレス

実際のところ確かに共有した時間は少ないがアテナは掛け替えのない親友と言える存在だと思っている

横笛は今でも大切

アイナが来なければ当然三日滞在した、来たので三日目はなくなった
新しい指輪はただのサービスかそれとも『次代の子』への期待か

クレマンス

王女も子供扱い、やはりマイペースか

クレスがアイナに気を使って接していないのも要因にあるのは確か

金咲月下（前書き）

一応ルビが……

金咲月下

アテナの子孫アイナとの予想外の出会いから六十と余年。
例の指輪で呼ばれる事三回。

そして一度だけ帝都に向かった際に本来は南極海側にいるはずである帝都守護聖獣の一体『アンバス・クルマ亀洵』と出会い問答無用で霧の結界に包まれ否応なく四日ほど戦わされた。

なんとか無事脱出したがその先には帝都守護部隊が揃っておりこれまた一騒動起こすところだったのを即座に転移し回避した。

それから三十年ばかりたった頃、近しい存在の感覚、とでも言うのか龍山山脈の奥地に惹かれるように向かえばこれまた何故か若い吸血鬼の真祖と出会い戦った。

そこから更に十五年ほど。

またもや感じた謎の感覚に従い主／魔王が不在の【魔王の島】に向かえばそこに居を構えて約二百年が経った今頃になって誰が呼んだのか召喚された悪魔が二十五体。

半日近く戦い続けこの軍勢を退けた。

何かあるのではと思いついた間城を拠点とし魔法世界に滞在する事十数年、結局何も起こらないため旧世界へ移動し人のいない場所を探し十年近く移動し続けた。

暗黒大陸で何処にも属していなさそうな砂漠地帯に目をつけ結界を張り居を構えた、そこと真秀とを行き来しつつたまに魔法世界の城に向かい引きこもる事約半世紀。

未だにヘラスで生活するユンは実年齢で言えば二百四十を超えているが見た目は三十半ば程で止まっている。

本人いわく「正直後何年生きられるか自分でもわからないですよ」
との事だ。

とくに孫がいるそうだが子供にさえ一度も会わせてはくれない、
が会うたびに成長記録を聞かせるのを何とかしてほしいところだ……。

などと言っているが私も既に三世紀と半ば程は生きている事になる。
今は平穏と言えるがいろいろあった……。

《何黄昏てるの?》

「いや、そう言うつもりではないんだがな……」

《そう? 疲れてるなら少しくらい休めば? 替わってあげるけど……?
》

「お前は外に出たいだけだろう?」

《それは当然だと思うんだけど。身体が欲しいです》

「真面目に言ったところでそれは難しいと以前から……」
《そうだけどさ》

「ふむ、またそのうち考えてみるか」

《うんうん。さすがクレスわかってるね。ありがとう》

「しかし今考えて……ん」

《この感覚って……》

過去に真祖の吸血鬼や悪魔などの魔に属する闇の存在を示す直感的なもの。

私たちは魔性誘振感覚、と呼んでいる。

「遠いな」

《しかも一瞬だったね》

とても遠い距離、しかもほんの一瞬だが確かに感じた。

「こっちの世界で反応、ね……」

瞬間的とはいえ遠い距離でも感知できるとなると相当高い力をもっている、それだけの階級、存在ということだ。

《行くよね?》

「ああ、放置はできないな」

正義を気取るわけではないが下手に騒ぎなど起こされては迷惑だ。

「とりあえずの方向として北だな」

《どこまで跳ぶの?》

「ふむ……。思い切ってローマ辺りでどうだ?」

《危なくない?》

「だからこそだろう?」

《そう言う事言って……。いいですよどうせ私に決定権はないんだから》

「久しぶりに外に出られるんだ、そうむくれるな」

《一日譲りなさい》

「わかったよ。行くぞ」

苦笑と共に転移魔法を起動し何年、何十年振りかにローマへと跳んだ。

砂漠を出て、ローマへと跳び五日。

今ある話では……、

ポーランド・リトアニア連合が近じかドイツの騎士団とぶつかる、との噂ぐらいだ。

「ドイツの騎士団？いつだか十字軍にいたあれか？」

《そうなんじゃないの？私がない時の事言われてもね。直接見るわけじゃないし》

ポーランド・リトアニア連合、どうやらリトアニア大公国がポーランドと合同しリトアニア大公が王位につく事でできた連合国、らしい。

あとは以前から騒がれている黒死病の被害。

そして祖国イングランドとフランス王国等の争いは現在休戦状態、とのことだ。

反応の原因に関するような異変や何かが起きていると言うような情報はない。

その後うつすらと残る感覚に従い西へ、山脈の向こうフランス王国。

グルノーブルの街に入って既に七日。

何か事が起こっているわけではないので些か早足かもしれないが何が起こっているかもわからないのであまり悠長にもしていられない。

「この辺り、だと思っただがな……」

既に日は落ち、森はより鬱蒼とした雰囲気醸している。

まるで全てを失い初めての吸血によるショックから立ち直ったような……、

「こんな風に一人で森を歩く事を、過去を懐かしいと思ってしまうとは、私も歳か……？」

《そりゃあ歳がどうこう言うのがおかしい程生きてるけどね》

「しかし『あの日』が満月かどうかだったなんて覚えてないな……」

約束を結んだ時と前後するとはいえそんな余裕は全くなかったから……。

《きつと、満月だったよ》

「……——ん、血のにおいだ」

鋭さを増した嗅覚がそのにおいを確かに伝える。

間違えるはずがない紅い鉄錆のにおい。

においのする方向と感覚による向かう方向はほぼ同じ。

近づいているとは言え感覚が幾らか大雑把なことを考えれば……、

「意外と近いか？ 何が出るのやら……」

ものの数分で歩き着いた場所は僅かにひらけ、誘うように月明かりが射していた。

黒々とした木々が広がる中に血肉の赤、死体、骨の白、死体、死体。苦悶の顔、死体、光を灯さぬ瞳、死体、鈍く地に突き刺さる剣、死体、断たれた手足、死体死体死体。

その中で輝くように月明かりに煌めく「金」

ところどころに紅い斑点をつけているが確かに金。

この空間において異色、黄金。

とても長い金の髪。

死体の中に身を埋めるように動かないその身体。

「《あれか?》」

《あれでしょ?》

短い確認をやり取りし足を踏み出す。

ネチャ、と乾き始めているのか血が靴底を濡らし僅かに糸を引く。

その音に初めて誰かが近付いている事に気がついたのか「金色」はびくり、と身体を震わせる。

グチャ、ともう一歩近づけばゆっくりとその顔をこちらへと向け…

「誰……?」

小さく振るえるような声音であるが綺麗な声ではっきりとそう言った。

そこにいたのは青い目に金の髪をした十歳前後の小さい少女だった

金咲月下（後書き）

ついにここまで来ましたわ…

例の指輪

詳細は前話参照

呼ばれる度に毎回新しいのを律儀に手渡している。

一度目はお遊び、二度目は別れ、三度目はアイナの子によるもの、一応新しい指輪は渡した

亀洵

りゅーじゅ、ここんに続く帝都守護聖獣の三体目。ききょう

名称は隆亀・亀洵

前と同じたとえならばシェンウーモン

残るは鳥か……出る予定ないな

龍山山脈の真祖な吸血鬼

当時は成って十数年程度の若い存在

引きこもり。感覚に応じクレスと戦った、が……

魔王の島

魔島、ファールガスが魔王と呼ばれることに起因

だれかが攻略しようと思魔を召喚。召喚者は全てが不明
爵位級が数体いたもよう

半日で全滅、早いのか遅いのか

砂漠の居住地

この時代では完全に空白地である部分

魔性誘振感覚

上位爵位級悪魔や真祖の吸血鬼の様な上位存在の闇の眷族、本当の化物と呼ばれるような存在にのみ反応し大まかな位置を知らせる本来は同族、同種間にのみ見られるもの。

クレスはその成り立ちから複数の種族を察知できる。慣れれば抑えが効くようになる。

雲狼

とっくにおじいちゃんをしている

『一番小さい』孫がかわいくて仕方がない
実はひ孫が既に……

クレス

平穏を乱しそうな存在を見に出動した
暗い森を歩いて思いだすのがなぜそこなのか……
ちなみに血はたまに取る嗜好品程度

クレマンス

体がほしい

金髪蒼眼の少女

一瞬だけ強大な気配を発生させた原因と思われる
死体に囲まれている

髪だけでなく頬や手、口にも血が
クレスには気づいていなかった

笑み（前書き）

40話目にしてついに……

笑み

死体と血だまりの中にいた青い目と金糸の髪を持った幼き少女。
少女の口から発せられた言葉は、

「誰？」

その一言だった。

「……旅をしていてな。偶然入ったこの森から酷い血のにおいがしたからその原因を探しに来たのさ」

《クレス？》

話す内容に疑問を覚えたクレマンスはクレスへ何故かと問う。
しかしそれに応えることはせず、

「そう、ですか……」

そんな少女の反応に、

「生存者は、生きているのはお嬢さん一人だけか？」

これまた分かりきった事を少女へ訪ねた。

「……そのようです」

僅かに間を置き再び少女は答える。

「何があつたのか教えてくれるか？」

《ちよっと、やめてあげなよ》

言外にからかうのはよせ、とクレマンズが言うものの、

「その、えっと……」

「素直に私が殺しました、と言えればいい」

戸惑いを見せる少女にクレスは冷めた眼差しを向ける。

「ちよ、そ……、なん、で……」

「ん？」

「なんで……そんなこと……」

しどろもどろになる少女に対しクレスは、

「闇の住人、化物なんだろう？」

最初から知っていた事実を冷静に述べた。

《ねえ、どういうつもりなの？》

わざと自身への意図をはぐらし続けるクレスにクレマンズの疑問の色が濃くなる。

「何で、貴方は知って……」

怯える様に、警戒するようにしつつも少女は言葉を紡いだ。

「知らんよ、お前の事は何もな。名前も知らないし会ったこともない」

「じゃあ……」

「本当に気づかないのか？《わからないのか？こいつ、誘振感覚に気づいていない》」

以前出会った真祖の吸血鬼や高位の悪魔等は差異はあれど気づいていた。

感覚を感じた以上は潜在的にであつてもそれなりの力を持つはずであり、クレスが感じ、直接見る事である程度はつきりと感じる様になった以上この少女も誘振の感覚を受けなければおかしいのである。

《あ……》

今更気づいた、とでも言うようにクレスの中でクレマンズの弦きが広がって消えた。

それと同時に、

「あ……」

全く同じ弦きが少女から発せられた。

「なあ……」

声をかけたその直後、

「うああああ———っ」

声を上げ少女が跳びかかってきた。

どういうわけか夜しか歩けない体になってしまったから日が落ちてから見つからないように、必死に走るようにこの数日生きてきた。傭兵って人達は殺してしまっただけでなんとか今日も生きてられると思っただけ……

教会の異端狩り、魔法使いには気をつけろってあの男も言ってたはずだ。

意味はよくわからなかったけどこいつがそうなんだ、そうに違いはない。

こんな身体になっちゃったけど私は……死にたくないっ。

酷い目にあったり殺されるくらいなら……、

「殺すっ！」

私は死なない、死にたくない。

生憎な事に今の状態になってからは今までよりも何倍も早く動けるし力も強い。

誰も止められない、さっきの傭兵達だって止められなかった。なのに、

「ぐうううっ、離せ下郎っ」

打ち倒すはずだった拳は男に掴まれて私は宙に吊られている。

足で蹴りを加えてもびくともしないなんて、こんな事今までなかったのに……。

早いな……まあ確かに少女にしては早く重い、だが所詮それだけだ。宙に吊られた状態で蹴りを出したところでたかが知れている。

「話は最後まで聞けと教わらなかったのか？」

そう聞いてみるがじたばたともがいては、

「黙れ、離せ、死ね」

連呼である。

「しょうがない……」

《どうするの？》

「こうする」

宙吊りの少女を放り投げる。

「きゃっ」

短く悲鳴を上げ綺麗に宙を舞った少女は、
どしゃ、という音と共に、

「んぎゃ……」

新たな悲鳴を上げ地面に落ちた。

《うわ、痛そう……》

「大丈夫か？」

「んぐぐ、貴様……」

顔に土をつけながらも少女は立ちあがった。

「どうもしないから落ちつけ」

「嘘を言うな」

「殺すつもりならとっくにそうしているし投げたりしないだろう」

「……騙されない」

寸瞬悩んだようだが未だにその目付きは鋭い。

「はぁ……本当に気づいていないのか？」

「何？」

「同じ闇の存在だと言う事に」

「な、……え？」

本当に気づいていないらしい。

「……帰るか」

《……そうだね》

同意も得た事だし宿に戻ろうかと踵を返した時。

「ちょ……っと、待ってください」

少女の引きとめる声が届いた。

「なんだ？」

「本当に……その、同じ……？」

「ああ闇の住人だ」

「あ、あの、なら……私を、助けてください」

力を失ったようにへたり、と足を地に寝かせ手を着き頭を垂れる。

「助けて下さい」

縋る様に、安堵する様に、怯える様に涙まじりの声で少女はそう言った。

「助ける、とは？」

「私を、元に……元に戻して」

「無理だ」

「何で、ですか？」

何も知らない少女にとって当然の疑問なのだろう。

「一度そうなってしまったら戻る事はできない。何があってもだ」

「そんな……」

「なりたてなんだろう？なら、今ならまだ死ねるかもしれん」

「死にたく、ないです」

「なら生きるしかないな」

「どうやって……？」

「自分で考えろ」

「……………」

俯く少女をそのままに今度こそクレスは踵を返し歩き始めた。

《いいの？》

「あれなら何か起こす事もないだろう」

《ユニ君は助けた》

「あいつはどう見てもそのまま死んでしまう状況だっただろう。目の前で死なれては気分が悪い。だがあの子は違う」

《鏡でもわからない事があるのです》

「ふん。全て分かったら分かったで困るだろう？」

《私は困らないけどなあ。あ……》

「どうし……ふむ……」

後方から浅く早い呼吸音と足音。

感覚的にも近づいてきている。

《どうするの？》

「どうもしない」

《着いて来ちゃうよ？》

「途中で諦めるだろ」

聞こえる音よりもいくらか早い速度で足を運ぶ。

本来は転移するなりで瞬時に消える事も出来るのだが。

《甘いんだから》

そんなことは承知しているつもりである。

「この程度着いて来れる根性がなければ何もできん」

《できれば認めるんだ》

「うるさいぞ」

《ふふふ》

彼女の笑い声と少女の発する音を受けながらクレスは森を抜けた。

少女が着いてくるようになってから三カ月。

宿に泊まると宿の前や反対側にある日陰になる場所に必ず少女はいた。

どこで手に入れたのかフードローブを目深にかぶり少女は昼の間も着いてきた。

それからは宿に泊まるのをやめた。

あえて険しい道を進んでも少女は着いてきた。

ローブやフードがめくれて肌が日に焼かれる事もあった。

足を踏み外して崖から落ちそうになった事もある。

あえて崖を下りれば傷つきながらも必死に岩や木にしがみついて下りてきた。

不意に立ち止まる。

少し離れた位置で少女も止まる。

「いつまで着いてくる気だ」

そう言ってクレスは振り向いた。

その目に映る少女は髪がくすみ服はあちこちがボロボロで少しやつれた様にも見える。

「……ずっと、どこまでも」

「どこまでも、か……」

聞き返したわけではないが少女は頷いた。

《いい加減認めてあげたら?》

クレマンズのそれが打ち止めの台詞だった。

「どこまでも着いてくるのか? 着いて来れるのか?」

「行きます。これからずっと」

昼夜を問わず移動したせいか目元にうつすら隈を浮かべながらも強い意志を秘めた瞳でそう言いきった。

「……ふう。お前、名前は?」

「え?」

「名前だ。ないのか?」

そう聞くと何が嬉しいのか少女は、

「エヴァンジェリン。エヴァンジェリン・アタナシア・キャサリン・マクダウエル、です」

少女、エヴァンジェリンは初めて確かな笑みを浮かべてそう名乗ったのであった――――

笑み（後書き）

聞、って使うと途端に厨二っぽくなりますね……

魔性誘振感覚（2）

感覚や誘振感覚等と略される

なりたてである、と言う事と共に興奮・恐慌・混乱状態等にあったエヴァンジェリにははつきりと知覚できなかった。

また作中にあるように直接対象を視認することで感覚はある程度強く、濃くなる

「離せ下郎」

貴族としてのプライド的なもの

「気づかないのか？」

わざと意味深な言い方をした

エヴァンジェリン・アタナシア・キャサリン・マクダウエル

金髪蒼眼血みどろ少女

夜夜中に少女の一人歩きは危険がいつぱい

元の生活に戻りたいが戻れない、このままは嫌だけど死にたくない、と言う我がまま具合だがこれは正常な反応。

宙吊りⅡ地に足が付いていない、即ち加速も無ければ踏ん張りも利かない状態での蹴りは威力が出ないと言う事をわかっていなかった。

なりたてであるせいかいまいち魔性誘振感覚がはつきりしていない
三ヶ月間クレスを追いかけてまわした
途中飢えから生き倒れになったり崖から滑り落ちそうになったりと
大分危ない目にあつたが、その度に何だかんだ言いつつ助けるクレ
スの世話になった。

イメージするならCLAYMOREにおける出会ったばかりのテレサとクレア

、
 というかそのまま

ミドルネームがキティなのでCではなくKの方のキャサリン

クレス

つい「お嬢さん」とか言ってしまう人

出会ってすぐから相手の反応で認識にズレがあるのに気付いた

あえてクレマンスには意図をはぐらかし隠してみた

何だかんだ言って世話を焼いている

クレマンス

実際のところクレスと違って元になっている『クレマンズ』と言う人物は魔、闇に属しているわけではないのでクレスに比べて誘振感覚の意識が薄いのが原因。

仮想鏡面、コピーとしては正確であると言う事

がんばろう

じつと一枚の羊皮紙を視続ける少女。
そこに書かれた内容は、

生死 問わず

賞金 400万Dρ

特徴 金髪または黒髪に碧眼の不老不死身
名前 ファーガス・フェイタラスト

手配書だった。

「これが先生の事、なんですか？」

「ああそうだ」

『先生』それが少女、エヴァンジェリンが彼に師事する時の呼び方だった

なぜ手配書など見ているかと言えば、

「あの、まず先生の事が知りたいです」

まずは座学を教えようとした時に少女がそう言った事が原因だった。

「私の事を？ ふむ……」

ファーガスもといクレスは一思案するとおもむろに一枚の羊皮紙を取り出し、

「これを見ろ」

手渡したのである。

それがこの手配書であつた。

「名前が……」

「偽名みたいなものだ」

「偽名、ですか」

沈黙。

どちらもよく喋る方ではないので二人の間にはよくある光景である。

「Dρ、というのは？」

「魔法世界と呼ばれる魔法使い達の異界がある。そこの通貨だ」

疑問に思つた事を少女が質問し男が答える。

常の光景だ。

「わかつたと思うが私はお前に比べたらよっぽど悪だ。書いてある通り不老不死身でな、今までの三百年以上という月日の中で自分の為に多くの人を殺してきた」

「三百年……」

「生きている友は一人だけだ」

「辛くないんですか？」

「……辛くないと言えば嘘だろうが私はどこまでも生き抜くと決めたからな」

「どこまでも生き抜く……。私も生き抜きたいです」

いい言葉を知った、とでも言うようにエヴァンジェリンの口が僅かに緩む。

「私についてくると言う事は必然的に悪と呼ばれる事になるぞ。多くの者に追われ恨みを買う事になる」

「もう決めたんです。それに人を殺した経験ならもうあります」

「殺す事が辛いだろう？」

「それは先生だって……」

「この身になった時から『死』に感情は抱くができるが殺す事への感情を抱くことはない。お前とは違う」

「……………」

「お前は吸血鬼だろう？血を飲むことに罪悪感を抱くか？抱かないだろう。私は吸血ではなく殺しに罪悪感を抱かない。存在の違いだ」

「存在の違い……？」

「種族と言い換えてもいい。お前は血を飲むことを当然と、当たり前だと思う吸血鬼だ。しかし私は殺す事を当り前だと思う殺人鬼、その差だ。仮に死というものに何も抱かないのならそいつは死神だろう」

「種族の違い。吸血鬼と殺人鬼、ですか」

「まあ私はお前と違っていろいろ混ざっているからただ純粹に化物と言えなくもないがな」

く、とクレスは自嘲気に笑うと、

「少なくともあと五年ないし十年の間お前は日の光を浴びれないだろうよ、覚悟しておけ」

「……わかるんですか？」

「私も最初は日光が浴びれなかったと言うのもあるが八十年ほど前に戦った吸血鬼がそんな事を言っていた」

「他にも吸血鬼がいるんですかっ？」

いつもは静かな彼女だがやはり同族への興味はあるようで自然と声が大きくなる。

「ああ、お前と同じ真祖だった。他の『粗製』にも何度か会った事がある」

「その人達は？」

「真祖の奴はお前ほどではないが十年経っていないほどの若さだったようだな日光はある程度克服した状態だった。それ以外の奴らは何年経っても耐性すらできなかったそうさ」

「それで今その人達は？」

「……ほとんど死んだ。真祖の男も私が殺したよ」

「え、なんで……？それに、だって、真祖の人は……」

真祖の死、その事でエヴァンジェリンには明らかな動揺が生まれた。

「再生力が高くて振り払い切れなかったのさ。退いた者も何人かいたがね、ほとんどか挑んできた。消すしかなかったのさ」

「だけどっ……だから真祖の人はっ……」

不老不死の、自身と同じ存在が消滅した事がよほど信じられないのかエヴァンジェリンは掴みかかるような勢いでクレスへと迫る。

「戦っているうちに日が昇り始めたんだ。そして日光を完全に克服しきれていなかったが為に全身を焼かれた時、丁度私の魔法が奴を呑みこみ消滅した。残ったのは私と戦闘の跡による崩れた山と更地だ」

「そ、んな……」

彼女は急激に意気を落とし俯いた。

「だからお前は日を克服するまで全身を晒すような真似はするんじゃないぞ」

クレスはそんな彼女の頭を優しく一撫でする。

そんな優しさを感じ取ったのか、

「……はい」

小さく頷き彼女は返事をするのであった。

クレス・A・T・エルレイア。

私の恩人とも言え父とも兄とも言える人で尊敬する先生だ。

魔法使いの間ではファーガス・フェイタラストと呼ばれる悪の魔法使い。

二つ名があるらしい賞金首。

そして……、

「じゃあエヴァンジェリンちゃんはどういう魔法が使えるか調べてみよう」

「あの、エヴァでいいです」

「じゃあエヴァちゃん……」

「あと『ちゃん』もできればやめて欲しいのですが……」

姉様でもある。

魔法で作られた偽装で虚像の人格であるそうだがちゃんと基礎になる人が昔いたそうだ。

詳しくは教えてもらっていないがそのうち話してくれるらしい。

「始動キーは練習用の『プラクテ・ビギ・ナル』だからね。呪文はさっき覚えた通りに。じゃあ一通りやってみよう」

言われたとおりに練習用の杖を振ってみる。

火は点かない、次は水だ……。

姉様は兄様、先生と比べればよく喋ってくれるし話しやすい。

だけどやっぱり根本が同じと言う事なのか考え方やなんかは同じようだし互いに隠しごとのような事はできないらしい。

意図をはぐらかす事ぐらいはできるらしいけど……。

「うん、水よりも氷だね。ちょっと珍しいかな？」

基本は火・水・風・地の四つ、それに光と闇を加えた六つ。

それに雷・氷・影・砂、等の副属性があるそうで他にもあるそうだが私は兄様が考えたと言う星と音、というのも興味がある。

「うーん……やっぱり闇も、だね」

「やっぱり、ですか？」

「戦った吸血鬼の人たち、もちろん真祖の人も、だけどね。みんな闇属性を主体で使ってたんだよ」

「なるほど。決まり、みたいなものですか」

「うん。じゃあ氷と闇を主軸として鍛えて行こうか」

「はいっ」

修行が始まるんだ……。

これからどんな事があっても生き抜いてみせる、その為の修行が。

「がんばろう」

少女の小さな決意はクレマンスとクレスに聞こえていたが二人は何も言わずただ笑みを浮かべるだけでその声は風と共に空へと消えていった――

がんばろう（後書き）

これから混沌と言うか意味不明さ加減が増していくのである。

賞金首 フアーガス・フェイタラスタ

黒髪の情報に信憑性が低いとされ金髪碧眼というのが容姿に関する目下最大の情報

何故か賞金が三百六十万から四百万となった

『粗製』

非真祖。

実験の産物や混血によるもの達。

真祖を完全な上位種と見た為にこの言い方となった。

龍山山脈の真祖

実は消滅していた。

引きこもりであった為消滅した事は周囲に知られていない。

戦闘により疲弊したところで朝日を浴び続けた為に回復する間もなく瞬間的に炭化し続けているところに「星の崩光」の直撃を受け消滅した。

完全克服ではなかったため、浴びる時間が長過ぎた。

魔法属性

基本は作中通り四種十二種の計六種類。西洋の四大元素の概念に由来する。東洋ではこれに「木」を加えた五行が基本となるため七種。

更にそれらから派生した雷・氷・影・砂等が存在する。
音と星も同様である。

練習用の杖

原作設定にある様に本来エヴァの様な存在は杖を必要としないがこの時はそれを知らない。

エヴァンジェリン（ry

「生き抜く」という言葉がちょっと気にいった模様
音と星に興味を持ったはいいがただでさえ光と相性が悪いのにそれよりも上に位置する星は使えるわけがなかった。

その事を知るのはこのすぐ後の事。

原作同様に主体属性は闇と氷

クレス

いまいちエヴァへの接し方が分からない。が、元々大して喋らないので別段問題があるわけでもない

クレマンス

エヴァをやたら可愛がっている

力と期待（前書き）

世間では夏休みとかいうものがあるらしい

力と期待

事の始まり、それは少女が男と出会って何度か襲われつつ半年が経とうかと言う時だった。

きっかけは、

「先生、どうすれば私はもっと強くなれますか」

基礎や座学にも飽きたのだろうか。
そんな質問だった。

「ふむ、ではお前にとって『強い』とはなんだ？」

「どういう意味ですか？」

「いいから答えろ」

「……相手を倒すための武力です」

「なら、私にその強さを、力を証明できるか？」

「え？」

「私を倒せるか？」

「それは……」

「できないか？」

「……はい。できません」

「ならお前に『強さ』は、力は無い事になるな」

「どういう事ですか？」

「もしお前の相手が、倒すべき敵が私だった場合お前の言う『相手を倒すための武力』と言う力は負けたその時点で意味を成さない」

「それは仮定の話で、私はっ……」

「落ちつけ」

威圧と共に男は少女を軽く手で押さえる。

「んぐっ」

地に押さえられ少女は呻くが男それには構わず続ける。

「私が殺しを厭わないのを知っているだろう？物事に絶対はない。殺すと決めればお前でも殺す」

「う……。それでも……」

「何者にも負ける事のないただの一人にしか許されないもの。それがお前の言う『強さ』即ち『力』と言う事だ。それを得ることなど不可能だ。そんな事が許されるのは神だけだろうさ」

「ぐ……。では『力』とは何ですか？」

「昔、友が言った『考え選び実行する勇氣』それが真の力、だと考えた。考え、選び……？」

「そうだ、何が大事で何をどう切ればそれを守れるか、そう言う事だ。当時私はそれに共感した。だがな……」

それは二百五十年以上も前の事。

既に遠きその思いで。

時が変われば人も変わる。

その事を口にいってもいいのか、アテナは分かってくれるのか……？いや、あいつの事だどつくに知っていて遅いと言いきうさだ。

等と考えるクレスの逡巡とも言える僅かな様子の変化に、

「兄様？」

砂が着くのを顧みず少女は顔を『兄』へと動かす。

「最近思うのだよ、強さとは考え選り実行する勇気とそれを信じる事、なのではないかとね」

「信じる事？」

「そうだ。物事を決断し勇気を出し実行する、そしてそれを信じる。事を成そうとそれを信じる思いが力となるのだと」

「……………」

「自分の行くそれを信じずしてどうする？それとも仲間が……私は、私達はお前の力になれないか？お前を信じる私達の、私達の信じるお前の力が信じられないか？」

「私は……」

「自分を、仲間を信じられない者が強いだ、力だ等と言ったところで何の意味もないただの暴力だ。まあそれを力と捉える者もいるだろうがな。私は今そう思っているよ……」

「……それでも私はっ、頼ってばかりじゃ、ダメなんですっ……後ろについて行くばかりじゃ私はいつまで経ってもっ……」

それは『一緒に』生きたい／行きた、という少女の必死な願いだった。

暗黒大陸、空白の砂漠地帯、深夜。

ドッ————オオオン。

爆音を響かせて砂丘を一つ消し飛ばし砂を撒き散らしてなお闇夜を裂くように走る雷の槍とそれを取り巻く嵐。

魔神術式の一つ『魔人射る雷嵐の槍』

それに撒かれるように宙へ飛ばされる金糸の少女。

「どうした、それで終わりか！？なら死ぬただぞエヴァンジェリン！」

砂塵の向こうから厳しい声が響く。

「くうううッ……リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 来たれ氷精 闇の精 闇を従え————」

宙を転がりながらも飛びそうになる意識を必死に食らいつかせ詠唱する。

今扱える彼女の最大呪文を。

「そうだ。それで良い、最後まで足掻いてみせろ……。タン・レス
タン・アルター・アンタレス 地より出でて晒せ 豹変せし姿 射
ぬけよ眼光————」

「————吹雪け 常夜の氷雪 『闇の吹雪』」

放たれたそれは暗く冷たい闇色の吹雪。

不安定な姿勢から放たれたにも関わらずそれは寸分たがわずクレスへと迫る。

「————炎の鳥よ 彼の愚行を焼き払え『敵射抜く瞳の炎翼』」

一呼吸近く遅く唱えられたそれは空中に魔法陣を描くと焰の鳥を撃ち出した。

クアアア————、

まるで一声上げる様に翼を羽ばたかせるとそれは『闇の吹雪』へと突撃し僅かな拮抗の後にそれを突き抜ける。

「ぐっ……」

迫る魔鳥、訪れるだろう衝撃に彼女は目を見開き歯を食いしぼる。正直に言えばすぐにでも目を閉じて縮こまっていたいくらい怖い。

だが彼女は「できるだけいい。限界まで目は閉じるな」そう教わったのだ。

少しでも生きる可能性を見出すためには何も見逃してはならないと。

『闇の吹雪』を突き抜け眼前に迫るそれは翼を広げ彼女の身体を炎で打つ。

「があああああ—————っ」

魔法障壁をいともたやすく打ち抜き一瞬で身体が燃え上がる。目など開けていられるはずがなかった。

炎上すると同時に力を失った身体が下へと傾き落下を始める。

「うあ……?」

落ち始めると同時に炎の熱が消え失せる。
朦朧とする意識の中で薄く目を開ければ炎は消え身体はただ砂地へと迫る。

「死にたく、ない」

この程度では死なない、死ねないと分かっているでも死を幻視してしまふ。

なんとか体の向きを変え魔力を放出し大丈夫だと信じ衝撃に備える。

そして着地。

ダァ――ン。

砂地とは思えない酷い音と共に砂が舞った。

「ぐっう、はっ、はっ、はっ……生きてる……」

振りかかる砂を気にする余裕などなく荒い呼吸と共にただ生きている事を実感し彼女は夜空を見つめた。

ざりっ、と砂が軋む音を立てて寝そべる彼女の隣に男が立つ。

「及第だ、よくやった」

戦闘の、修行の相手であり師でもあるクレスであった。

「はい……ありがとうございます」

「ああ。その生への渴望を忘れるな。生きられると言う事を信じろ」

「はい、先生……」

「今日はもう休め。運んでやる」

「はい。ありがとう、ございました……」

返事を返すと同時に少女は意識を手放した。

《ちょっと厳しいんじゃないの？》

少女を背負い家へと向かうクレスの中で声が響く。

日光を克服していない少女の都合上基本的に夜しか行動できない。

修行をつけ始めて二年半。

実戦訓練を初めて四カ月。

異常とも言える呪文を使い彼女を苛め抜いていた。

「加減はしているしな。奴も泣きごとを言わず耐えている」

魔神術式など本気で出した事がないのは事実であり『魔人射る雷嵐の槍』は射軸をずらし威力は半分程度

最後の『敵射抜く瞳の炎翼』は翼で打つだけに留まり炎もすぐに消しているしこれも威力は押さえている。

《何も言わないのは凄いやね。うん、偉いよ》

もう一人の人格、クレマンンスはクレスが背に背負う少女をねぎらう。

《偉い偉い》

表に出ていれば頭を撫で回していそうなのはご愛敬だ。

「子供扱いすると怒られるぞ？」

この少女は子供扱いされることを酷く嫌うのだ。

《だってこんなに可愛いんだよ？健気なんだよ？頑張ってるんだよ？小さいんだよ？》

「はぁ……。明日はお前に任せる」

《うんうん。ちゃんと面倒みるよ》

「だから子供扱いは……」

《それに糸の扱いが上手だし。教えがいがあるよ》

実際のところ持っている能力も技能も同じなので指導役を変える必要はないのだがクレマンスがどうしても、と言うのでエヴァンジェリンの興味を示した糸の扱いを彼女が教えているのである。

まあクレスもずっと子供、エヴァンジェリンの相手をするのもどうしていいか分からないのが実情であるが……。

「確かに私より才能がありそうだ」

扱いを教えて一年半、既に33f tの距離であれば五本の糸を自由に操っている。

「まったくもって先が楽しみな子だよ」

《子供扱いしてるよね？》

「子供だからな。それに今は聞いていないから文句も言われないさ」

そんな言葉や期待など知らずに少女は静かに寝息をたて続けるので
あった――

力と期待（後書き）

『強さ』 『力』

人により解釈の変わるものの一つ

作中の論で言うところ

エヴァが言った誰にも負けない『武力』という強さは世界に一人にしか許されない。誰かに負けなければそれは強さではないのだから。

アテネの言った強さは自身の行動に後悔を抱かない決意と自信『勇氣』

クレスの言う新たな強さは更に加えて『自分を信じる事』

自分の信じるものを信じその為に振るう力

『敵射抜く瞳の炎翼』

魔法陣が展開されるⅡ魔神術式

レベルとしては雷嵐の槍に劣る

フラウロスの力

炎の鳥を射出する。

詠唱は「地より出でて晒せ 豹変せし姿 射ぬけよ眼光 炎の鳥よ

彼の愚行を焼き払え」

作中ではエヴァを翼で打った

本来は先端の嘴から体当たりすることで貫通、突貫性を上げる

威力だけ見れば翼で打つとゴッドバード位の差がある

翼を広げるのは威力が落ちる分範囲が広がる

翼で打つ程度でも簡易障壁くらいなら突破する威力

『闇の吹雪』を貰いたのは全身で当たったため。翼だった場合威力にもよるが相殺するか翼が切裂くのどちらか。また鳥という性質上僅かに誘導性を持ち片翼が消失などした場合速度、誘導性が大きく低下する欠点を持つ

エヴァンジェリン

操系の才能がある

厳しい修行に泣きごと言わず耐えているが本当は泣きたい
だって女の子だもん

自分から言い出した手前むきになっているのもある
が、耐えられる時間が増える＝力が付いている。という実感が嬉しい
くもある

子供ながらに褒めてもらえるのも嬉しい

クレス

加減はしているが自分でも厳しいとは思っている
エヴァ本人が文句を唱えるまでは続けるつもり

クレマンズ

厳しい事に文句は言うがやめるように言ったりエヴァに文句を言う
ように進言したりはしない
エヴァを可愛がっている

魔女狩り（前書き）

カオス度上昇中

魔女狩り

時は過ぎエヴァンジェリンは十年という予想よりも遅く十三年の時間をかけようやく日光を完全に克服した。

ただたまに太陽を見ては忌々しそうに睨む事が日常と化しているが……。

東から流れてきたのかこちらでも『銃』が使われ始めてかなりの時が経ち戦争は激しさを増した。

そして以前から行われてきた異端審問は過激さを増し魔女狩りとして民衆によってより広く取り締まられることになった。

その結果長き間にわたり行われた戦争において当時窮地にあった要衝オルレアンを解放せしめ『オルレアンの乙女』『英雄』『聖女』とまで言われた女騎士ジャンヌ・ダルクでさえ最期には魔女と言われその身を炎で焼かれ消えていった。

彼女を失ったフランスであるが、その勢いは衰えることなく劣勢を覆しイングランドに勝利を収め戦争は終結した。

そして半世紀。

新大陸の発見である。

これには裏表関係なく誰もが驚いた。

時を同じくする頃、偶然に偶然が重なりエヴァンジェリンに事件が

起こった。

始まりは偶然クレスが旧世界にいなかった事。

そして一人になったエヴァンジェリンが何気なく出歩き一つの村を歩いているとき一人の女性、と言うには幼く少女、と言うには大人びた女の子と偶然出会った事。

そしてその女の子は曖昧な容姿と不思議な雰囲気から自然と異性を引き寄せる特異な存在だった。

それは当然の如く同性の嫉妬を買った。

男を魅惑し誘惑する魔女、その言い掛かりから女の子、ソニアは捕らえられた。

そして女の子は数日の拷問により数少ない、

否、唯一と言っている知人、友達と呼べるエヴァンジェリンの名を『自白させられて』しまった。

そして彼女を目の前で人質にとられたエヴァンジェリンはその甘さから女の子を一人にできなかった……。

更に彼らが何処から持ってきたのか封印術式の刻まれた破魔銀の枷をはめられてしまう。

幼い容姿故か酷い拷問はされなかったが枷を付けられままボロボロのソニアと共に牢に入れられた。

数日の嫌がらせと言う尋問の間で長時間銀の枷を付けさせられ続けたその被退魔体質からエヴァンジェリンはから手足に傷を負ってしまふ、当然外せば傷が治る。

結果、有罪。

更にその数日後ソニアと共に生きたまま火刑に処されることになる。周囲の築かれた薪に火がくべられて数分、煙が立ち込め始めるとソニアは激しくせき込みただでさえ弱っていた彼女はどんどん衰弱していく。

柱に身体を繋がれ手には枷。

自分は死なないとはずだと思いつつも隣の彼女は助けられない。と、エヴァンジェリンは己の無力さに打ちひしがれた。

「私はこれまで何の為に強くなろうと……助けられないの……？」

煙のせいなのか哀しみのせいなのか思わず目に涙さを浮かべ唇を噛む。

「ぎあゝっ——」

声にならない悲鳴がソニアから発せられた。服は燃え始め足元も既に炎が踊っている。

「助けて……誰か。兄様、姉様……」

「あゝあああああ——っ」

煙に巻かれほとんど見ええないとは言え流石に取り囲む村人の中には幾らか顔の青い者もいる。

その中で、

不意に、

イ——ン。

澄んだ音色が響いた。

その瞬間時が止まったかのような錯覚を覚えながらエヴァンジェリンは確かに見た、

炎が押されるように自分たちから離れて行くのを。

押された炎が壁となる様に周囲を覆うのを。

「まったく、何処にいるかと思えば……馬鹿者が」

「あ……」

ふわり、

静かに真横へと舞い降りたのはいつも通り黒衣に身を包み髪を靡かせた『兄』の姿。

「タン・レスタン・アルター・アンタレス 訪れよ狂気の誘い 具現するは汝の思い その身を落とし 夢幻に包まれよ 其は一時の夢なり 『狂気の王冠』」

唱えられたそれは何の変化も起こさない。

しかし、

「行くぞ。そう長くは持たん」

そう言って腕を一閃。

いつの間にか握られていた剣により縄と枷はいとも容易くその存在意味をなくした。

それを確認するとクレスはエヴァンジェリンを抱え跳ぼうとするが、

「あの……兄様」

それをエヴァンジェリンが遮った。

「どうした？」

「あの子を、ソニアを助けて下さい。どうかお願いします」

ぎゅっ、と手を握り未だ咳き込む女の子の為に頼みこむ。

「なぜ？」

クレスにとっては当然の疑問だろう。

答えられる言葉は多分、

「友達、なんです」

これしかなかった。

それを聞いたクレスは寸瞬悩むように目を巡らし、

「……はあ」

溜息と共に、

「クレマンスに感謝しろ」

それだけ言うтусぐ隣で縛られた彼女の拘束を解き、

「助けてやる。掴まれ」

その声を聞き既に足の先が焦げているように見えるソニアは弱々しくもクレスの外套を掴む。

「エヴァ、お前も早くしろ」

その声でただ立ちつくしていた彼女は、

「はっ、はい。有り難うございます」

涙を浮かべながら、

「有り難うございます姉様、兄様」

何度も礼を言いつつ彼にしがみついたのであった。

炎の壁を飛び越え外に出る。

しかし周囲の人間は誰も三人を気にも留めず燃え盛る炎を見つめていた。

「何を、したんですか？」

地面にソニアを寝かせると周囲を確認したエヴァンジェリンがそう尋ねた。

「村人には強力な幻を見せている。一時間しか持たないがな。炎は一応音魔法だ、もう解ける」

言うが早いか壁となっていた炎はその形を崩し再び自由に燃え始め先ほどまでいた場所をも呑みこんだ。

「で、こいつはどうするんだ？馬鹿娘よ」

「え、いや、それは……と言うか、ば、馬鹿娘……」

「お前など馬鹿娘で十分だ。それでなんだキティ、お前この娘を私に助け出させた方がいいがどうするか全く考えていなかったと言うのか？」

考えなしの馬鹿娘、と呼ばれたためかそれとも久しく呼ばれていなかったキティなどと呼ばれたせいかな僅かに涙を浮かべ顔を赤くしエヴァンジェリンは俯いてしまう。

「……まあいい、治療が先だ。タン・レスタン・アルター・アンタレス 雄々しき姿は魔障を与えよ——」

「な、なんですかその術はっ」

呪文に不穏な文言を聞いたのだろうエヴァンジェリンは慌てて駆け寄ってくる。

それを一瞥し手を出してその場に立ち止まらせる、が詠唱は止めない。

「——美しき姿は魔傷を癒せ その身に宿せし魔性を持って我が意の元に力を示せ 『二面持つ魔貌の光』」

発現された呪文は暗い光となって寸分変わらず地に伏せるソニアへと向けられる。

「っ、兄様！何の呪文ですか、教えてください」

その間に飛び出したエヴァンジェリンに光が当たる寸前、

「術式凍結、固定ッ」

光は流れを変えクレスの手へと向かい渦を巻き収まった。

「治療だと言った。お前はできんだろう？この術は治療と攻撃で有る程度選択が効くとはいえ見るかに無傷のお前に当たると傷を与える。だからそこをどけ」

「……はい。わかりました」

幾らか申し訳なさそうにエヴァンジェリンはその場から移動した。

「術式解凍」

停止させていた術を再び動かし掌に留めていたそれをソニアへと押し当てる。

「う、ん……」

小さく呻くが直ぐに大人しくなる。

「治った……」

その場には焼け焦げた足が見事に治癒され他の火傷も綺麗に無くなった彼女の姿があった。

「体力までは戻らん。家まで一緒に運んではやるが後はお前が面倒みる」

「はい」

「返事だけはいいいんだがな……」

「う、ごめんなさい」

「ふん……。タン・レスタン・アルター・アンタレス……」

そして光が包みこみ三人の姿はその場から消え砂漠へと帰っていったのであった……

魔女狩り（後書き）

章管理って言うのをやってみました。

以下説明

炎が壁になった

一定時間の間音の壁により炎を退けた

『狂気の王冠』

詠唱は「訪れよ狂気の誘い 具現するは汝の思い その身を落とし

夢幻に包まれよ 其は一時の夢なり」

補助、幻覚系の魔神術式

魔神オセの力 一定範囲内の対象全てに強力な幻覚を見せる事が出来る

ただし効果は一時間

その精度は同じ幻覚系のエキスパートが魔法と理解できてもレジストできない程

村人が見た幻覚はあのまま二人の少女が泣き叫びながら燃え尽きる
と言うもの

『二面持つ魔貌の光』

詠唱は「雄々しき姿は魔障を与えよ 美しき姿は魔傷を癒せ その
身に宿せし魔性を持って我が意の元に力を示せ」

回復兼攻勢の魔神術式

魔神マルバスの力

作中、詠唱にもあるが攻撃と回復どちらかの効果を發揮する条件としては無傷の者には害を、負傷者には癒しを与える

どちらも詠唱は同じ

どちらの効果であっても作中通り光線を照射する。速度はあまり早くない

回復時は傷が治るだけで流れた血、各部欠損、体力は戻らない
攻撃時は雷の斧程度の威力、威力の低い某原子崩しのようなもの

術式凍結、固定、解除

凍結、術式をその場で停止させる、既に発動しているため結構な荒技。凍結時は照射、放出系の場合その場で停止してしまう為簡単に破壊、消失、破棄が出来る。

固定、詳細は過去話後書き。任意の場合、この場合は掌に術式を収めた。理由としてはエヴァに当たって術が崩れるのを避けるため。
解除、凍結した物を再び再開させる。一度固定したため再び照射するところからとなった。仮に固定しなかった場合凍結時、停止した光線の続きからとなる。

ソニア

妖艶な女の子

キャラ背景としては某ルサルカさん

エヴァだけが友達

エヴァンジェリン

馬鹿娘キティちゃん

ちよっと泣きそうだった

原作に比べまだまだ甘さを残す

初めての友達だった

クレス

ユン君に会いに行ったら大変なことになってた
エヴァの居場所がわかったのは例の誘振感覚
何だかんだ言ってもエヴァの事を思っていたりする

クレマンス

出番なし

クレスを諭したらしい

変遷と継承（前書き）

この作品は読者の脳内補完が必須と言う事をお忘れなく

変遷と継承

打ち捨てられたかのような砂上に聳える古城。
その一室。

糸や布、その他にも魔力を帯びた人の体を模したかのような素材等
が雑多に並んだ作業台の上に人形が一体。

人形はその口をカタカタと揺らしながらケケケと笑っていた。

『彼女』の名をチャチャゼロ。

製作者はエヴァンジェリン。

彼女が自ら作った自意識を持った、魂が込められた人形。

魔力の供給により体を動かす事を許された彼女の小さな従者。

「暇ダゼ御主人」

「うるさいぞ。もう完成するから少し静かにしている」

実戦訓練により壊れた手の交換と全体の補修と調整。

そのために解された『彼女』は暇を持て余していた。

あの火刑に処された日から数十年。

先日できた従者は同じ魂を持っているとは思えないほど『友』とは
似ても似つかない。

面影すらなく何故か物騒な方向へと精神が向かってしまっているが
確かに『彼女』

自我を形成しない魂はまさにまっさらな状態。

ある意味純真無垢とも言えるそんな状態だったのにこんな風になってしまったのは主人の意向なのか、その魂の本来の性質なのか、それとも製造環境の問題なのか。まったくもって不明である。

「……私は正しかったのだろうか、ソニア」

小さく呟いた言葉は誰にも聞かれることなく虚空へ消えた。

消えたはずだった。

「ナア御主人」

「なんだ」

「オレハソノそにあッテ奴ノ事ナンテ知ラナイケド御主人ニ会エテ良カッタト思ッテルゼ」

「……チャッチャゼロ」

「ソノそにあガ望ンデオレガココニイルンダカラ御主人ガ悲シイト

『私』マデ悲シクナルゼ」

「ふん、言ってる……。さあできたぞ」

声音に陰を含んでいるがその頬は幾らか緩んでいた。

「オウ、待チクタビレタゼ。コレデアニキニ借リガ返セルツテモンダゼ」

「馬鹿を言うな、性能が上がったわけじゃないんだ。それに少し性能が上がったところで今のままじゃ何度やっても兄様に勝てるわけないだろう」

チャチャゼロの言うとおり兄との戦闘は未だに勝てずにいる。

操糸では負けているわけではないが一日の長が相手に有る。

必ず発動が予期できるという点があるが威力の割に消費の少ない【魔神術式】

更に「音」と「星」という総数は多くないが初見では何が起こるか分からない呪文。

近接では無手のエヴァンジェリンと違い神鳴流と言う東、極東の地の剣術を収めている。

チャチャゼロと言う戦力を得たは良いが相対的に火力不足の感はない。

「オイオイ御主人、ソウ言ウ事ヲ言ウナヨ。オレダッテ強クナッテンダロ」

「何のために私が新術まで考えてると思ってるんだ」

「クケケ。ソリヤイツニナッたら出来ルンダカ」

兄であり師、彼の使う術式の固定。

それに目を付けたは良いが制御が思いのほか難しい。

姉に教えを請い訓練しているがどうしてなかなか……。

実戦という状況下で使えば少しは上達も早まるかもしれないが成功できなければ術を自分に向かい放つようなもの。

被害を負うだけである。

そんな事したら兄に何を言われるか分かったものではない。

「兄様はどうやってあれを……あ」

「オ？」

「チャチャゼロの修理は終わったのか？」

悪魔の噂をすれば悪魔が、とはこの事か。

現れたのは件の兄であり師その人。

本当に悪魔のような存在と言うのが洒落になっていないが……。

「オウ、アニキ。コレデマタ戦エルツテモンダゼ」

新品の手をを付けられたチャチャゼロは台から飛び降りた。

そしてクレスの腕に掴るとそのまま頭へと登りそのまま居座る。

「……これはどうにかならんのか？」

「ケケケ、ソレハ無理ナ相談ダナ。ケツ、良イ眺メシテルゼ」

なんだかんだ言ってクレスも無理に取り払おうとはしないため半ば特等席と化している状態だ。

「あの、兄様」

「ん？」

「お聞きしたいのですが術式の固定、と言うのはいつから、どうしてやり始めたんですか？」

「そんな事か。なに、大したことじゃない。最初は実戦でのぶつけ本番だったよ」

「え……そ、それは本当に？あの、大丈夫だったんですか？でも成功したって事は……」

「まあ、落ちつけ」

「ソウダゼ御主人。アンマリ一人デ盛り上ガルナヨ」

「あ、いや……というかチャチャゼロはどっちの味方なんだ」

「ソリヤ御主人ニ決マツテンダロ」

「だったら……」

「はあ……。話を続けていいのか？」

「あ、はい。お願いします。チャチャゼロも静かにしろ」

「オウ、リョーカイダ御主人」

その軽い態度はどこまで本気か分かったものではない。
しかしそんなのは彼女が出来てからいつもの事。既に気にする者は
いなかった……。

「今は魔法界にいる友と初めて会った時の話だ。雪山で吹雪の中そ
いつと出会って殺し合ったのが始まりだ……——」

話は簡単だった。

相手は人狼、状況からどの攻勢呪文も使いようがなく操糸は至近で
しか使えなかった。

刀剣も良い効果を得られない。

互いにダメージを与えては回復して力が尽きるまで続く殴り合いに
発展しそうになった。

それを打破するために思いついたのが周囲に衝撃を与えず相手を眠
らせる事の出来る『眠りの霧』を使う事。

霧状のそれを強風で撒かれないようにするには拡散しないように固
定し直接ぶつける、という荒技。

クレマン스가唱え一瞬の隙で入れ替わりそれを発動させた。

それが術式固定式の始まり。

「まあ、もう三百年程前の話なんだがな……」

「三百年……。まだ生きていると言いましたよね？」

「ああ。一応元氣だが本人いわくいつ死ぬかわからんそうだ」

「トンデモネーナ……」

「まあ長くなったがその時にひな型が出来て今その完成系をお前が
会得しようとしている。そう言う事だ」

「三百年の、完成系……」

それは師を追う者として重く圧し掛かるだけの意味が少女にはある様な気がした。

「そう気負うな。お前は天性のセンスがある、すぐ出来るようになるさ」

だが気負わせるような事を言った本人が気負うなとそれを軽く一蹴してしまった。

背負おうと思っていた方からすれば拍子抜けしそうなものである。

「ほ、本当ですか？」

「ああ、本当だ。嘘を言っても仕方がないだろう」

「ケケケ、良カッタジャネーカ御主人」

「うん。あ、いや……そうだな、これは心強い励みになる、頑張らねば」

《私でよければいつでも手伝うからね。クレスが邪魔しなければ、だけど》

「流石アネキ話ガワカル」

「私が邪魔するとはどういう事だ」

《失敗してもいいから訓練の時使わせてあげなよ》

「あの……私はそんな、時間も有りますし」

「……二回だ」

「え？」

「一度の戦闘訓練時に二回だけやる事を許す」

「オオ？」

「有り難うございます先生！」

ひし、っとエヴァンジェリンが目を輝かせながらクレスの手を掴んだ。

「今は先生と呼ぶな」

《素直じゃないんだから……》

「ケケ、ソレガアニキノ良イトコロナンジャネーカ。ダイタイ……

——」

「おいチャチャゼロ、あまりそう言う事を本人の前で……——」

《でも確かにクレスは……——》

「お前たちは私をどういう目で……——」

最後はともかくこうしてエヴァンジェリンの新術開発は更なる進展
を見せようとしていた——

変遷と継承（後書き）

と言う事でチャチャゼロが出ました
空白期間は妄想してください

時は移ろい魂と技は継がれる、的なタイトルでした

『彼女』

前話にいた彼女

まっさら魂が自我でうんぬん

意思のない無垢な魂と自我を持った魂

無垢な魂、そのままだと昇天する。

自我を有する魂、相坂さよのような幽霊や特殊な例としてクレマン
スがある。

肉体に宿る魂、魂と肉体の因果、精神が肉体に引かれるまたはその
逆など肉体と魂（精神）は切っても切れないものである。

即ち人という存在、生物も自我を持った魂とこの場合は位置づける。
言いかえれば肉体と言う名の自我をもった魂が人、生物である

相坂さよやクレマンは魂レベルの希薄な存在ではあるが疑似的に
でも体を有しているために個としての自我を形成している。

相坂さよやクレマンのような事情、事象が発生しないを限り死Ⅱ
肉体（自我）の喪失であり魂は無垢な状態となり昇天する

借りの話とするのなら

「死んでもあなたと一緒にいたい」

「ああ、一緒にいよう」

と言う感じで死して召される前の『彼女』の魂をエヴァが人形に込めた封じた。

人形に込めた理由としては人形とは言え肉体と言う自我を芽生えさせると言う事と共に

「私（不死者）の作った従者なのだから永久に生きるのは当然だろう、ふふん」

的な、この世に繋ぎとめておくための概念的要素を含んでいる

エヴァンジェリン

従者を作る

術式固定に興味あり

チャチャゼロ

物騒な事を平気でいったり主人で遊んだりと従者からぬ従者
クレスの頭、肩車状態が気に入ってる

クレス

何だかんだ言って（ry

クレマンス

エヴァが可愛くて（ry

闇の魔法（前書き）

久しぶりにそして無駄にルビを使ってみましたー
遂に45話ですって
この辺は難しい……

闇の魔法

とある砂漠地帯・岩場。

「行け、チャチャゼロ！」

「アイサー御主人！」

ダンッ。

その小さな体からは想像もできない重い踏み込みから砂を巻き上げチャチャゼロは相手へと突進する・

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 来たれ氷精 闇の精――
――」

手に持つもの大型で肉厚のナイフと身の丈の丈の三倍はありそうな巨大な鉈。

その両方を巧みに振るい一気に肉薄する。

「今日コソソノ首貫ッテヤルゼ！」

「口より手を動かせ。斬撃連続同時展開、飛燕拔刀霞斬りから――」
「ウオ――ッ」

両袖からの抜き打ちの二刀、それを両手のちぐはぐな大きさの刃を器用に持って防ぎきる。

「――雷鳴剣と斬鉄閃へ」

「ッラァ――！！」

裂帛の気合とともに別々の太刀筋に合わせ雷光と鉄をも裂く鋭き斬衝を受け止める、が……、

「ふっ、斬鉄閃を止めるにはそのナイフでは役不足だ」

バチバチと雷撃を受ける鉦とは対照的に。
ギャ………イン。

「ンナーっ」

「秘剣、風塵乱舞。次回に期待だ」

そこら中から放たれる杭や短剣に体と手足を縫いとめられあつくなくチャチャゼロは地に落ちた。

「ア、スマネエ御主人……」

「……術式、固定……ぐウ」

本来放出されるはずの魔力が轟々と渦巻きその手へと集束する。

「ハアアッ 掌握!! 魔力充填 術式兵装『闇氷乱舞』」

「ほう……成功させた、か？」

暗き風と冷気を纏いエヴァンジェリンが佇む。

「ありがとう、チャチャゼロ……。行きますよ先生？」

「ああ、いつでも来い」

「では……はっ」

「早いな、ッ」

今までに比べ圧倒的、とまでは行かないがなかなか早い機動。

「速さだけか？」

「まさか……」

瞬間、ぶつかる拳。

ピキ、パキ。キ。

「凍る？それが……」

触れた相手を凍てつかせ動きを鈍らせる。

「これが『闇の吹雪』を取り込んだ『マギア・エレベア闇の魔法』の力ですっ！」

「は、面白いな。……いいぞ、さあ来い」

「はいっ」

そして再び乱打戦が始まった。

「は————ッ」

「ぐううう——」

どうやら上がっているのは速度と防御か。

攻撃力自体はそこまで増えてはいないようだ。
それを補うのが凍結化なのだろう。

「はっ、はっ、はっ……」

「どうした、息が上がってるぞ」

「く、う……」

膝を着くと同時にしゅうしゅうと音をたて魔力が抜けていく。
どうやら使いこなすには時間が必要か。

「時間切れ、のようだな……」

「はっ、はっ、はっ——もう、大丈夫です……」

「何か異常はないか？」

「いえ、今のところは……」

「そうか、今日はもう休め」

「う、はい。あ……」

踵を返すと同時に未だに地面で寝そべるチャチャゼロが目に入った
のか立ち止まった。

「チャチャゼロはこっちで連れて行くからさっさと行け」

「う、有り難うございます。ごめんチャチャゼロ……」

それだけ言うと彼女はフラフラとその場を去って行った。
少しは自分の状態を把握しろと言っているだろうに……。

「御主人ハ大丈夫ナノカ？」

体と手の拘束を解かれチャチャゼロは上体を上げた。

「わからん。あのような術式使った事ないからな……」

「ソウ、ダヨナ……、御主人……」

「やってみるか……」

「エ？」

《え？》

「タン・レスタン・アルターアンタレス 闇夜を巡る星の瞬きよ
永遠と無限の狭間にて 全てを超えて変革せよ——」

《ちよっと、それはっ！》

「——定めを歪め糸を断て 冒涇の選択を経て闇へと至る光
『崩壊する均衡』 術式固定 掌握！！ 魔力充填！ 術式へ——
——」

魔力が渦を巻き岩山に輝を入れ砂を巻き上げる。

その瞬間、溢れる極光が夜を照した。

「……ドウナツタンダ？」

既に辺りは光が収まり静けさと暗さを取り戻していた。

「アニキ？」

チャチャゼロは周囲を見渡すが誰の姿も見当たらない。

「チヨ、オイ?! ドコ行キヤガッタ」

ヴーン。

「ここだ」

「ナツ、イツソコニ……」

突如消えたかと思えば突如光を纏い現れたことに文句を言おうかと思えば、

バシユツ……ドサツ……。

「ハ？」

魔力が抜け光を失うと同時にクレスがその場に倒れた。

「実際の使用時間5秒と言ったところか……」

「何ダッテンダヨ」

その質問に答えることなく、
パキン。

乾いた音をたてクレスは姿を消しクレマンズが現れた。

「はぁ……本当に死ぬかと思った」

「アネキ？」

「あーチャチャゼロだ。なんかちよつと久しぶりな気がするよ……」

「何が起コッタノカサッパリダゼ……」

「いやぁ、それはね……」

「兄様！今……って、姉様？」

先に戻ったはずのエヴァンジェリンが血相を変えて戻ってきた。

「あーエヴァ。もう休んだんじゃないの？」

クレマンズの軽い調子にエヴァンジェリンは勢いを崩される。

「あ、いえ。今さっき凄い魔力と光がこちらから出ていたので何事かと……」

「うん、ちょっと禁術を使ってね。そのせいだよ。大丈夫だから、ね？もう休んで」

「アネキ……？」

「禁術、ですか……？無事ならいいのですが。あ、チャチャゼロは……」

「少し話してたところだから、私が連れてくよ。だからエヴァは早く戻ってしっかり休むこと。師匠命令です」

「え……あ、はい。わかりました。お休みなさい」

そう言うのと先ほどよりも幾分しつかりした足取りで少女は戻って行った。

何度か振り返りながら……。

「ソレデアネキ。何デアンナ嘘ヲ……？」

「一歩間違えば存在が消えてたよー、とか言ったらエヴァの事だから泣いて怒りそうじゃない？」

「イヤ、ソレハ……ッテ、存在ガ消エルッテナンダ？」

「まあちよつと世界の法則を捻じ曲げると言うか……。まあ消費魔力が多すぎて闇の魔法で取り込んでも5秒が限界みたいだし。終わったら終わったで魔力が全然残らないし、……使いどころがないね」

「何デソソナノ使ッタンダヨ……」

《『闇の魔法』で闇に相対する光、その極地とも言える「星」を使ったらどうなるかと言うただの好奇心だ》

「馬鹿でしょ？」

「……………」

沈黙は肯定である。

《……まあ、選んだ術に問題はあったかもしれないが星魔法自体に問題はなかった、だが『闇の魔法』の問題はだいたいかった》

「本当カヨ……？」

《ああ、あれは文字通り『闇』を、全てを取り込む魔法だ。私はクレマンズという自身を見つめる術を持っているが普通はそうじゃないだろう。闇を、自分の全てを受け入れてなお己を持って自分自身である、といわれる者でなければ最後は闇に吞まれるだろう》

「ドウ言ウ事ダヨ？」

「あの子はまだ自分の全てを、負の側面とか何かを受け止められていないのかもしれない……」

《全てを孕み尚且つ包む、それが闇。光、星魔法でさえ受け入れられる『闇』の正体だ。素養があれば拒まれん。が、親和性が高すぎても簡単に呑みこまれ闇へと堕ちる。自身の闇を制御出来なければ堕ちて暴走するか壊れるか……、どうなるにせよ良い事ではないな》

「既に真祖の吸血鬼っていう破格の存在であるエヴァなら一時的に暴走はしてもこれ以上堕ちる事も自我を失う事もないだろうけど十全に力を発揮する事も出来ないでしょうね」

堕ちる事もなく暴走の危険性も限りなくない、だが100%の力を発揮はできない。

そう言う事である。

「御主人……」

「あの子次第だけど支えてあげてね？」

「ケケ、ンナノ当たり前ダロ。オレノ御主人ナンダゼ？」

「良い子良い子」

「チッ、ヤメロヨ」

「照れてる照てる」

「照レテナンカネーヨ。早く足ノ剣取ツテクレヨ動ケネーダロ」

必死に足を縫い付ける剣に手を伸ばすがいかんせんチャチャゼロの手では届かない。

「まあまあそんなこと言わずに」

「撫ンナッ。アニキドウニカシテクレヨ」

《疲れた……》

「チヨ、アニキ頼ムゼ……」

「うふふー」

《寝る……》

「アー御主人、戻ッテ来テクレネエカナー……」

この後十分にわたって愛でられるチャチャゼロの姿がそこにはあったとか……。

少女の問題は未だ終わってはいない――――

闇の魔法（後書き）

ストックが増えるとテンションひいては製作のモチベーションが上がる

斬撃連続同時展開

某虚刀流の「打撃技混成接続」みたいなもの大した意味は無い

秘剣、風塵乱舞

本来は手裏剣術

ネギま的には「奥義」になるのかしら……

クレスは仕込んだ小型の暗器を放出しチャチャゼロの体を縫いとめた

術式兵装『闇氷乱舞』

接触時に対象を凍結させる

速さと防御を重視した形態であり攻撃力はあまり変わらないが凍結効果がそれを補う

闇

詳しくは単行本を参照

この場合の闇とは属性の一つではなく全て、『全』である。

負の側面から過去から現在に至るまで、更には未来と言った自身に纏わる全てを含めた事

『闇の魔法』

詳しくは単行本（r y

作中にある通り、エヴァは自身の全てを完全に受け入れられていないもよう。よくある迷いがある、的な状態と言える

その為に十全の力を発揮できない、故に『闇氷乱舞』は出力が低く使用効率も悪かった。

だが既に真祖と言う破格の魔と言う存在であるためいくら使おうが基本的なペナルティは存在しない

使う分には問題が無い

十全扱うには上記の「闇」を受け入れる事が必要、当然光だろうが星だろうが使用は可能。

全てを受け入れる、と言う行為の難しさが咸卦法に匹敵するとされる所以

全へと至るのが咸卦法、全を受け入れるのが闇の魔法過程が違っただけで目指している場所は同じようなもの

『崩壊する均衡』

詠唱は「闇夜を巡る星の瞬きよ 永遠と無限の狭間にて 全てを超えて変革せよ 定めを歪め糸を断て 冒涇の選択を経て闇へと至る光」

効果は不明。莫大な魔力を消費するらしい

術式兵装『?????』

『崩壊する均衡』を取り込んだ状態

取り込んで使用して稼働時間は精々5秒

使用者との体感時間に関係があるらしい

取り込む際に発生する魔力気流による波動は周囲に物理的な干渉を起こすほどらしい

また目にも映らぬ速さでの移動が可能らしい

一歩間違えれば存在が消える、らしい

らしい、ばかりとなっていてるが実際のところ自身を光に変換し粗方の物理法則を無視する

取りあえず好奇心で発動した結果、瞬間で地球の自転、公転と自身の位置、速度がズレること宇宙に放り出され戻ってくるとかそんな事をしていた

また光になった事で物体としての概念が無くなり制御に失敗すると自然と同化し消滅する

チャチャゼロ

何だかんだ言って主人が（ry

エヴァンジェリン

疲れてる

闇の魔法が成功したは言いがどうしていいのかわからない。
ある種の壁に当たった

クレス

馬鹿

クレマンスという鏡が全てを受け入れている事が闇の魔法の使用を可能にする

クレマンス

馬鹿の被害者

クレスと言う鏡が全てを受け入れている事が闇の魔法の使用を可能

にする

対話の試み（前書き）

今回も一応ルビ使用。カタカナ多く読みにくい警報。
カタカナが読みにくいし纏まらないせいでも文字数が多く
なる……。

対話の試み

———闇は、自分が見たくない、目を逸らしたいものだ。負の側面を自覚して受け入れろ———

兄様はそう言った。

———闇は全。そう、全てなんだよ。エヴァも、エヴァが抱く思いも全部を含めたものがエヴァであって闇なんだよ———

姉様はそう言った。

私はどうすればいい……？

ベッドで一人、エヴァンジェリンは光を拒むかのように横になっていた。

どれだけの時間が経ったのか少女は微動だにせずそこにいた。

「ナア御主人サツキアネキガ……」

部屋に入ってきたのは従者である小さな人形。

体を横にし続ける主にカタカタと体を揺らして近づいていく。

「寝テルノカ？」

ベッドへと上り声をかけるが主は返事をしない。

それを確認したチャチャゼロは主の頭にそっとその小さな手をのせる。

「……ナア御主人、オレハ御主人ノ悩ミヲ解決シテヤルコトハデキ
ネエケド一緒ニ悩ム事グライハデキルツモリダゼ？」

「マア、オレハ基本戦ウ事シカデキナイケドナ……。ソレデモ御主人
ガ頼ツテクレタラ……。マアナンダ、嬉シインダゼ？」

それだけ言うに従者である『少女』は手を離しベッドから飛び降りる。

「ア……、コンナノオレノキャラジャネエ……。コレモ全部心
配サセル御主人ガ悪インダ、クソッ」

頭を抱え悪態を吐きながら、

「マア、オヤスミダ御主人」

扉を閉め部屋から出て行った。

この後何故かクレマンズに主へと語りかけた事が知られておりその
事だからかわれるのはまた別の話。

己の従者が出て行って何分か。
むくり、と少女は起き上がり、

「チャチャゼロ……有り難う……」

小さくそう呟いたのであった。

ずっと考えていた、そして思った。

兄様と姉様のように私も自分を投影出来れば、それと対話すること
で己のを見つめ直せるかもしれない
なら自分の影となる存在をどうにか作る事から始めよう。

「そうと決まれば……」

部屋から飛び出したエヴァンジェリンは兄たちがいる部屋へと駆け
入る。

「兄様、姉様、ついでにチャチャゼロ！」

「ツイデカヨ……」

「私は自分と向き合いたい。だから、手伝ってください」

入ってきた勢いそのままに口を開き彼女は頭を下げた。

「お願いしますっ」

「ふふっ」

《はっ》

「ケケ」

三者三様の笑いを浮かべ、

「もちろんだよ」

《任せろ》

「アタリマエダゼ」

返事をした。

使用者との繋がりと闇への繋がりを持つ影という最適な属性魔法を基礎としそこに幻術を加えエヴァンジェリン自身を投影。

それによりエヴァンジェリンの分霊体と呼べる存在、偽エヴァを制作。

現実世界でも活動できる分霊だがそのあり方から幻想世界での活動の方が適合性が高い。

そのため分霊体の住処のとして幻想空間を用意。

幻想世界構築の魔法円を羊皮紙に刻みそこへ偽エヴァを封印。

あとは使用者の精神を内部の空間へと引き込む術式を加える。

何度か改良を加えた結果式が長くなり巻物状となってしまうがこれで完成である。

ちなみに余談だが現在偽エヴァは本体と同じ力を有しているが「分

けられた幻」と言う設定上一定以上の力を持つ事が出来ないためこれから先本体が強くなるにつれ力量差が生まれてくると思われる。まあ分霊とはいえ真祖の吸血鬼という破格の存在であるのに変わりはない。

「完成だよー」

巻物を手にぐでつ、と体を机に倒しクレマン스가宣言した。

「ケケ、ヤットデキタノカ。待チクタビレタゼ」

「お前は最初の資料とか集める時しか動いてないからだろ……」

半眼でチャチャゼロを見つつエヴァンジェリンが嘆息する。

《なにはともあれ後はお前次第だ》

「はい」

返事と共に巻物を自分の前に広げた。

「必ず物にしてみせます」

描かれた複合魔法円陣が輝きを放つ。

「うん、待ってるからね」

「頼ムゼ御主人」

《信じろ、全てを》

「いってきます」

エールを受け少女は幻想世界へと入り込んだ。

《魔の属性その極地、闇と最高の融和性を持つとも言えるエヴァは精神と肉体の同調率が高い。精神世界で受けた傷が反動としてこちらへと現れるだろう》

「傷ツテ、戦ツタリスルノカヨ。大丈夫ナノカ？」

《相手は自分だ、それに本来完全に受け入れなくても生きていけるものだ。それくらいの覚悟は必要だ》

「再生能力が高いからね。大丈夫だよ。まあその時の為に血を拭く準備でもしようか。私はお水持ってくるからチャチャゼロは拭くための布を持ってきて、沢山だよ」

「リョーカイダ、任せナ」

言うや否やその小さな体を最大限動かし従者たる人形は駆けだした。

《問題は肉体よりも》

「その精神、の方なんだけどね……」

眩き齎されたその言葉に疑問を抱く者は誰もいなかった。

「ヤア、初メマシテダナ私」

「……もう一人の私」

「自分ト、自分ノ闇ト向キ合イタインダロ？」

「……………」

「ソレデ、ドウダ感想ハ？」

「つ…………分らない」

「ソウカ…………ナラ死ネバイイ」

「なっ…………」

パキイイイイン。

空気に輝を入れるかのような音と共に分霊はその腕を振るう。

「馬鹿な『断罪の剣』だと。私はまだ…………」

「コノ魔法ヲ習得シテイナイ？ ハッ、ココハ幻想ノ世界ダゾ？ オ前ノ思イハ私ノ思イダ、兄ト同ジコノ力を振ルイタカタダロウ？ 私ハオ前ノ全テヲ知ッテイル」

「思いの力が…………ならっ、リク・ラク・ラ・ラック・ライラック

慟哭せよ咎人 振り下ろすは執行者 罪を斬り業を祓え 処断の刃
魂に刻む 穢れなき断罪の刃を今ここに 全てを虚空へ帰せ『断
罪の剣』」

信じた幻想。

そこに手にするは影と同じ極低温からなる処断の刃。

「ハハハ、出来ルジャナイカ」

ギシギシと互いの刃をぶつけ合い拮抗する。

「闇ヲ知り、飼イ慣ラシタインダロ？ナラ全テヲ晒セ。己ノ闇ガ何カヲ真ニ自覚シテミセロ」

「闇の自覚……」

「今デモ……」

「？」

「今デモ夢ニ見ルダロウ。血ヲ吸ツタ時ノ事ヲ、誰カヲ殺シタ時ノ事ヲ、私ヲ見テ恐怖デ顔ヲ歪メル人ノ事ヲ」

「っ……だったら何だと……ッ」

「アノ日アノ場所デアノ男ニ出会ワナケレバ私ハズット幸セデイレタハズナノニ、ト」

「私は……今に後悔など、ない。満足、している……」

「本当ニ？アノ日アノ村ニ行カナケレバそにあニ出会ワナケレバ彼女ハ焼カレル事モナカタト思ッテイルダロ？自分ノセイデ不幸ニシタト、コノママデハ師ニモ迷惑ガカカルト、コンナ身ノ私ガイルカラ、コンナ体ニナツタカラト思ッテイルダロウ」

「そ、それは……」

「理解シタカ？自覚マデハさーびすダ、悲劇ノひろいん。ソレラノ思イヲドウ受ケ止メ次ヘ持ッテ行クカハ自分デ考エロヨ私」

キ。イイン、

刃を振り分霊は距離を取った。

「なら、どうしろと言うんだ……私は……」

「……闇トハ全テダト聞イタダロ。善ヤ悪、光ト影ノヨウニ分ケラレルモノデハナイ。全テノ始マリデアリ全テヲ内包スルモノ、ソレガ闇ダ。即チオ前ハ全テヲ包ミコム程ノ力、オ前ガ抱クソノ思イノ全テヲ受ケ止メ前ニ進メルダケノ、闇ヲ抱エラレルダケノ答エヲ得ヌ限り闇ノ力ハ永遠ニオ前ニハ扱エナイ」

「それは、どういう……」

「私ハ一個ノ完成シタ魔ダ、故ニ失敗シテモコレ以上墮チル事ハ無い。ダガ答エヲ得ヌ限リドウ足掻イテモソノ力ヲ全テ使ウ事ハ出来ナイ」

「本当に先に進むた為には答えを得るしかない、と言う事か」

「ソウダヨ」

そう言つて分霊は断罪の剣を手に再び構えた。

「サア私ダケノ答エヲ探セ。何デモイイゾ、ソレガ全テヲ抱エ込ミ闇ヲ扱ウニ準ズルナラナ！オ前ハ何ノタメニ、何ヲ願イカヲ振ルイ欲スルツ！兄ト姉ト仲良ク暮ラシタイ？チャチャゼロト、アノ子ノ魂ト寄り添ッテイタイ？ソレトモ吸血鬼トシテ血ヲ欲シ他ノ存在ヲ犯シタイ？意思ヲ貫ク為ノ力ナンドロウ？ココデ使ワズシテ何ノタメノ力ダ！」

「く、私の力は……」

「ククク。ナンダ、ソレトモ……もとの体に戻つて幸せに暮らしたいと今でも願っているのか？」

その一言で一方の剣が崩れ障害をなくした一方が無慈悲にその刃を走らせる。

「私は、私はっ——」

悲鳴のような声が響くのと同時に冷たい爆風が辺りを満たすのだった——

対話の試み（後書き）

ほぼ全編にわたり分霊エヴァのセリフがカタカナなのは原作から見ての仕様です。

「悲劇ノひろいん」

分霊のセリフ

ああ、なんて不幸な私

心のどこかでそう思っている部分が無きにしも非ず
それを分霊が口に出してしまった

肉体より精神が問題

肉体損傷は治癒出来ても精神が死んだ（諦めた）場合肉体の状況に
左右されず死亡する

前々話の魂の説明にありように肉体と精神の関係いよるもの
ある種不死身の存在を殺す方法と言える

ネギと違いエヴァに肉体的な死は観測されないため現状これしか適
応されない

闇（2）

闇とは自分自身のことさしている。

自分自身の理解、把握を行う事で自身の感情、意思、認めたくはない負の側面を理解する。そしてそれを否定することなく、抱え込み前に進めるだけの答えが無ければ闇の力、自分自身の力を完全にコントロールすることはできない。ということ。

ここに起こる答えとは力を振るう理由や力とは何か、ではなく心の奥底で願う事柄、力を求める理由である。

前話説明に有る様に闇の魔法同様「全」を成す咸卦法

それが気と魔力の統合、即ち調和ならば闇の魔法は制御である。

やはりどちらも似ていて要はイレギュラー、波を起こさない、と言う事である

チャチャゼロ

結局は主人（ry

エヴァンジェリン

吸血鬼にならなかつたら、人間に戻れたら。そんな「if」を一度も願わないはずはない。

兄妹、チャチャゼロと一緒に平穏無事の生活を願わないと言う事もない。

これらの願い、思いその実、結局のところ同じ単純な一つの事であるそれが答えであり力を求める理由でもある

また全てはこんな自分が悪い、という譴責や呵責などと言った事で苛まないことなどない。はず

えう、あんじえりん（分霊）

今本体とは同じ強さ、その内に差が出始める

彼女の言う「才前」Ⅱ「私」である

私はお前の全てを知っている

文字通り全てを知っている

特に影と言う性質上、己の影、後ろ暗い部分、闇に関しては熟知している

全て知っているとと言う時点で熟知も何もないのではあるが……

クレス

長年の研究、経験から特異な術式はお手の物と言える

クレマンズ

アリアドネーでの活動を考えれば資料探しは得意分野と言える
チャチャゼロ可愛いチャチャゼロ

ただ一つの思い（前書き）

もうどうにでもな—れ

ただ一つの思い

エヴァンジェリンがその精神を書へと飛ばして既に半日以上。

幻想世界へ入り幾許もしない頃には、

「ぐ、あ……」

呻いてはびしゃ、

そんな音と共に体のあちこちから血を流しては傷が瞬時に再生するを繰り返していた。

流れた血はそのまま体を濡らす。

それを片時も離れず拭い続けるのは彼女の従者。

「御主人……」

チャチャゼロの表情は些か暗い。

それでも手に布を持ち続ける。

これをやめてしまえば後はただ信じて待つ事しかできないのである。

「初期の設定ならば既に内部で六日は経過しているはずだが……」

彼女等のすぐそばで椅子に腰かけクレスは呟いた。

《まだかな……》

それに続くようにクレマンスも呟いた。

「あれに限った事ではないが誰しも闇など簡単に理解できるものではないだろうさ。だがまあ、あれ自身が魔に属する以上それを自覚することや抑え込むだけならそう難しくはないだろう。受け入れ、力として自在に制御を、飼い慣らせられるかどうかは別だが……」
《あの『闇の魔法』を使いこなすのには必要、だよね》

無論その為のスクロールと分霊である。

「何だかんだ言って甘い奴だからな。これから先一人になり辛い目に遭った時にそれを見つめてなお己が准じ殉ずるだけの、自分だけの答えがなければ潰れるだけだ」

《せめて優しいって言ってあげられないの？まあクレスがここまで生きてきた答えは『本当の私』との約束はあなただけのものだしね。共有なんてできないのは当然か》

ソレを扱いこなせるだけの答えも意思も人それぞれである。

他人の答えによる借物ではソレを得られない。

「ふん、『お前』がいなかったら私だってこの身体と化した自分を完全に受け入れられなかっただろうさ」

《あの子が素直じゃないのは兄であって師でもある人の影響なんじゃないかと最近よく思うよ……》

「お前が表だって出ていれば素直な子だったと？冗談だろ」

「アニキ、御主人ハオレガ一人ニサセネエカラ……」

「はっ、良くできた従者だ」

《ホントにね……。そんな君と御主人が帰って来た時の為に……》

「美味しい飯でも作っておいてやる。楽しみにしておけ」

「オオ、ソリヤ遣り甲斐ガアルツテモンダゼ」

そう言う『二人』は笑みを浮かべながら調理場へと足を運んで行った。

「ダトサ御主人、ダカラ早く戻ッテコイ……」

「おいおい私、随分無様だな。もう諦めたらどうだ？別に死ぬわけじゃない。今のままでもいいだろう？私には勝てなかったが十分力は持っているだろう。ここは鍛錬の場にもなるしな」

ニヤニヤと笑いながら分霊体であるエヴァンジェリンが嗤う。

「うる、さいっ……」

「もうわかっただろう？私は確かにお前自身だがその思いだけでは、その過去への衝動だけでは闇と言う全て足る私にはなれない、届かないと」

「……………」

「諦められないか？ならヒントをやろう。闇は私の全てだと言っただろう、どういう意味か考えろ。お前の考えた貴族の娘としてのエヴァンジェリンへの、あの頃への思いが全てではないのだよ。いや、それでは足りないのだよ。お前は、何者だ？」

「ウ……アアア——ッ」

「ははっ、いいぞ。それが吸血鬼／私の力だろ！」

「アアアッ！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 来たれ氷精
大気に満ちよ！ 白夜の国の凍土と氷河を 『凍る大地』」

大地から数多の氷柱が偽物を捉えようと伸びる。

「ははは、過去からの思いと今に至る力を得たぞ、だが……」

それを避けてなお分霊は嗤い続ける。

「闇は全てだと言ったろう。光だ影だとわかるものではない、始まりにして全てを包む混沌、それが闇だと」

放たれる拳打は同じ存在とは思えないほど重い。

「くうッ……」

「私の衝動は、欲しいものは、願いは何だ！」

「私はただ生きたくて、死にたくない、だけで……」

「違うだろう！欲しかったものは何だ、その身へと堕ちてなお死なず力を求めたのは何故だ、従者を作り師を求めたのは何故だ、過去を忘れられず、死なず生き続けたいのも全てはソコから来るたった一つの、単純で、ありきたりで、それでも何にも劣らない、願いを、渴望したからだろう！自分の不幸を抱えても進み掴みたい思いがそこにあるだろう！」

「私の、渴望……掴みたいもの」

「そうだ、自分にここまで言わせてそれが分からないようならその
思いを永遠に鎖してくれる！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック
来たれ氷精 闇の精 闇を従え 吹雪け常夜の氷雪 『闇の吹雪』」

暗黒を纏った吹雪が一直線にエヴァンジェリンへと走る。

「私が掴みたいものはっ……！」

何かを掴むかのように『闇の吹雪』へと右腕が差し出された。

「はっ、こなしてみせろ私だろ……」

先ほどまでとは違い穏やかな笑みを浮かべ影は眩いた。

轟々と迫る嵐はエヴァンジェリンの差し出された手へと渦となり集束する。

掌握。

魔力充填・術式兵装『闇氷乱舞』

蒼い光を纏い静謐な冷気を湛えたエヴァンジェリンがそこにいた。

「ハハハハ、さあ来いその思いが、答えが本物なら使いこなせるはずだ、真価を発揮した『闇の魔法』の力を見せてみろ！」

「ああ……行くぞ」

その顔には喜びも悲しみもないがただ穏やかな空気を醸していた。

「はは、以前とは比べ物にならないじゃないか。……私の役目も終わりのようだな」

地に体を倒し影たる分霊は自分を見つめた。

「その答えを忘れるな。もしかしたらこれから永い時の中で諦める事があるかもしれない。諦めるのは勝手だがその思いがあったと言う事は忘れるな……。その渴望は……」

「ああ……私はただ、人並みでいい。平穩が、幸せが欲しかったんだ……そうだろう？」

「そうだ、力を得れば、誰も近寄らなくなれば傷付けることもなく平穩が得られると思った」

「兄様にはその事で幾らか窘められたがな……」

「私は行くよ。有り難う私」

「どういたしまして、私」

「また来る」

「そうか？なら、待っているよ」

こうして熾烈な己との邂逅を少女は終えた。

「遅い」

《まあまあそう言わずにさ……》

「モウ少シデ完全ニ冷メチマウトコロダツタゼ」

現実で目を覚ましたエヴァンジェリンの目に最初に映ったのはテーブルに並べられた料理と口々に好きかって言う家族のような人たちだった。

「っ……」

「チョッ、ドウシタンドヨ御主人」

突然涙を浮かべた主に道化のような従者も流石に焦りを浮かべる。

「もう、クレスは引っ込んで」

《むう、私が何をした……》

いつの間に入れ替わったクレマン스가エヴァンジェリンの背を撫でる。

「どうしたの？」

「いえ……私は、幸せ者だと、そう思ったんです」

「そっか」

泣きやむまで彼女はそつとエヴァンジェリンを撫で続けるのであった。

泣きやんだ少女は幾らか冷めてしまった料理に文句も言わずそこにある幸福を噛み締める様に嬉しそうに食べるのであった――――

ただ一つの思い（後書き）

もうエヴァンジェリン編終わるんだ……

原作で私はもう人並みの、と言っているところから「幸福」で良いかと思ったのです。

ソレ

闇

『本当の私』『お前』

オリジナルクレマン

クスと言う存在のあり方、理由が闇でありそれを悪魔の腕かつこいいねや、白い髪もステキとか言って鏡が受け入れた

全てをなくしたクスに別れの際生きる目的、理由（光）を与えた。

自身の存在を彼女が受け入れた事が全ての救いであり異端存在であるクスにとっては生きる理由を成すには必然敵に力を振るわなければならぬ。

鏡による闇の受け入れ、先へ進むだけの意思が『闇の魔法』の使用可能にした

単純だがそれ故に強固

エヴァンジェリンと『闇』

※前話との纏めと考察的なもの。本文中にない事を多分に含みます。

脳内補完してください。

『悲劇のヒロインⅡ嫉妬心』

人が幸福なのは羨ましいし妬ましい、自分はこんなになって。私は可哀想……

『過去への思い、吸血鬼としての自分、未来への期待と恐怖』

あの頃に戻りたい、しかし他者を害し脅かす吸血鬼として生きなければならぬ。そんな自分は幸せになれるのか、なってもいいのかそんな罪悪感、自責の念、幸福になる事への恐怖と迷い

幸せだったあの頃、兄妹と従者に囲まれ平穏に過ごしたい今、人並みで良いから幸福になりたい未来
求めるものは『幸福』

今いる人たちと共に昔の様な幸福を得るために力を振るう
昔は確かに愛おしい、しかし今の自分を持って幸せになれなければ意味がない。その為なら誰かを傷付ける事になっても……

エヴァンジェリン

「人並みでいい、幸福になりたい。これが私の渴望だっ」
遂に生きる目的と言う光を見出す

えう、あんじえりん

文中のお前Ⅱ私。私Ⅱ闇、と捉える事ができる
もう出番は（ry

チャチャゼロ

「マカセロヨ御主人」

結局は（r y

クレス

「クレマンスがいなければ私はここまでこれなかっただろうな」

クレマンス

「本当の私が今の私みたらどう思うんだろう？」

結局しっかり纏まってる気がします、はい
私の文才なんてこんな物ですわ

月下奏送

魔法世界・ヘラス帝国首都ヘラス。

「いやあ、久しぶりです。兄さん^{あに}、姉さん^{あね}も」

そんな以前と変わらず軽い口調で奴は私に挨拶をしてきた。

「なんだ、元気そうじゃないか」

《そうだね、もっと寝たきりみたいなのを想像してた》

「あははっ、見た目だけですって。もう、持ちそうにありません…」

三百年以上を生きる人狼、王・雲狼は静かにその命を終えようとしていた。

「で、そちらのお嬢さんは？ 子供、ってわけじゃないんでしょう？」
《妹みたいな》

「弟子だ」

「初めまして、エヴェンジェリンです。こっちは従者のチャチャゼロ」

「ヨロシクナ」

「ふむ、長寿な種族なんで？」

「いや、違う」

「おや、じゃあ普通の？よくもまあ弟子なんか……」

《不死なんだよ》

「は？いや……え？」

「真祖の吸血鬼だ。まだ百年と言ったところだがな」

「な、なんちゅう……。今ので死んだらどうしてくれるんですか……」

「はは、お前がそれで死んでいるなら初めて帝都守護聖獣を見た時に死んでいるだろう？」

《ふふっ……確かに》

「あの時はまだ若かったですし……って、お嬢さんどうしたんだいそんな顔して？」

過去の話に花を咲かせ始めたところでユンがエヴァンジェリンの變化に気付いた。

「あ、いえ。兄様も姉様もそんな風に笑う事なんて滅多にないもので。ちよつと驚きました」

「確カニナー。驚キダゼ……」

「あーなるほど。確かに、特に兄さんなんて表情すらあんまり変わらないですからねえ。姉さんも表情は動くけど笑うのは人からかう時ぐらいで……」

その時の事を思い出しているのかユンの顔が僅かに顰められる。

「失礼な奴だな」

《ちよっとそれは失礼なんじゃないかな?》

その事を同時にクレスとクレマン스가非難するが、

「っ、あははははは……—」

「ケケケケケ」

唐突に笑いだしたエヴァンジェリンとチャチャゼロに視線が集まる。

「どうした?」

「いえ、二人の知らない一面を見れたような気がして……」

「ダナ。衝撃ノ光景ダゼ」

小さな主従からすれば兄妹、特に兄の方は冷静と言うより冷徹とも言える印象があるため友と話し笑うと言う光景などこれまでなかったのである。

「じゃあ今日はそんなお嬢さんに俺の知ってる兄さんと姉さんの話でもしてあげますよ」

「本当ですか? 楽しみです」

「本当カヨ、コリヤ酒ガ進ミソウダゼ」

「あまり変な事を吹きこむなよ」

《そうだよ『教育』に悪いからね》

「二人とも私を子供扱いしないで下さいと何度言えば、それに育てられた覚えも有りません」

「なに?」

《えー、そう言う事言うの?》

「御主人……」

「チャチャゼロまで。な、何ですか……」

「おいユン知ってるか? この馬鹿娘私達に師事して欲しいが為に三

カ月も後を付けてきてな……」

「兄様?!」

「本当カヨ御主人」

「凄い執念っすね……」

《あの頃は本当にちよつと変わった十歳の子供って感じで……》

「姉様まで?!」

「クケケ、ソノ話ダケデ酒ガ欲シイクナルゼ」

「まさかコツチに來ない理由がそれだったとは……うーむ」

「お前とて子供らに影響があると嫌だとか言つて私に來ないように言つただろうに……」

「それはそれ、これはこれって事ですよ。だいたいですね……——
——」

こうして『楽しいお喋り』は三時間続く事になるのをエヴァンジェリンはこの時知らなかった……。

「まあ、ユン君に会わせるためにあの子を連れてきたわけじゃないんだけどね……」

日が変わり日は高く日光が燦々と降り注ぎ気温を上げる頃。

エヴァンジェリンにユンの子供らの相手をさせつつクレマン스는ユンと共に日陰の椅子に腰かけながらそう呟いた。

「確かに俺をあのお嬢さんに会わせたところで意味があるようには

思えませんが……?」

《ちょうどいいと思ったのだよ》

「悪いとは思ったけどユン君の死とあの子との別れを同時にしようかと思ってね」

「はは、そりゃまたなんとも……大丈夫、なんですか?」

「君は他人の心配出来る立場なの?」

「自分の心配したところでたかが知れてますからね。お二人には世話になったしそれぐらい使われてあげますって」

《悪いな、感謝する》

「へへ、やめてくださいよ。兄さんが素直に感謝するなんてらしくないですね?」

《ふん。精々生き足掻いてみせろ》

「ユン君の身内に何かあったら私達の方でも手を打ってあげるからさ」

「そりゃ安心だ。影から『魔人』が味方してくれるなんてほど心強い話はないですわ」

ふう、

ユンが何か疲れたように溜息を吐く。

一息吐いたところで、

「何の話をしてるんですか?」

エヴァンジェリンが自身より小さい子を連れて近づいて来た。

その中にチャチャゼロが紛れているのは御愛嬌、というやつだろう。

「お嬢さんが大切にされてるな、って事ですよ」

「えっ」

「ぷ、っはははは————」

「ちよ、笑うとか姉さんそれは酷いんじゃない?」

「だって、今の「え？」って顔、赤くなっちゃって……本当にエヴァは泣いても拗ねても可愛いねー」

「にゃ、何言ってるんですか、本当にもうそんな……」

本人は噛んだ事が余計に恥ずかしいらしく語尾がボソボソと消えていく。

「ふふ、確かにお嬢さんはなかなか……」

「元気出セヨ御主人……」

「元気出してお姉ちゃん……」

チャチャゼロと子供たちの手が少女の肩に乗りエヴァンジェリンに悲壮感が漂う。

「まあでもお嬢さんが心配されてるのは確かですよ」

そう言って軽くエヴァンジェリンの頭をユンが撫でる。

「あの、子供扱いは……」

「ああこりゃ失礼」

少女が常日頃気にしている事を指摘されたユンは小さく笑うと、

「だがなお嬢さん」

不意に真面目な雰囲気醸し出す。

「お嬢さんのその容姿は武器になる、覚えておきな」

「……はい」

「これから死ぬ奴の戯言だと思って聞いてくんない」

そう前置くと死が迫る身とは思えないほどに真摯で苛烈な瞳がエヴァンジェリンを射抜いた。

「……これから先、絶対に困難が立ちはだかる。必ず兄さん達が助けてくれるわけじゃない。すぐその子が駆けつけ来れないかもしれない。そんな時頼りになるのは自分だけだ。何度も兄さん達に言われてるだろうが自分を信じな。んで、何もかも嫌になったら昔の俺みたいに雪山の奥地で過ごしてもいいしここで俺の子孫を眺めに来たっていい。俺にはもうないがお前さんにはこれからが、未来がある。諦めるな生きろ、どうせ死ぬなら俺みたいに温かく看取ってくれる人がいる死に方をしな」

そこまで言ってユンは一度言葉を切ると表情を和らげ、

「最期さえ良ければきっと全部ハッピーになるさ」

「最期が良ければ……」

「はっぴーニナレル、カ……ケケケ」

「どうなるか、どうするかなんて全部手前の勝手さ、後悔すんなよ」

「はい」

「オウ」

「よし。俺は疲れたしちょっとくら中で休ませてもらいますよ」

断りを入れゆっくりと立ち上がると、

「よしガキ共、中で冷たい飲み物が待ってるぞー」

子供たちに声をかけ中へと消えて行った。

この五日後、日が頂点に達する頃に彼は多くの人に看取られながらこの世を去る。

そしてその夜、涙を流す吸血鬼の少女と悪態を吐く従者はその身を救ってくれた姉妹と別れ違う道へと進み始めた。

何か因果があるのか奇しくも、例の如くこの日は旧世界における神木大発光の日。

何を思っただかクレスは一人心を空へ上がりただ胸に秘めたその思いを音色に込めたただ笛を吹き続けるのであった――――

月下奏送（後書き）

別れはいつもこの日

正直「また発光の日かよ」と書いてる本人が思ってます
くどいと言うかなんというか

現状今後に意味は無いんですけどね……

『笛』

昔、あの時オスティアで貰ったアレ

魔改造されてる一品、一応名前がつけられている
その内にちゃんと登場する

王・雲狼 わん・ゆんらん

久しぶりの登場がまさかの退場劇、ユン君

少なくとも360年は生きた

子孫は沢山いる

クレスと会わなかった、会いたくなかった理由はそれ
エヴァ火刑事件の時は本当に偶然だった、そう言う事

近隣の御意見番的存在だった

ちなみに奥さんは猫科

エヴァンジェリン

子供扱いされるのを逆手に取れ、と言う事

庇護から外れる事で真祖、即ち世間一般に言う悪の扱いについて知
ることで世間ずれし成長し始める

チャチャゼロ

主人の昔話だけでお酒が飲める

子供たちという時は比較のおとなしかった

クレス

また一人になった人

獅子は我が子をなんとやら、そんな心境
心配

クレマンス

クレスほど心配はしていない。母は強し、母じゃないけど……

ガラクタ（前書き）

と書いて聖遺物と読む

どうでもいい話に入った

原作が絡むと思った人はもういないだろう

ガラクタ

イタリア戦争。

神聖ローマ帝国とフランス王国。

ハプスブルクとヴァロワ、以前からあった両家の確執と軋轢は限界を超え半島をめぐっての戦争へと発展した。

その最中半島とは反対の内陸ヴィッテンベルク。そこにクレマンズの姿はあった。

幾分前まで選帝侯フリードリヒが居を構えており彼の人物が死した今は弟のヨハンが後を継ぎ治めている、らしい。

なんでも生前フリードリヒは聖遺物の收拾に精を出していたそうだ。聖遺物、文字通り聖なる遺物。持っていれば死後煉獄で受ける清めの時間を減らす効果がある、と言う物だ。

時にはその者の遺体そのものさえ言う。

もつとも分かりやすく名が通っているもので言えばキリストが磔にされた時に磔刑台となった十字架、頭に被せられた茨の冠に手足を穿ち繋ぎとめた釘、最後の晩餐に使ったという杯と生死を確認するためロンギヌスが刺し血に濡れた槍、そして体を包んだ布。と、キリストだけでこれだけ上がると言うのに聖人伝集である「レゲンタ・アウレア」を見れば聖人など有に百を超える数があるのである。

聖釘のようにいくらでも偽物が出るようなものさえある事を考えればこの世に聖遺物などごまんとあるのだ。

そんな聖遺物を一万五千以上集めたのが先代のザクセン選帝侯フリ

ードリヒである。

その彼が集めた聖遺物は宮殿内の教会に保管されている。

目指す教会位置の目印はプロテスタント教会を示す黒い塔である。

既に日も沈み宮殿内も静まりかえった中で、

《どうせ偽物だろうに……》

「いいじゃない、一万も有れば本物の一つや二つあるって」

《はあ、お前だって期待など欠片もしていない癖に》

「あはは、面白そうな物があればそれでいいんだけどねえ」

スタスタと宮殿内部を誰にも咎められることなくクレマン스는歩く。

《しかしいくら戦時中とはいえ警備が杜撰すぎないか？》

「出会ったのが二人一組が三回で計六人、だもんねえ。別に姿を隠す必要もなかったかな？」

《面倒が起きない事を考えればこのままでいいさ》

「そうなんだけど……って、ここすごい事になってるね……」

木製の扉には一面釘によりマルティン・ルターの「95カ条のテーゼ」とやらが未だに張り付けられている。

《教会のことなどもはや私にはどうでもいいさ。さっさと入れ》

「うん。失礼しまーす」

意味もなく挨拶をしながらクレマン스가扉を静かに開き中へと入った。

「広いし煌びやかだねえ」

祭壇まで一直線に床は続き天井は高く装飾まで施されている。

《フリードリヒは大層金持だったらしいからな。向こう、右手に階段だ》

「はいはい」

《自分で探す気はないのか……》

「私が見てる間にクレスが先に見つけちゃうんだからしょうがないよ」

《……私は落ちる。何かあれば呼べ》

それっきりクレスの声は聞こえなくなり意識内の存在も薄くなる。

「あ、酷いな。半身を見捨てたよ……しょうがない、真面目に頑張ろう」

溜息を吐きつつも彼女は階段を上り出した。

「聖十字架の破片が沢山……聖母マリアの母乳？聖カタリナの壊れた車輪？バルバラの枝……本当にがらくたばかりじゃない。ウルスラ一万一千人の中の五人……聖釘が五本にキリストの聖骸布。ネクターオスの髭、ニノの十字架、聖セバスチャンを射った矢の束にゲオルギオスが竜を殺し槍。ルカの使った羽ペンとマルコの使った羽ペン、ジュリアのか、髪の毛……。あ、アガタの胸をのせたお皿？！イアンの右手……ペドロの歯、ヴァレンタインの祝福を受けた結婚指輪。マグダレナの聖骸布、ユステイノス著「魂について」か……貰えるものは貰うけどねえ」

出るわ出るわガラクタの山である。整理されているとはいえガラクタの山である。

他にもキリストの汗を拭いたベロニカのヴェールやジュリアンの著

「神の愛の十六の啓示」

聖マーガレットやルクセンブルク皇后のティアラなどの装飾品まで節操無しである。

聖遺物以外にも絵画などの美術品が山のように鎮座している。

「風？」

どこからともなく、
ひゅう。

風が彼女を一撫でした。

「クレス？ねえクレスってばっ」

《うん？どうした？》

その意識を沈めていたクレスが反応を返す。

「どこからか風が入って来てるみたい」

《風？窓は……一つか、しかも閉まっているし扉も閉じてある。ならどこかに隙間か又は……》

「部屋か何かあるってこと……？」

《だろうな。ここにいて風が届くということはそう遠くないだろうな、よく探す事だな》

他人事のようにクレスは返事を返すのであった。

風が吹くのを感じてはそちらへ風がやめば移動をやめる、そんな動きを続ける事数分。

「この棚、みたいだね。動くのかな」

行きついた棚は背が高く天井へとその頭を付けている。
見ようによってはこの部屋にはめ込んだかのようにさえ見える。

《こいつだけ高さが違う事を考えれば当たりだろう》

その言葉の通り左右の棚は件の棚と比べ背が低く両方とも同じものであるようだ。

明らかに二つの間にあるこれだけが異彩を放っていた。

《左右へは動きそうにない事を考えれば押すか引くか。取っ手などないようだし押すしかあるまいな》

その言葉に従いクレマン스는棚へ手を当てゆっくりと力を込め始めた。

「ん……け、結構重い……」

ふぬぬ、

そんな逆に力が抜けそうな声を出しながら棚を押し続けると、
がりッ、

石を引っ掻いたような音をたて棚が僅かに後ろへと動いた。

《全体ではなく左右どちらかだけ押してみたらどうだ？》

「りょーかい。ふっ……」

そこから柵はたまにがりがりと言を上げつつ半円を描くかのようにその身を開く。

「階段、かな？」

《の、ようだ。しかし私達の力でも手こずる重さの物など誰が動かすというのだ、設置だけでも大変だろうに……》

「それはほら、実はここにそれ用のアイテムがあったとかさ」

《それは、まあそうか。探す時間も惜しいしな……しょうがないだろう。結果的に開いたことだしいいさ》

「うんうん。さあ行こうか」

一人が入れるスペースが開けたそのは上へと続く急階段。

二人はそれを罨など有れば打ち破ればいい、という気構えで優々と登り始めるのであった――――

ガラクタ（後書き）

プロテスタントは聖人とか定めてないからはずですから聖遺物って
この場合どうなんでしょうね……。
探してる所で鉄の歯車を出して「メタル・・・ギア」ってやろうか
悩んだのはいい思い出です。

聖遺物

作中通り

人体として有名物としてイシュトヴァーンの聖なる右手やザビエル
なんかがある

また仏舎利のような灰や骨なども含まれる

某怒りの目的には人の魂、思念などを吸った呪いの武器やアイテム
的な物のことを言ったりする

フリードリヒ三世

賢明公などと呼ばれる

聖遺物の収集が趣味だったらしい

この作品内では聖遺物以外にも様々な物を、珍しい物を収集している

「レゲンタ・アウレア」

聖人伝集

黄金伝説と呼ばれるもの

フリードリヒの宮殿・黒の尖塔

ヴァルトブルク城とは別のもの

黒い尖塔はプロテスタント教会を示す

現代では宮殿と黒の尖塔すなわち宮殿教会も焼失してしまい基礎ぐらいしか残っていない

「95カ条のテーゼ」も再現されたものが作られているだけである

クレス

今更教会関係とか聖遺物とかどうでもいい

全てを失ったあの時から神や信仰といったものは捨てた

クレマンズ

宝探し気分

オリジナルの生まれついた体質故に神は最初から信じていない

聖剣（前書き）

なんだかんだで50話です。ルビあります

ちなみにこれまで長さに比較すると二章に次ぐ長さ

恒例の後書き解説が非常に長いので見る人は注意

聖劍

結局収拾条件として魔力を帯びた物と興味の出たものを選んだ結果、聖遺物はゲオルギアス、聖ジョージのドラゴンを刺した槍の一本とマグダレナの聖骸布、興味をひかれたものとしてユスティノス著「魂について」と何故か棚にあった貴重そうな最初に活版印刷された聖書であるグーテンベルク聖書初版と絶対的権威と恐怖の英雄串刺^{ベシユ}し公の血、そして……、

スルーズ・ワルキューレ 『戦雷の聖剣』

剣が刺された台座にはそう刻まれていた。

隠し部屋で見つけた詳細不明の銀に輝く美しき細剣。

それは暗闇のそこにあってなお気高く輝き目を見張るほどの霊格を宿していた。

一般人が見てもその姿と醸す空気に息を呑むだろう至高の一品。

闇を斬る光の剣だとか天使たる聖ミカエルの剣だ、と言った憶測による補足も隣に書かれていたが確かにそう言えるだけの物である。

とりあえずそれだけの物を有りがたくいただきクレマンヌ（私）はその場を後にした。

わざわざ砂漠の隠れ家まで戻り持ち帰ったものを検分を開始する。どうやら槍には確かに幾らか竜種に対して殺傷力を増す効果があるようである。

だが本物かと言われればそれは不明としか言えない。

推測にすぎないが槍に宿った力では災害振りまく巨竜を倒す前に槍が壊れてしまうだろう。

次にマグダレナの聖骸布だがどうやら男性に対して束縛と無力化の効果を持っているようだ。

伸縮性などもあり魔力を注ぐ事で復元、形状変化なども可能とする。男以外に対しては少々丈夫な布、と言ったところだが……。

生憎人間でない事も関係してか私にはそこまで効果を発揮しないがこれはクレマンズが持てば……、

《もし今度エヴァにあつたらあげればいいじゃない。私が持つてるって事はクレスにも効果が出ちゃうんだし》

まあそれもそうか……。

聖骸布を武器とは別に影への中へと入れる。

次に本、はいいとして問題はツェペシュの血である。

乾燥し既に粉と化しているが手が触れた途端形状を変え棘のようになりこちらを刺してきたのである。

それだけならまだいいが刺さった場所からこちらの血を、力を吸い始めるのだ。

「吸血鬼を自称しただけのことはある、と言う事か……?」
《それに棘って言うより「杭」なんじゃない?》

私の力を吸た事で本来の力を取り戻すかのように大きさを変え棘から釘、そして杭へと大きくなっていった。

「死しても国を守ろうと言う意志と力を得ようとする思いは健在と、でも言うのか……。やっている事は『魂鎖す悪魔の檻』と同じようなものだがな……」

《どうするのよこれ。牢獄結界、杭バージョンとか使いこなせるの？》

「わからん。まずどう使ったらいいかもわからん。保留だ」

《……私に調べさせる気なんだ》

「お前が持って来たものだろう？ 今検分してるだけ有りがたく思え」
《だってクレスが気にしてたみたいだからいいものかな、って……。はい、私が調べさせていただきます》

「ああ、そうしてくれ」

《そんなことより剣だよ剣！》

「そうだな『戦雷の聖剣』か……。情報がないからな、わからんと言えないがとりあえず……」

見て分かる霊格から退魔効果ぐらいならありそうだが後は魔力を注いで反応を見るくらいだろう。

バチッ、バチチッ、

《電気？》

「魔力の自動変換か？ ふむ……」

《ちよっと……ッ》

静止の声を無視し、
スパッ、と腕を軽く斬ってみる。

「っ……これは」

《うっ……クレス、私まで痛いんだけど、どういう事……?》

「さっぱりだ、傷の治りも遅い……検証の必要があるのは確かだな」
いまだにトクトクと血を流す腕を見ながらそう呟く。

《魔法界、行く?》

獲物に困らないよ?とクレマンズが言う。

「すぐにエヴァンジェリンと出会いでもしたらつまらんだろう。聖骸布を渡すのも当分先だな」

《はいはい、わかりましたよ。でも面白そうな物見つかって良かったかも》

「退屈凌ぎにはなるな。さて、どこにいくかとするか……」

《やっぱり新大陸とか》

「なら転移はできんから船、か……」

過去の経験から船には乗りたくないのだがな……。

《ご愁傷さま。代わってあげようか?》

「……ああ、頼む」

垂れた血を指ですくいながらなぜクレマンズは船酔いしないのか不思議でならない……。

なんてことを考えながら『戦雷の聖剣』を静かに袖へとしまい入れた。

冒険／征服、好きのスペイン人が新大陸にある原住民たちの街へと押しかけているのをしり目に私は彼ら独自の魔術とかを探して調べてるわけだけど……。

「生贄とか結構な事するんだねえ」

《日本にもそんな神話等があっただろう。人柱、だったか》

「やることはどこも同じ、って事？」

《まあ、そうだろうな。魔法によっては触媒を使うのと同じような物だろう。人一人捧げれば大層なものが使える事だろうさ……》

「でもさ、んー……ちゃんと読めないけど毎月のように生贄をささげる？っていうのはどうなんだろう」

《自分達を「法則に従う者」と呼ぶくらいだ。それが長年続く規則なのだろう》

「そうかもしれないけどさ……っ、また出たよ……」

《人気者だな》

相変わらず嫌な事を言ってくれる。

まあ文句を言ったら「彼ら」が消えてくれるわけじゃないけどさ……。

「あーもう、代わってくれる？」

《死人は専門外だ》

「私もだ、よっ」

ザク、

戦雷の聖剣が小気味いい音を立てまた一人還す。
降霊系の術らしいけど流石に……、

「死んでからが本番だなんて、反則、だよっ」

しかもそれなりのダメージじゃ煙みたいになってまた元に戻るとか。刀で切っても魔法で蹴散らしても元に戻るし斬魔剣は効果が高いけど結局元に戻るし……。

《信仰が力、なのだろう。流石の神鳴流も無限の復元には対応しきれないようだな。だがそのおかげで剣の効果が分かったじゃないか》

「そうだけどさ……ああもうっ 『^{トーテンタンツ}死の舞踏！』」

私が剣を振ると同時の聖剣から放たれた幾筋もの雷が彼らを襲い着弾、と同時に雷が炎を生む。

『死者の生を断つ』たぶんそれがこの剣の力。
雷属性による速度重視の身体強化と雷撃、そして死者に対しての圧倒的な攻勢能力。

クレスが腕を切った時に私にも痛みがきたけどたぶんあれはこの剣からしたら数百年も生きている私達も生ける死者と変わらないと言う事であり、クレスと私を繋げるもの、即ちこの剣が魂レベルでの攻勢能力を持っているから。

私達は一応の結論をそう付けた。

実際斬ることしかできない斬魔剣と違い消滅させることができてるので間違いないだろう。

けど、だからって……、

「数が、多いってばー！」

何で私達が、いや「私が」冒険家達の後始末なんてしなきゃいけないのか……。

バチバチという音と瞬間の稲光、その後に起こる炎に混じり彼女の
声_が神殿の中に木霊するのであった――――

聖剣（後書き）

そうですね、今さらですね。私は某怒りの日が結構好きです、はい。
リアルタイム？で見てる人にとっては久しぶりの二話同時更新ですね
最近質はともかくとして良く書けた事に感謝ですね

ゲオルギアスの槍

聖ジョージとも言う竜退治で有名

マグダレナの聖骸布

マグダラのマリアの事

某運命とか何かそんな感じの作品に出るシスターが「フィッシュ」
とかやるやつ

男性に対してのみ強力な束縛効果を持ち脱力や強化無効化の効果も
ある

破れても魔力を注ぐ事で再生する

ユステイノス

または聖ユステイノ

キリスト教こそ正しくロゴス、真理であり異教はそれから離す悪魔
といった哲学の人

「魂について」現代では消失してしまったものである

グーテンベルク聖書

最初の活版印刷された聖書その初版。即ち人間の知、真の文明の幕

開けを知らせる一冊である
ちなみに日本にも同じ聖書が保管されている
無論初版などではない

ツェペシュの血

畏怖の英雄ヴラド・ツェペシュ。ワラキア公ヴラド三世
一般的にドラキュラと言ったらこの人だと思われる
その血液、が乾いて粉になったもの
魔力などを養分として吸収する性質がる
力を得る事で肥大化し杭の様な棘を増やし花開く
牢獄結界、杭バージョンと言われた通り最終的には魂さえ捕食する

余談だがツェペシュは「串刺し公」の意味
その方法で多くの処刑を行ったことからの
また自らそう名乗ったこともある。

今では吸血鬼即ちドラキュラ、ドラクレアは自ら名乗っている。
これは父親がドラクルと矢ばれていた事に起因する
王の絶対性を示す恐怖政治を行い国を守った英雄でもある

『戦雷の聖剣』（するーず・わるきゅーれ）

謎の物体と言う名の細剣。ゲストキャラならぬゲスト武器
由来は不明

高い霊格によつて退魔効果と魔力の電撃変換と身体強化を可能にする
また性質上電気と相性が良く避雷針としてはうってつけである
その能力については作中で『死者の生の否定』という一応の結論を
出している

一応それも正しくはあるがしかし本来は『魂の異常者の否定』である
死すべきもの、本来は死んでいる者、などに対し攻撃能力が飛躍的

に上昇する。

その力を帯びた電撃ないし斬撃は該当者に当たった場合見た目に合
わず強力な威力、減退、消滅効果を発揮する。

それにより直接切られた場合はクレスのような存在でも回復が遅く
なる。

そのため作中では血が出続けており繋がるクレマンズも精神的とは
いえダメージを負った。

程度が低ければそれだけで致命傷となり、この剣の攻撃が異常に効
く場合は相手が普通ではないと言う事を示す。

またこの機能は自動判別であり過去話で肉体と魂、そして意思の話
があったがそれを見捨てるものでありつくられた存在である『魔法
世界人』や霊のような『精神体』等に対して必殺の武器と成り得る

『死の舞踏』（とーてんたんつ）

前述の戦雷の聖剣から周囲に電撃を放つ、基本的には無差別攻撃

その力により亡者を一掃した

炎が上がったのはただ電撃が着火しただけ。魔力を用いれば任意で
の発火も可能

どうでもいいが火がついた事で概念的に死者への攻撃力は増してい
ると言ってもいい

降霊系で傷が煙みたいになって再生する死人

「煙を吐く鏡」を始め数多の名を持つアステカの神テスカトリポカ
に由来する術

生死や運命を司る一面や呪術に関する一面を持つ神である

その力を降ろす事で不滅の兵士となった

信仰を依代に己の身をささげた戦士たちのなれの果て

斬ることしかできない斬魔剣

霊体のような存在としてレベルの低いものならば滅する事が出来るが

今回相手にした無限再生する半不滅存在と言った存在に対しては切ることはできても滅することはできない。

再生を許さないほど大量に放ち細切れにして滅するか原作で刹那が使った極大雷鳴剣のように全力で放てば話も変わるだろうがそんな事をしていては対象の数があるだけに流石に疲れる。

また仮に切る物を選ぶ事が出来る『二の太刀』により原因の術式や魂そのものを切る事ができれば対処は可能。

斬魔剣は霊等の精神体と言った実体のない対象や魔族などに効果がある技であり文字通り魔を斬る技であって滅する技ではない。

クレス

最近やる気がない

船酔いは克服できないもよう

クレマンズ

楽しそうな事に労力を使いにはするがそれで起こる面倒事は嫌
戦雷の聖剣は結構気に入ってる

異変・初陣（前書き）

先は長い

異変・初陣

新大陸、アメリカ。
とある荒野。

「タン・レスタン・アルター・アンタレス 出でよ勇敢なりしもの
星の光をその身に宿し矢となり敵を討て 『黒耀の蝶』」

飛び出した幾多の黒き蝶が目標へと殺到し障壁を貫くと同時にその
身を爆発と閃光に変え散らせてゆく。

「まさか新大陸のこんな辺境まで私を追う者がいるとは思わなんだ」
黒き蝶をひらひらと舞わせながらクレスが呟く。

「残ったのはたった二人か……」

爆風の晴れた先には倒れる男が二人と原型のない骨肉と血飛沫の跡。

《十人はいたはずなんだけどねえ》

男達には聞こえない、内なるクレマン스의つまらなさそうな声。

「それで、貴様等は誰かに雇われでもしたのか？」

すうつ、

滑る様に蝶が一匹倒れ伏す男へと近づく。

「わ、わがらない、んだっ、ただアンタを襲えっで言われでそれで……ほ、本当だ」

「く、黒いローブを着て顔は分からなかった、多分声からして男だと……」

片腕、片耳を吹き飛ばされた男はどうやら上手く喋れず顔の近くで爆発が起きた事からいろいろと酷いありさまである。

それに比べもう一人は右足こそないもののすぐさま止血でもしたのか横たわっている割にははつきりと喋っている。

「俺たちは、アンタがあゝの「ファアガス」だなんて知らなぐでそれで……」

「そんなことは聞いていない、黙れ」

ぼんっ、と瀕死の男は蝶の餌食となり瀕死から死亡へと移行しこの世から消え去った。

「ふむ……私の事を良く知っているようだな。なら『向こう』の住人なのだろう？ 依頼も向こうで？」

「そうだボスポラスにある……」

「そうかありがとう。もう眠るといい」

その言葉と共にひらひらと舞う蝶の群れは残りの一人へと近づく、

「え、やめっ、助け……」

実際のところどこかの遺跡や首都に有る一部の人間しか出入りできない場所で、などというならまだしも地方都市のボスポラスなどと聞いたところで情報として大した意味はないのである。

悲鳴をかき消し再び響く爆音、それに合わせ爆煙が舞いあがった。

「この魔法、初めての割に存外使いやすいな」

《私的には蝶の形っていうのが結構気に入ったりしてるんだよ》

「亡者の相手をしただけの事は有った、と言う事だな」

《あれはもう勘弁だけどね……》

「半、とはいえ不滅ほど厄介なものはないな」

《それってカテゴリは違うけど自分を厄介って言ってるようなものじゃない？》

「ふん、追う側からすれば私は十分厄介だろうよ……。しかし魔法世界か、まさか十年もたたずに行くことになるとはな」

《エヴァには会う？》

「そのつもりはないが」

《縁が合えば出会う？》

「そうだな」

なるべく気配を消すとして、どうしたものか……。

ところ変わり魔法界。

「ん？」

「ドウシタ御主人」

「今、兄様達が私の事を話していたような気が……」

「自意識過剰ナンジャネーカ？ソレトモ遂ニ寂シサノアマリ幻聴デモ聞コエタカ」

「何を言っているんだっ、いつ私が寂しいなどと……」

「別レテカラ最初ノ一カ月マトモニ寝レナカタクセニ何言ッテルンダカ」

「ばっ、お前何を言ってるんだ。あれはこれからどうしようかと期待で胸がいっぱいになってだな……」

「ヤレヤレダゼ。ソナンダカラ兄貴達ニ捨テラレルンダヨ」

「別に捨てられたわけではないわっ！」

そんなやり取りをしている二人に、

「その油断、命取りと知れっ！」

まるで豪雨の様に魔法の射手が降り注いだ。

辺り一体を着弾の衝撃とそれによって舞い上がる煙が話していた二人を覆い尽くす。

「我々を前にあのように油断するからこうなるのだ」

「どうだ、如何に化物とは言えこれだけの攻撃。ただでは済まんだろう」

「あれでは彼の悪名高き【不滅の音色】や【ノースブラッド果ての吸血鬼】でさえその膝を着くに違いない」

などと攻撃を仕掛けた者達は口々に言い続ける。

そしてようやく煙が晴れたころ、

「油断、と言ったか？違うなこれは」

「余裕ッテ言ウンダゼ」

先ほどと同じように二人、一人と一体はただそこに悠然たる態度で立っていた。

ただ先ほどと違うのはその視線が攻撃者達、スキヤバレリ国境魔法騎士団を見つめていた事だった。

「馬鹿な、無傷だと」

「そんな、あれだけの攻撃を受けて被害がないなど……」
「怯むな、何か仕掛けが有るはずだ！」

「被害？仕掛け？はっ、笑わせる。あの程度の魔法で兄様が膝を着くだと？馬鹿共め」

「アア、ソレハネーナ。絶対ニ」

「相手をしてやるぞ三下。やるぞチャチャゼロ」

「アイサー御主人。マカセナ、切り刻ンデヤルゼ」

タン、

軽やかにその身を前へと飛ばしたチャチャゼロに近いものから次々と、数人まとめて斬り伏せる。

一瞬のうちに起こったそれは同じく一瞬のうちに最前線にいる者達を恐怖へと落とした。

それからはまさに蹂躪と言う言葉がふさわしいだろう。

放たれる氷結呪文は瞬く間に部隊の大多数を呑みこみ氷像をつくり運良く逃れた者は必死に剣や杖を手取るが小さき従者の前にその身を悉く地へと伏せる。

それでも飛び交う呪文は味方の氷像を砕いてなお進むが少女の前ではその意味をなさずただ消えていく。

「有象無象が、私の兄であり師を倒せるなどと驕ったその思い、間違いだと知れ」

ゆるり、

前へと出たエヴァンジェリンはその一言と共にぼつ、と片手を振り上げると指を動かし手を振るい始めた。

たちまち周囲にはひうんひうんと唸るような音が、空気を裂く音が響き始める。

「もし生き残った者がいたら帰って伝えろ【魔島の主】の後継が現れたとな！」

堂々たる宣言の元にその意図は振り下ろされ全てを呑みこんだ。

些細なことから始まった戦いは圧倒的で一方的な幕切れとなった。

そしてこれが師の庇護を失った少女とその従者の幕開けでもあった

異変・初陣（後書き）

ちなみに次回も二話同時の予定です

なぜ連日や四話更新じゃないかと言えばこの説明文は上げる時になって纏めたりしてるので書くのが思いのほか大変なのですよ……

『黒耀の蝶』

詠唱は「出でよ勇敢なりしもの 星の光をその身に宿し矢となり敵を討て」

アステカの神イツパパロトルの関係からの術式

接触時に爆発する蝶

わかる人に言えば蝶人パピヨンのニアデスハピネス、の見た目が黒曜石というもの

イツパパロトルが矢を放つ姿で表されることから『矢』として、また黒曜石即ち『石』としてある程度の物理適性を持つことから魔法障壁貫通性能が高い勇敢な蝶である

火のアーウェルンクスが使った紅蓮蜂と似たようなもの

詠唱から察するに紅蓮蜂は上級に分類されると思われ。それに見合う威力と成っている

ボスポラス

原作カゲタロウの出身地

地図で見るとMMの右上の辺りのようである

不滅存在

死ぬ死なないという部類ではない

どのような場合においても、永久的にその者の魂、意思、存在をこの世に留めておく事が出来る存在を言う

前話に出る亡者は敵を倒すと言う意思以外を捨て去りその代償、見返りとして肉体を動かし続けている。

術式により一時的に行っているもので完全な不滅存在とは言えない。『造物主』のように肉体が無くなっても精神を移動させ新たな肉体を得れば動ける精神由来のものとクレスのようにいくら肉体を失っても復元しそこに精神を留め続ける肉体由来のものがある

しかし現状造物主も絶対かどうかかわからずクレスも魔核に頼っている部分があるので「どのような場合においても永久的に」という言葉の前に理論上、と付く

『果ての吸血鬼』（のーす・ぶらっど）

以前に存在だけ示唆されクレスと戦い消滅した若い真祖引きこもりだったせいはいまだに存在してると思われている

スキャバレリ国境魔法騎士団

シルチス亜大陸方面で帝国と御国境に配備された連合側の騎士団百余名からなる騎士団でその半数以上を魔法騎士、残りを魔導兵、僅かに補給系が存在する力量としては中の上程度。その所在位置から帝国が陸路で連合へ侵攻する際ウェスペルタティアへ入る前に障害となる。

戦時下ならば周辺警備隊と共に連携を取る事で一個大隊クラスならば相手ができるくらいになる

この話に出すだけなのににわざわざここまでの設定が考えられた異色の組織

ちなみにスキャバレリはイタリアで火星研究家をしていた天文学者

の名前から

「油断、と言ったか？違うなこれは」

「余裕ッテ言ウンダゼ」

元ネタは某明治の剣客漫画に登場するイケメン包帯男

「シャアアアアアッ——」 「この世は所詮弱肉強食」等と言う
名言？を残した素敵な奴である

些細な事

「お嬢ちゃんこんなトコに一人で何してんだい？危ないよ」
という言葉から始まった戦いである

エヴァンジェリン

「大丈夫だと言ったのに通さない奴らが悪い。何がお嬢ちゃんだ。
しまいには吸血鬼とわかった途端に掌返しおって……」

チャチャゼロ

暴れられて大変満足

クレス

誰かに狙われているらしい
やれやれと言ったところ

クレマンズ

久しぶりの魔法界
内心かなりワクワク

魔女の仮面（前書き）

一応ルビを

きゅーてんかい

魔女の仮面

魔法界、 MMの西、タルシス大陸はマリネリス溪谷の遺跡群『夜の迷宮』

そこにクレスの姿はあった。

「よくぞおいで下さいました。まさかこんなに早くお会いできるとは思いませんでしたよ【不滅の音色】殿。旧世界では失礼しました。力を確かめる必要があったもので……」

出会って早々に口を開いたのはくすんだ灰の長髪に申し訳程度に付けられた髪留めと両腕に描かれた刺青、そしてその上体の瘦躯を惜しめなく晒すという奇抜な出で立ちの男だった。

「申し遅れました、私はファトゥム。とある秘密組織の中に組み込まれたしがない末端構成員です」

「エレミタや。まあ、よろしゅう頼むわ」

「……………サスペンディオ」

独特の喋り方と藍の髪に四角い縁と薄い茶の色眼鏡をつけた男、エレミタ。

そして、ゴシック調だがフリルなどがふんだんに着けられたロリー

夕服のようなものと短剣を突き刺したようなヘッドドレスを着けた赤い髪をたなびかせる女、サスペンディオ。

「我々三人で『ストレガ』と名乗っています」

ストレガ、それは旧世界の一部で魔女を意味する言葉である。

「お前たち自身の事などどうでもいい。さっさと要件を言え。お前達から接触してきたんだ、何かあるのだろう？」

そう魔法世界に到着して五日後には『ストレガ』から接触してきたのである。

「せっかちですね。まあ特に話すような共通の話題も無いですからしょうがないですか……。我々の上司、先ほど言った秘密組織の方ですが、そちらがアナタを欲しがっているのですよ」

「欲しがる、とはまるでやりとりできる物のような扱いだな」

「お気に召さなかったのなら申し訳ない。簡単に言いましょう『我々』の仲間になりなさい」

ファトゥムは先ほどのまでの下手な態度を一気に高圧な物へと変わった。

「断ったら？」

「力づくで連れて来い。と、体さえ残っていればどうにでもなるらしいのでその辺は任されています」

「ふ、分かりやすいな。嫌いじゃない」

「そうですか、お気に召してなにより。それで返事の方は？」

「私に何の得がある。断るに決まっているだろう」

「そうですね、なら……」

「さっさと来い、あまり長居はしたくないんだ」

挑発的なクレスの言葉。

そこに話し合いによる解決は存在しなかった。

「それでは。ファルティス・フォルテス・フォーチュネス 夜よ訪れよ、静かなる眠りは死への道標——」

「行かせてもらうで。エネシス・エレケス・エクエレス 狂々と廻る円環よ、時を刻め死を刻め——」

「ふん、簡単に詠唱を許すと思うか」

ファトゥムとエレミタが始動キーを口にした瞬間には刀を抜き前へとクレスは駆けだしていた。

次の瞬間、

ジャラジャラ、

擦れ唸る金属音を携えサスペンディオが前へと踊り出ると同時にいつのまにかその手に持った赤い斧を投擲した。

「なっ、貴様が前衛だっ……」

投げられた斧は寸分たがわずクレスへと飛来する。

「私じゃ、おかしい……?」

ギャリンツ、

嫌な音を立て刀でそれを受け止める。

しかし斧は地へと落ちるよりも早くその柄に繋がれた鎖により彼女の手元へと戻っていく。

「ちッ、珍しい武器を使うじゃないか。それは予想外だ」
「そう。一つ学習したわね」

軽口のようにひらりと再び投じられた斧は刀によって弾かれる。
しかし彼女はそれを引き戻さずに腕を振るった。

「っ、なるほどこういう使い方もあるか……」

腕の振りにより斧と繋がる鎖がうねり刀に絡まる。
簡単に効果のある武器封じである。

「だが生憎刀は二振りあるのだよ。奥義・斬鉄閃」

文字通り斬鉄を可能とする飛ぶ斬撃である。
断たれた鎖はがしりと力なく地へと落ちるが彼女の手には既に新しい鎖付きの斧。

「時間が稼げればそれでいい……」
「……良くてきたものだ」

事実、僅かな時間とはいえ彼女は稼いで見せたのだから。

「もういいですよ。サスペンディオ。ご苦労さまでした。さあ、これが『ヒュプノス』です！」

「出番や『モロス』」

掛け声とともに二人を青い炎のようなものが揺らめき。
バリッ、

クレスにとって聞き覚えのある音が響く。

「この音は……」

《私達が……》

青い揺らめきが治まるとそこには二人の倍はあろうかという二つの巨大な影。

一つはだらりと手足を下げた人型、その背中っから伸びた管のようなものが伸び左右に分かれ翼のような形を成している。

もう一つは全体が金属のようなものでできており頭と胴体の部分には様々な数字と思われる記号が刻まれている機械人形。

「これは困難に立ち向かう為の仮面の鎧、心の剣であり盾。いわば精神の具現存在、これが我々の『ペルソナ』」

「まさか自分の精神を具現出来るやつがいるとはな……」

しかしそれは、

「それが傷つけば自分が傷つくのと同じ事だぞ」

「そんなことわかつとる。けどな、わいらにはペルソナこれしかないんや」

「普通の魔法が使えない代わりにがこの力なのですよ。ヒュプノス！」

声と同時にヒュプノスが翼をはためかせ光の球を生み出す。

それは空から降りると轟音と共に爆発した。

「くうッ……」

《純粹な魔力爆撃だっ》

普通は起こり得ない属性を帯びていない純粹な魔力の爆発は障壁へ

と干渉しその効果を打ち消し衝撃をクレスの体へと当て吹き飛ばす。

「厄介な、連中だな……」

細かな傷は瞬時に治しつつクレスは立が上がる。

「ハッド・マギクス・ハマジク・ハイハンド 来たれ憤怒の炎、その身を憎しみで焦がせ、我が激情を糧に顕現せよ裏切りの魔女」

その間にサスペンディオは一人詠唱を済ませ、

「来て『メーディア』」

赤き四肢に黒き体、羊の面に金の髪、手にはそれぞれナイフと激情の炎を湛えた杯、新たなペルソナと呼ばれるそれがそこに具現した。

「三体目だと……」

大して広くも無い空間に三つ目の異形が空間を埋める様に顕現する。

「タン・レスアン・アルター・アンタレス 大いなる公爵よ、契約の元に今こそその力を示せ、強大なる炎、全てを壊し薙ぎ払え『破壊する炎』」

飛ばされた位置から更に距離を取り唱えられたのは魔法陣を展開する魔神術式のそれ。

そこに現れたのは松明に灯されたような小さな炎。

炎は速く静かにストレガへと飛び出し突如その火勢を増す。

姿を大きく変えたそれは触れただけで床や壁を舐めとるように喰らい尽くす地獄の業火へと至った。

同じ魔神術式の『敵射抜く瞳の炎翼』が貫通力、突貫性に優れたも

のならばこれは破壊力、火としての本来の性能ならば桁違いに高い
それである。

如何に特異な存在であるペルソナと言えどまさに塵も起こさないだ
ろう。

「これは……」

「流石にやばいんちゃうか……」

二人が焦燥の音を上げるなか最も業火に近いのは最後に登場したサ
スペンディオのメディア。

そして、

「メディアアツツ！」

仲間を守るため彼女の声に応えたメディアは地獄の業火へとその
身を晒すのであった――――

魔女の仮面（後書き）

ペルソナ3を知っているとわかりやすい
こんなに読者にとって分かりやすいだろう秘密組織は他にないでしょう・・・

『夜の迷宮』

マリネリス溪谷の最奥部にある古代遺跡
原作にもあった場所

『ストレガ』

とある秘密組織の下部組織構成員三名による少数精鋭部隊
構成員は『ペルソナ使い』のみで構成される

意味はイタリア語で「魔女」

『ペルソナ』

説明は作中通り

術者の精神具現体。どちらかが傷つけばもう片方も傷つく。

これを使用できるものをペルソナ使いと言う

ペルソナ的能力は使用者の力量に左右される。また逆に使用者はペルソナの恩恵を受ける。

ペルソナを使用できる者は通常の魔法が一切使えなくなりペルソナの技能に依存する事となる

ペルソナ召喚の為の始動キーと詠唱のみが可能。

ペルソナはそれぞれの特性等によりアルカナと呼ばれる大まかな分類をする事が出来る。

大まかと言っても大アルカナに準ずるので二十以上存在する。

また精神の具現であるためクレスとクレマンスのような間にあるに精神の壁を壊す音が発生する

意味はラテン語で仮面と言うのが本来の意味だが現代では心理学で使われ人格等の意味を持つ

ファトゥム

ストレガ構成員その一

リーダー的存在

使用するペルソナは『ヒュプノス』

アルカナは『運命』

始動キーは「ファルティス・フォルテス・フォーチュネス」

召喚の為の詠唱は「夜よ訪れよ、静かなる眠りは死への道標、浅き夢は死への誘い、その瞳閉じ、生ける苦しみからの逃避を与えよ『ヒュプノス』」

エレーミタ

ストレガ構成員その二

諜報・参謀役。独特の口調

使用ペルソナは『モロス』

アルカナは『隠者』

始動キーは「エネシス・エレケス・エクエレス」

召喚の為の詠唱は「狂々（くるくる）と廻る円環よ、時を刻め死を刻め、定められしその宿業を刻め、暗き死を招く定めを輪を『モロス』」

サスペンディオ

ストレガ構成員その三

戦闘員。鎖のついた赤い斧を使用する。

使用ペルソナは『メーディア』

アルカナは『刑死者』

始動キーはハッド・マギクス・ハマジク・ハイハンド

召喚の為の詠唱は「来たれ憤怒の炎、その身を憎しみて焦がせ、我が激情を糧に顕現せよ裏切りの魔女『メーディア』」

純粋な魔力爆撃

ヒュプノスが放った白い光

本来何かしらの属性を帯びる魔力を何にも染められることなく放出、爆破した

無属性故に魔法障壁に干渉し打ち消す事で必ずダメージを負わせる事ができる。特異な存在であるペルソナならではの高度攻撃魔法

『破壊する炎』

魔神アイムの術式

詠唱は「大いなる公爵よ、契約の元に今こそその力を示せ、強大なる炎、全てを壊し薙ぎ払え」

速度や範囲等よりも攻撃性能に特化した炎

『敵射抜く瞳の炎翼』と違い誘導性などは一切なく放射、移動等の速度も劣る。触れたものを消す炎である

炎を広げたとしてもせいぜい幅数メートルの通路いっばいに広がる程度

クレス
物扱いされる

わかる人にわかるストレガ・ペルソナ技解説
ファトゥムⅡタカヤ

エレーミタⅡジン

サスペンディオⅡチドリ

名前の意味はそれぞれのアルカナである運命、隠者、刑死者のを意味、それに近い言葉のラテン語を捩ったりしています
始動キーも似たようなものです。

光の球による魔力爆撃（ヒュプノス）Ⅱメギドラ

傾かない戦況（前書き）

戦闘シーンなんて嫌い

傾かない戦況

サスペンディオオの精神具現体メーディアとぶつかるは全てを無に帰す地獄の業火。

轟音を上げぶつかった二つは僅かな均衡の後に何事も無かったかのように周囲を元の静寂へと戻した。

「馬鹿、な……」

クレス呟くような驚愕の声が上がる。

《そんな、なんで……》

同じ思いをクレスの中にいるクレマンスも抱いた。

彼の放った炎はそこに至るまでに壁や床の一部を舐めとり空気に熱を持たせただけでその姿を消した。

無傷のメーディアを残して。

「メーディアに、炎は効かない……」

「流石ですね、サスペンディオ。助かりました」

「ほんま助かったで。モロスじゃ耐えられなかったわ」

防げて当然、という会話。

「魔神の炎を防ぐだと……」

「……さて、どうでしょう。我々に着いて来てくれる気になりましたか？」

「アレを無傷で防ぐとはでたらめだな。だが私は何が有っても諦めると言う事が許されないんでな。抗わせてもらう」

「そうですか、では第二開戦といきますか」

「モロス！」

エレミタの呼び声に反応し前へ出たモロス、その機械の腕が急激に回転を始めた。

——いん、

何かが風を裂く。

ひいん、ひいん、

次の瞬間にはいくつも音を上げあちらこちらに傷を刻み始めた。

「見えない斬撃……」

既に音に間隔はなくひんひんという連続音だけが響く。

「音使いを舐めるな」

「な、避けれるんかいっ」

クレスにとって音はかなり付き合いの長いものである。

一言でいえば長年の勘。

それに加え空気の振動から感じる斬撃の速さ、距離、向きを察知し自身に当たるものとそうでないものを選び最低限度の回避を行う。

「その腕貰うぞ。タン・レスタン・アルター・アンタレス 慟哭せ

よ咎人 振り下ろすは執行者 罪を斬り業を祓え 処断の刃 魂に刻む 穢れなき断罪の刃 全てを虚空へ帰せ『断罪の剣』」

斬撃を交わし近づきながら詠唱を行い断罪の剣をつくり出す。

狭い空間内、なんとか詰めれば二体のペルソナを並べられるがそれでは回避行動がとれなくなるという事だ。

故に全員がペルソナを召喚している今、対峙できるのはペルソナ一体とその使い手のみ。

モロスとエレミタ、自分で対処するほかはないのである。

「くうッ……モロス！」

声に応え斬撃をやめ炎撃を連射する。

《斬撃、止んだっ》

「《わかってる》」

見えるのであればより避けやすいのは道理であり縮地を交えてでの移動も可能となる。

「確かにペルソナは脅威かもしれんが、戦場を誤ったな」

胴体周りを回るモロスの腕、断罪の剣の射程距離、見事にそれが重なる位置で剣は振られた。

「させない……」

サスペンディオオの小さな声と共に差し出されたメーディアの握るナイフが断罪の剣の進路を拒み、
キィイイー、

ナイフと断罪の剣が甲高い音を上げこすれ合う。
エレミタを間にクレスとサスペンディオの目が合う。

「貴様が最も厄介だな……」

「……そう」

呟くような返事を聞き終えるか否かの内に、

「私を忘れないでください」

さらに後ろにいるファトゥムの声が耳朶を打つ。

彼の後ろに控えていたはずのヒュプノスはそこに存在せず、

「今です」

明らかな合図。

同時にクレスの頭上で気温が下がりパキパキという氷結音。

《上っ！》

クレマンスの声に従い確認などせず咄嗟に後退する。

直後、巨大な氷柱が落下しガッシャアアンとけたたましい音を立て氷片をクレスへと浴びせる。

「おや、外しましたか。しかしここが戦場で正解でしたでしょう」

ふふふ、とファトゥムは悠然とした笑みを浮かべた。

再び距離が開き体勢を立て直すクレス。

浴びた氷片による傷は既になものの辺りには氷と血が飛び散っている。

「っは……はあ……今のは流石に肝を冷やしたぞ」

僅かとはいえ乱れた呼吸を整えファトゥムと役目を終えゆっくりと下降するヒュプノスを睨む。

「そう睨まないでください。今ので私達の力を少しは理解していただけと思うのですが、どうでしょう……？」

降参していただけませんか、とその目は語る。

「生憎、諦めが悪くてな」

「そうですか。ならしかたありませんね。エレミタ、サスペンデイオ」

「モロス！」

「……メーディア」

対照的な主の声を受けそれぞれのペルソナが動き出す。

モロスの体が光るとそこから青みがかった霧が噴出する。

そしてその僅か後方に控えるメーディアの目が赤く妖しく光った。

クレスは咄嗟に息を止めるも僅かに吸った霧はその効果を発揮する。

「これは、毒煙か……。しかも私の知らない物とは……」

数百年前に暗殺者から毒を受けて以来、不死身なのをいいことに様々な毒物耐性を着けたクレスにとって一般的な毒は脅威足りえないものである。

だが、未知の力であるペルソナの発する毒は僅かとはいえその体を確かに蝕んでいた。

そして、

《あの女、舐めてるわけ？》

珍しい事に苛立たしげな声を上げるクレマンヌ。

《クレスが、私もいるって言うのに魅了なんてかかるわけじゃないじゃない》

内側にいる彼女にとって精神系の攻撃を察知することは容易いらしくメーディアの赤く光る目は魅了の魔眼と判断したようだ。

薄くかかる霧の向こうで光る魔眼を睨みながら、
《その程度で私達が落ちるわけじゃないじゃない》

誰にも見えも聞こえないのに胸を張った。

「うそ……魔眼が効かない」

相も変わらず呟くようにサスペンディオが口を開いた。

「なんやて?! ペルソナの魔眼が効かんで、どういふことや……」

「伊達に何百年も生きる化物、という訳ではなさそうですね。私が出ます、エレミタはそのまま、サスペンディオは援護をお願いいたします」

「了解」

「わかった」

攻勢へと転じたファトゥムは腰にさしていた短銃を後ろ手に抜き発

砲する。

パンパンッ、と乾いた音が響くが、
「神鳴流に飛び道具は通用しない」

クレスの振るう刀は的確に銃弾を捌いていく。

「ヒュプノス」

「メーディア」

翼を羽ばたかせたヒュプノスは先ほどよりも小さい、とはいっても一人が優に入るほどの大きさの氷柱を出現させメーディアはその隙間を埋める様に手に持つ杯を掲げ炎を放つ。

「くッ……道を開け『破音の鎚』」

無詠唱で放たれたそれは炎を押しつけ氷柱の横へと逃げ道を作る、
が先ほどと同じように砕けた氷片がクレスへと降り注ぐ。

「つつ……奥義・斬空閃」

痛みの中で振られた刀は空を裂く気の刃を放ち銃を持つファトゥムへと直進し当たる瞬間、
カーン。

乾いたような軽い音と共その向きを反転しクレスへと跳ねかえった。

「な、に……」

声を上げた時には既にクレスの腕は体から切り離され地へと落ち始めていた。

クレスは不覚にも一瞬それを目で追ってしまう。

《クレス！》

響くクレマンスの声に意識を戻し前へと進む体を無理やり後ろへと戻そうとするも既にモロスの毒煙が体を取り囲むことで効果の拡大を図りヒュプノスの翼からは氷柱と同規模の雷が放たれメーディアの杯からも炎が放たれていた。

「これは……」

まずい、そう呟く前にクレスの体は炎と雷に吞まれるのであった――

傾かない戦況（後書き）

ペルソナ（2）

ペルソナはそれぞれ固有の能力を持つ

メーディアの能力の一つは「炎の吸収」である

メーディア

あらゆる炎を無効化、吸収する。

炎の扱いはお手の物。ナイフでの通常攻撃も可能

その瞳は誘惑の魔眼。通常は無効化など出来ないが精神攻撃に対し異常な防御力を持つクレスには効かなかった

モロス

見えない斬撃と炎を飛ばす事が可能

毒煙の放出も可能とする

ヒュプノス

魔力爆撃、に氷、雷と多彩な攻撃手段を持つ

飛翔能力を持つ

カーン、と言う音

斬空閃を跳ね返した

ファトゥム

腰に銃を持つ

あえて狭い狭い戦場を選びつつ有利に事を進める。
カリスマ

クレス

いつも一瞬の隙を狙われる人

クレマンズ

サポート役に徹している

魅了の魔眼に対しご立腹らしい

わかる人にわかるペルソナの技解説

（ペルソナ名）は作中で使用したペルソナが判明しているものだけです

不可視の斬撃（モロス） || 利剣乱舞

乱射された炎撃（モロス） || マハラギオン

魅了の魔眼（メーディア） || マリンカリン

青みを帯びた毒煙（モロス） || ポイズンミスト

カーンと言う跳ね返し（不明） || テトラカーン

氷柱（ヒュプノス） || ブフダイン。巨大氷柱は待機中に行ったコン

セトレイトによって強化されたもの

炎（メーディア） || アギダイン

雷撃（ヒュプノス） || ジオダイン

窮地

放たれた炎と雷は狙いを違える事無くクレスへと直撃した。
空気は毒に浸され雷が貫き床に穴をあけ、炎は怒り狂うが如くその身を焼き尽くす。

「生きとるんか？」

「彼は自身の領域内とはいえ高位なものを含めた悪魔を二十体以上半日で仕留めたそうです。この程度では死にはしないでしょう。それにもし体が動かなくても上はいいと言っているのですし」

焼ける煙と毒の煙、混じる二つの煙に包まれ膝を着き腕を下げたクレスは創痕ながらもその姿を確かに留めていた。

「が……あ、はっ……っ」

既に再生は始まっておりボロボロと黒く炭化した皮膚が落ち元の色を取り戻しつつある。

落ちた腕も既に元の位置に復元されており見た目だけなら元通り、といった体である。

《体は元通り、魔力はまだ有る、体力は今ので大分持っていかれたからあまり気は使えないよ。あと、どういいうわけか体しか燃えてな

いから武器はある、それと毒で動きが鈍くなってきてる……」

クレマン스가状況を冷静に伝える。

状況は芳しくない。

煙がはれ始めるのを機にクレスはゆっくりと立ち上がる。

「おや、まだ立てるとは流石ですね。それにあれだけの攻撃を受けて元気そうだ。見た目だけ、ですが」

ファトゥムは全てお見通しです、と言わんばかりの目でクレスを見つめる。

「三度目の言葉になりますが……」

「……私はまだ、戦える。タン・レスタン・アルター・アンタレス
集え星光、星の精 全てを貫く星の瞬き 天を穿ち地を断て光の
波動 薙ぎ払え『星の鋒光』」

選んだのは光の上位にしてオリジナル、貫通力を重視した『鋒光』
過去のような加減などない光の帯は一直線に宙を走る。

「ヒュプノス！」

上から舞いおりたヒュプノスはその身を盾とするかのように翼を交
差させ前へと折り曲げる。

そして僅かにヒュプノスを押した後再現するかのようにカーンとい
う音と共に光はその身を翻しクレスへと向かう。

「なんて奴だっ……」

すぐさまその場をずれたクレスの隣を光は線となり床を裂きながら走りぬける。

盾となったヒュプノスは翼を焦がしながらも健在。

召喚者のファトゥムも顔を顰める程度で大したダメージはないようである。

《星の光まで跳ね返すなんて……》

愕然としたような驚嘆の声をクレマンスが上げた。

炎に続き星までも封じられる。

上位である星が効かないのなら光もその意味はなさないと言う事を示す。

彼女の眩きを無視し周りが動かない中クレスは一人詠唱を開始する。

「タン・レスタン・アルター・アンタレス 影の地統ぶる者、スカサハの、我が手に授けん、三十の棘もつ、愛しき槍を『雷の投擲』」

それぞれの手に一つずつ、二本の槍を投擲する。

「ヒュプノス！」

「モロス！」

同時に掛けられた声は二体のペルソナからそれぞれ氷柱を射出し迎撃する。

「タン・レスタン・アルター・アンタレス————」

その間にクレスは新たな呪文の詠唱を開始する。

「————凍てつく氷霊、其は眠りへと導く清冽の終わり、慈悲深

き棺は安息へ『舞い降りる氷棺』」

現れたのは氷でできた巨大な剣、それを上から落とすように投げ放つ。

「メーディア！」

杯の炎がうねりを上げて氷剣とぶつかり水蒸気を発生させ辺りを包む。

「迎撃すると言う事は雷と氷は反射、吸収できない、か……。クレマンス、あれをやるぞ」

《あれ、って……ああ、あれか》

「ああ、それだ。丁度水蒸気で姿も見えないしな」

《了解》

そう言うのとパリッ、と音を立てクレマンスが表へと現れた。

「タン・レスタン・アルター・アンタレス 来たれ雷、吹きすさべよ嵐、四方の一角を統べし大いなる王のもとにその雷鳴を轟かせ敵を穿つ槍となれ『魔人射る雷嵐の槍』」

現れる魔法陣と共に轟槍が放たれる、と同時に嵐により水蒸気が吹き飛ばされるより早く再びパリンと音が響きクレスが現れ、

「解放『魔人射る雷嵐の槍』」

同じ呪文を打ち出した。

裏と表に分かれて行う魔術式の同時詠唱。

二つの槍は嵐を纏い雷を撒き散らす事で周囲を傷つけながら標的へと向かう。

「くっ、ヒュプノス！」

「頼むで、モロス！」

「メーディア！」

それぞれが迎撃の為に動きだすが僅かに減衰させるに終わり光に呑まれる。

直後に響き渡る轟音、舞いあがる煙と降り注ぐ瓦礫。

それを見届け、

「流石に魔力が持たん……」

クレスはそれらを見据えながら片膝を着く。

自身を生き埋めにしない程度、と最低限の加減をしたとはいえ魔神術式三発、全力の星魔法が一発。

他にも魔法と神鳴流の技、炎と雷に焼かれまだ体には毒が残る。

状況だけみればまるで戦争でもしたかのような消費である。

そして残ったのは見つめる先の崩れた通路の瓦礫。

それが、

ダッ————ァン。

雷光と共に吹き飛んだ。

「ッう、迂闊でした。まさかあのような呪文を二発も同時に放てるとは……」

現れたのは血みどろのファトゥム。

その後ろには姿を薄くさせつつも依然とヒュプノスの影。

そして、

「許さない……」

その目に憤怒の炎を宿し現れたのはサスペンディオ。
ヘッドドレスはなくなり髪は荒れ服は片方の袖がなくなり血に濡れている。その下に文様のような痣が見える。

「エレーミタは？」

「私を庇ったせいで倒れてる。まだ息はしてた」

「そうですか」

ふう、とファトゥムは一度目を閉じ息を吐き、

「さて、決着をつけましょうか」

と

意識を切り替えた目でクレスを見る。

それに応じる様にゆらり、とクレスは刀を取り出しながら立ちあがる。

「望むところだ」

一言を皮切りにクレスの刀とサスペンディオの己がぶつかり合いその隙を狙いファトゥムの銃が火を吹く

そして銃弾をかわすクレスにヒュプノスからの攻撃が頭上から降り注ぐ。

「邪魔だ、奥義・斬空斬魔閃」

魔を斬る一太刀が切っ先から放たれヒュプノスを狙う。

当たる直前キン、と甲高い音と共に薄い膜にぶつかるもそれを突き抜け翼を斬る。

「ぐッ……」

それと同時にヒュプノスのダメージをファトウムも受け体から血があふれる。

「しかし、ただではやられませんッ」

叫びにも似た一言は消えかかるペルソナへと伝播しヒュプノスはその身を更に薄れさせながらも氷柱を作り上げた。

「……今」

小さな呟きはじゃらじゃらという音をもってクレスの腕を拘束した。

「流石です、サスペンディオ」

振り下ろされる手とシンクロし氷柱がクレスへと落ちた。

「がッ……」

体をひねるも距離は取れず半身を氷に覆われ再びクレスはその膝を着く。

「これで、終わり」

彼女の瞳に宿る炎が燃え盛りクレスを襲う。
その直前、

「闇の吹雪!!」

ゴウッ、と暗い闇を纏った雪嵐がクレスを避けるように、迫る炎を押しつけストレガ二人を吹き飛ばすのであった――――

窮地（後書き）

身体だけを焼いたメーディアの炎
文字通り「身を焦がす」サスペンディオに宿る情念の炎

ヒュプノス

メーディアが炎を吸収する能力を持つようにヒュプノスには光を反射する能力がある

吸収と違い反射には一応の限界が存在する。そのため反射限界ギリギリであった『鋒光』により押された上に翼を焦がしていた。

通常の光魔法であるなら押されることも翼を焦がす事もない

ちなみにモロスは火と闇を反射する

前話で『破壊の炎』を反射しなかったのは威力が反射限界を超えていると判断したため

同じ規模や術しての方向性を加味しても魔神術式を反射したヒュプノスのレベル、ファトゥム的意思、精神力は相当な物と言える

『雷の投擲』

原作通り。詠唱からモチーフはゲイボルグだと思われる

ナギが大量に出していた様子から展開本数は任意で決められる模様

『舞い降りる氷棺』

詠唱は「凍てつく氷霊、其は眠りへと導く清冽の終わり、慈悲深き

棺は安息へ」

巨大な氷剣を斜め上方から投げ放つ
テイルズで言うフリジットコフィン

『魔人射る雷嵐の槍』の二連放出

32話『思いの果て』や34話『奇策』でも使用している「疑似遅延呪文」を利用したもの

わざわざ入れ変わり先にクレマンズを出したのは彼女が後に放つと水蒸気による霧が無くなる事で姿が露わになってしまおうのを防ぐため

エレーミタ

サスペンディを庇い気絶した。それに伴いペルソナも沈黙し姿を消した

サスペンディオの腕の痣

彼らが『実験』によってペルソナ使いとなった証のようなもの
ファトゥムの刺青はそれを隠すためのもの。袖に隠れているがエレーミタにも当然存在する

『実験』についてはこの章の終りに説明がされる予定

奥義・斬空斬魔閃

斬魔剣を斬空閃で放出する

『剣』は直接攻撃 『閃』は放出攻撃

『二の太刀』は斬りたい対象だけを斬る。分類的には『閃』に近く酷く高度である。現在クレスは習得していない。

「闇の吹雪!」

この状況で登場しそうな人が一人しかいない・・・

クレス

所謂ピンチというやつ

事実として今までにこれ以上の消耗をした事がない

クレマンズ

今回もサポート

また会う日まで（前書き）

戦いはこれからも続くー、みたいな

また会う日まで

突如放たれた闇の吹雪。

それがクレスへ降りかからんとする炎と雷、ストレガを吹き飛ばす。そしてクレスの隣に、

「大丈夫ですか、兄様。姉様も」

一人の少女がふわりと舞い降りた。

「すまん。助かった」

《ありがとう。助かったよ》

「いえ、お役に立てて嬉しいです」

少女、エヴァンジェリンは小さく微笑みながらそう言った。

「嬉しい、か……」

「はい。隣に立てる事がこんなに嬉しいとは思いませんでした」

《嬉しい事言うねえ……》

「……ふん。気をつけろ、普通じゃないぞ」

「その姿を見れば相手がどれ程かわかります」

笑みを消しエヴァンジェリンは鋭い目つきで先ほどストレガを吹き飛ばした方を睨む。

「チャチャゼロはどうした」

「後方の警戒に当たらせました。問題がなければもう来るかと……

——」

「モウイルンダケドナ」

《久しぶりだね。元気そうだなにより》

「ケケ、姉貴達ハ結構酷イミタイジャーネーカ」

「長く生きてきたが世界にはまだ知らない事があると実感させられた。凍ると再生速度が落ちるらしいぞ」

《未知との遭遇、って感じかな》

茶化すように言う兄と姉に少女は些か呆れを滲ませ、

「二人とも気を抜かないでください。チャチャゼロお前もだぞ」

「わかっているさ」

《わかってるよー》

「ワカッテルゼ？」

「……なら、いいのですが」

ヒクヒクと頬を引き攣らせながらもエヴァンジェリンは前を見続ける。

「で、奴らは何者なんです？」

「さあな。勧誘だそうだ」

「勧誘、ですか？」

《まあそんな感じだと思っておけばいいよ》

「はあ……？」

「光を反射、炎は吸収して効かん。あと多分だが気による攻撃を反射するかもしれん」

「三種類モ効カネエノカヨ。反則ダナ」

敵の異常性にチャチャゼロもナイフを弄ぶのをやめやレやレダナ、と肩をすくめる。

「正確には気ではなく、物理攻撃、と判断されるもの。ですよ」

息も絶え絶えに現れたのはファトゥムだった。

「その容姿と人形の従者……あなたもしや最近噂の吸血鬼ですか」

「私を知ってるのか？ふふ、その通りだぞ人間」

「ケケケ、有名ニナツテキタミタイダナ」

「まさか本当にあなた方が知り合いだとはね……。どうやってこの場所を？」

「そんな事教えるわけないだろう？自分で考える事だな」

「ふむ、流石にこの状況我々の不利のようですね。退散させてもらいましょうか」

「逃がすと思っているのか？チャチャゼロ！」

「オウ、マカセロ御主人。兄貴達ノ仇ハトルゼ」

「死んではいないがな……」

その言葉を見殺しにチャチャゼロが何処から取り出したのかその身に合わぬ大剣を担ぎ駆けだした。

「兄貴、達？」

その言葉にファトゥムは訝しげな視線をクレスへと送るが、

「気にする余裕はないだろう」

クレスの言葉を受け、迫るチャチャゼロを見たファトゥムはすぐに

決断を下す。

「そのようですね。エレミタ、サスペンディオ退却しますよ」

「了解。モロス！」

「メーディア」

いつの間に起きたのかモロスに指示を与えるエレミタ。

そしてスカートも破け髪の一部が凍りついているとはいえサスペンディオも健在。

「最後に一つ、我々には闇も効きませんよ。それでは」

そう言い残したファトゥムはモロスから噴き出た霧に紛れ消えていく。

「オイオイ……」

「これは……」

「気配が消えた？」

《幾つ能力があるのよ……》

こうして「夜の迷宮」における戦いはあっけなく幕を下ろした。

夜の迷宮を出た二人と一体はそのままなんとなく人気のいないオリンポス山方向へと歩みを進めていた。

「しかしエヴァ、よく場所がわかったね」

「数日前から兄様の気配があると直感が訴えるのでそれに従ってみました。ただ、たまに気配が消えたりしたのであのタイミングになっ
てしまいましたか……」

《少なからずお前にもやっとの事で誘振感覚が現れている、と言う
事か》

「誘振感覚、ですか？」

「便宜上そう呼んでるだけなんだけどね。悪魔とか私たちみたいな
特異な存在を互いになんとなく察知できるみたいなんだよ」

「それが私にもあると？」

その質問にクレマン스는人差指をぴんと立てると、

「百年ほど前、私達は突然気配を感じその場へと向かいました。そ
してそこで一人の少女と出会いました。さあその少女とは誰でし
ょう」

答えの少女を前にしてそう言った。

「私、ですか……？」

《そいつは出会ってすぐ殴りかかって来てな。とんだじゃじゃ馬だ
った》

「なっ、兄様それはっ」

「オ、何ダヨ面白ソウジャネーカ」

自身が作られる前の主人の事に興味を惹かれたのかクレマン스의頭
に乗ったチャチャゼロが騒ぎだす。

「おい、チャチャゼロお前は黙っている。それで結局あいつらはど

うするのです?」

『幼い頃』の事を話されたくないのか従者の言を一蹴し話を変える主人。

「無理やり逸ラシタナ……」

《機会があれば話してやろう》

「流石兄貴、話ガワカルゼ」

「アハハ……。まあどうこうするって言う気は今のところないかな。ね?」

《ん、まあそうだな。手掛かりは皆無といい。組織立って動いているならそのうち勝手に出会うか、また接触してくるかのどちらかだろう。それまで待つさ》

「そうですか。なら私も動こうとは思いませんが……」

「好きにしていいいんだよ。もう私達に縛られてるわけじゃないんだから」

「別に縛られていたなんて思っていないせんっ」

「ふふ、そう。さて、この辺りでいいかな」

そう言ってクレマン스는歩みを止める。

気づけば山の麓まで随分近付いていた。

「何がですか?」

「お話の時間は終わりって事」

頭に乗った人形を下ろしながら告げた。

「え、あの……私は……」

少女の思いを無視しクレマン스는己の影から聖骸布を取り出す。

「これをあげる。どういう物かは自分で見定めて」

手渡すと同時にパリンと音が響きクレスが現れ、

「また会う時までしっかりな」

くしゃりと頭を一撫でし足元で光る魔法陣が輝くと同時にその姿を消した。

「御主人？」

「……行こう。チャチャゼロ。今度は置いて行かれないように、もっと頼ってもらえるために頑張らないと」

兄の気配は既にずいぶん遠くにある様に感じる。
たぶんまた旧世界へと戻るつもりなのだろう。

「ケケ、ソウダナ見返シタルクライノ気デ行コウウゼ」
次に会う時は……。

少女は手渡された赤い布を握りしめ従者は何処からか取り出したナイフをクルクルと振り回す。

そして小さな主従は再び険しい道を、兄達のいる更なる高見を目指

し歩き出した……――

また会う日まで（後書き）

たまに更新日が合ってるのか不安になる。そんな作者です。

ストレガ

増援は想定外

取りあえず退く事にした

斬空間を跳ね返したのは物理攻撃と判断したものを反射する力によるらしい

「我々」と言う言葉から三人とも闇を無効化すると思われるが、闇の吹雪により飛ばされた衝撃や氷などは当然当たりダメージとなる

また撤退時にモロスが煙を放出し気配が消えているがこの時メーディアも出現している事から気配遮断はメーディアの力とも思われる

未知との遭遇

ペルソナの事

凍ると再生速度が著しく低下する

ちなみに石化すると停止する。疑似的に殺す事も出来ると言う事。

エヴァンジェリン

今更になって誘振感覚がわかり始めた

最近有名になってきた

二人の窮地に駆けつける私、今輝いてる

雲狼の時と同じく昔の話はやめて欲しい

ちなみに雲狼の時は師事し始めてからの話ばかりで出会った時の話

は無かった
聖骸布貰う

チャチャゼロ

やっぱり御主人は面白い、いろんな意味で
ペルソナなんて特異なもの、見たらとりあえず斬るしかない

クレス

疲れた、帰りたい

クレマンス

魔法界は『ファーガス』といると忙しいからクレスのままでいるか
城に籠っていてほしい

それか自分が表に出ていたい

ようするに楽に、楽しく過ごしたい

不機嫌（前書き）

ルビ一つ

不機嫌

神聖ローマ帝国シュヴァーベン、黒い森。

そこに生える木々により昼間でも暗く見える事からそう呼ばれる広大な森林地帯。

エヴァンジェリンと魔法界で劇的とも言える再開を果たしてから既に三年。

なぜこんな場所にいるかと言うと……、

「ただ、旧世界で人目につかないで行動できて、もし戦闘になったらアナタの行動を封じれる手段が多い。それだけの理由で私が選ばれた。ただそれだけ。それが私がここにいる理由」

淡々と理由を述べたのは以前と変わらぬ個性的な服装の女性、サスペンディオ。

待たされたせいか、旧世界が不慣れなせいかなのかは分からないが目を尖らせ少々落ち着きがない。

「人目に……と、言う事はあの姿をくりました際に気配を消したのは君の力。と言う事か」

「そう」

「ふむ。それで？」

「そのままファトゥムの言葉を伝える」

そう言って彼女は羊皮紙を一枚取り出し広げると一か所を指でなぞ

る。

すると羊皮紙上に光が現れ小さなファトゥムを投影した。

「お久しぶりです。前はあのような事になってしまいました但我々、と言うより『上』は貴方の事を諦めてはいません。もう一度言いましょう我々と共に来てはくれませんか？もちろん大抵の質問には答えましょう。その上で判断してくださって構いませんので。今回は取りあえず私達『ストレガ』も動いたという証明の為に彼女を派遣したただけなので出来れば誰にも死んでほしくはないのですが……」

それだけ言うとファトゥムの姿はかき消えた。

「少しでも有利に動ける戦闘要員を選んでおいて何と言う男だ……」

一言愚痴のように口を開くと、

「そうそう。戦闘要員、と彼女に説明しましたが実際のところエレミタは他の活動で動けず、私が行ったら問答無用で戦闘になりそうだったのでこのようになりました。まあ戦闘要員と言うのも嘘ではありませんからね。では私はこれで。サスペンディオ、後は任せます……」

再び姿を現したファトゥムはふふふ、と笑みを浮かべながら喋ると口に笑みを浮かべたまま姿を消した
それと同時に羊皮紙上の光も消えた。

「ちっ、的を得ているじゃないか……」

《確かに彼だったら出会った瞬間に殺してたかも……》

内と外、両面とも考える事が同じで彼の言い分が否定できないのが困った事である。

「それで、どう？」

「とりあえずお前達の上にある秘密組織、とやらの名はなんだ」

「ん。『コスモエンテレケイア完全なる世界』って言う」

「そうか……。ではまず何故私なのだ？」

「それは知らない。たぶんファトゥムも知らない」

「その完全なる世界とやらの詳細は？」

「私達みたいな下まで入れれば数万はいるらしい。ちなみに私達みたいな「名前持ち」は上の方であんまり数がないってエレミタが言ってた。もっと、本当に下の方は武器商人に犯罪組織とか各国の政治に関わってる人もいるって。これはファトゥムが……」

どこから、誰からの情報なのかまでわざわざ彼女は口にする。

「なるほど。私の事以外ならだいたい分かった。次にその「名前持ち」とは？」

「上から名を与えられた組織。ストレガもその一つで、有る程度の情報と物資とかの援助がある。その代わりこういう任務も受けない

といけない。どこもそれなりに少数、らしい。ってエレミタが言
ってた」

どうやらストレガ内における情報の管理等はエレミタが行ってい
るらしい。

「組織の目的はなんだ、私とどう関係する」

「分からない。ただアナタという指定しかされてない。組織は基本
的に秘密主義。さっき上げた傘下組織や人員を使って人を襲ったり、
情報を操作したりしてるのは確かだけど……、いまだに地方で北と
南が争ってるのは彼らが原因だろうってエレミタが……」

「完全な停戦を望んではない……？ いや、戦争状態を望んでいる、
と言う事か？」

「さあ？」

武器の売買をする者がいる以上争いは続けてもらわなければならな
い、ということか……？

「ふむ……。では、これでお前たちはもう私に関わらないと思って
いいのか？」

「……いいと思う」

「そうか。ではもう会う事もあるまい……」

そう言うとき彼女は軽く顎を引くと踵を返し歩き始める。

そして私も彼女に背を向けたところで、

「それと……」

ゆっくりと歩きながら彼女は思いだしたかのように口を開いた。

「……炎の狂人は今も笑っている。確かに伝えたわ」

その言葉を聞いた瞬間、

「っ……?!」

ぞくり、と言い知れぬ不安と悪寒が背筋を撫でた。

「おいっ!」

咄嗟に去ろうとする彼女を呼び止める。

「何?」

気だるさと苛立たしさを混ぜたような表情で彼女は振り返った。

「それは、どういう意味だ……」

「意味? 知らないわ。もういいかしら?」

眉間にしわを寄せながら再びその身を翻そうとする彼女に近づき、

「その言葉に関連する事を全て答えろ。でなければ……」

取り出した二刀を首筋と背中に突きつける。

「……連絡をよこす黒尽くめがもしあなたがこの邂逅で興味を示し
そうになかったらそう言えって言ってた。だから……」

「それ以外には?」

「知らない。もういい? 一人でこんな所まで来るのなんて嫌だった
のになんで私が……、いい加減……」

限界。

声には出さず唇を歪めぶち、と唇の端を噛み切った。

「これ、何かわかる？」

鋭いながらも暗い瞳に固まったような表情でそう言いながら彼女はポケットから掌に収まる大きさの輝く符を取り出した。

咄嗟に剣を出すのではなく距離を空けたのは不穏な空気を感じたからか。それとも位置と距離、得体の知れない符を経験から危険と判断したからか。

そんなことは分からないが今回は失敗した、としか言えないだろう。距離を空けず剣を繰り出すのが正解だった。なぜなら、

「これは、新しい力ッ」

彼女は光を放つ符を片手で握り潰した。

潰れると同時にバリン、という破碎音に青く揺らめく幻炎と、

「メーディアー！！」

叫ぶような呼び声。

即ちペルソナの召喚を許したと言う事である。

そして彼女の分身たるペルソナが今その身を顕現させるのであった

不機嫌（後書き）

精神状況があまりよろしくない、サスペンディオよりも作者が

黒い森

ドイツにあるそれ

山と言いか丘陵地帯というか
現代では木々の減少が目立つ

『完全なる世界』

全ての大本

どういった組織か詳細は不明

「名前持ち」

武器商人やマフィア等より上に位置する上位組織

全て特異能力者や一芸特化能力者等のを集めつくられた組織

ストレガの他にカノッサ機関、幻影旅団、裏麗、裏切り同盟、埋葬
機関、超常選民同盟等がある

「停戦を望まない、ではなく戦争状態を望んでいる」
同じような意味だがあり方として大きく違う

炎の狂人

笑っているらしい

新しい力

詠唱なしでのペルソナ簡易召喚

符、カード自体は使用者の精神を具現したものであり召喚毎に創造しなければならぬ。が、使用者からすれば大した消費ではない力の具現でもある符を握りつぶし掌握、自身へ出力する

行為としては闇の魔法と同じ

サスペンディオ

新しい召喚方法を会得した

気配が消えたのは彼女の、ペルソナの力

正確には察知、探知系の攪乱。意識の集中が必要なので戦闘では使えない

短気、というか危うい精神というか……

夜の女王（前書き）

脳内補完て大事、です
一か所だけルビが

夜の女王

現れたのは羊の仮面に金の髪。

炎の杯と漆黒のナイフを手に赤い四肢をもつ異形の存在。

メーディア。

「詠唱を破棄できるのか」

「これであの時の借りを返すっ……」

いつのまにか両手に鎖付きの斧を持ったサスペンディオはその片方を勢いよく投じた。

「三人がかりであの状況だったと言うのを忘れたわけではあるまい」

あの時と同じ轍を踏まぬように弾くと同時に縮地で一気に距離を詰める。

「奥義……」

「アナタこそ剣は効かないって覚えてないの？」

クレスは覚えている。

不覚にも隙をつくってしまったあの反射能力を。
そして放たれるのは。

「……斬魔剣ッ」

神鳴流の真骨頂とも言える魔を斬るための技。
それが彼女に張られた障壁とぶつかる。

結果は、

「そう言う事……」

障壁の消失。

反射はされないが斬撃もその場で止められ相殺。
障壁の除去という目的を果たした事からクレスの優位とも言える。

しかし、

「でも残念、これは何度でも張れる」

サスペンディオが冷静に事実を述べる。

「やはりお前が一番厄介だな……」

「私は戦うことぐらいしかできない……」

ストレガという癖の強い人間の集まりの中で二人を纏める事のできるファトゥム。

情報の収集、操作を一人で行えるエレミタ。

そして組織の事は興味がなく二人に任せっきりなサスペンディオ。

彼女に出来る事など趣味の絵を描く事それだけ。

荒事が付きまとうこの世界で生きる以上それが役に立たない事など
最初から分かっていた。

だから彼女は趣味とは二人とは違う事を、正反対とも言える戦いを
積極的に行ってきた。

過去、二人に寄り掛かってきた恩を返すように。二人は守って見せ

ると。

そして三年前、最後にクレスへ増援があったとは言えこちらから撤退。

失敗は失敗である。

「こんなところで私は……」

斧と刀が交差する事数度。

クレスの体からは肉が焼け血の焦げるにおいが、サスペンディオの体にはところどころに切傷が。

意外な事に近距離戦闘においても彼女は類稀なる身体能力でクレスの剣撃の多くを防いでいた。

互いに距離を取れば魔法と憤怒の炎の撃ち合いが行われる。

水や氷と炎がぶつかれば周囲を水蒸気が覆い互いが即座に行う気配遮断能力により行動を読めず。

だからと言ってクレスが魔神術式や星魔法のように炎を打ち破るだけの術式の詠唱など相手が許さない。

水蒸気を発生させず炎を押しこむには物理的、地属性の魔法が欲しいところであるが苦手なそれを使えるはずも無い。

風か雷によっての相殺が現状の基本なのである。

以前は三対一で圧倒され今回は一対一でほぼ対等。

たった数年でその差は随分埋まったようである。

「随分強くなった……」

敵とはいえこうまで腕を上げていると感心する、とクレスは感慨深く呟く。

《面倒なことに変わりはないけど……》

「さて、どうしたものか……」

再度、互いに距離を置き様子見となった。

《いつそのことまた入れ代わる？》

「使いたくはないがそれも視野に入れた方がよさそうだな……」

小声とはいえつい癖で呟くようにクレスがクレマンスへ返事をする
と、

「……何の話？」

訝しげにサスペンディオが口を開いた。

「聞こえていたのか。これは失敬。独り言だと思ってくれて構わない
い」

「……変な人」

「何、ただ三年で随分力を付けたようなのでね。驚いていたのさ」

「ペルソナは心の力。そして私の分身」

「それは知っているが……？」

「私が、心が強くなればペルソナも強くなる。逆にペルソナが強ければ私も強くなるのは当たり前。この三年アナタに負けた事を糧に
頑張った……」

「それでも、だ。私は自分の位置づけを人から外れた『化物』としている。稀有な能力者とは言え人間が身体能力で張り合うとは予想
外だ」

クレスの賛辞にサスペンディオはふふふ、と小さく笑った後僅かに
顔を俯かせ、

「でも、だからって……」

ぎし、と彼女の手に力が籠る。

「私は……負けていいわけじゃないっ！」

放たれた激情に呼応するかのようにメーディアの持つ炎が勢いを増す。

「なら、私もその意思に応えて相応に尽くさなければ……」

手の刀を収納したクレスは空いた手を軽く何かを掴むように上げ、
「安心しろ、殺しはしないさ。ただ、忘れなくさせてやる。だから
精々怨めよ」

そう口にした次の瞬間には銀の笛が淡い輝きを放ちながらその手に
握られていた。

「笛？」

「ああ、思い出の品だな。実戦で使う事も無ければ他人の目に触れ
させたことさえない、私の秘蔵だよ。この【夜の女王】は……」

そう言いながらクレスはクルクルと片手で笛を回し始める。

すると、

オ————ン、オ————ン。

低いようで高く、儂いようで力強い。そんな矛盾を孕んだ不思議な
音を発し始めた。

「……？メーディア」

音を発し続けるだけで何も起こらない事を不思議に思いつつも彼女は仮に跳ね返ってきたとしても自身にとって害にならない炎を放つ。轟々と燃える炎は得物を魔獣の如く宙を疾走した。

それを見ながらクレスは悠然と構え笛を回し続ける。ただ狂々くるくると…。

炎がその姿を覆い尽くす程に迫った時。

音も無く炎は揺らぎそこに壁でも有るかのように押し留められたただ燃え続けた。

「……何をしたの」

「何も」

獲物を焼かんと前進を試みる炎は何かに抑えられたかのようにただ揺らめくばかりであった。

「……っ」

彼女から放たれる射殺さんと言わんばかりの眼光を一度受け止める。そしてクレスはおもむろに空を見上げ、

「……来たか」

その眩きと共に暗い森の中は更なる暗闇へと引きこまれた。

「え……」

サスペンディオオが驚きの声を上げると同時にぽつり、ぽつり、と雨が降り始めた。

「雨？晴れていたはずなのに……でもそれぐらいじゃ……」

言葉を紡ぐ間にも雨粒はその勢いを急激に増し文字通り豪雨へとその姿を変えた。

打ちつけるような勢いの雨は瞬く間にクレスの前で揺らめく炎を消し去りメーディアの持つ杯に灯る炎の勢いさえ衰えさせる。

普通の雨如きでは揺らぐはずの無いそれが確かに弱くなっていくその事に気付いた彼女は小さく、

「あ……そんな……」

悲観し諦めるような弱々しい呟きを洩らした。

憤怒と言う激情により灯った炎は彼女の意識、感情によってその火势を増す。

言い換えれば戦闘意識の表れ。それが急激に消えていく。

「私の、負けね……」

小さくなり最低限となった炎を見つめながら彼女はそう言った。

「こんな形で終わりにするなんて……ホント、怨むわ」

更に口を開いたサスペンディオは悔しさと他にも何か感情を混ぜた表情で薄く笑みを浮かべていた。

しかしその感情がどんなものなのかクレスに知る術などなかった。

「はあ。なんだか……いえ、いいわ。……さっき言ったように私は何も知らない。こんどこそお別れ」

何かを言いかけた彼女は結局それを言う事なく終わりを告げた。

「……そうか。では、な」

僅かな間を置きクレスはその一言と共に風のようにその場を去っていった。

未だ雨が降る暗い森の中。

一人佇む彼女はふらりと倒れる様にその身を横たえる。

泥と草に濡れる事を気にも留めずに雨雲に覆われた空を見つめ、

「ねえ、メーディア。私達は——……」

風と雨音に掻き消されたその呟きは半身たるペルソナだけに届けられる。

小さく頷くメーディアを目に留めた彼女は、

「流石に疲れたみたい……眠いわ……」

僅かに漏れた月明かりに照らされると同時にそう言ってその目を静かに閉じるのであった——

夜の女王（後書き）

不完全燃焼、何故こうなったのか……

この章が終わる後4話（61話）で連載を始めてから半年が過ぎますね

編集中に間違えて全消し、推敲のやり直し、これはきついです……

【夜の女王】

遂に出た魔改造された思い出の笛

吹く代わりに回転させる事で空気を送り込み魔力を流す事で音を発生させた

発せられた微細振動が空気を振動、圧縮または膨張させる事で気圧に変化を生じさせ魔法の雨を呼ぶ

また発せられた音が壁と成り岩や氷と言った物理的で流動性が無いものの以外の攻撃を防ぐ事が出来る

本来そんな微弱な振動では大気に影響しないはずだが魔法、魔力万能と言う事で……

ネーミングとしてはモーツァルトの「魔笛」第二幕「夜の女王」からその苛烈な歌詞とメーディアの憤怒という性質

ストレガの元となっているゲーム、ペルソナ3においてアバターの使う「夜の女王」

などの関連から生まれた

ネーミングが苦手な作者的にはお気に入りの一つ

メーディア

手に持つ杯の炎は意思、戦闘意欲等の現れ。完全に消える事は無い
また杯の炎の強弱により炎攻撃の威力は増減する
普通の雨では杯の炎に影響は限りなく零である。

クレスが呼び発生させたのは特殊な魔力雨と言ったところ

サスペンディオ

実験の生き残りとして負ける事は許されないと思っていた
何かを得たらしい

クレス

相手の意思に応じ笛を使用した

クレマンス

何もしなかった人、する事が無かったとも言える

訪れ（前書き）

トカゲ肉

訪れ

黒い森での出来事から半年。

真秀の木々もその葉の色を変え既に落ち始めている頃。

そんな季節に情緒や風情等と言う言葉を楽しむ事も無く、縁遠い場所にクレスはいた。

魔法界はウェアスペルタティアの東ニヤンドマとの中間。

帝国と連合、そのちょうど間に位置する荒野と隣接する森林地帯。

少し帝国へ足を伸ばせばサバエス高地、そしてヘレスポントス山脈を遠目に臨める。

もう少し南西へ行けばそれらに囲まれるような形で亜人等の集落が有ったりするらしいが今は無縁。

そんな場所の内部、中心に近い位置。

周囲を糸で囲い近づく魔獣等を排除している場所が一つ。

「今夜もトカゲだな……」

黙々と鍋を煮詰めつつ魔獣を捌く男が一人。

緊張感も無く黒髪に黒衣いを纏うという黒尽くめでこのような生活を送る男など魔法界、旧世界共に探してもクレス一人しかいないだろう。

《サバイバルなんて久しぶりだよねー》

クレスにしか聞こえない声が響く。

サバイバル生活をしているとは思えないような声音で体があればはしゃぎ回ってさえいそうなクレマンスの声はクレスのテンションを下げ、

「はぁ……城に行った方が圧倒的に快適じゃないか」

《そうだけど、情報収集には不便じゃない》

「やはりどうかしてお前にも体を用意しなければな……」

《何年前からそれを言ってるんでしょねえ》

「……不都合はないだろう」

《じゃあ文句を言わないでくれると嬉しいな》

「……ん、うむ」

この数百年間、たまにとは言え心なし彼女は黒いんじゃないかとクレスは思ったりしなくもなきと些細な事だろう。

《けど、用意してくれるならそれはそれで嬉しいんだけどね》

「まあ、善処しよう。機会があればな」

《またそう言って先延ばしに……何か来た》

捕縛を目的とした『網』とは違いそのほとんどを木々や地を縫い這うように張られた『探知用』の魔力糸が来訪者を告げたのだ。

「探知に掛るとはいえ相当な手練れのような……」

意図して『誘振感覚』を閉じている現状ではエヴァンジェリンの来訪、といのは限りなく零に近く、同様に誘われた魔族。と言うのも考えにくい。

ただ襲ってくるだけの魔獣や有る程度知能のある竜種等だとしても『網』の糸に一本もかかることなく近づいてくるなど有りえない。目を凝らしても見えるか、という実体の糸にはかからないと言う事は相当目がいいか、同じ糸の使い手か、はたまた単に運がいいだけなのか何とも言えないものである。

「ふむ。そう重くはないな、移動速度も速く息使いも速いがそれほど乱れてはいない、か」

探知用の糸から齎される情報から対象を推測するが、

「人型、と言うのは確かだろうな。身長が高い。何を目印にしているのか知れないが真っ直ぐこっちにくるな……」

まったく、と溜息を吐くと鍋の火を消し手に一振りの刀を持つとフアーガスへと姿を変えつつ客人を迎えるためにその場から相手の来る方向へと歩き始めた。

クレスから一番近い最も内側の網へたどりつくのとはほぼ同時に来訪者も計ったかのようにその場へと姿を現した。

「そこのお前、止まれ。この場に……お前は」

そこにいたのは、

「はは、なんや久しぶりやな……」

独特の口調に薄い笑いを浮かべた『ストレガ』の一人、エレミタだった。

「なぜお前がここに？ 第一お前たちはもう私に関わらないと言ったはずだろう。それ以前に良く場所がわかったものだ……」

「あんたに用があるからに決まってるやろファーガス・フェイタラスタ。まあ今回ののは不可抗力や許してや。それに自分の情報力とサスペンディオの探知力を合わせれば誰がどこにいるかなんて意外と簡単な事や」

やれやれ、と肩を竦めたかと思えば得意げな笑みを浮かべエレミタは説明をする。

その姿は同じストレガとはいえ以前一對一で会ったサスペンディオとはかけ離れたものだ。

「……不可抗力だと言ったな。なら、要するに私でなければならぬい。と言う事だろう？」

「そうや、あんたにどうしても来てもらなあかんのや。無茶言ってるのはわかつとる、けど頼む。仲間の為なんや」

「はあ……以前来た彼女が言っていた『炎の狂人』の詳しい情報をよこせば話を聞いてやる」

クレスは溜息と共にうんざりしたような声でそう言った。
それに対し、

「ズバリや、奴が関係しとる」

眼鏡を押し上げながら先ほどとは打って変わった真剣な表情で答えた。

「ふふ、なるほど。いいだろう、手を貸してやる」

「ホンマかつ！」

「ああ。乗せられているようで気に食わないが私もそいつに興味があるのは確かだ。それで、時間はあるのか？」

「え、ああ。実際のところ予想よりあんたが早くに見つかってくれたおかげで大丈夫や。もし予想と大きく外れて旧世界にでもいるっちゅうんならちいとばかし非情な手段つこうてでも探してたところや。火が相手ならサスペンディオさえいれば時間を稼ぐのには十分やけどな……」

「ふむ、なるほど。とりあえずは、だ」

「……なんや」

「飯だ」

そう言ってクレスは刀をしまいつつ踵を返すと放置した鍋の方へと戻り始めた。

「は？」

「食べながらでもいい、もう少し詳しく話せ」

啞然とするエレミタを無視しクレスは歩み続けるのであった。

「う、うまい。なんやこれホンマにあんたが作ったんか……」

「そこのトカゲに感謝しろ」

「と、トカゲ……」

などと言うどうでもよさげな会話から始まった食事は何事ともなく

ただ淡々とエレミタの説明によって幕を閉じる。

以前の伝言を含め連絡に来る黒いローブの人物が狂人本人であった。相手の目的はファーガスの情報、ひいてはファーガス自身。

エレミタのペルソナ『モロス』は炎の反射が行えるらしいが炎特化であり治癒能力を持つサスペンディオを防御に、万能な攻撃のできるファトゥムを攻撃に残しエレミタ自身はクレス、もといファーガスを搜索。

サスペンディオも自分だけを守るなら何日でも可能だがファトゥムも守るとなると勝手が違ってくると言う事であり長期間は持たないだろうと言う予測。

だが相手の振る舞いを見る限りでは現状嬲り遊んでいるらしと言う事である。

「治癒能力？」

「そうや、前にあんたと戦ってから何かあったらしくてな。結構な力を持ってるんや」

「ふむ。まあ、今はいいとするか……」

現在境目の森を出発し既に一日。

情報の確認をしつつ向かう先はウェスペルタティア王国。

「しかしウェスペルタティア、か……」

「ん？ ああ、あまりいい思い出はなさそやな」

どこか含むような言い方をするクレスにファーガスの経歴を調べたの
のあろうエレミタは納得いったように頷いた。

「ああ、滅多なことでは寄りつかないのは確かだな……」

最古の都市にてクレスは再び騒動に巻き込まれようと自らその足を
進めるのであった――――

訪れ（後書き）

自ら厄介事に向かう日が来た

今回は書く事が少ない

クレスの居た森

もつとウェスペルタティア寄りに進めばスキヤバレリとなる

サバエス高地とヘレスポントス山脈

火星図で言えばヘラスの方向、サバ人のくと言われるあたり
山脈もその辺り、のはず

トカゲ

多分竜種

ゼクトが鍋の時に旨いかの？、とか言ってた

クレマンズの体

実際のところもし二人になった場合メリットよりデメリットの方が
大きい

『網』と『探知』の糸

外敵を追い払う目的もあるため『網』の方には実体系が多く使われている

逆に『探知』は接触時に気付かれなかったために強度を低く証拠が残りにくい密度を下げ存在感を下げた魔力糸がほとんど

『誘振感覚』

自ら抑えが効くらしい。

これが発する存在全てが可能なのか様々な存在を含む特異な存在であるクレスだからできるのかは不明

エレーミタ

ストレガ内の料理人はこの人

「夜の迷宮」戦において『破壊の炎』が放たれた時に炎の反射をしなかったのは破壊の炎を反射するほどの力を有していないため反射能力は分類としては障壁に近い

サスペンディオ

新たに治癒能力を得たもよう

『炎の狂人』

自ら狂っていると自覚がるらしい

クレス

再び王国へ

クレマンス

体の件は冗談半分本気半分と言ったところ

再会と（前書き）

全然書いてない今日この頃

再会と

ウェスペルタティア王国。

帝国と連合の境に近く連合にとっては最前線とも言える国家。

その領土の大半を天然の浮遊大地とし観光地としても名高く、最古の歴史を持つとされ歴史的な価値もある魔法界の中でもかなり特殊な位置にある国である。

そして浮遊大地にばかり目を奪われるがその地を擁するのは反対側が見えないほどの巨大な溪谷なのである。

その谷間に浮かぶ大地の遥か下にはかつて空に浮かび繁栄を極め今ではその天然の浮力を失った島々のなれの果てが広がる。

浮かぶ大地と雲の下に覆われ普段は誰も目にする事のない忘れられた世界。廃都市となった遺跡群

文字通り無法地帯。

クレス達の歩みはそこへと向かっているのであった。

「半天然の要害とは……。よくこんな場所に目を着けたものだな」

「日陰者にはお似合いやろ。あんたみたいに島一つ占拠して城立てるなんて普通はできんからなあ」

「それもそうか。まあ、私には術があったからな。それに誰のものでないと言うのだから別にかまわないだろう」

「流石伝説的な賞金首やな、言う事が違うわ。味方だと心強いで。」

……こっちや」

通常よりも幾らか魔力濃度が高くうつすらとは言え霧が張っているような状態だと言うのに確実な案内を行いながらエレミタは道とは言えない道の角を曲がる。

更に右に左と曲がるにつれ次第に周囲の気温が上がるのがわかる。

「ちいつ、敵さんも周りの事お構いなし見たいやな……急ぐで」

争いが激しさを増している事にエレミタが汗を浮かべ走る速度を上げた。

門のような物が立てられた朽ちた大地を超えた先、周囲の霧が赤く照らされる光景の中で暑さは更に増し時折火柱が上がるのが見える。

「あそこか……私は先行する。お前は自分のペースで来い」

「ちよっ、何言うてんや」

「死にはしない、気にするな」

「あ、おいっ……そう言う問題かいな……」

どんどんとその背を小さくしていくクレスに眩きかけるが聞こえるはずもなくエレミタは溜息を吐いた。

一息ついて再び仲間のところへと駆け始めるのであった。

「狂っていて炎を使い笑う存在で私に関係があるなど奴しか思い浮かばん……」

『本来』の色をした金の髪を靡かせながらクレスはただ走る。

《私もちよーっとだけその人には恨みがあるかなー、なんて》

「ふん、何度でも打倒してやるさ」

《当然、今回は私だって一応戦えるし。負けるわけない》

熱気に当てられたか何時になく熱の籠った台詞と共に二人は障害を超えただ走る。

「エレミタは彼と会えましたかね……」

「……心配なら行ってもいい」

「ふふふ、私が行ったところで彼と一戦するのが目に見えますよ」

呼吸が否応にも熱くなり内側から体が焼かれるような熱気の中。

玉の様な汗を浮かべながらファトゥムとサスペンディオは何でもないかのように会話をしながら炎を凌いでいた。

「無理しないで良いわ。炎相手ならいくらでも持つ」

「こう暑いと涼しい場所に行きたいですがね。貴女一人だと無茶をしそうだから」

「……………」

「ふふ……しかし今日は静かですね。どうしたのでしょうか……」

いつもならばそこら中で火柱が上がり炎の海の中から二人を燻り出し適当に戦っては逃がし、それを繰り返すのだが今日に限っては時折火柱は上がるもののいつもの苛烈さが無いのである。

「飽きてきた、とか」

「それは困りますね。あれが遊んでいてくれるからの現状な訳ですし。本格的な水や氷使いがない我々にはどうしようもない……」

「あんなのに目を付けられてるファীগス・フェイタラストも災難」「ええ、本当に。そして彼に関わってしまった我々も災難です。まったく……」

息を吐こうとしたところで二人の前にあった建物が炎包まれ消し飛んだ。

「おやおや、こんなところにいたんですか。探してしまいましたよ」

声の主は笑顔と共に火柱の中から悠然と歩きながら現れた。

「っ……」

「おや、今日は随分静かだと思ったらわざわざ探して歩いたんですか」

サスペンディオの隣でファトゥムが軽い調子で口を開いた。

「ははは、そうなんですよ。些か飽きてきましたね。趣向を変えてみたんですが……、あまり長続きしませんでしたねえ」

にたり、と笑いながら炎を上げる腕を上げる。

「ファトウムッ！」

声を上げると同時にサスペンディオの手の中で握り潰された符がぱりん、と砕け散った。

「ぐ……」

瞬時に後ろへと跳んだファトウムも符をぱりん、と握り潰す。

二人へと放たれた炎は現れたメーディアが身を盾とし防ぎ後方で浮かび上がるヒュプノスが雷撃を放つ。

「あはははは、さあ今日も鬼ごっこですよ。頑張って逃げて下さいね」

雷撃が体を貫くがそれをものもしないかのように炎が体を覆い傷を消し去る。

「ははは、炎である私の体が穿てるわけじゃないじゃないですか。あはははは————」

周囲を更に火の海へと変わるなかで笑い声が木霊する。

「あの笑い声……やはり」
《そうだね》

辺りは既に火の海となり近づくほどにその脅威は増してゆく。
幾度か上がった火柱のせいか瓦礫はところどころがくりぬかれたかのように消失しその周囲には溶け跡が残っている。

これだけでどれだけの火力かわかると言うものだ。
目の前の瓦礫に足を掛け一気に上空へ跳び上がり炎を操るその姿を捉えた。

「タン・レスタン・アルター・アンタレス 来たれ星精 降り注ぐ
は断罪の剣 仇なす者に烙印を 七星の光持ちて刻み込め 『七星
の刻剣』」

放たれる光は七つの剣となり炎の体を縫いとめ陣を形成する。

「はは、今度は誰ですかっ」

振り返るより早く八本目の剣が中央へと突き刺さり光を上げた。

「っ、あなたは……」

クレスを見つけたファトゥムが何かを言おうとするが……、

「退け。私がやる」

そう遮りつつ二人の元へ落下を始め……、

「タン・レスタン・アルター・アンタレス 契約に従い我に応えよ
時と光の輝く聖王 煌めく星の抱擁は閃く星光 全てを無に帰す
灰燼の帳と氷河の訪れをここに 来たれ壮絶なる奔流 『災厄齎す

光の破壊』」

着地と同時に放たれたそれは更なる極光を呼び視界を白に染め上げる。

同時に無音。

否、あまりの衝撃に本能的に聞くという事を拒否し反射的に目を閉じてなお瞼を透かし白が埋め尽くし眩ませているのだ。

全てが過ぎ何秒か、数分か。時間が過ぎた頃最初に戻った聴覚が最初に捉えたのは……、

「やり過ぎたか……？」

そんなクレスの眩きだった。

聴覚が戻ると同時に未だに眩む目を開いた二人はいつの間にか倒れていた事に気がつきつつ起き上がる。

そして見たのは常にこの地域で立ちこめていた霧が消え失せ僅かに残された瓦礫と燦ぶる火と言うほぼ更地と化した周囲の状況だった。

「何が……」

「……………」

言葉なく立ちつくすファトゥムとサスペンディオ。

そんな二人に背を向けた状態で、

「しかし本当に奴なら生きていても……」

眩くクレスの姿があった。

「おい、なんや凄い音と光が起こったけど大丈夫かー」

周囲の更地の向こう、未だ瓦礫のある、むしろ衝撃で更に積み重なった方向からエレミタが駆け寄ってくる。

「大丈夫ですよ」

「……なんとか」

「む。今の一撃でその『奴』がいなくなったのだがどうしたものか……」

「ああ、あんたが……って、え……」

クレスの呟きに周囲は沈黙した。

何も物音がしない世界でその沈黙は酷く……――――

再会と（後書き）

一言で言うとかレスさんえ……
読む人減ったのに評価増えるとかどういう事なのか……

『本来』の色、姿

『賞金首ファーガス』として使用する金髪碧眼、それが『ファーガス』としてこの世に生まれ持った姿

『七星の刻剣』

詠唱は「来たれ星精 降り注ぐは断罪の剣 仇なす者に烙印を 七星の光持ちて刻み込め」

星魔法、名前とは裏腹に八本の剣が出現する

七星や剣のワードからわかる通り北斗七星が元になっている

武曲が二重星と言われる所（所謂死兆星の存在）から八本目が存在する

剣一本一本の攻撃や八角形ないし七角形＋中心に一本の簡易的な陣としての範囲攻撃が可能となる。

作中ではこれの陣によって次の『災厄齎す光の破壊』の効果をなるべく外側に洩らさないようにしている。

『災厄齎す光の破壊』

詠唱は「契約に従い我に応えよ 時と光の輝く聖王 煌めく星の抱擁は閃く星光 全てを無に帰す灰燼の帳と氷河の訪れをここに 来たれ壮絶なる奔流」

名実ともに星魔法最大威力の広範囲殲滅術式

一言で説明すれば惑星衝突、隕石落下、アルマゲドン。この世の終わり

単純な衝突による力の奔流それによって発生する衝撃に閃光と音限定された空間と言う事で威力を加減し簡易とはいえ同じ星魔法によって発生させた七剣の陣による結界中で放ってなお周囲に影響を与える威力

もし通常の空間で十全に放っていたら術者諸共巻き込み上空の大陸を落とすと言っても過言でない範囲と威力を発揮する災害魔法。

手加減して放ったが魔力の七割を余裕で持っていくため連続でもう一発などとは絶対には言えない

またその規模から対象を選ぶことなどできないため使いどころもなく使用する魔力量などから闇の魔法で掌握する事も困難である完全に威力だけを求めた欠陥魔法である。

炎の狂人

浮遊大地のなれの果てである大地と遺跡群を溶かす程の炎を軽く操る体を炎に変換できる

「あははは、出番これだけですか……？」

ファトゥム

サスペンディオに触発され簡易召喚を可能にしたそれでもサスペンディオには届かない

サスペンディオ

現在ストレガ内において群を抜いた戦闘力を持つ炎のエキスパート

エレーミタ

遅れて着いた結果案内だけだった人

クレス

やりすぎた人

しかしもう魔力はほとんどない

クレマンス

「私の見せ場は？」

刃（前書き）

遂に60話

ルビ機能がなあ……

刃

ウェスペルタティア王国の浮遊大陸。

その遙か下。忘れられた都の瓦礫が思いのままに跋扈する一帯。なんな中のとある一部分だけが取り払われたかのように半ば更地と化し僅かに残る残骸と、ここ数日消える事のなかった業火の残り火だけがそのなごりを主張していた。

周囲の風景を作り変えた本人であるクレスは懽然とした表情で周囲を見渡す。

彼を呼んだストレガの三人は呆れた眼差しを向け本来ならあるだろう剣呑な雰囲気は微塵も無かった。

「……んで、奴は消えた、っちゅうことでええんか？」

沈黙を破ったのは遅れて来た為にこの『惨状』しか知らないエレミタだった。

「と言われましてもね。我々も気づいたらこうなっていた、としか言えないので……ですよね？」

「……うん」

ファトゥムもサスペンディオも何も見ていない、正確には何か見えるような状況ではなかった為に何も言えないのである。

そして再び三人はクレスへと視線を向ける。

それに気付いたのかクレスが振り返り口を開こうとした丁度その時、
「——あはっ、あははは。その姿、まさかファーガス？ ファーガス・エルレイアですか？ ——」

突然周囲へと響き渡る笑い声が四人の注意を引いた。

声が響くと同時に燦ぶっていた炎の一つが火勢を上げ大きくなる。

「——金の髪に碧の目、そうだ。初めて会った時の貴方の姿はそれだったと私の記憶にあります——」

炎は揺れ蠢き次第にその形を変えていく。

「——最後の記憶では白くなっていたはずですが、金色に戻したんですね。いやはや白も似合っていましたよ？ ——」

嘲笑うかのような声と共に動き始めた炎は肢体を、顔を、服までも形成し遂にそれは降り立った。

「久しぶりですね。ファーガス・エルレイヤ」

手にナイフを持った旅人然とした出で立ちに張り付けたように崩れる事のない笑顔。

「今はファーガス・フェイタラストだ。……カーシー」

対極に位置してありながら背中合わせと言えるかつて消えたはずの男がそこにはいた。

「貴方が家名を捨てた？ははは、それは面白い冗談だ。捨てるなら名前の方じゃないんですかね？魔へと堕ち悪となったあなたが『フアーガス（英雄）』を名乗り続けてるなんて。皮肉か何かですか？面白い冗談ですね」

さも面白いです、と言わんばかりにカーシーは両手を広げて見せる。

「ふん、だったらどうだと言うのだ」

「口調も何だか堅くなってしまつて。まあ流石に四百年以上の月日が経てばそれぐらい変わりますかね……」

ふふふ、と相変わらずの笑みを浮かべながら楽しそうに彼は笑う。

「地下で……、あの時私は確かにお前を消したものだとはかり思つていたが違つたんだな……」

「あの時？ああ、はいはい。記憶にあります。いえ、あの時確かに私は消えましたよ。今ここにいる私はしがない人形みたいなものにしてね」

「人形……？」

「おや、知らないんですか？この世界は秘密で満ちているんですよ。四百年も生きていて嘆かわしいですね。と言つても私も知ったのは人形になってからのここ十数年なんですがね」

「世界の秘密、か……。それにお前は十数年前には既に人形とやらだった、と言うのか」

「まあ私も気づいたら目の前に所長、おっと今は主殿でしたね。まあその主殿がいましたて吃驚ですよ。そうだ所ちよ、主殿で思いましたでしたが私が貴方に会いに行くと言つた時に伝言を頼まれました「無事に事は成った。もう消えても構わない」だ、そうです。察するに結局のところ私と言う『踏み台』の上にいた貴方も同じく何かの踏み台だったわけですね。ますます共感を覚えますよ」

そこまで滔々と語ったカーシーは嬉しそうな笑みに切り替えた。

「いやあ、本当に傑作ですね。嬉しいですね、楽しいですね、こうしてまた貴方と語り合える時が来るだなんて」

その体から時折炎を吹き出しながらそれを気にする事が無くケタケタと彼は笑い続ける。

「でもその前に……」

突然口の弧を維持しつつ目を尖らせ、

「その邪魔者達には消してしまいましょっかっ」

ナイフを持った右手を炎と共に突き出した。

刀身は炎と混ざりその凶刃をストレガへと伸ばす。

「メーディア！」

ばりん、と符を握り潰す事での最速召喚によりサスペンディオの半身が瞬時に現れその身を盾とする。

そして、炎を吸収するその体が、音を立て迫る炎刃にぶつかり、裂かれた。

炎刃が戻ると同時にメーディアはその姿を揺らめかせ消える。
ペルソナが受けたダメージは召喚者に現れる。当然サスペンディオも、

「ぐッ、な……んで……」

ぐらり、と膝を着くその体からは血が流れ白い服を赤く染め上げていた。

「あはっ、あはははははは————」

「「サスペンディオ!!」」

ファトゥムとエレミタの叫びがカーシーの笑い声と共に辺りに響く。

「っは、大丈夫……まだ、治せ、るから」

流れ出る血をとめるため手を押し当て荒く息を継ぎながらも彼女は大丈夫だと答える。

そんな彼女を守るかのようにファトゥムとエレミタは立ちはだかると自身のペルソナを召喚した。

「ふふふ、ここ最近目の前の人のせいでうんざりしているのですよ。ファーガス・フェイタラスト、私も加わりますよ」

「はっ、あんたに任せるのはやめや。自分らもやらしてもらおうで」

好戦的な笑みを浮かべ二人はクレスへ言い放った。

「好きにしろ。だが……死ぬなよ」

刀を抜き放ったクレスはそう言い残し未だ笑い続けるカーシーへと駆けた。

「刀剣が私に効くと? 記憶にある言葉を再び言わせていただきますし

よう。僕は炎だ、切れず穿てず碎けない、とねっ」

「はっ、それはどうだろうな。奥義・斬魔剣」

神鳴流の真骨頂たる魔を退け斬る、その一撃が放たれる。

それに合わせ後方から氷柱と雷撃が降り注ぎカーシーも動きを阻害する。

「あはっ、何ですかその剣は。まさか僕を斬った？あはは、はは……」

雷と氷により炎でつくられた体を持つカーシーは一時的にその構成を解かれ修復しようと炎を上げる。

しかし胸元の傷は塞がることなく血を流し、自身の炎に焼かれ赤い煙を上げていた。

「四百年前と同じようにまた貴様を消してやる」

取るに足らないとでも言うかのような調子でクレスはそう言い放った。

「どうせ消えたところで僕はまた作られるのです。ならここで貴方を道連れにしても構わないでしょうっ」

再び刃に炎を灯らせ、

「その剣で僕を斬った、けど僕の刃だって君は防げない。なぜなら……」

防げない、と断言され突き出された刃は槍のようにその切っ先を伸ばし、

「なぜならどんな魔法や障壁だろうと貫くっ！知っているでしょう」

ファীগス、この刃を、貴方の大切なものを奪った刃を、僕の新し
いナイフはその残骸を使っている特別製だぞっ」

絶対の自信からくるそれ。

曰くその刃はあの『コントリート・ハスター魔崩の槍』その残骸であると――――

刃（後書き）

もう半年も経つそうです

今回は書く事がかなり少ない、はず

斬魔剣

原作ではクルトが二の太刀でネギを斬っていたが必ずしも二の太刀である必要はない

二の太刀とは切りたいものだけを斬る技術でありそれ故に離れている対象に届くまで「閃」のような飛来、飛翔エフェクトが必要となる複合技である斬空斬魔閃は斬魔剣を飛ばしているだけであるため二の太刀と違い障壁などに当たる

また直接接触できる距離であれば作中の様に「閃」や二の太刀を使用しなくてもその効果を発揮する。しかし同様に障壁などで止める事ができる

カーシー

復活した人。

地下施設が密閉状態だったのが幸いし半精霊体としての魔力素が残っていた。それを元に更なる調整を加えられ復元された。

そのため一部記憶に欠損がある。台詞で「記憶に」と言っているのはその影響である。

消し飛んだとしても自身が発生させた炎がある限りそこからいくらでも復元が可能

また殺したはずの「所長」が主らしく世界の秘密と言うのを知っているらしい

エレミタ

どうやらファトゥムと同時に召喚したことから簡易召喚が出来るらしい

魔崩の槍の残骸を使用した炎刃

正確には魔崩の槍の刃の部分

どういう訳か魔法を打ち消す刃が魔法の炎と融合した

精神具現体とはいえ魔法存在であるペルソナには当然効果が高い

以前同様障壁を貫く効果は健在である、炎が加わった事により武器等で受け止める事等も難しくなった。

クレス

魔力を使う魔法ではなく剣技、気による攻撃を開始した

そして幕は……(前書き)

開くのか閉じたのか。

二か所ほどルビ使用

そして幕は……

大切な者を奪った魔法を貫く刃。

確かにクレスは知っている。

一人の騎士が持っているそれをはぎ取った事も。

それを叩き折った事も。

『魔崩の槍』
コントリート・ハスター

それを覚えている。

しかし、何故、

「何故お前が、彼女の事を知っている！」

刀を押し折り障壁を貫いた炎刃はそのままクレスの肩を抉る。

「主殿はたいていの事を知っているらしいですよ。私にいろいろ教えてくれました。貴方の軌跡とか、ね。本当にそんな力があつたんですね」

既に傷が無くなっているクレスの驚異的な回復力を見ながらカーシ―は呟く。

「なるほどな。この四百年あまりの私が公に行った事とそれに纏わる細事等を知っている訳か」

「流石に全部ではないですがね。事実、貴方と施設を逃げ出した少女の足取りは全く掴めていませんし。焼いてあげたかったのに残念

です。他の事も主殿は何か知っているらしいですがね……。だいたいの事をなら教えていただきましたよ」

「だが……彼女が大切だという事には繋がらないだろう」

「主殿が言っていたのですが。貴方のその新しい力の源になっているものは真に大切な者でなければ託されないだろう、とね」

「どうやらその主とやらに会う必要があるそうだ……」

話は終わり、とばかりにクレスは再び刀を取り出し構えた。

「私が負けるより早くこの刃でその『託された物』を刺し貴方を倒せばいい、それだけです」

カーシーも部分的に肉体を露わにし瞬時に胸の傷を自らの炎で焼き無理やり止血をし再び炎へとその身を変える。

「話は終わったようやな」

「要はその刃に当たらなければ良いのでしよう」

話を聞いていたストレガの二人も再びその闘志を燃やし始める。

「私は生きなければならぬんだ」

「僕は貴方を焼き殺したい」

「そんなんでもええ。ワイらは……」

「ただ、仲間の為に。それだけです」

意思の表れと共に私、生きてるわよ。と言うサスペンディオオの呟きに誰もが無視を決め込んだ瞬間だった。

周囲を火の海にするという圧倒的な火勢で囲み魔槍の力を持った炎刃で執拗にクレスを狙うカーシー。剣技と牽制程度に無詠唱の術を放ちつつ迫る刃をかわすクレス、そしてそのクレスの隙を補いながらカーシーを妨害するストレガによる即席の連携。

逸れた攻撃が更地となった大地を再び荒れ果てたものへと変えてゆく。

集中力を切らした方から崩れるだろう状況の中、最初に行動を起こしたのは、

「埒があかないな……」

鬱陶しそうに呟いたクレスであった。

その手にはいつの間にか刀は無く笛が一つ。

傷を治しつつ戦況をただ見守っていたサスペンディオだけが、

「夜の、女王」

悲しいような嬉しいようなそんな目で見つつそう小さく呟いた。

「笛？そんなもの出してどうするつもりですか。吹くんですか？あはははは、傑作ですね」

「ふん、その余裕がいつまで続くか見ものだな。光栄に思え、これを見るのはお前で二人目だ」

「二番目、ですか。それは少々気に食わないですね。どうせなら最

初が良かったですよ」

軽い口調ながらもカーシーは攻撃の手を緩めず、逆にクレスは片手を自ら笛で塞いだ事で回避に専念する事になる。

「何をするのかはわかりませんが早くお願いしますよ」

「頼むで、ほんま」

愚痴を言いながらもサポートを続けるストレガの援護を受けながらクレスは笛を狂々くるくると回し続ける。

「前よりも早い……来るわ」

一人雲と僅かに見える大地に覆われた空をサスペンディオは見上げる。

そして数十秒もしないうちに暗雲が立ち込め雨を降らし始めた。たちまちそれは豪雨となり火の海を消し去ろうとする。

「雨？急に……あは、ファーガス、これがその笛の力ですか。ははは、雨を降らす？凄いですね。ですが周囲の炎は消せても私は消せませんよ」

消えていく炎に反しカーシー自身の炎の勢いが増す。蒸発する雨水が霧となり薄く幕を張る中で勢いを増したカーシーの炎が彼の周囲をより深く霧で包みこみ渦を巻き始める。

「これを待っていたが、まさか自分からそうしてくれるとは有り難

い」

瞬時に駆けだしたクレスは各手に持った刀と笛をしまいながら霧に包まれるカーシーへと肉薄しストレガの視界から消えた。同時にカーシーの視界に入りこむ。

「っ、自ら来るとは……一騎打ちか何かですかっ」

自らの射程に入ってきた事を驚きながらも喜びつつカーシーは必殺のナイフを繰り出す。

「これで……」

瞬間響くピシリ、という何かの割れる音。

「終わりよっ」

「貴女はあの時のっ……!!」

左の掌でナイフを受け止めることでカーシーの動きを止めながら突如現れたクレマン스는、

「解放、術式固定『炎の氷柱』」

魔法円陣と共に右手の掌に留められた術式を叩きつけた。

放たれた衝撃が風となり辺りの霧を吹き飛ばす。
間一髪のところではクレマン스는ストレガの三人に姿を見られることなくクレスと入れ変わる。

霧がなくなり風も無くなった頃、その場にはなんとか攻撃を避けようとしたのか半身を氷漬けにされ今もゆっくりと、しかし着実にその「炎を凍らせつつある」カーシーと左の掌にナイフが突き刺さったクレスの姿。

「やった、ようですね」

「いきなり突っ込むからひやひやしたで……」

警戒を緩めた二人はゆっくりとクレスへと歩き近づきカーシーの姿を見る。

「あは、かッ、炎が……こ、凍る……?! 何ですかこの術は……っ」

呻きたいのか笑いたいのか何とも言えない声を上げながらもカーシーが喋る。

「教えるわけないだろう。そのまま凍ってしまえ」

「あ、ははははは……ははははは……。一度だけしか許されてないのですがね……」

ひとしきり笑ったカーシーはそう呟くとまだ動く右腕を宙に上げクレスを見ながら、

「せめて貴方も……ははは。『リライト』」

鍵の様な先端を持った杖の様な物を掴みそう言った。

「何をっ」

その言葉は紡がれることなくクレスは横に倒れ、入れ代わる様にその場に入ったサスペンディオの体の一部が白く花卉のように散った。

「「サスペンディオ」」

クレスを含む三人の声が同時に響いた。

「はは、最後に失敗とは……どうせなら全員消えましようかね『リライト』」

放たれた光が辺りを覆う瞬間体を失いつつ倒れこんだサスペンディオと庇うように前へ出たファトゥムとエレミタにクレスは守られる。

「お前たちっ……！」

「誰かを守って消えるっちゅうのも悪うないかもな……」

「光に包まれて終わりとは予想外ですが、悪くない。かもしれないね」

笑みを浮かべながら舞い散る花のように消える二人に続き一番光から遠くクレスに近いサスペンディオも、

「あなたに会えていろいろわかった気がする……。だから、ありがとう。これからも負けないで」

そう言って先の二人と同じように笑顔で消えていった。

「最後まで失敗とは。不甲斐ないですね。あはは……」

その手に杖は既になく乾いた笑みを浮かべながらカーシーもゆつくりとその身を散らし始めていた。

「お別れに一つ」

「……何だ」

「互いに聞きたい事はあるでしょうが……永い時を生きる貴方は、何もしなくても……時が来れば全て知ることになるでしょう。まあその時はまた私に会う時でしょうがね……」

「……………」

「まあ、楽しみにしててください」

それだけ言うと満足したのかカーシーは笑いながら、
「では、またいつの日か……」

その身を凍らせることなく花として散っていった。

そして、

「貴様が試作品か？」

声が響いた。

咄嗟に振り返ったクレス。

その目に映るのは重い空気を纏い漆黒のローブに包まれた人物。
完全な不意をついて現れたその人物は先ほど消えた鍵のような杖を手に、

「役目は果たしただろう『リライト』」

同時に光がクレスを襲った。

「なるほど、貴様————を持って————なら————生きて——

————」

薄れて行く意識の中で響く言葉を最後にクレスの闇へと落ちた。

オスティア謎の集中豪雨の日、その遥か下で事は静かに幕を……—

———

そして幕は……（後書き）

書けないせいでストックが減っていく
次回からで閑話になります。

『託された物』

大地の心臓の事

クレスと同化しているためこれだけを貫くのは事実上不可能

『炎の氷柱』

魔神マルコシアスの術式

疑似遅延によって発動した冷凍炎撃

触れた相手を燃やしながら凍らせる氷の炎

永遠に焼かれ続ける

魔法「リライト」

人間を消す事ができるらしい

また触媒に特殊な杖が必要な模様

カーシーの持っていた鍵の様な杖とローブの人物が持っていた鍵の
様な杖

魔法リライトを使うのに必要とされる

カーシーの持っていた物は劣化コピーであり試作、試験段階のもの
であり一度の使用しか許されていなかった。

その為二度目の使用により杖自体と使用者であるカーシーも影響を

受け消える事となった

ローブの人物が持っていた物は持っていた人物の事を考えてればオリジナルかそれに近いカーシーの物よりもより高度な物だと思われる

カーシー

いろいろ知っている模様

再び消える事になったが再度現れるような発言を残す

漆黒のローブ

クレスを試作品と言った。この事から察するにカーシーに伝言を頼んだ元地下施設の所長であり彼の主でもある。また中堅以上であるストレガの上にいるカーシーの上に位置する事から完全なる世界の盟主ないしそれに準ずるような存在だと思われる

ストレガ

それぞれにそれぞれの思いがありそれに準じ消えていった
悔いがないわけではないが後悔はない

クレス

三人を犠牲にし残った

謎の人物から魔法リライトを受け意識を失う

クレマンス

いいところだけ持って行った

生死・喪失（前書き）

すぐにバックしてもいいくらいどーでもいい回かもしれない
一か所ルビ

生死・喪失

魔法『リライト』

人を簡単に散華させる謎の呪文。

一瞬で壊す、崩す、分解する、デイスインテグレイト超高度分解魔法に分類される物か。

そんな高度な呪文を詠唱もせず一言で人を分解する威力で発生させたのはあの鍵の形をした杖。

人を消せるならば魔法も消せると仮定する。

完全魔法無効化能力を宿した杖……か？

そうであるならウェスperlティア王家に所縁のある物と考えるのが筋か。

高度分解と魔法無効化の二つの能力を備えている？強力すぎる……。想定されるだけの力を有しているなら最上級の宝具に分類されるだろう。

そんな最上級の宝具に分類される物に覚えがないわけではない。

カーシーが持っていた物は二度の使用で消え、本人も「一度だけ」と言っていたところを見るとその劣化品と言ったところか。

コンタミネーションと思われる取り出しも可能。

あの黒いローブの存在は確かに同じ鍵杖でリライトと言った。

そしてわたしはそれを受けたはずだ。

しかし……、

「私に何が起こった？」

わからない。

ただあれを境に新たな魔神術式の会得が行えなくなった、と言う事は私の中で何かが起こった、と言う事だ。

高度な魔法、強力な宝具、コンタミネーション、ウエスペルタティア……。

可能性としては『大地の心臓』と同じく始祖アマテルの作ったもの、ということだが……。

結局、何度、何年考えてもそれ以上の事は分からない。

考えては同じ結論に至る、確認の様な思考作業を行いながらそのまま時は過ぎる。

「始まったか」

クレスは何度繰り返し続けたかわからない思考に浸っている中で霧がはれ始め状況は開始された

自ら好んで魔王と名乗る存在に興味を持ち一度遠目に見た時。
自身の暗殺者仕込みの隠れ身を無いかのように目を合わせた、まさに鬼子足る織田信長が気づけばいないとは思ひもしなかった……。

冒険好きのスペインは新大陸でアステカに続きのインカを攻め滅ぼした。

古き祖国、偉大なるイングランドは隣国を併合しその領土を拡大した。

内海を征していた精強なおスマン帝国艦隊は教皇率いる連合艦隊に敗れたものの力を維持している。が、内部の政治不安等から混乱へ歩みを進めた。

連合艦隊の中核、最強を誇った至高のスペイン艦隊もイングランドとの戦闘を経てそのほとんどが海に沈み壊滅。

この数々の争いの中で現住地である日本でも時は戦国、その幕を閉じようとする一大決戦、その地は関ヶ原。

東と西、その二つにわかれ全国を巻き込んだ戦が始まった。

認識阻害の結界を張りつつ雲に紛れる様に風に吹かれながらクレスはただ俯瞰する。

「日本の戦乱はこれで終わりそうだな……」

何とはなしにはあ、と溜息をつきつつそう呟いた。

そしてふと取り出した『夜の女王』を口に当て静かに音を奏で始める。

この数十年、何事も無く時は過ぎた。

奴の言っていた「その時」はいつ訪れるのか。

この五百年という歲月、長かったのか、短かったのか。

エドとアンナの墓はまだあるのだろうか。

やはり一度くらい見に行くべきだったか……。

私は約束を守れているだろうか、判断するのは彼女等だ。

ドロシーなんかは全然ダメだとか言いそうだ。

アテナも何だかんだ言って背中を叩きそうだな。

まったく厳しい奴らだ。

《また、海の見える場所に行きたいな》

《ああ、穏やかな時間を過ごすのは悪くないな》

あまり仰々しくされるのは嫌だがたまにはユンの家族や神鳴流道場にハシューシの、今代のハサンの元を訪れるのもいいか。

《なんだかお世話になったところへお礼に行く見たいだね》

《お礼、か……》

《クレス？》

《昔の事をこんなにも思い出すのは人間で言う『走馬灯』のようだな、とな……》

《は？》

《たぶんこんなことを言っでは怒られるのだろうが……、中途半端

に残っている人間としての心は、魂はとつくに死にたがっているのかもしれない」

《それは……》

《私はエヴァンジェリンのように完全な魔ではなくただの人間でもない。人間は肉体的に二百年も耐えられない、もちろん精神的にも、魂的にも……年を取り過ぎたか……》

それともあの時失った何かのせいなのか……。

《うん……もう、おじいちゃんだね》

《ふ、楽に隠居生活を送らせてくれればいいものを》

地上から響いてくる合戦の音と黙々と紡がれる笛の音が内面で笑う二人の声を補うように響き続ける。
気づけば既に日は中天を過ぎ戦局は大きく傾き始めているようだった。

そんな時間となった昼下がり、一陣の風が吹き、

「どこにいますかと思えばこんな果ての国の上空で何をしてるんです？」

その声にクレスは笛の音を止め振り向く。

「お前……」

《久しぶりだね》

そこには金糸の髪を靡かせた少女の姿。
そしてその肩には従者。

「ケケ、何ダカ老ケタンジャネーカ？」

「おい、チャチャゼロっ」

「ふ、そうかもしれん……」

そう言ってクレスは自嘲的に笑う。

「ちょ、兄様が年をとるはずないでしょう。……何かありましたか？」

「大したことじゃない、ちょっとしたジレンマと言う奴だ」

「ジレンマ、ですか……？」

「ジレンマと言うほどではないが……。私は確かに化物だが中途半端に人間だからな。生きたいと思う化物としての私ともう死にたいという人間としての私が私の中にはいるのさ」

そうクレスが言うときエヴァンジェリンは手を顎に当てながらしばし首を傾げた後一度頷く。

「なるほど。人間の部分の限界、ですか。それは確かにそうかもしれないですね。私にはわからない苦しみなのかもしれません。確かに人間は脆くすぐに死ぬ。ですが、それを含めての兄様なのではないでしょうか。あそこで懸命に死に抗っている人間のように抗うべきです。その人間の魂を殺したりしないでください。死にたがっているのなら生きたいと思わせればいいんです。生きる事から逃げないでください」

極真面目に真摯な瞳で彼女はクレスを見つめがらそう言った。

「……くっ、はは、あはははははは————」

「わ、私何か変な事言いましたかっ?!」

「ははは……いや、そうではない。くく……まさかお前にそんな事を言われる日が来るとは思わなくてな。ああ本当に、お前は……」

笑いそうになる呼気を落ち着かせがらクレスはエヴァンジェリンを近くに寄せると頭を撫で始める。

「っ……子供扱いはいいい加減やめてもらえませんか……」

「何を言う。お前は永遠に子供だろう。ああ……悪くない。解決にはならんがお前の言う事も一理ある。どうせ時間は有り余っているんだ、じっくり考えてなんとかするさ」

クレスはひとしきりエヴァンジェリンの頭を撫でまわした後手を離すと地上を見つめる。

その中で敵に囲まれてなお一直線に中央突破し撤退する一団を見つけると小さく笑い。

「あの一団のように私は私の思いを貫いて生きるだけだ。そうだろう」

《もちろん。いつまでもね》

「ケケ、ヨク分カンネエケド兄貴ガ元氣ナラソレデイイゼ」

「ふふ、悪いな。氣を使わせた。それで、わざわざ来たと言う事は何か用か？」

「ああ、いえそれほど大した事ではないのですが……」

こうして新たに浮き彫りとなった問題を抱えつつもクレスの歩みは止まることなく先へと進み続ける――

生死・喪失（後書き）

新章ですって

と言う事で過去話において度々出てくる多くの「実験」について一つ。この小説のネタバレみたいなのはです

全ては共通の目的であり実験主は「造物主」

外的要因による実験「ルクレツィアの系譜」限定条件下でのみ成功

魔法による肉体面の実験「カーシー」制御不可、失敗

魔法や薬品等の複数の要素による肉体面の実験「クレス」後天的な

混成生物へ転生。成功半分、失敗半分

単純、単一要素による実験「王・雲狼」後天的な他種への転生、ある意味成功

精神面のみの実験「人工ペルソナ使い達」精神の具現化のみ、失敗目標であり完成品は「エヴァンジェリン」

以上

超高度分解魔法（ディスプレイングレイト）

原作では原子分解魔法と言われた物。

作中の時代では原子や分子といった物理学用語が存在しないためこなくなった

由来は結合等の意味を持つintegrationに打ち消しで使われるdisだと思われる

魔神術式の会得

会得ができないだけで既存のものは使える

魔王

人から呼ばれたクレス、自ら名乗った織田信長

至高のスペイン艦隊

俗に無敵艦隊と呼ばれる

ユンの家族・神鳴流道場・ハシューシ今代のハサン
無縁と言うわけではなく現在も多少の交流はある

中央突破する一団

関ヶ原における島津の所業

魔法リライトの影響

旧世界人のクレスではあるがその存在は魔法世界の要素が多く含まれる物である。ある意味特殊なハーフとも言える存在
それ故に消されはされなかったが内部にある魔系因子の多くが消滅し魔としての存在濃度が薄くなった、人間寄りになったと言える
これによって指輪が印象としての反応をしなくなり魔神術式の会得が不可能となったり今まで感じなかった人間としての限界を感じるようになった

また誘振感覚も薄れている
完全に喪失しなかったのは大地の心臓のおかげである

エヴァンジェリン

物分かりが良い、良すぎる

クレス達に何か相談をしに来たらしい

チャチャゼロ

相変わらずな奔放従者

クレス

化物としての死か人間としての生か

人間としての部分が死を訴えている。半端者の因果

クレマンス

疑似存在故にクレスの問題のには囚われていない

人形使いと……

時は移ろい日本は外交を極力閉ざした。

西側では未だに魔女狩りが続きアメリカでも行われ、その勢いを急激に増した時期もあった。

そのアメリカ側では労働力が足りないとかれば仕事をあげよう、物事を教えてやろうと「親切に」暗黒大陸から人々を攫うように連れて来ては労働力として扱っている。

問題はここ数十年寒波の影響が強くどこの国にいても食糧問題が起こっている事。

各国では戦争や革命がひっきりなしに起こっていると言った事だ。どこまで行けば世界は落ちつくのか。

異種族間でありながら小競り合いがあっても大きな事が起こらない魔法界の方がよっぽど平和なのかもしれない。

そんな実際のところ大して興味の無い、たまに飛びまわって見る世界の情勢を思い考えながら最近僅かではあるが人の流入が増えてきた真秀、ひいては真秀等一帯をぶらぶらする日々。

大陸では西側、教会関係者が増えてきているらしいが、この国では弾圧の対象である。

長崎まで行かなければその姿を見る事はほぼありえないのだが……。

要するに「魔法使い」の東側への流出である。

かつて繁栄にあり今では廃都となったメルヴの街。

霊地でありその持っていた力、歴史的な価値から魔法使いが聖地とし、その地に残された強大な力、魔力を介し魔法界へのゲートを開いた程だ。

現在彼らの言う聖地、魔法界へのゲートは六つ。

幾つ聖地とやらを作る気かは知らないがこの真秀の神木、蟠桃と呼ばれ始めたそれは確実に目を付けられるだろう。

この鎖された状態がいつまで続くのか、いつ解かれるのか……。それが問題でありその時が私の転換期の一つになるのかもしれない……。

そんな如何にも黄昏ています、といった雰囲気醸すクレスだが神木の枝の上という位置では誰にも見られる事は無かった。

《あのさ。ふと、いやずっと思ってたんだけど私の体はー？》

「ふむ、一時しのぎでも求めてみるか？」

《やったねっ》

喜んではいるがクレマンスとしては久しぶりに言ってみたら成功した、そんな感じである。

嬉しいのは確かであるが……、

「まずはエヴァンジェリンから素体になりそうな人形でもないか聞いてみるか……」

クレスはクレスで弟子を頼るのもいいかという具合である、暇つぶし感があるのは否めない。

《じゃあ、向こうにエヴァを探しに行こう》

「ではさっさと行くか」

《あの話もどうなったのか気になるしね》

クレマンスとしては以前に相談された話題が気になっているらしい。

ふむ、と一呼吸置きクレスは枝から飛び降り風を感じながら魔法陣から放たれる転移の燐光に包まれ姿を消した。

ところ変わり、時進み、魔法界。

「人形使い」

最近呼ばれ始めた私の名の一つ。

大量の人形を投入し戦わせるという方法からそう呼ばれ始めた。

私が直接戦ってもいいのだが派手に動くとテンションが上がってし

まいやりすぎたりするものだから代わりに戦わせている。が、実際のところ軍隊の様な大勢を相手取る時に戦争の真似事でもする「ごっこ遊び」のような遊び半分と一人で多数を相手取るのが面倒、というのも理由ではある。

この人形達は道具召喚の要領で出現させ糸により操るというものだが近い数体にのみ実体の糸を使い残りの人形には実体系から伸ばした魔力の糸を繋げてている。

全てを直接魔力の糸ではなく本物の糸から魔力の糸を派生させているところがポイントなのだが……、

「ナア、現実見ロヨ御主人」

「なんだ、私は今忙しいんだが？」

「ソレ、現実逃避ッテ言ウンダゼ。オット……」

わざわざ作ってやった『チャチャゼロ限定で魔法が切れるナイフ』を喜々として振り回しているくせにこいつは何が不満だと言うのか……。

「ダカラ、現実、見ロヨツ」

「はあ、兄様達は言った「相手をするからつけあがる」と、ならば無視すればいいのだ」

「ソウハ言ッテモナ……」

迫る黒い重力球を切り崩しながらチャチャゼロが口を開く。

「追イカケテクルモンハシヨウガネーダロ。重力系ジャ捕マツタラ終ワリダシヨ」

再び溜息を吐きつつその発生源を見ると、

「どうしました？休憩してお茶にでもしますか？」

ふふふふ、と笑うローブ姿の『変出者』が一人。

何かの意を決してエヴァンジェリンが話しかける。

「あー……アルビレオ・イマ？」

「アルと呼んでください」

何とも言えない笑みを崩さず『変出者』もといアルビレオ・イマはそう応えた。

「まあ、それで……」

「呼んでくれないのですか？」

笑みが若干拗ねたように変わる。

「……着いてくるなど以前から言っているだろ」

「いいではないですか。何か邪魔をしていると言う訳ではないのですし。さあアルと」

「呼ばん」

エヴァンジェリンは断固拒否、といった様子で腕を組みながらそっぽを向く。

それを聞いたアルビレオは、

「なら着いて行きますね」

先ほどとは打って変わって元の何とも言えない笑みに戻しそう宣言した。

「なんでそうなるっ！」

「さっきまでの演技が崩れてますよ、キティ」

「があっ、演技ではない派っ、それにその名で呼ぶなど言っているだろうがっ。兄様達にしか許してないんだぞ」

親しげに愛称で呼ばれた事で恥ずかしさよりも激昂により顔を赤くしながら少女が叫ぶ。

「ふふふふ、可愛らしくていいではないですか。とてもお似合いですよ。それに私と貴方の仲じゃないですか」

その様子を何とも楽しそうに眺めるのは『変出者』故か。

「うるさいっ。だいたいなんだ、貴様はいつもいつもその胡散臭い笑みは」

「失礼ですね。それに真面目な時でもないのにそんな事言われても……」

「私という時は真面目じゃないと言いたいのかつ」

「え？ いえ、それは……」

「何故そこで言葉に詰まるんだっ。おかしいだろ」

びし、と音がしそうな勢いで彼女はアルビレオに向かって指さした。

「釣れないですね、私はただ貴方と楽しく話がしたいだけなのですが……」

「何が楽しくだ。最後はいつも「これまでの半生を私が本にしまし
ようか」じゃないか、そしてその時だけなぜ真面目な表情なんだ。
逆に怖いわっ」

腕を振りながらエヴァンジェリンは力説する。

するとそこへ、

「ナァ御主人」

それまで口を閉じていたチャチャゼロが唐突に喋りだした。

「何だ、私は今あいつに……」

「上、見テクレヨ」

「は？上？」

何だ突然、とぶつくさ言いながらも上を見れば、

「ん？話しは終わった？」

空中でありながら優雅に椅子へ腰掛け本を片手にエヴァンジェリン
を見つめる第三者の姿。

それは彼女が姉と慕う人物の姿であつた————

人形使いと……（後書き）

遂に出たあの人

前回に続きこれまでの設定の話、今回は「ペルソナ使い」について過去作中では全員「人工」とつくが当然自然覚醒者もいるがどちらにせよ数は数える程度

実験による人工の使い手が先に誕生、それに触発され自然覚醒者が誕生したかたちである

人工の使い手のみ腕に痣の様なものができこれを自虐的に烙印と呼ぶ。また人工使いはそのあり方から自身の能力暴走の危険性がある。また僅かであるが人工、自然問わず覚醒者の血統は発現率が通常より高いと言える

血の濃さには影響されず傍流の末裔と言えるような存在でも発現する時は発現するが自然発生確率は数億分の一というレベル

また捉え方によっては仮想人格であるクレマンヌもペルソナと言える

670

「親切に」労働力確保

奴隷貿易という負の歴史

真秀に人の流入

行政首都として江戸に幕府が置かれた為に東側の人口が増え始めた事が原因

結界を無視できる人がいくらか西から流れてきている

クレマンヌの体

人形を素体にするらしい

普通、というか多くの作品だとホムンクルスなんでしょうね……
そんな難しい設定考えられない作者です

エヴァンジェリンの相談

最近（ここ数年）変な奴に追われているというもの

現実逃避

出会った日から胡散臭い笑みのローブ男がずっと楽しそうに迫ってきたら逃げる

『チャチャゼロ限定で魔法が切れるナイフ』

エヴァンジェリンの魔法具制作能力をフル活用して作った

弾いたり叩き落とすのではなく切ることができる。常に斬魔剣状態とも言える

それでもチャチャゼロ限定であることから『魔崩の槍』がどれだけ優れてるかわかる

「半生を本に」

アーティファクト『イノチノシヘン』ではないが過去にそれを使ったせいで目覚めた性癖的な物

アルビレオ・イマ

変出者の名を冠する人物

胡散臭い笑みをたたえつつ日々エヴァンジェリンを追いかけている

得意な魔法は重力系

とりあえず重力、と表記したが時代的には引力とかエーテル渦動力とかになるのだろうか……

クレス

暇つぶしも兼ねているとは言えやっとなしはやる気になったらしい人移動時間を含めエヴァンジェリンの搜索は一月程度
思いのほか早く見つけた

クレマンヌ

本を読みつつも実は面白そうだったのでずっと様子を見ていた人

会話（前書き）

一番適当なタイトルかもしれない

会話

椅子に座り本を片手に持ちながらクレマン스는、
「やっほー」

軽く手を振りエヴァンジェリンへと声をかけた。

「な、なぜ姉様がっ」

「先ほどからいらっしやいましたよ？」

「サツキカライターゼ？」

「うん、少し前からね」

ぱたん、と本を閉じ椅子を消しクレマン스는静かに着地した。

「なら教えてくれればいいじゃないですかっ」

「だってなんだか大変そうだったから。邪魔したら悪いかな、って
さ」

「姉様が邪魔だなんてありませんっ。むしろ邪魔なのはコイツの
方です」

ぴっ、とエヴァンジェリンは勢い良くアルビレオを指差した。

「ふふ、どうもアルビレオ・イマと申します。キティがいつも口に

する『姉様』でよろしいでしょうか？」

「まあね。もしかして前に付きまどって人があるって言う話をエヴァから聞いたんだけどあなた？」

笑顔ながらも若干の睨みを効かせつつクレマン스는アルビレオへと体を向けた。

「付きまどうだなんてそんな、私はただ彼女の友として……」

「ふーん……友達、ね」

どうなの？とエヴァンジェリンの方を向けば、

「ち、違います。こんな奴が友達などありません」

何から来る赤面なのかそれを隠すように顔をそむけた。

「ふふ、そう。まあこの子は素直じゃないから」

片手で少女の頭を撫でながら笑みをこぼす。

「だ、だから子供扱いはやめ……」

照れながらも正面を向こうと顔を動かせばニヤニヤと笑うアルビレオの姿。

「何を見てるか貴様はあつ！」

照れは激昂へと様変わりし魔力を纏った蹴りがアルビレオへと見舞われる。

それを緩やかな動作ながらもしっかりと流し、

「ふふふ、お聞きしたい事はありますが今は私の事は気にせず存分に再会を喜んでください。それに何かご用があったいらしたのでしょうか？」

アルビレオはクレマンズの方を向きそう言った。

「そう？じゃあエヴァちよっと願があるんだけどいいかな？」

「はい、もちろんです。私にできる事なら……、というかあいつ私の時と態度が違いすぎるぞ」

「ふふ、まあまあ落ち付いて。それでできれば人形を一体譲ってほしいんだけど……」

「人形を、ですか？構いませんけどどうするつもりなのですか？」

当然の質問にクレマンズはちらりとアルビレオを見やってから、

「ファーガスがね、私に『人形を使え』って言うからさ」

「兄様が姉様に……なるほど、概ね理解しました。と言う事はできるだけ用途に近づけてた物か何の機能も無い物がいいですよね？」

一度首を捻るとすぐさま理解したのかエヴァンジェリンは渡す人形をどうしようかと悩み始めた。

「流石エヴァだね。理解が早くて助かるよ。できれば新品でまっさらなのがいいかな、今あるならそれでもいいんだけど……」

「できれば新しく作らせて下さい。いえ、作りたいです」

姉が頼りにしてくれる事の嬉しさからかエヴァンジェリンに笑顔が浮かぶ。

「そう、ならその間はコッチにいるから何か必要なら言ってね。城の場所は知ってるでしょ？」

「はい、大丈夫です。精一杯やらせてもらいます」

「うん。期待してるね」

拳を握るほどに力強く頷くエヴァンジェリンにクレマン스는苦笑気味に言葉を添えるのであった。

「さて、じゃあ私はそろそろ……」

話も終わり姉様がそう言った時、

「少し私もお話をいいですか？」

アルビレオ・イマの奴が姉様に話しかけてきた。

「何かな？」

口元は緩やかながらも僅かに目を細めながら姉様は自然に振り返った。

流石に多少は警戒しているらしい。

「キティの言う『兄様』はファーガス・フェイタラスだと思っているのですが貴方は一体……」

「私？ 私はクレマン스。ファーガスとは……そうだなあ、とりあえ

ず切っても切れないまるで自分の様な存在、かな」

ふざけているような言い方だが事実で的を得ているのだから何とも言えない。

現にアルビレオ・イマの「詳しくは教えてくれないようだね」と言う言葉をこれまたいつのまにか姉様の頭に乗って静かにしていたチャチャゼロは面白そうに「ケケケケ」と笑っている。

と言うか本当にあいつはいつ乗ったんだ？

おい、と言うか今のタイミングであの位置と言う事はまさかあいつ私に気づかなかったらそのまま姉様と行ったと言う事か？
やはりもっと厳しく私の従者であると言う事を言い聞かせ……。

エヴァが何か考え始めたけどもう作る人形の事でも考えてるのかな？
内容としてはそんな大変じゃないと思うんだけど……。
まあ基本的にしっかりした子だから放っておいても大丈夫だろう。
今はこっちだ。

「質問はそれだけかな？」

少しは真面目な様子になったアルビレオ・イマとか言う人に聞く。

「フアーガス・フェイタラスタとはお会いできますか？」

クレス。いや、フアーガスに会いたい？何を考えてのことなんだろ

う。

《どう思う?》

《わからん。が、次の時は会えると言っても言っておけ》

《んー了解》

どうやらクレスも分からないらしい。エヴァで遊んでる時点で何とも言い難い人物であるのは確かなんだけど……。

「もし次の機会がったら出会うのは私じゃなくてファークガスだと思うから。その時を楽しみにしてて」

「ふむ……今はそれで満足しておくとしますか」

そう言った時には既に元の胡散臭そうな笑みに戻っていた。何とも年期を感じさせる早業だ。

それにしても今は、ねえ……。

《面倒にならなきゃいいか》

《エヴァの様子を見るにそう面倒な事にはならないだろう》

《そうかもしれないけどこの人自体が面倒そうじゃない?》

《……チャチャゼロを下ろしてさっさと行くぞ》

否定はしないんだね。

「はい、じゃあそう言う事でチャチャゼロは下りてエヴァのところに戻りましょうねー」

「ケツ、シヨーガネエナ戻ッテヤルゼ」

悪態を吐きながらもちゃんと戻るんだから本当にいい性格した子だ。主従揃って素直じゃないのは玉に瑕なんだけど……。

「さて、それじゃあ今度こそ私は行くとしようかな」

「はい、待っていてくださいね」

「ケケケ、イイ酒ヲ頼ムゼ」

「その時を楽しみにしていますよ」

チャチャゼロは自分で用意しなさいよ……。

「うん。その時にまたね」

そう言ってクレマン스는宙に浮くとそのままふわふわと飛び去る。

「楽しみだなー」

《そうか》

「うん」

期待を胸にクレマン스는機嫌よく舞うように城へ向かって空を駆けるのであった。

数時間もする頃には飛ぶのをやめて転移したのは言うまでも無い――

会話（後書き）

体が欲しいで章

いまだに更新日合ってるかとかそういう不安がたまによぎる

椅子

わざわざコンタミ現象出来るくらい魔力をなじませてある

脚の部分には空中に固定できるように魔法陣が刻まれている

素体人形

何の機能も無い無垢な物を所望

目鼻だけでなく手足もほとんど形を成していないようなもの、単純な人形

アルビレオ・イマ

ファীগスに会ってみたいらしい

エヴァンジェリン

兄と姉の事をよく口にするらしい

チャチャゼロの再教育を考えなくもない

チャチャゼロ

行動の自由度、いい加減さと言う意味ではブレる事を知らない

クレマンス
とっても楽しみ

島内事情（前書き）

思いきって二話

島内事情

魔法界 ケルベラスから北の海上。

通称【魔王の島】

害意ある者に対し容赦のない試練を与え敗れたものを糧とする悪魔の結界を備えた孤島。

賞金首ファーガス・フェイタラスタの居城が存在する場所。

「ここが島の中心、魔王の城ですか。凄いですね、島の内外に張られた幾つもの結界といいその規模と緻密さ、それに一部に解読できない式が組み込まれています。これは貴方がご自身で？」

胡散臭い笑みの上から驚きを張りつけたような顔でアルビレオ・イマは感嘆の声を上げた。

「そう取ってもらって構わない。しかしアルビレオ・イマ、何故お前までいる？」

「どうやら紹介は不要なようです。私はただキティがここに向かって言うので着いて来ました。貴方に会えるという思いもありましたかね」

「好きにしろ、だが城に入れんぞ」

「おや残念。では島内を歩き回ることになりますか」

元々入れるとは思っていなかったのかいつも通りの笑みを浮かべながらアルビレオは肩を竦めた。

「ではキティ、また後ほど会いましょう」

「うるさい。とっとと帰れ。だいたい私は貴様にここを訪れると言う事を教えていないぞ」

「まあまあ、そんな些細な事いいではないですか。ふふふふ……」

エヴァンジェリンの文句を受け流しつつアルビレオは笑いながらふよふよと森の方へと飛んで行った。

「ちっ……あんな奴は放っておいて行きましょう兄様」

「そうだな。ゼロの奴はとっくに行ってしまったしな……」

「なっ、あいつめ……本当にすみません。後で言うておきますので」

しきりに頭を下げながらエヴァンジェリンは言葉を紡ぐ、

「ふ、いいさ。あいつのああ言う行動は今に始まった事でもないし、悪くないとも思っている。私達も行くぞ」

苦笑混じりながらもクレスは笑ってそれを許し城へと歩き始めた。

その様子にエヴァンジェリンは安堵しながら足を進める。

「そう言ってくれると助かります。それで用意した人形はやはり姉様の体にな？」

歩きながら本題を切りだした。

「ああ、最近は何事も無いからな。作れる時に作っておく事になった」

「そう、ですか」

《ん？反対かな？》

僅かにエヴァンジェリンの言葉が詰まった事にクレマン스가疑問を覚える。

「いえ、そう言う訳ではないです。ただ……」

《うん？》

「私もお二人から離れてそれなりに時が経ちましたが平穩、とはいきません。やはり忌諱される存在であると言うのは……」

平和が訪れないのでしょうか、という言葉は音にならずに消える。その実はクレマン스가独立した肉体を持つ事への不安だろう。

《私達も最初はそうだったよね》

「ああ、この島にも多くの者が訪れては消えていった。そして今では誰も寄り付かん」

「やはり時間の問題、という事ですか？……いつになるんでしょうか」

「何かあったのか？」

「いえ、ただ気軽にお二人に会ったりできないのが、何というか……」

どこか不満げな表情でエヴァンジェリンがそう言った。

《何？寂しいの？》

「ち、ちちち違いますよ。今になって寂しいだなんて、もしそうだ

と言うならそれは私が成長せずにこの姿のままであるせい、即ち精神が幼いままであると言う事が原因で私の意図しないところから来るものであって決して私が自分で寂しいな……、などと思っているわけではないのですよ。本当ですからねっ」

僅かに頬を上気させながら捲し立てる様に言葉を放つ姿は必死に弁明しているようにしか見えず、

「オ、ヤット来タカ。ドウシタんだ御主人、顔ガ赤イゼ？久シブリニ会エタカラッテ喜スギダロ」

ケケケ。という笑い声。

歩いてきた二人を酒瓶片手に待ちかまえていたチャチャゼロが知ってか知らずか煽るような事を言う。

そうなれば当然意外と沸点の低いエヴァンジェリンなら、

「く……チャチャゼロ。貴様、今日という今日は許さんぞ……！」

怒りに達するのは当然である。

体を震わせて怒るエヴァンジェリンはチャチャゼロを捕まえようと飛びだした。

「チヨ、何ダッテンダヨ。オイ御主人？ナッ、ウオイ……」

小さい体を活かし跳ねる様に迫る魔手から逃れるチャチャゼロとそれを追いかけるエヴァンジェリン。

途方も無く無為な追いかけっことは始まったばかりだった……。

《私の体はー……？》

「しかしどういふ結界なんでしょうね、これは…」

アルビレオ・イマは島の外縁、沿岸部で一人佇んでいた。

細かい部分は理解できないがおおよそ『吸収』を基礎に置いた弱体化を図る結界だと言う事は理解できた。

「それに魔獣の方も大陸側に比べ強力になっているようですし……。招かれない限り中央への到達は至難でしょうね」

島と言う限られた空間で獲物の数が豊富とは言えず厳しい生存競争が繰り広げられるため進化、と言ってもいいような大陸側とは一線を画す程の強力な個体が常に飢えを感じ徘徊しているのである。

その中に生半可な実力で飛び込めば餌となるのがおちである。

魔獣に追われ傷つき疲弊した体では容易く結界の餌食となる。

そうでなくても森林の迷宮で疲弊し結界により疲労度を増したところで魔獣に出くわしでもしたら結果は同じである。

「防衛として理に適ってはいいるかもしれませんが何ともえげつない……」

ふと視線を逸らした先では上空を飛び島へと近寄ってくる小型の翼竜数体が海上で嵐につかまり突風でバランスを崩すなり雷に貫かれるなりで落下したところを大波が攫いそのまま渦潮へと呑みこまれていく姿があった。

何とか傷つきながらも生き残った数体が島内に侵入するもすぐさま駆けつけた大型の魔獣等が近寄りなす術なく捕食されていった。

「本当にえげつない……誰も近寄らない訳ですよ。命を捨てに来るようなものですね……」

どこか呆れた様なその眩きは静けさを取り戻し何事も無く寄せては碎ける波の音に掻き消されるのであった。

「場所としては悪くないんですがね。少しの間泊めさせてくれればいいのですが……。キティは私の宿泊に反対しそうですし、直接交渉するしかないですかね？」

アルビレオは一人、どうやって説得交渉したものか考えつつ元来た空をふよふよと飛びながら近寄る魔獣を殺さない程度に地面へ落として痛めつけるのであった――――

島内事情（後書き）

何故二話更新かと言われても意味は無い

島の結界

何かしらの害意、敵意に反応するためアルビレオは引つかからなかった

飛行が出来て尚且つ敵を迎撃、撃墜できる実力があれば森林迷宮は簡単に越えられる

「防衛として」

何もしなくても勝手に敵が消えてくれる

アルビレオ・イマ

やはりただのストーカーか……？

ちよっとぐらい滞在させてほしい

来た理由もフアーガスに会いたい理由もただの好奇心

チャチャゼロ

始めて来たとは思えないほどの早さで酒を見つけ出した

エヴァンジェリン

初めてお呼ばれされた

内心ドキワク

クレス

今はファーガス

クレマンス

私の体はー？

一緒（前書き）

何書いてるのか良くわからなくなってしまい理解するのが面倒になってしまった回

一緒

アルビレオ・イマが島の外縁から戻りつつ魔物と遊んでいる頃。

城内の一室。

「言われた通り何の改良も加えていない素体を用意しました」

「ああ、それでいい。下手に何かして不具合があっても困るからな」

チャチャゼロとの追いかけっこを終えたエヴァンジェリンが乱れた髪を気にしつつそう言った。

そのすぐ横では縄でぐるぐる巻きにされたチャチャゼロが転がされていた。

「一部とはいえ繊細な魔神術式を刻み込む以上は何もない状態の方がいい」

『あの時』から新たな魔神術式の会得が不可能となった今、見あうだけの術式を得る事も出来ない以上は既存の術式を組み合わせるほかないのである。

『悪魔の檻』にも使われる魂を呼び寄せるガミジンの術式によって

人形へ魂の誘導を、ムルムルの術式により人形へと誘導し移した魂を呼びかけ目覚めさせる。

あとは通常の魔法により安定や維持をかければいい。

身体の方は魂が意識として目覚め精神が生じる事で肉体が精神に自動的に引っ張られるかたちで形成されるはずである。

精神の構成度合いに比例するため時間がかかるかもしれないがこれが最も負荷のない方法だろうとクレスは考えた。

彼女の魂を全て移動させても本来なら問題はないが『あの時』以降些細とはいえ不具合のあるクレスの状況を考えた結果、魂の移動は一部のみとして鏡面人格であるクレマンスを補う形で一緒に移動させることとなった。

不安がないと言えは嘘になる。全ての成功は魂定着後の意思の発露、精神の発生にあるのだから。

だがクレスが心配することはない。絶対の自信と信頼を込めて彼は言う。

彼女ならば成功すると、それだけの思いを込められ、それに応えるだけの意思を持った彼女に失敗は無いと。

「やるぞ」

《うん》

二重に書かれた複合魔術術式、その周囲に補佐の為の術式を書きこんだ大掛かりな魔法円。

その中心には穢れなく無垢な人形が一体。準備は整い後は起動するのみ。

「もう一度私に前にその姿を見せてくれ……」

《すぐ会えるから》

「タン・レスタン・アルター・アンアレス

絶えざる光が汝を照らし 闇より救い 生へと導け
私の祈りを聞き届け その魂を受け止めよ

我が愛しき魂よ 再び翼を得て死へと立ち向かえ
汝の命は再び花咲き その翼でこの世を翔けん

己を信じよ 我を信じよ 我は汝 汝は我
この輝きが 鼓動となりて 命を導く

天地の栄光の元 その御名において祝福を
祈える魂に奇跡の祝福を 救いの御手を今ここに」

———魂魄喚起円陣——— 『魂息吹く聖櫃の光』

放たれた全てを覆い尽くす極光。
そして収束、訪れる静寂。

「あ……」
「オ？」

私より先に声が上がる。

響いたのはエヴァンジェリンといつの間にか拘束を解かれたチャチャゼロの声だ。

「これは……」

自分がうろたえるのがわかる。

予想に反しクレマンズの体は既にできあがり完成したそれだった。

「ん……う」

肉体も精神も常のそれと変わらないと言う事かただいつも通り目覚める様に彼女は目を開けた。

思わず安堵の声を上げそうになる。何が不安や心配はないだ……。

「姉様っ」

よほど嬉しいのかすぐさま駆けだしたエヴァンジェリンがクレマンズへと抱きついた。

「あーエヴァ。よしよし……って、私もしかして成功した？しかもこの状況は大成功みたいな？」

「ああ、そうだ。大成功だ」

「あっちははー、流石私だね。と言うか服が欲しいです。まだうまく動かないから取って来て欲しいなー、なんて」

「ふ、ああそうだな。今持ってくる。これでも巻いていろ」

そう、最初の間は限りなく人形体のままである予定だったので服を用意していないのだった。

まあ異性体とはいえ自分の裸など今更見たところで何とも思わない訳であるが……。

仕方なく人形を包んでいたクロスを投げ渡し私は部屋を出た。背を向け扉を閉じた途端重い溜息と共に自分が酷く緊張していた事を思い知らされた。

「よかった。本当に」

「本当にお二人は凄いです」

クレスが部屋を出て行った後エヴァがそう言った。

「ふふ、ありがと」

「でもなんで最初からその、完全な状態なんですか？」

「オウ、ソレハ俺モ気ニナッテルゼ。赤ン坊ミタイニナルヲ予想シテタンダガ」

「んー、クレスの意見も聞かないと断言はできないけど私って言う既に出来上がってる意識あるものが入った事が原因なんじゃないのかな……？」

多分だけど、そう言ったら、

「それはどういう……」

「……事ナンダ？」

同じように首傾げちゃって、仲が良い事だ。

「最初は意識なんてないただ魂だけに移すつもりだったじゃない？
要するにそれは零から精神を構築するって事なんだよ。精神が零
て事は精神に引つ張られる肉体も零、最初は人形でだんだんに、
赤ちゃんの状態になるはずだったんだけど私って言う意識も一緒に
移した事で精神を零から構築する意味がなくなったからその工程を
省いてその結果、精神通りの私、この状態になったって事。だと思
うよ」

まあ十全の魂じゃないって事は当然人として成り立たないわけだか
ら失敗する可能性もあったんだろうしその場合はクレスの所に逆戻
りだったんだろうけど……。

それ以外の可能性もあったかもしれない。それは言わないでおこう。

「自我を有していたか、いなかったか。という事ですか？」

「んー、まあそんな感じかな」

「ケケ、何ニシロ無事ナラソレデ良イジャーカヨ」

「まあね、結果良ければ……」

全て良し、って人が締めようとしたら扉が開いた。

この感じはクレスじゃなくて……、

「先ほどこちらで巨大な魔力と光が溢れるのを……」

アルビレオ・イマ。だよねえ。

私まだ服着てないんだけど……。

まあとりあえず、

「キヤー、変態さんダワー」

って言うっておこう。

「オホ、面白いみたいみんなぐジャーネーカ。クケケケケ」

「き、き、貴様は何を見とるかっ！今すぐ出て行けこの変態めっ。姉様が穢れるわっ」

うん、上手い事動いてる。さすがエヴァ。相手は任せよう。

「いえ、これは不可抗力であってですね……」

「煩い、そもそもなぜ貴様は城内に入って来てるんだっ。誰も許可してないだろう」

「ちよっとした好奇心とキティの様子を見にですね……」

「何が好奇心と様子を見にだ、ただ覗きにきただけじゃないかっ」

「だから魔力と光が……」

「口を開くな変態がっ」

「ヘンターイ」

「へんたーい」

ごめん、ちよっとおもしろいかも。

なかなかこの二人は良いコンビなのかもしれない。

「んぐ……そもそも私は変態などではないですし仮に見ようとするなら彼女ではなくあなたを見ますよキティ」

「な、ななな何我真顔で言ってるんだ貴様はっ」

あ、赤くなった。あれは照れてるのか怒ってるのか結構微妙……。

「ふふふ、どうしたんですかキティ。そんなに赤くなって」

「だいたい貴様はいつもいづもだな……」

へえ、そんなに一緒にいるんだ。っと、クレスが来たみたい。

「こいつらは何をしてるんだ？それとクレマンズ、ほら」

「うん。ありがとね。いやー流石に布一枚よりいいね」

「……で、どういう事だ？」

「エヴァがからかわれてる？」

「見ればわかる。はあ……面倒だ、好きにさせておくか。私は食事の準備でもするか……」

「動けるようになったし私もするよー」

「ケケ、酒選ビハ任せナ」

いやあ、初料理。腕が鳴るね！

それに、

「いつまでも一緒なんだから」

こうして無事クレマンズに体が与えられる事となり、エヴァンジェリンとアルビオレ・イマのじゃれあいには二人と一体がいなくなった後も行われ食事を知らせに来たチャチャゼロが来るまで続く事になる。

が、それはまた別の話である……

一緒（後書き）

一回早く次から新章

『あの時』

リライトを受けてから

魂魄喚起円陣『魂息吹く聖櫃の光』

詠唱は略

複合型魔神術式。二種、二重の魔神術式と補佐の術式を組み合わせたもの

魂の移動、呼びかけなどを可能とするもので強装魔導結界『魂鎖す悪魔の檻』とは対を成す存在

魂の移動

魂量のおかしいクレスだからできる魂の割譲

これまででも書いたように魂は精神を起こし肉体を形成するものであるさしずめそういった大量の情報を含んだ高エネルギー結晶の様な物である

本来はクレマンズ由来の魂全てを移しクレスないの仮想人格は凍結後解除する予定だったがクレスの変異に際しどのような影響があるかわからないため一部の移動に留め足りない情報、魂量を仮想人格で補った

人形の肉体形成

本来は魂のみの定着であったため意志は存在せず肉体も最初は人形のままの予定あった

予定通りならば人形内の魂が精神を喚起、意思を発露させる事でそれにともない培養槽の中で次第に肉体を形成する予定であった

しかし実際は魂と共に完成された人格、意志も定着した事で精神形成等の工程と共に初期の肉体形成も省略され儀式の魔力と必要なくなった仮想人格を形作る魔力に微量の周辺魔力を使用し完成状態での全形成を可能とした

失敗した場合

作中でクレマンズの言う「クレスへ逆戻り」が可能性としては高いしかし最悪の場合、割譲した魂と仮想人格の喪失が考えられる

仮想人格はクレスが魔法でつくったものなので再現は可能だが現状との齟齬などが生じる可能性が高い

二人に別れた事での影響

入れ代わる事が無くなった

二人が別に行動できる、と言った事

実際のところ入れ代わりによる疑似遅延呪文の不可等デメリットの方が大きいと思われる

「うん。上手い事動いてる。流石エヴァ」

ちゃんと体が動いていると言う意味だが「変態さんダワー（棒読み）」によってアルビレオに対してエヴァンジェリンが対応に動いていると言う意味でもある

「そもそも私は」
変態という名の紳士です

初料理

自分の肉体を得てからは全てが初体験

アルビレオ・イマ

タイミングが悪い。が、そのおかげでなんとか宿泊可能となった
いろんな意味でエヴァにはかり興味がある

チャチャゼロ

相変わらず兄弟はぶっ飛んできてる。だがそれがいい
面白ければいい、それが主人でも

エヴァンジェリン

兄と姉、二人が同時に存在している事に驚きを隠せない。嬉しい
アルビレオ、こいつは許せない

クレス

自分にさえ隠し通した不安に心配
想像以上にそれは重かったらしく一人安堵した

クレマンス

改めてずっと一緒に、いつも傍に

魂が同じである以上距離なんて関係なく離れるわけがない

迫る時（前書き）

前話から200年は経った話

迫る時

争いの百年、革命の百年が過ぎ去り世界は争いと革命の時代を迎えていた。

西側諸国では人々は王という国の頂点にある存在を討つために革命を起こし戦った。

そんな中で我が古き祖国の島国はアイルランドと併合し強大さを増す。

そして日本は自国の領土の安定に勤しむ中、しぶとく生き残っていたらしい神聖ローマなどと言う国は遂に消え、西側において革命軍の頂点に立った男は自らが討つべき対象であった王となり無様に死んでいった。

今まで以上に世界中で事件だ戦争だ和平だなんだと騒ぎが広がる中で事は起きた。

日本国内に衝撃を与えたそれは私にも無関係という訳にもいかなかった。

すぐ隣に位置する大国「清」が祖国イギリスに敗れた。

これが意味するのは魔法使いの完全なる東洋への進出である。

世界最古レベルの歴史を持つ清を魔法使いが見逃すはずもなく、歴史と力を持つ土地を無く瞬く間に手中に収め聖地と位置付けた。

聖地の数は八。比較的新しく魔法使いが容易に進出できるアメリカ

側にはないと考えれば残る候補地にこの真秀の地が当然入るだろう。

いくら防備を固めたところで広大な真秀等の土地、守り切れるはずがない。

クレマンسやエヴァを呼んだところで結果は変わらないだろう……。

ここ近年、諸外国からの開国を迫られるこの国がどれだけ耐えられるかそれが刻限だ。

などと考える間もなくペリー代将率いる艦隊が上陸し呆気なくアメリカに門戸を開いた。

その三ヶ月後にはついにイギリスにそれを許した。

私の戦いはこれからということである。

そんな思いを無視し貿易の相手として大部分を占めるのはイギリス。これは痛い。

港とは言え彼らが謳歌するのは痛手であることに間違いはないのである。

そんな中での始まった討幕運動。

諸外国から流れてきた新鋭の火器を有する旧幕府軍と旧来の火器しか持ち得ない新政府軍。

数の上でも上回る旧幕府軍は將軍の逃亡という形で負けを喫した。

その後も戦いも次々と旧幕府軍が降伏することで戦況は大きく傾きついに江戸の無血開城という形で一応の収束をみせた。

そして始まる明治という時代。

起こるべくして起こっただろうとは言えこの混乱期。

比較的混乱のない裏とは言え京都側の援護得られないだろう。
この状況、必ず数年のうちに魔法使いの介入が起こる。
今こそが本当に正念場なのである。

アンコールと言う地が世界に知られ聖地となりその後、海を隔てた
すぐ隣の朝鮮が開国となりまた聖地が一つ増えた頃。

時は訪れた。

真秀等森林地帯の一角。
入口となる石段上の鳥居。

「この地に何の用だ異邦人。ここから先は私有地だぞ」

クレスの前、石段の下に現れたのは一人の男。
そう、男が一人。その後ろにも周囲にも人の影はなくなつた一人で
現れた。

クレスを超える長身に柔和な笑顔を張りつけ黒のカソックを纏っている事から教会の司祭である事がうかがえる。

「おや、しかしそう言う貴方もこの地からすれば異邦人でしょう」

「随分以前から住んでいる身でね。ここ等一帯は私の土地だ」

「なるほど、それは失礼しました。私、クリストフ・フレイザーと言う者です。見ての通り神に仕える者です。お見知りおきを」

クリストフ・フレイザーと名乗った男は光の加減によっては黄金にも見える長く淡い枯葉色の髪を垂らしながら軽く頭を下げた。

「それで。そのフレイザーさんは何の用だ」

「単刀直入に言います。この土地を譲っていただきたい。もちろん対価は支払います」

「拒否する、と言ったら？」

「ふうむ、それは……どうでしょうか」

困りましたね、ははは。と、司祭は乾いた笑みを浮かべた。

「諦めてはくれないだろうか？」

「ええ、まあそれは……上司からの命令でもありますし、神に仕えるとは言っても所詮は人の身。あれが欲しいこれが欲しいと言う欲が無いわけではないので……」

「どちらも引く気が無い状況ならば交渉による解決か闘争しかないと思うがそのへんはどうだろう」

「嘆かわしいですがそれはどうしようもない事なのでしょう。無論、私……いえ、我々は交渉による平和的な解決を望んでいますよ。争う事は最後の手段でしょう」

「ふむ、同感だ。……私の言う条件を全てのむと云うのなら考えなくはないな」

「条件を全て、ですか。先に内容を聞いてみなければ素直にはい、とは言えませんか」

「なに、そう大したことじゃない。当然の事を言わせてもらうだけだ」

そう前置きクレスは三つ、と三本の指を上げた。

「一つ、この地においてそちらが行う事について全ての情報の開示。二つ、一つ目で開示されたそちらの行動に関しての賛否、要否を含め私の基本的な権利の保持、行使を保障する事。三つ、先の二つの条件や有事の際を除き基本的に互いが不干渉である事。細かい事を除けば概ねこの三つだ」

「なるほど、わかりました。が、そういった事を私の一存で決める事は流石にできませんので後日改めて訪れさせていただきたいと思っています」

最初は様子見と言う観がある以上後日、というのは当然なのか。

「ああ、構わんよ」

クレスは二つ返事で了承する。

「では本日は失礼させていただきます」

一度頷くと司祭はその身を翻し歩き始めた。

そこへ、

「そうだ、忘れていたが私の名はファーガス、ファーガス・フエイタラストだ。よろしく頼む」

振り返りざまの司祭に微笑が投げかけられた。

「ファーガス……フエイタラスト？」

「ああ、そうだ。ではな、また会おう」

目を見開き僅かに顔色が悪くなったような様子の司祭をしり目にクレスは悠然と背を向けてその笑みを崩さず歩き始めた。

「さて、どうなることやら……願わくば平穏無事に、と言いたいがな……」

半身と別行動を取り始めてからその眩きに返事をする者はいない……。

港からほど近い西洋人の宿营地その一か所。

月明かりだけが辺りを照らす中でクリストフ・フレイザーは一人困ったように頭を抱えていた。

「はあ、困ったものですね。まさかこんな所でファーガス・フエイタラストとは……」

こんな仕事受けるのではなかった、と一人ごちる。
ここ数日この調子である。

本国に指示を仰ぐもどうやら向こうも予想外らしくまっとうな返事をよこさない。

まあ八百万を超える賞金首が極東の島国で居を構えているだなんて誰も予想だになかったのだろう。

ただその土地を手に入れられさえすればいいだけの仕事にまさか伝説の賞金首が出てくるなど誰が予想出来ようか……。

事実自分としてその名を告げられるまでそんな事考えもしなかった。だが現実は無常だ。

確かに情報通りの金の髪に碧の眼。そして去り際に見せた笑みと共に放たれた威風とも言える魔力の波動

直感とはいえ確かにあれは本物だと思わされた。

並の相手であるなら自分一人でも問題はない。が、噂によればその力は山一つ消しさるだとか、帝都守護聖獣と互角以上に渡り合うだとかそんな存在相手は流石に許容外である。

「はぁ……私はどうすればいいのでしょうか……。リザとテレジアに会いたい……」

妻と子を思い一人寂しく今日も司祭の夜は更けていくのであった――

迫る時（後書き）

10月も終わり。章タイトルの英語がやたらかつこいい事になった。あくろすでいすにゅーでいばいど

真秀ないし周辺を含めた真秀等が麻帆良になる話
戦闘も書けなければ策謀も書けない作者です

革命く革命軍の頂点のく

フランス革命、ナポレン等々

祖国うんぬん

大英帝国

聖地

全部で11らしい

この小説ではウェールズ・ローマ・イスタンブール・メルヴ・扶余・
洛陽・雲崗・アンコール・麻帆良

あとカザフスタンとバングラディシュなのだがメモががが……

条件三つ

クレスとしては土地を譲る事に関してそれほど執着があるわけではない

この地に不都合が無く互いに不可侵でありファーガス・フェイタラ
スタが住むと言う事を認められさえればいいと思っている。要す
るに自身と真秀の地に不都合がなければいいと思っている。

ただファーガスの存在を認めさせるには戦闘しかないだろうと思
っている

クリストフ・フレイザー

司祭。イメージは某怒りの日の神父

賞金首ファーガスの存在と上司との間で頭を痛める

妻のリザと娘のテレジアがいる

「フレイザー」は神話の世界樹ユグドラシルと同じとされるトネリ
コのこと。

エヴァンジェリンやクレマンズ

自由行動

クレマンズは城を拠点に問題を起こさない程度に好き勝手してる

クレス

真秀の地に住み守る者ファーガスとしての務め

ファーガスと名乗ったのはある意味「私からこの地を奪えるか？」
という挑発にもなる

真秀等攻防戦（前書き）

何なんでしょうねこの話

真秀等攻防戦

犯罪者と聖職者。

それぞれに思いを抱いた初の邂逅。

そこから数日後。

遂にクリストフの元に本国からまともな指示が返ってきた。

待ちに待ったその内容は、

『相手の条件全てを呑む事は許されず、また我々は速やかにその地を手中に収める必要がある。よって今一度の交渉により解決できない場合は武力による解決もやむを得ないものとする。その場合相手が悪名高き賞金首ファーガス・フェイタラストの懸念がされるが本人である可能性は極めて低く、仮に本人だとしても本国からの増援を加えれば十分対応可能と考える。よって増援が到着次第可及的速やかに任務を遂行されたし』

従わないのなら討ち取り奪い取れ。そう言う事だった。

「彼は引いてくれないでしょうから戦争をしろ、と言う事ですか。これは参りましたね……」

どうせ上層部の老人方が考える事だ、送られてくる者の中に暗躍専門の方が幾らか混じっている可能性もあるでしょう。

何かを欲するか消したい為に一部の兵士や召喚術による魔獣や悪魔による襲撃。

端的に言えば不慮の事故、そう言った言葉でかたづけられる暗殺だ。最も元老院議員の方々が得意なやり方ですね。

何も残らず事後に謎の事件として事が知れるか生還者が数名残り悲劇とされるか。そして真相は不明のまま闇に葬られる。

「一部の方とはいえ相変わらず黒い事ですな……」

調べたところでは以前、と言っても七百年は昔の事らしいですが、何かを欲した元老院議員が同じような事をしてそこに居合わせたフーガス・フェイタラスタに打ち破られ失敗、全滅した事があるんですが。

再び失敗するとは……いや、文面から察するに彼らはここにいないが本人でないと思っっていると言う事ですか。ならば通常の増援かもしれないですね……。

そこまで考えクリストフは息を吐く。

「ああ、これは本当にどうしたものか……責任重大ですよ」

意気を落としたままクリストフはどうしたものかと考える。

戦闘になるのは必至。

立場上自分が前に出るは確定であり当然死にたくはない。

そして元老院議員が動けば目撃者として自分も危うい。

「まあ死にはしないでしようが今の位置にはいられなくなるでしょうね……」

可能な限り自分が安全で、相手の不興を買わずに土地を譲ってもらうには……、

「まずは敗北、ですかね……」

当然のように敗北、とクリストフは口にした。

仕掛けておいて図々しいのは承知だがこちらが敗北し下手に出て相手の条件を呑むことで土地を譲ってもらえない。

無論自分の都合も含めての成功である。

そのためには、

「事が起きる前にもう一度会う必要がありそうですね……」

その夜から度々クリストフ・フレイザーの姿が宿営地から消えるがその事に気づく者は誰一人としていなかった……。

天気は快晴、時刻は正午を過ぎて幾許。か心地よく風が吹く中でそれは成った。

認識障害を掛けながら行軍とも言えるような騎士四十名という供を引き連れクリストフ・フレイザーはファーガス・フェイタラスタの元を訪れた。

以前と異なり石段の周囲には守護の為か種類までは分からないが結界が張られているのがクリストフの目に映る。実質的に入口は石段上の鳥居のみ、と言う事だ。

「交渉とは思えないほど物々しく随分とお仲間を引き連れてきたものだな」

鳥居の下、以前と同じ場所にファーガスは立っていた。

「こちらとて本気、と言う事です。それに貴方の様な人物が相手ならばなおさら、と言う事で御理解下さい」

「ふん、そんなことは何とでも言えるものだろう」

「ははは、手厳しい限りで。……ではさっそく本題と行きましょうか」

「何度聞いたところで私の条件は変わらんよ」

「こちらも本国命令で譲れないのですよ」

不意にクリストフが右手を上げ、

「譲歩していただけませんか？」

言うと同時に左右に並んだ騎士が得物を構えた。

「断る。三つの条件さえ呑めばいつ何時でも譲ると言っているんだ。申し分ないだろう？ 仮に今ここで戦端を開きお前たちが全滅した後で新たな使者が来て条件を呑むから譲ってくださいとさえ言えば快く譲ってやってもいいほどに私は寛大だ」

構える事はせず淡々とファーガスは口に笑みさえ浮かべる。

「それは我々が負ける事が前提でしょう？ 我々が勝てば問題ありません」

「くはは、ありえんな。百にも満たないただの人間如きに私は負けんよ。それにここは私の領地だぞ？」

「ならば、そう言う事で……。掛かりなさいッ」

号令一つ、騎士達が石段を、その上の入口を目指し前進を始めた。

こうして戦いの幕は上がった。

ある者は細切れになり、またある者はその身を裂かれ、貫かれ、潰され焼かれ凍らされ消滅しながら次々と騎士達はその数を瞬く間に減らされていく。

それでも尚騎士達は任務遂行のためとただ愚直に向かってゆく。

ひゅん、

刀を血振るいしながら舞うように飛んでいたファーガスは地に足を付け、

「口ほどにも無いな」

さして息を切らす事もなく極自然にそこに立ち塞がる。

「どうした、終わりか？ ならば退け。私は自衛しかしないからな。掛かってこないのならよほどの事がない限り私から手は出さんよ」

当たり前のようにようにファーガスは言う。

鳥居を超えた者など当然いなかった。

「……後退なさい。退きますよ。無事な者は息のある者を最優先で回収なさい」

残った騎士は瀕死の負傷者を含め七人。

戦況報告ならば全滅を越え壊滅言える被害である。

「……また来ます」

「何度でも来い。対応は変わらんがな」

こうして真秀の地を掛けた最初の戦いはファーガスの圧倒的な勝利として幕を閉じたのであった。

魔法使い達により真秀、否その中心に位置する神木掌握計画。
その進捗状況は微々として進んではいなかった。

唯一の障害にして最大の難関『自称』ファーガス・フェイタラスタ
の攻略が出来ないためである。

一度目、騎士団の投入。結果は惨敗。

二度目は騎士に加え魔法使いの混成部隊　結果は魔法使いの生存数
が僅かに高い程度で惨敗。

三度目にはあえて魔法使いのみの部隊を投入。文字通り全滅。

四度目になると結界の解析、解除を視野に入れ結界解析班にその護
衛として重装の騎士を加え投入するも解析に時間がかかり過ぎ前衛
である騎士が壊滅、撤退。

攻略を初めて既に半年ほど。

そして訪れた五度目の作戦。

解析班を守るために騎士だけではなく魔法使いも加えたこれまでに
最も人数が多い混成部隊。

正直これ以上手はない、あるとすれば人員の増加ぐらいである。

そして、

「ついにご老人方も動き出しましたか……」

そう呟くクリストフの視線の先には増援の部隊とは関係のない人員
の姿。

一般人を装っているのであろうが所作のところどころに不審なもの

を感じさせる。

体つきなどからして前衛、騎士などではなく後衛、魔法使いや召喚士の類か。

「まあ手練れとはいえ騎士では敵わないでしょうからね……」

いつもの柔和な笑顔は隠れその目には鋭利な光が宿っていた。

「やれやれ、やっと本番ですか。待たされるこちらの身になっても
らいたいものです」

「は、何か仰いましたしたか？」

不思議そうな顔をする部下を目に留めるとふふ、と笑みを取り戻したかのように張りつけ、

「なんでもありません。ああ、そうだ先日娘が私の誕生日にですね

……」

何事もなく若干嫌そうな雰囲気醸す部下へと娘自慢を始めるのであった。

「また来たのか。懲りないな、お前たちは……」

「そう言われましても仕事ですので」

これまでと同じように石段の上に構えるファーガス・フェイタラス
タ。

そして彼を見上げながら常と同じ柔和な笑みを浮かべるクリストフ・フレイザー。

ここに五度目の攻防戦が幕を開けた――――

真秀等攻防戦（後書き）

絶対無敵難攻不落七転八倒真秀等の攻略。守将は魔人ファーガス、
と言うお話

犯罪者と聖職者

賞金首ではなくあえて犯罪者と表記してみた

元老院議員の十八番

暗躍

五度目の攻略戦で遂に動いたらしい

七百年前の話

とある森で宝具をめぐる起こった争い

愛と血のお話。当時は若かった

詳細までとは行かなくてもクリストフはこの事を調べ得たもよう

「死にはしない」

消されることになっても死ぬことはないと言いきる自信があるもよう
だが今の地位は気に入っているらしい
なので上手い事終わらせたい

真秀等結界

中心地に基点をつくり展開されている
もともとあった神木に対しての認識障害に加え障壁、探知、拘束、
麻痺と言った機能が加えられている
足止めや拘束といった防衛主体のもの

クリストフ・フレイザー

苦勞してる

夜な夜な人知れず消えるらしい

部下がうんざりするほど妻子の話をしている

ファーガス・フェイタラスタ

偽物などではない

唯一にして最大の障害

戦闘・暗躍 その狙いは……(前書き)

やっぱり難しい

戦闘・暗躍 その狙いは……

たった一人の守護者に対し百に及ぼうかと言う兵団の決戦とも言える争いは始まった。

「魔法騎士団は前面へ、なんとしても後衛を守りなさい」

クリストフの声が静かに響く。

応、という掛け声とともに全身鎧を纏った騎士の一団が前面、石段へと進みだした。

相手の位置が高い事を考えてか杖剣や盾を掲げ障壁を斜め上方へと展開する。防衛主体の行動である。

「ふん。人数が多いな……タン・レスタン・アルター・アンタレス
集え星光 星の精 全てを貫く星の瞬き 天を穿ち地を断て光の
波動、薙ぎ払えっ！『星の鋒光』」

薙ぎ払え、その言葉通り薙ぐように一条の閃光が走る。

光、そして悲鳴。

障壁など無視するかのように最前衛の部隊は纏めてその身を貫かれ地へと崩れ落ちる。

「次、前へ出なさい。魔導兵団は呪文を、解析班は結界解読を急ぎなさい」

「全くわらわらと虫のように……」

不意に訪れた陰りと同時に気温の低下。

「ん……?」

見上げたその先には強大な氷塊。

術式『氷神の戦鎚』

それが三つ。

周囲の石段や鳥居諸共押し潰すように落ちてくる。

しかし動じることなく静かな眼差しで瞬時にそれを見据えると周囲に牽制で技を放ちながら詠唱を開始する。

「タン・レスタン・アルター・アンタレス 響け角笛の音よ 終焉を告げる笛の音よ 始まりの大火を呼び 時の黄昏を再びここに『炎呼ぶ角笛の響き』」

唱え終わると僅かに空が揺らめき全ての氷塊にぴしっ、と亀裂が走る。

次の瞬間には輝となって生まれた隙間と言う隙間から炎が溢れだし氷塊を包み込む。

「そのような炎でこの氷塊を止められると?」

「世界を焼く炎だ、氷の一つや二つ溶かし消して見せるさ」

その言葉通り煌々と燃える朱き炎は落ちる氷を溶かしながら熱い水蒸気が辺り一面を濡らす。

蒸気と散る炎を浴び上がる悲鳴の数々。

鎧を纏った者などは蒸し焼き状態となり意識などあるはずがなかった。

「お前たちに選択肢やろう」

「選択肢、ですか」

「ああ、このまま退けば今生きている者は全員そのまま帰れる。だがまだ来るといのならこのまま氷漬けになるかまたは雷に焼かれるだ。さあ生きるか凍るか焼かれるか好きなものを選べ」

「それは選ぶ、と言えるのでしょうかね……」

ひくりと頬を攣らせクリストフは微妙な笑みを浮かべる。

「生きるか死ぬか選べるだろう」

「我々の目的は果たせないのですがね……」

「知った事ではない。そもそも私はお前たちに譲る条件を……っ」

話すのを突然やめ後方を、遠くを見る様に尖らせた視線を送る。

齎されたのは異変は守護結界に現れた反応と同時に誘振感覚である。即ち魔に属する者の襲来。

「どうかしましたか？」

知ってか知らずかクリストフは常と同じ笑みをたたえている。

「貴様……そう言う事か。事情が変わった、すぐさま退け。でなければ悪いが問答無用で消えてもらう」

「おやそれは、困りました。が、急いでいる様子の貴方を引きとめるのもまた……」

「返答と受け取った。タン・レスタン・アルター・アンタレス銀の腕に抱かれし光の剣よ 今再び鞘から放たれよ 眩き瞬きもつて我に仇なす者を断て 『不敗の光剣』」

時間稼ぎと瞬時に判断を下し即座に唱えられた呪文。

完成と同時にきんっ、という金属音じみた音と共に閃光を放った。

そして、

「ッ……無事に残ったのは私だけですか。やれやれ、大人しく退くとしますか。しかし流石に負傷者の回収が手間ですね……」

苛烈な光と同時に起こったのは瞬間的な斬撃。

立っていた者は全て大小なりとも体のどこかを、そのほとんどが胸の辺りに傷を負い倒れ伏せているのだが……、

「……無傷だと？」

それを受けたはずであるクリストフ。その胸元は確かに一筋の切れ目が入っているがそれは服だけであり体には傷一つ、血の流れた痕さえ無い。

「まあ今はいい。……ではな、私は急ぐ」

その長身を屈めながらせっせと息のある者を集めるクリストフを尻目に黒衣を翻すのであった。

「さてさてどうなる事やら」

結界反応の位置を頼りにして転移で大まかな位置まで移動しながら探知用に糸を放ち捜査域を僅かに広げながら探し走る。

「結界反応は三か所、その内一か所が誘振感覚の方向と同じか。なら残りは雑魚と言う事か」

軍を相手にしていた正面を除いた残りの三方向全てから同時襲撃と言う事だ。

その中で一か所から感じる感覚、一つとはいえそれなりに力を持っていると言う事だ。

『あれ』以来感知力の薄まった私が感じると言う事はもう少し上に見るべきか……。

だが相手側がこのような正規とは違う者らによる奇襲と言う強硬策に出たと言う事はこれを凌げばこの地を巡る争いは私の勝利となるだろう。

「さっさと終わらせたいものだ……」

平和が一番なのだ。

などと考えているうちに一か所目、未だに結界の辺りをうろついて

いる魔族が五体。

その内の一体が口を開いた。

「才前が今回呼ガレタ理由カ」

「悪いが雑魚に構っている時間は無いのだよ。二刀連撃 斬空斬魔
閃」

話しかけてきた奴ともう一体へ退魔斬撃を放ち刻み還す。

「クッ、貴様ッ」

残りが動きだした。

どうやら私を囲む気らしい、だが……、

「遅いのだよ」

「何ダッ?!」

経験からの移動予測に従い放った斬撃は吸い込まれるように一体を
切り捨て還す。

「動くな、時間の無駄だ」

残りの二体を糸で絡め動きを止め返す刀で首を刎ねたのを確認。

「しかし全で一撃とは、いい位置に当たっているのかただ弱いのか
悩むところだ」

愚痴りつつも自然と転移の準備をしている自分に小さく苦笑する。

「やれやれだ。平和は遠く尊いな……」

眩くのと視界が変わるのは同時だった。

真秀の地を巡る争いは瞬く間に終わりへと近づいていく。

召喚による魔族の三か所同時襲撃。

作業の様に一か所目、二か所目と対処し最後。

問題は『感覚』がある以上相手も気づいている。

即ち奇襲は意味がないと言う事だ。

「ようやく来たか、待ちくたびれたぞ」

結界を越え幾らしもない地点、森林地帯に入ってすぐの地点にそれはいた。

色を失ったような灰の髪に琥珀の目を持った男が一人、周囲に敵影はなく構える事もせず木に背中を預けていた。

「貴様だけか？」

「ん？ああ、余分なものは全部俺が還した。邪魔なだけだからな」
「随分流暢に話す。やはり他の奴らとは違うと言う事か」

「まあそこそこの地位に立つ者としては当然の嗜みというやつさ。」

で、お前がファーストでいいんだな」

「ああ、お前を排除する者だ」

「そうか。とりあえず俺はアルフォンス・リヒャルト・フォン・ベルンシュタインだ。最近一応とはいえ侯爵の位を授かったもんだ。

……じゃいくぜッ」

話は無用と言う事か木から背中を離れたかと思えば軽い踏み込みと同時に爆発的な加速で接近。

既に人間の形を捨て鈍色の体にそれに近い色の体毛を生やした獣人の様な姿が迫る。

応じる様に袖から滑り出させた刀を握り構え迎え撃つ。

その衝撃に足が後ろへと滑るが押し切られることなくきんッ、と掌と刃とは思えない音を上げぶつかり合い拮抗する。

「ははっ」

アルフォンスが口角を吊り上げ笑う。

「ッ！」

瞬時に体を回転させた離れたるも頸筋と頬には血の流れた跡。既に傷は無い。

「ほう、今のを避けたか。たいていの場合は何もわからず、出来ずに死んでいくんだがな」

そう言いながらアルフォンスは自身の爪を自在に伸ばし折り曲げ操ってみせる。

「なりたての頃は爪を含めいろいろ自在に操れたものでな……」

「なるほどな。それにその回復速度も異常だ、面白い。俺も本気を出そう」

再び駆けだしたアルフォンスは剣のの間合いに入る直前で向きを変え木々へと向かう。

「俺にとってこの地形は好都合だ」

そう言いながら跳躍。

木の幹や枝を折ることなく足場とし残像を残すほどの速度で辺りを駆けまわる。

「貴様に俺を捉えられる事が出来るか」

刃と、鉄と打ちあってびくともしない鋼の腕に変幻自在の刃となる爪、そして強靱な足による縮地レベルの高速移動。

一撃が必殺と成り得る攻撃と木々を利用した超高速の攪乱戦闘術である。

今までにない敵、それが今牙を剥こうとしていた……――――

戦闘・暗躍 その狙いは……（後書き）

呼ばれる以外で一度も「クレス」や「ファーガス」を使わなかった回

薙ぎ払えっ！

某巨神兵を彷彿とさせる台詞

『氷神の戦鎚』

魔法兵団の三重詠唱によるもの
大きさもちょっと大きいかもしれない。が意味は無かった

『炎呼ぶ角笛の響き』

詠唱は「響け角笛の音よ 終焉を告げる笛の音よ 始まりの大火を
呼び 時の黄昏を再びここに」

最初の空間の揺らめきは衝撃波を意味する、その後衝撃の通った場所の範囲内にある対象物から炎を噴出、対象を火だるまにする。

衝撃はその魔力振動で空気を熱し魔力による発火を促し、場所を指定するソナー的な意味を持ち尚且つ氷塊を割るほどの力がある。魔法だから、という都合のいい魔法

対人なら軽く骨が折れ下手をすれば文字通り内側から焼かれることとなる。

その特性上最初の衝撃さえ防げれば無効化できる。

衝撃は放つ前に任意で方向や数を変える事が出来る半指向性、やろうと思えばジグザグにも動く

分類上は音魔法。

詠唱や作中の説明にあるように大本のイメージはヘイムダルを持つ

ギヤラルホルンの角笛と始まるラグナロクの最初、世界を焼くスルトの炎

裏設定としてこの術によって発生した炎を元にすれば簡単に「燃え盛る炎の神剣」の術を発生させる事が出来る

『不敗の光剣』

詠唱は「銀の腕に抱かれし光の剣よ 今再び鞘から放たれよ 眩き瞬きもって我に仇なす者を断て」

瞬間斬撃、高度光術式、斬撃軌道は任意

一瞬の閃光と共に斬撃を放つ。光速の斬撃であるが光学兵器の様に焼き斬るようなものではない。

即放たれる訳ではなく詠唱後であれば任意のタイミングで発動できる。敵の攻撃に合わせるなどすれば防御にも使える。ただし放てる斬撃は一つのみ

モチーフは詠唱にある通り銀の腕のルーが持つクラウ・ソラス

一撃で消えたその他の悪魔さん達

斬魔剣の効果も当然あるがただの雑魚というのもある

アルフォンス・リヒャルト・フォン・ベルンシュタイン

一応侯爵、という結構上位存在

アルフォンスは高貴な人物。Ⅱ侯爵

リヒャルトは勇敢や力強い統治者と言った意味

ベルンシュタインは琥珀。目の色

一撃必殺の高機動攪乱戦闘が得意

いろんな意味で名は体を表すと言える存在であり人間形態と悪魔形態を使い分ける。強靱な肉体と自在に動く爪が武器の武闘派

悪魔形態のイメージは某半人半妖の女戦士達が登場する大剣漫画の銀眼の獅子王さん。悪魔っぽくない……

クリストフ・フレイザー

『不敗の光剣』を受けて無傷
依然として謎

クレス

早く終わらせてまたのんびりしたい人

これまでで把握していると思われるが基本的に戦闘シーンはどんなに熱く次に持ち越されてもすぐ終わるので期待できないのがこの小説
これまでもこれから熱い展開なんてないと思いますが……

絶対の聖者（前書き）

戦闘なんてなかった。いつものことである
長いし空白も多いしでもう……

絶対の聖者

興醒めとはこういう時に使うのだろうか……。

それが行動を起こしたアルフォンス・リヒャルト・フォン・ベルンシュタインに抱いた私の感想だ。

私の、この地において自身に有利な地形とは笑わせる。

「残念な勘違いだな」

「何だと？」

やる気が無くなったせいかなのか高速移動を続けているせいかなのかは定かでないが正確な位置は掴めない。

それを良い事に撚るつもりなのだろう。攻撃を当てる瞬間こちらがギリギリかわせる程度まで速度を落とすわざと無駄な傷を増やしていく。

その程度の傷は意味がないと知っていないがら……。

「確かに私はお前を正確に捉え撃ち抜けるような術を持っていない」

それは事実だ。

もし確実に当てると言うのなら広範囲の術式で周囲ごと薙ぎ払うのが最も効果的だろう。

「そうだろう、だから貴様はこのまま……何だ、この……」

異変が起こり始めたようだ。

あれだけ動きまわっていれば当然だろう。

「この地の支配は私にある。貴様の有利など幻想に過ぎない。それがわからない貴様は三下以下だ」

「っ、体が……俺に何をッ」

どうやら相当速度が落ちてきているらしい。
既に目で追えるほどだ。

「ほら、どうした。さっきまでのように駆けまわってみせろ」

声を放つだけで放たれる音の衝撃が奴の体にぶつかっては消える。
牽制程度の威力であるそれは本来苦なく避けられる奴にとっては酷く煩わしいものだろう。

その強靱な肉体故か動き続けてはいるが止まるのもすぐの事だろう。

「くそっ、何をした！俺が何もせず膝を突くなどありえん……」

そう言いつつももう限界なのだろう、焦りを浮かべながらも片膝を突いた。

「単純な事だ、お前の体は今私の意図／糸により動けないそれだけだ」

「糸、だと馬鹿な……そんなものでこの俺が」

「事実だ。酷く詰まらん……。だが、これでこの争いも終わると思えば幾分気も晴れる」

「まさかこんな決着とはなあ。小細工なしの方が良かったか。……無念だ。俺が未熟で貴様が見事だったと言うだけか……」

潔く負けを認められるか。三流以下は言いすぎだったかもしれないな。

次があれば訂正してもいいかもしれん。あればの話だが……。

「お前の言う異常な再生力がある分どこでやろうと私が勝つさ。……まあ達者でな」

片手で糸を引きながらも片手で剣を振る。バラバラと切り崩れた体は地に落ちる前に消えて行った。

「さあ、これで……」

既に日は沈み月が天高く上がり輝く。

真秀の中心、神木を前に月明かりが射す。

そこに影が『二つ』

「そこから離れろクリストフ・フレイザー」

象徴たる大樹の前、そこに豪く真剣な様子のクレスと変わらぬ笑みを張りつけたクリストフ・フレイザーの姿があった。

「おやおや。なぜばれてしまったのか、隠身には自信があったのですが……」

その柔和な笑みを崩さず酷く自然な様子でクリストフ・フレイザーは首を傾げた。

「そこから離れろと言ったのが聞こえなかったのか？」

一歩踏み出すと同時にクレスの手には刀。

「その様子から察するにやはりこの広範囲結界の起点は大樹ではなくこの石碑のようですね。随分古いようですが何なのでしょう？」

「聞く気はないと言う事か。……そもそも私はお前を信用などしていなかった。そして今日、一部とはいえ結界が破られた。なら私がここにいるのは当然だ」

「なるほど、だから今日私にも攻撃が当たったのですか。私の思惑だけが動いていたわけではない、と……。少し貴方を過小評価していたようだ。武力一辺倒だと思っていましたが頭も回るようだ申し訳ない」

悪びれた様子もなくクリストフは笑顔のまま頭を下げた。

「しかしこれを破壊すれば我々の勝ちです」
「その前にお前を消せば私の勝ちだ」

ふふふ、くくく、と低い笑みが木霊する。

「ふッ」

息を込め穿つような掌底がクリストフから石碑に向かい放たれる。
『不敗の光剣』を受け無傷で済むような防御力を持つと言う事はその力が、筋力が人並みでも怪我を負うことなく石碑を破壊できるまで怪我も痛みもなく殴り続けられる事だろう。

そしてそれは――――、

「させん」

クレスによって振るわれる刀はがん、と言うとても腕を斬りつけたとは思えない音を立てその軌道を逸らす。

――――クレスの術も剣も効果が無いと言う事に他ならない。

「邪魔をしないでいただきたい」

「貴様の方こそ邪魔だとわからないのか」

ぶつかる視線、再度衝突する刀と腕、そして鈍い音。
それを繰り返す。

「その体どうなってい。いくらなんでも傷すらつかないのは驚くよりも呆れるぞ」

「私はクリストフ。神に仕え神を運ぶ者。この世における神への信仰心をその身に降ろし絶対の加護を持つ者。何人たりとも私を害することなどできないのです。信仰を超えない限り、ですがね」

「……………なるほどな。信者の数が防御力と言う訳か。しかし信仰心とは面倒そうなうえ厄介なものだな……」

単純に考えて信者の数＝防御力。

「信仰心という魂の欠片を私へと移しているのですよ。故に信者の信仰に揺らぎはなくまた私も揺らがない」

「一部とはいえ人の体で数千、数万、いや……億に及ぶ他人の魂を受け止められるというのか」

「そこは私の名前と体質、といったところでしょう」

「ふん、よく喋るな。いくら知られたところで余裕と言う訳か」

「ふふふ、まあそう受け取ってもらって構いませんよ。約五億、貴方は同時に倒せますか？」

「……………」

そして再び激突の繰り返しが始まった。

切るものを選ぶことのできる二の太刀ならば切れるだろうがそこまで習得はしていない。

手加減なしの『雷嵐の槍』のような魔神術式ならば数千ぐらいなら

一度で吹き飛ばせるかもしれないがそれは密集しているなりの条件が合つてのことであり数千では威力が足りない。

威力だけで言えば『災厄齎す光の破壊』なのだろうが仮に放ったとしてそれこそ以前とは違い自身も省みない本当の全力で放たなければならぬだろう。

そうなればこの辺一帯が焦土どころか荒野になってしまふだろう。それでは意味がない本末転倒だ。

『破壊の炎』 『炎の氷柱』 辺りか…… 『魔貌の光』 でも…… いや無理か……。

こいつを倒したという証明を立て突きつけるには『破壊の炎』では失敗だろうし『炎の氷柱』で固めてもいいが私がそれを運ぶのか？それは嫌だ。最後の手段だろう。

他に手は…… 奴の防御を落とすにはその身に宿す信仰を削ぎ落さなければならぬ。

その身に宿る信仰、魂の欠片をなくす……。

魂の欠片…… 欠片、魂の？

そう言う事か……？

「悪いが勝たせてもらう。さっきのお喋りを悔やむんだな」

「私に勝てると？」

「ああ、見せてやるタン・レスタン・アルター・アンタレス

天にまします我らの神よ どうかお赦してください

まさに今死ななくてはならないはずの地上のすべての罪人

たちに

今永遠の死を与える私の大罪と小罪の全てを赦し

聳え立つその城を 愚かな罪人を 微塵に碎き

その苦悩もろとも止めを刺せば

至高の光の元に永劫の円環を与え

それを私の祝福となし 私の霊魂を満たせ

私の願いがあなたの思いとなられるように

れば天主よ その時全てを許したまえ」

———強装魔導結界———『魂鎖す悪魔の檻』———

そして世界樹の一带は区切られたようにその色を失った。

「色がっ……なんだ、この術は……」

「ここからは長期戦だ。覚悟しておけ」

そして終わりを見せながらも再び力のぶつけ合いは始まった。

気付いた異変。

「まさか私の加護が……？」

削がれる力。

「この私が敗れる？このクリストフ・フレイザーが？」

それは認められない現実。

「私は、神に選ばれた……絶対の存在だっ」

呆気ない幕切れ。

「なぜ……神は、私を見捨てに……これが定めだとも言うのか……」

遂にクリストフはうなだれる様にその膝を突いた。

「化物の私が言おう、お前は人間だよ。何処までいっても、誰しもが人であることに変わりはないのだ……お前は少々特殊だった。そ

れただ」

「……何故、貴方は神を信仰しないのですか」

「信仰を持つ事は自由さ。私も初めは……一応そうだった。しかし信仰とは理論や経験とは無縁のもので現実においては馬鹿馬鹿しいだけだ。だから私はこの現実を生きると決めた時に信仰を、神を信じていなくなった」

「だが私はこの世に神がいると信じている」

「私はこの現実には神はいないと知っている」

「信仰にも負けない強く固い意思なのですね……。信仰のないただ一つの意思。それを貫くのは簡単なようで酷く難しいでしょう。貫き通せますか」

「無論、この身が果てるまで」

「ふふ……。最大戦力である私の首を持っていけば貴方の勝利で事は収まるでしょう」

「ああ、有り難く使わせてもらう」

その言葉を最後に静寂が訪れた。

これを機に真秀の地はクレスの条件のもとに明け渡され土地を開いていくこととなる。

その地名を麻帆良と変えて……――――

絶対の聖者（後書き）

彼の神父の暗躍は失敗する。

と言う事で七十話。切りよく次から新章。どうでもいいけれど「1」ばかりなので1時更新にしようかなと思った。今この時

糸による拘束、殲滅

生存率3%「紐の試練」とかそんな感じかと思われる
忘れられているだろうが奏糸操の元は日本の退魔術、鳴弦。魔を相手にして通常より効果はあって当然だと思われる

結界起点の石碑

わざわざ神木から魔力を引きだし石碑から結界を展開している
共に旅し流れ着いた友が眠る場所。一種の感傷か……

「く貫き通せますか」「無論、この身が果てるまで」
完全に元は某剣客漫画の悪・即・斬である

アルフォンス・リヒャルト・フォン・ベルンシュタイン
終わってみればけっこうサッパリした奴
熱いような性格をしつつも自身の負けも認められる

クリストフ・フレイザー
元になったキャラ同様と言えるような絶対防御。信者の数だけ防御

力が上がる。

そんな異常に耐えられる特異体質、自称神に選ばれた存在
信者に宿る信仰心という魂情報を自身に移す事が出来る

当人から切りはなす事で信仰者の信仰の揺らぎをなくし移された分
だけクリストフ自身の信仰を高め固めると言うもの

その信仰を超える力だけでなければ傷一つつけることはできない
当然魔法世界最高の防御力であり、この一連の攻防戦でなくともど
の戦場においても最高戦力である。

クリストフ本人は魔法世界出身だが魔法世界人でないためリライト
は効かない。魔法世界人からの信仰心はリライトで消せるがそれで
も防御力はほとんど落ちないのでやはり牢獄結界の様に魂に直接作
用するか信仰を超える攻撃力を有さなければ倒す事が出来ない

1800年代終盤、1900年辺りのキリスト教信者数は人口の3
0と何%だとされる。かなりおおざっぱに約五億人だと思われる。
五億数千万人

クレス

戦いは終わった。首を手土産にのんびりしよう
牢獄結界の力が万能過ぎる

白の少女（前書き）

定番の一言を、なんだこれ……

白の少女

真秀の地を欲する魔法使い達との闘争を終え地名を『麻帆良』と変えてから既に半世紀。

契約上物事の把握はしているとは言えあつという間に開拓が進み1番目の聖地としての設備が備えられ魔法界はウェスperlタティアのオスティアとの転移ゲートが機能するようになった。

今やこの地は巨大な森林から都市へとその姿を変え初めている。

しかし、まさか繋がる地がウェスperlタティアとは随分と皮肉な物だ。

そんな事を思う私の事など露知らず人々は互いに行き来し日々生活を営んでいく。

ゲートの他にも危険威力存在の管理と言う名目で各地に封印されている無名の鬼神を集め再封印処理を施し地下空間に封印したり、魔法界からも集まる物資、書籍の保管を目的に巨大な保管庫を建造。問題は魔法関係以外の物だけではなく世界情勢の不安から外部からも様々な物品が持ち込まれていると言う事だ。

これまでそのような事は無かったのだがどうやら今の時世になって大規模な開拓した事で表にもその存在を大きく注目されてしまったようである。

裏表問わず貴重な物が集まる、と言う事はそれを狙う輩も当然出てくる。

そう言った存在から集まった物品の保護、防衛を目的として保管庫を囲む形で人工湖の建設まで行われた。

それに加え大樹を起点として都市全域を覆う形で認識阻害を基本とした巨大な複合結界まで施されている

人口比率を考えれば一般人の方が多いとは言え今や半ば要塞じみた機能を有した魔法使いの拠点となっている。

開拓によって流入する人々。一般人が増えると言う事で魔法使いのものとは違ったと設備、施設が必要になり魔法使い、非魔法使いそれぞれによって様々な住宅、病院、学校その他諸々数多の施設が建設された。

魔法使い達が裏で必死に動いたようで軍事関係の施設が存在しないのはいいことだと言えよう。

その代わりと言っては何だが西側諸国から魔法使いが避難民として押し寄せているのだが……。

そんな雑多な状況と隣り合わせでありながら私は傍観者として静かに日々を過ごす。

ファーガスでありながらこのような、人々の中で『平穏』な時を過ごせるなどこれまでにない事である。

ほぼ日課と化している麻帆良内の散歩。

広大な敷地であるため全てを歩き回るのに一日では終わらないのだがその訪れない間の数日でも各所で発展の様子が見られなかなかに面白いものである。

そんな日課の散歩中、中心から少しの距離にある学業区。西洋系、東洋系を問わず多様な小学校と高等学校が並ぶ最も子供が多く街中とは違った賑やかさのある区画である。

その中の一つ、とある高等女学院の裏側、その端にある花壇。

花壇の前につばの大きな麦わら帽をかぶった一人の少女がこちらに背をポツンと座りこんでるのが見える。

「お前、そこで何をしている？」

「え?! あっ、えっと……その……」

話しかけられた事に驚いたのか振り向いた少女はあたふたとうろたえる。

その手には土のついた移植ごてが握られていた。

「ああ、なるほど。花の入れか。ご苦労な事だ。しかし一人でやっているのか？」

「あ、……はい」

「一人では大変だろう？」

「その、えっと……私、こんな見た目のせいで友達とかいいませんし……。これは趣味みたいなものですから……」

「こんな見た目」一言で言っていると白だ。

肌は他の者とは違った白さを持ち、髪は白く瞳は鮮やかに赤い色を放っていた。

白化、なのであろう。

「まあ、確かに珍しくはあるな。だが別に「こんな」等と下卑する事でもないだろう。国によっては神聖な存在とされるものだしそのような存在は過去にいくらでもいる。お前は別に異常でも何でもないさ」

私のような存在に比べれば白化という存在など十分に人として、人間の範疇に入っていると言うものだ。

「あの」

「うん？」

「本当に、本当に私はおかしくないんですかっ」

しかし、やはり当人にとっては至上の命題といったところなのだろうか……。

「ああ、多少珍しくはあるし日差しが辛いだろうが人としてお前はおかしくなどないさ」

「っ……わ、私にも友達が、皆みたいに友達が出来ますかっ？遊べますかっ？勉強を教えたりしてくれますかっ？」

目尻に涙を浮かべ彼女はずっと胸に秘めていたのであろう思いを零した。

「ああ、きっと叶うさ。私みたいな年上でもいいなら友になってやるぞ」

言葉にしてから思う。自ら友などと以前の自分ならば口にはしないだろうと。

やはりこれもあれの影響なのだろうか……？

「はいっ、はい、是非お願いします。私と友達にっ……」

「少し待て。いいか、友とは対等な存在だ。そのように相手の伺いをたててお願いをしてなるようなものではない」

「でも、私……遊んだり何かを手伝ったりとか何にもできませんし……」

そう言って彼女は俯いてしまう。

「そんなことはいいんだ。今出来ないからどうした、これからできるようになればいいだろう。それにお前は今こうやって花の手入れも、私と話す事だってできているではないか。私はそれだけでも十分だ」

「なら……なら、私はもつとあなたとお話ししたりいろいろな事を教えて欲しいんです。だから友達になりましょう」

「ああ、そう言う事なら喜んで」

しかもこんな小さい人間の少女を友とするなど考えもよらなかった。昔の私が見たら腑抜けたとも言って笑うだろうか……。

「私はクレスと言う。だが事情があってな、他に人がいる時にはフアーガスと呼んでくれ」

「はい。私はさよ、相坂さよです。これからよろ惜しくお願いしますねクレスさん」

その後互いの話を、当然魔法関係の話を抜きにしていたのだがどうやらさよは既に両親と妹、家族全員を失っているらしく施設で過ごしているのだそうだ。

そして彼女が一人で手入れをしている花壇の花は妹が世話をしてい

たものを引き継いだらしい。

「ふむ……。よければ一度私の家に来てみるか？」

「そんなんっ、いいいいいんですかっ？」

「私が良いと言っているんだからお前が気にする事など何もないさ。それで、そうだ？」

「はい、はいはいはい。是非お邪魔させていただきますっ」

「ふふ、そうか。もう昼になるな……。もしよければ家で食事を御馳走しよう」

「わあわあ、そんな、私……。でも……。えへ……。私でもお手伝いできることがあったら言ってくださいねっ」

「ああ、頼むよ。さあ行こうか」

「はいっ。あ、その前に一度施設に寄っていききたいです」

「そうか、では一緒に行こう」

こうして歳も身長も性別も、ありとあらゆるものが違いすぎる私とさよの友誼が結ばれることとなった――――

白の少女（後書き）

二人目の3-Aキャラである

知らない人について言うてはいけません

|| 友達だからいいんです

麻帆良

日々開拓が行われる11番目の聖地。

ファーガス・フェイタラストの治めていた地が因縁あるオスティアに繋がると言う皮肉な事態に。

世界樹の魔力を集積し転移ゲートの動力としている。

その上で余った余剰魔力を結界の展開にも使用している。

様々な物品や人々が集まる集積地。

世界大戦中であるがそんな事お構いなしに集まる。

同盟国以外の人間もいるが結界のおかげでなんとかなっている。

中心である世界樹に近いほど学校が多い。外縁は一般的な居住区といった感じになっており商店の様な所謂「お店」は最低限しか存在しない。

保管庫と人工湖

後の図書館島と麻帆良湖

ファーガスの名を出せば襲撃や盗掘などの人数を減らせるはずだが本国の対面を保つ都合でその名はあまり出されない。

巨大複合結界

麻帆良大結界であるが現段階では電力による展開をしているわけではない為原作に比べれば出力や精度は低い。
設定のほとんどを様々な人種、物品を非魔法族から誤魔化すため認識阻害の効果に割り当てている。

危険威力存在の管理

危ないですから我々が責任を持って封印管理します。と言ったところ
将来的にチャオに悪用されるの品物

『平穩』

第二次世界大戦中だが麻帆良内、クレスとしては平和そのもの

高等女学院

現在で言えば女子中学

移植ごと

園芸などに使われる小さなシャベル

相坂さよ

原作ではどうかかわらないがこの作品では白化、所謂アルビノの少女。家族は既に他界している。

その外見故に友達がいらない。妹が大切に世話していた花壇を引き継いでいる。

自身の事情故にあまり学校が好きではない。

年上のお兄さんと言った風の友達を得た

クレス

麻帆良内であればファーガスを名乗っていても普通の生活が出来る事に満足している。

日進月歩する周辺環境の変化に楽しみがある

基本的に家を出る時はファーガスの姿であるが気分によっては影でこっそりとクレスとしての姿になる事もある。

当然ファーガスの時は一部の魔法使い達に目を付けられたりしている。

基本的に一人でいるさよはクレスとして近づきやすい。

傾ぐ影（前書き）

Epilogue — Memories fragment —
シチュエーションはご自由に。

「さよ、そこは……」

「え？あ……こ、これはですね、偶然今回も間違えてしまったと言
うで別にくっついてたとかそういうのじゃ……」

「くくく……いや、いいさ。私も教えがいがあって楽しいしな。嬉
しい限りだ」

「もうっ、そんな事言われたら強く言えないじゃないですかっ。今
のうただけですからね。いいですか、そのうち役に立っていつか絶
対————」

傾ぐ影

白き少女、相坂さよとクレスが友人となってから数カ月の時が経った。

さよはその性格からかクレスの他に近衛 近右衛門と言う男の友達を一人つくった程度だが本人はそこまで気にした様子は無く、むしろクレスと会う事で勉強や料理、その他に雑学やクレスの海外での話と言った事を聞き知る事が楽しいようである。

ちなみにその近衛 近右衛門、クレスは何度か会って見たのだがどうやら過去に名を馳せたあの藤原、近衛天皇の系譜らしくその高貴な血筋からか生来の高い魔力を持つ京都、関西の協会理事の家系らしい。

麻帆良に住む魔法使いが自らを関東魔法協会と関西にある日本古来の呪術派閥に対して名乗った。

それに対応するかのように関西の方では関西呪術協会と名乗る様になったのである。

そしてその関西の重鎮に連なる近右衛門少年は関東への視察や友好の意味でこちらに在籍しているのだとか……。

閑話休題。

ついつい話に夢中になりそのまま寝てしまった事を皮切りにクレスの家には次第にさよの私物が増え始めたりしている。
見せる表情や意外とおっちょこちょいな所があるさよの姿はクレスからすれば友でありながら手がかかりながらも可愛い娘のような存在となりつつあるの現状だ。

既に毎日のように夕食をクレスの家で食べるさよの、
「今夜はオムライスにしましょう」

そんなリクエストを受け材料を買いに出たその帰り道。
幾分上機嫌に歩くさよとその少し後ろを歩くクレス。
そんなクレスの前に、

「フェーガス・フェイタラスタで間違いないな」

一人の男が現れた。

「私に何の用だ」

「私はフェリックス・グリーンと言う。一時間後世界樹前の広場に
来てほしい。大切な話がある」

「ふむ。その話とやらはすぐに終わるのかね？」

「スムーズに運ばな。ではその時に……」

そう言ってフェリックス・グリーンと名乗った男は夕暮れの中に消えて行った。

「ファーガスさん。どうしたんですかー？」

前を歩くさよが立ち止まるクレスを不思議そうに見つめていた。

呼び出しに応じ訪れた世界樹の前に来たのだが、
魔法関係者だけがざっと大人子供合わせ五十人、と言ったところか。

「来たか、ファーガス・フェイタラスト」

「わざわざこんな所に呼びだして、しかもこの人数、何の用だ」

呼び出した張本人であるフェリックス・グリーンとか名乗る男が話しかけてきた。

「簡単な事だ。貴様がこの地から早急に去る事を望んでいる者たちの集まりだ」

「それを言うためだけにわざわざここに人を集めたと言うのか？」

「これを受けない場合我々が正義の名の下に貴様を成敗する」

「はッ、何を言うかと思えば。知らないのか？もともとこの地は私の物で、それを譲る対価として私はこの地における大抵の物事の権利を持っているんだぞ？当然住む事も許されている」

「そんなことは知っている。だが我々は悪の権化たる貴様がこの地に住まう事を良しとは出来ない」

良しとはしない、とは……。この麻帆良ではなにもした事が無いと言うのに随分嫌われたものだ。

「そんな個人的な理由などは知らんよ。帰っていいか？」

「待て。この地を去る気はないと言う事かっ」

「当然だろう？ではさらばだ。友が夕食を楽しみにしているんだな」
すぐ戻ると言った手前あまり遅くなるとさよが心配してしまうだろう。

「待てっ。本当にその気が無いのだな？」

「なんだ、くどいぞ」

「いいだろう。その気がないと言うのなら今ここで我々が貴様を成敗する」

「できるのか？貴様ら程度が、私を？」

「くっ、舐めるな。ファーガス・フェイタラスト……大袈裟な伝説も今日で終わりだ。真の正義の現実ってやつを教えてやる」

そう言うのとフェリックス・グリーンは懷から銃を取り出し迷いなく引き金を引いた。

パンッ、乾いた音。

一瞬の間。

そして衝撃。

「づっ……」

音の下方向とは明らかに違う角度からの衝撃。

跳ねた音はなし。

わざわざ銃弾に空間転移の魔法でも使用した、ということだろうか。

衝撃と同時に左側の視界が閉ざされる。

どうやら左目を抉られたらしい。

しかしその程度なら……、

「なんだ……？」

ふと感じる違和感。

そして瞬時に思い当たる、いつもなら既にその目は再生を終えて常の状態で動いているはずであるが、それがない。

「馬鹿めっ、その銃弾には回復阻害の術が込められているんだ。不死と言われる流石の貴様でもそう簡単に再生はできんだろっ。今のうちだ、撃てっ。奴を倒すんだ」

パンッ、パンパンッ。

四方八方から次々に魔弾が放たれる。

「厄介な、物をっ」

これは多少帰りが遅くなるかもしれんな……。

そんな物が量産される時代か、等とクレスは舌打ちしつつ弾幕が薄くなった瞬間にダンッ、と一歩踏み込む事で周囲へと放たれた衝撃が迫る銃弾を逸らし落とす。が、それでも一向に数は減らず障壁貫通の効果でも付与されているのか多少勢いを落とすものの雨霰と降り注ぐ銃弾はクレスの身を次々と決り貫いていく。

「ッう……斬空百烈桜華斬」

鈍る体に気を巡らし放たれた旋撃は銃弾の悉くを断ち切り空を断つ刃が取り囲む者達が持つ銃器を一閃した。

「く、しかしそれだけの弾丸を浴びていてはそう満足に動けはしないだろう。一気に畳み掛けろっ」

そして最初に後方より放たれた魔法の射手が七矢。やっとのことで再生を終えた左目、広がる視界が迫る魔法の射手を捉える。

どうという事は無い、障壁一つで事足りる。

問題は撃ちこまれた弾丸の種類だ。

障壁貫通に回復阻害、体を走る嫌悪感、破魔弾か何かか、他にも麻痺毒や魔族封印術、術構成の阻害、拘束術式等々、通常弾頭など微塵もない。

体の状態からそうクレスが判断、分析をしている瞬間、

「な、待てっ。今入るのは————」

乱入者か何かか、静止の声が響く。

射線上に一つの白い、そう白い影が一つ。
そして、

「きゃっ——」

悲鳴。

びしゃびしゃとその身を撒き散らしながら影が傾き始める。

——いつか絶対、私が出る子だって証明してみせますからね。
忘れないでくださいよ——

不意にいつだかさよがそんな事を言っているのを思いだした……—

傾ぐ影（後書き）

テンプレ的な正義の魔法使いの回

「く大袈裟な伝説も今日で終わりだく」
狙ったか、ファーガス・フェイタラスト！
認めん、認められるか、こんなこと……

ようするに水没王子である。

斬空百烈桜花斬

文字通り斬空閃と百烈桜花斬の混合技

飛ぶ斬撃と飛ばない斬撃は必要に応じ自由に分けられる

特殊弾丸

回復障害弾…被弾者自身の治癒力や掛けられた回復魔法の効果を著しく低下させる。

障壁貫通弾…文字通りの効果。貫く障壁の強度、枚数によって減退を受ける。

破魔弾…魔に属する対象に対し威力が上昇する。神聖な弾丸である。
麻痺毒…呪詛による強制的な筋肉硬直弾。他にも五感などの感覚麻痺や金縛りの様な全身麻痺など種類がある。

魔族封印術…魔に属する者に対し身体能力の低下等を促す術式が込められている。他にも竜族や各獣人系など様々なものがある。

術構成の障害…魔力運用を障害し術を放てなくするもの。下級術式さえ構成、制御に支障をきたす。気には作用しない

束縛術式…麻痺弾とは違い着弾時に簡単な拘束術を展開するもの。

旧世界の時代、戦闘は変わった。

フェリックス・グリーン

名前は幸運な青二才

所謂正義の魔法使い。(笑)がついても可

ファーガスの存在に不満を持つ者を集め不安を持つ者の不安を煽り
人数を集めた。銃撃包囲作戦を考えたのもコイツ。

転移魔法を銃弾に利用したりと頭が悪いわけではない。ただ残念な
だけ。

近衛近右衛門

関西から来た。高貴な血族『近衛』の一人

さよの友達らしい

「と……ととと、友達になってくださいっ」頭を下げ手を前に、ま
るで告白である

「頭を下げてなるものではない」というクレスの言葉があったせいで
一度振られ、もとい断られている

相坂さよ

友達が出来た。女友達が欲しいと思わなくもないと言ったところ。
ほとんど同棲状態。

いつもどじを笑われているがそこから感じる優しさは嫌ではないと
思っている

「そのうち役に立っていつか絶対私が出来る子だって証明してみせ
ますからね」

クレス

さよを猫かわいがりしているとも言える。経過年齢でいえば子供どころか曾孫の曾孫に曾孫がいてもおかしくは無い

特異境遇とはいえ一般人にここまで手を貸すのはやはり『リライト』の影響が大きい

願いは光となって

その身を呈しクレスの前に現れた一つの影。

血と肉を撒き散らす影。

それが今ゆつくりと傾きその身を地へと倒そうとしていた……。

赤く熱い一滴がぴちやりとの頬を濡らした。

一瞬の空白、そして思う。

この状況で私を助けるために出てくる者など一人しかいないではないか……。

「さよっ」

ゆるりと倒れ行くその体をなんとか抱きとめる。

「だい、じょうぶ、でしたか……?」

「馬鹿者、私は死なないと言ったのを忘れたのかっ?!」

「えへへ……でも、やっぱり友達が傷ついたりするのは嫌……です、

よ」

へにやりと嬉しそうな笑みを浮かべないでほしい。

「それでお前がこんなことになってどうするっ」

大きく削がれた腹部からはとめどなく血が流れていると言うのに未だに意識がある。

いっそ意識を失っていて欲しかった。

「そう、かもしれませんが。体が、動いちゃったんだから、しかたない、です」

「待っている、今すぐに———っ」

訪れたのは一発の銃弾。

まだ残っていた銃があったと言う事か。

「何をしているっ。奴を庇った、即ち彼女は奴の仲間だぞ。怯むなっ」

それを皮切りに狂ったような声と共に多種多様の魔法が放たれた。

「すぐ収まる。じっとしている」

「はい」

覆うように抱きしめるが強くは抱きしめてやれず、安心させる事も

出来ない。

自身の不甲斐なさを呑みこみ魔法障壁と音壁による今行える最大の全天防衛を行う。

特殊弾丸の影響が碌に術も、魔力も使えず十全から程遠いとは言え魔法の射手程度ならば早々抜かれる事は無いだろうがそれ以上はわからないという障壁。

抜かれる度に加わる衝撃と傷による熱につい顔を歪めてしまう。

「大丈夫、ですか？」

失血のせいだろう。白い顔を更に白く、蒼白へと変えながらもこいつは気使いをやめない、意識を失わない。

「お前一人を守る事くらいどうという事は無い」

「いつも見たいなことが言えるなら、安心、ですね」

今にもその目を閉じてしまおうのではないかと思わせるようにその笑みに力は無い。

そして魔法が止む。

「っ！」

低く這わせた糸を一齐に振るい取り囲む連中を引き倒す。

思った以上に冷静ではないらしい。つい力加減を間違え運なく足が無くなった者さえいる。が、気にしている余裕はない。

今、この中で杖を振ろうと言うのなら杖を、手を、腕を断ち意図を

断つ。

「私の、邪魔をするなッ！」

ひうんひうん。糸がうねり跳ね周囲を蹂躪する。

魔法使い共など既に問題ではない。

大事なものは腕に抱えたさよ。それ以外には、この身体でさえどうでもいい。

腕の中で刻一刻を争う状態のさよ。

今だ碌な術を組めずにいる自分。

術式はある。だが、それを扱えない現状に思わず噛み切った唇は僅かに血を流しすぐに治る。

何度も助けられたこの治癒力。腕の中の少女一人助けられない今、私には誰も助けられないと言われているようで皮肉の様にさえ感じてしまう。

「諦めるな。生きてみせろ」

言葉を掛けながら夜の街をひた走る。

瞬く間に包囲網を瓦解させ突破したクレスが向かう先は図書館島、その地下。

聖地の、世界樹の魔力を集め稼働するオスティアへのゲート。

そこに集積される大量の魔力を使用し自身の変調を無理やり押し流す事で正常化し『魔貌の光』で一気にさよを治療する。

現状、彼が思い浮かぶ手はそれしかなかった。

街中を駆けるクレスその前方から。

「ファーガス、さんっ」

声と共に一人の少年が現れ並ぶように走る。

少年が並んで走れるギリギリの早さまで速度を落としたところでクレスは口を開いた。

「近右衛門か。なんだ？」

「襲撃の話を聞いて……。抱えているのは……。？相坂さんっ?!」

驚愕する近右衛門。しかしすでにさよに意識はなくその声に反応せず無く浅い呼吸を繰り返すばかりである。

「その……。どういう事ですか」

「私を庇った。魔力が必要だ。ゲートに向かっている」

言葉に詰まる近右衛門を目の端に留めつつクレスは告げた。

「そうですか……」

「急いでいる。もういいか？」

「あ、すみません。その……。相坂さんをお願いします」

「無論。全力を尽くす」

クレスは一度頷くと一気に速度を上げ駆け抜けて行った。

「もっと僕に力があれば……」

遠ざかる背中と残された血の跡を見て呟いた。
悔しさを滲ませる少年の声は闇に溶けて消えた。

時には通路を飛び越え、飛び下りながらクレスはゲートに向かい自身の知る最短の道を走る。

「どけっ！死にたくはないだろうっ」

未だ調子は戻らず術の方向も威力も完全には定められない状態ながらも『破音の鎚』を一步踏み出すごとに放ち障害を排除しながらクレスは駆ける。

遮る警備などの障害を押し分け遂にクレスはゲート施設へ入る。
通路を抜け地下深く、ドーム状に作られた転送エリア。

「見えた」

呟く視線の先には宙に浮かぶ魔力集積炉、そこを狙い魔法を撃ちこむ。

大呪文による一撃を加えれば済む話なのだがそれを扱えるほど回復はしていない。

故にただ我武者羅に魔法を乱れ撃つ。

「そうだ。当たれっ、溢れろ……」

数年前に発光を終えたばかりである世界樹、それゆえ魔力炉には未だ多くの魔力が残る。

転移の準備に入っていたのか炉は既に起動臨海に達しているように輝きを放っている。

そこに放たれる呪文は炉へと更なる魔力を流し込む。

輝きを増し異常状態、オーバードロードへと至り機能を果たせない器は崩れ魔力が溢れ放たれる。

「来いっ私の元に！」

叫ぶように術式を固定、掌握する要領で大量の魔力を己へと導く。

魔力の激流、それに身を晒し体に残る異常を全て押し流す。

「ぐッ、うああああっ——」

本来その身には余る過剰な魔力は激痛となって体を巡る、それに晒されて尚クレスは耐える。

この荒療治に耐えなければ何もできないのだから。

「っ……タン・レスタン・アルター・アンタレス 雄々しき姿はっ、魔障を与えよ……美しき姿は魔傷を癒せ その身に宿せし魔性を持

って、我が意の元に力を示せっ 『二面持つ魔貌の光』

ふらつきながらも唱えられた術は一条の光をさよの体へと注ぎ傷を見る間に治す。

「起きろ、さよ。もう大丈夫だぞ」

呼びかけるが返事は無い。

しかし、辛うじて息はある。

「おいっ、しっかりしろ」

一度体をゆすると、

「んう……私……」

少女はゆっくりとその目を開いた。

溢れ行き場をなくした魔力が世界樹の内を駆け廻りぼんやりと周囲が光を帯び始める。

顔色は蒼白なままであるが僅かにさよは目を開き、

「あ……えへへ、結局助けられちゃいました、ね」

安堵と共に再びへにやりとした笑顔を見せる。

「でも私、ちゃんと何か出来る子でしたよね」

「ああ、まさか私を助けに来るとは思わなかったがな。だが、この調子ならもっと、すぐに友達ができるに決まっているさ」

瀕死の重傷だったさよ、そんな彼女を抱えていたクレス。

互いにその身の半分を血に濡らしながらも一度小さく微笑みあった。

「沢山出来たら嬉しいですけどもっと生きられないとだめ、ですよ
ね」

生きられないと。その言葉が彼女は自分の死を感じていると言う事を窺わせた。

その事がクレスに重く押し掛かった。

『魔貌の光』に限らず基本的などんな治癒術にも言える事だが流れた血は、失った体力は戻らないのである。
言いかえれば血が流れなくなっただけ。

「ああ、当然だろ」

「そっかあ……もっと、生きたいなあ」

何を見ているのか世界樹の輝きが増す中、目尻に涙を浮かべた少女はぼんやりと宙を見つめる。

「諦めるのか？」

「諦めたくないですけど……だけど」

「なら祈れ。ここならきっとそれも叶うかもしれないぞ」

「……はい。諦めたくないです。私、もつとここにいたいですつ。せつかく出来た友達と、クレスさんと別れたくないですつ。もつと一緒にいたいですつ。消えたくないっこのまま終わりなんて嫌ですつ」

文字通り最後の力を振り絞る様にさよはぼろぼろと涙を流しながら
思いの限りを晒し出した。

同時に世界樹はその周期を無視し一度だけ強く光を放つのであった。

過去に例を見ない世界樹の異常発光が起こったこの日。

それは久方ぶりに公の場で賞金首ファーガス・フェイタラスタに纏
わる事件が起こった日

そしてその事件に巻き込まれ一人の少女が亡くなった日であり……

一人の幽霊がひっそりと誕生した日でもあった————

願いは光となって（後書き）

さよ編終わり。次はあの人

そのうち原作で彼女の話をやるんだろうけどそんな事は知りません。と言う事で『麻帆良の乱』でした

「思った以上に冷静ではない」「力加減を間違え」

作中には無いが血濡れで伏せる姿が嘗ていた思い人、ルクレツィアを思わせた。

またリライトを受け「魔」が薄まり人間っぽさが出てきてる影響でもある

魔力集積炉

世界樹、聖地に集う魔力を集積する。集めた魔力を転移ゲートの起動等に使用するものである。クレスによりオーバード、オーバードフロア破損したため修復までゲートは機能しなかった。

この時代は大結界もこれで起動している為に一時的に結界も消失していた事になる。

『魔貌の光』

魔神術式『二面持つ魔貌の光』の事。実はそれなりに状態異常にも効果はある。あくまでメインは傷の治癒であり状態異常回復はおまけ以前書いたように血は戻らない。基本的に回復魔法は傷を癒すもの、損傷を回復し更なる出血や感染を防ぐものである。

『麻帆良の乱』

魔法使いの集団によるファース襲撃事件と彼によるゲート魔力集積炉破壊事件

重軽症者合わせて三十八名、死者一名

唯一の死者はファースを助けるために巻き込まれた一般人事件後ファースは軟禁、魔法使い達は本国送還となったという公表内容。ほとんどあっている

幽霊

肉体を失ってもなお魂を何らかの力で留めている存在
間際の際における最も強い思念に影響を受けられると思われる。

怨霊などはその負の想念を元に行っているため姿も恐ろしかったり醜くかったりする事が多い

さよは世界樹を起点としたもので地縛霊に近い

フェリックス・グリーン

右手左足を失い入院、後に送還。以後詳細不明

近衛近右衛門

力が欲しいと願う

相坂さよ

今までの中で一番ヒロインぽいかもしれない人
世界樹に願った結果幽霊として生きる事になった
結果として世界樹を触媒とした魔法のようなものであるため幽霊で

ある、体が無いうちは基本的に触媒のある麻帆良内でしか行動できない。

この事件唯一の死者

クレス

自分の傷は勝手に治るのに腕の中の少女は治せないもどかしさ

さよにルクレツィアを重ね見てしまった。

また原因や結果はどうあれ巻き込んだ末に幼い少女に自信の死を認識させてしまった事を悔いてもいる

上陸XピンチX救援（前書き）

気合で冒険する物語

上陸XピンチX救援

嵐に晒され荒波と豪雨にずぶ濡れになりながら一人の男がとある島に上陸した。

「ここが魔王のいるって言う島か……」

濡れた荷物と剣を一振り担ぎ男はそう呟いた。

俺の名はジャック・ラカン。流れの傭兵剣士だ。

数年前まで剣闘奴隷なんてもんをやってたが今や自由の身。

晴れて自由気ままに旅が出来るってもんだぜ。

そして何処に行こうか悩んだ時ふと浮かんだのがここだった。

このヘラスじゃ観光できない観光名所として知られる【魔王の島】

今じゃ大して名を馳せてるわけじゃないが時折目撃されるその姿が今でも伝説のように囁かれる悪名高き賞金首、ファーガス・フェイタラスト。その根城。

手配されてから既に八百年は経つ、それでいて未だに姿が確認される。

どんだけ長生きだってんだか……。

まあそんだけ生きてりゃ俺の知らない事も沢山知ってるってものだろ。

もし戦う事になったら勝てるか？いや、無理か。相手は長生きの賞金首、そう簡単に勝てるならとつくにいないはずだ。だが諦めきれねえ。

俺はもつと強くなりてえんだ……。

その為に、

「絶対見つけてやるぜっ、待ってろよ！」

しかしなんかこの島に着いてから体がだるいんだが風邪でも引いたのかね？

こうしてジャック・ラカンの冒険が始まった。

「ヤベエ……」

何がヤバイかってこの島だ。

海を挟んだ向こう側のケルベラス大森林にだって多くの魔獣なんかはいる。だがこの島の魔獣はそこらのとは格が違う。

全部が全部って訳じゃないがたまに馬鹿みたいに強ええ奴が居やがる。

島の大部分を占める森林だって異常だ。迷路みたいに入り組んでた

から思い切って薙ぎ倒して進もうかと思ったたらおかしい程に途轍もない堅さを誇りやがる、そんな木に苦戦してる時に限って例のヤバイ魔獣がうようよ出てきやがる……。

素直に來た道を戻ろうと思ったたらなかったはずの木が生えてて道が変わりやがるし……。

「なんなんだってんだこの島は……」

それに応える者は誰一人としていない。

既に六日、日に日に体が重くなっていく中ラカンはずき続けたいた。そしてそんな昼下がりが事態は変わる。

たった今まで目の前でラカンと死闘を繰り広げていた雷を操り赤いマントの様な物を着けた虎の様な大型の魔獣が唸りながらじりじりと後退を始めたのである。

「あん？何だ？」

魔獣の行動に疑問を浮かべた瞬間、ぞくり。

不意にラカンの背が揺れる。

「何だ、この感じは……」

何かよくないものが近づいている、その事だけを直感的に感じ周囲を確認する。

不用意に木々を超えようと飛べば格好の餌食となるこの森でそれは勇壮と飛びながら現れた。

背中にある二つの突起から青い炎を翼のように吹き出しなが木々を超え現れた赤い目の青い竜。

「は、はは……こいつは、ヤベえ……」

この数日で鋭さを増したラカンの勘は瞬時に自身との力量差を把握した。

青い竜はラカンには目もくれず先ほどまで戦っていた虎の魔獣に目を向けている。

「グオオオオオ——」

竜が腕を上げ一鳴きすると同時に気温が下がりその手には氷の槍。それを掴むと再び背中から青い炎を吹き出し猛スピードで虎魔獣の上に飛翔しそのまま腕を振り下ろした。

「……マジかよ」

ラカンの眩きと共に先ほどまで戦っていたはずのそれはなす術なく氷の槍に貫かれ声も上げずにその巨体を地へと横たえた。

あれは戦うとかそれ以前の問題だ。今の俺じゃ無理だ、逃げるしかねえ。

くそっ、何で体が動かねえ、どうなってやがる。

「くそ、が……」

へへ、口は動くのに情けねえぜ。

こっちを見やがった。見つかったか、いや最初からわかってたんだろうな。ただ眼中になかったってだけで……。

「グウウウウ……オオオオ」

飛ぶまでもねえって事なのか奴は一步また一步とゆっくりとこっちに近づいて来やがる。

そして少し離れた位置で止まった。

そこからが奴の射程なんだろうな。なんとなく思他人事のように思っちまう。

その位置で腕を軽く引いたかと思うとじゃきん、という音と共に腕から巨大な刃を展開して一気に俺へ――――

死んだ。

音も、空気も、そして俺も。

死んだ、確かにそう思った。

光だった。

強烈な光が一直線に宙を切り裂いて現れた。

俺にとってまさに死って言う暗闇に射す一条の光ってやつだった。

光は一直線に俺へ、いや、俺に迫る竜に伸びて行って奴の頭に直撃したかと思えば竜の野郎を押し退けやがった。

轟音と奴の悲鳴のような鳴き声が俺を正気に戻した。

その瞬間から荒い呼吸を繰り返す、どうやら呼吸することさえ忘れていたらしい。それに合わせるようにどっと汗が溢れる。

今のはヤバかった、マジでヤバかった。

汗をぬぐうと、

「ふう……」

同時に溜息がこぼれた。

奴はまだ押し飛ばされて木にぶつかった時のまま倒れている、動いてるところを見ると死んではいないらしい。

なんて生命力だ……。

と、それよりだ。

「今の光は一体……」

辺りを確認しようと見渡すが誰も——、

「大丈夫だった？」

上、空からその声はふってきた。

「え？」

不覚にも呆けちまった。

女だった。

黒い衣服に金の髪を靡かせその人は降りてきた。

金の髪が日の光を受けてキラキラと光らせながらその人は笑顔でこっちへと向かってきた。

「怪我はないみたいだね。運がないね。あれと出会うなんて。そう言う意味じゃ運がいいのかな？」

なんてちよつとおもしろそうに笑うもんだから対応に困る。

「あの、俺は……えつと……」

自分でさえどうしたんだと思うほどに言葉が出ない。

「まああれをどうにかしてからだね」

そう言って彼女は俺に背を向けて奴の方へと向いた。

「あ……」

俺の間拔けな声が響くが問題はそこじゃない、奴が、あの竜が起き上がった。

「ギャオオオオオオ——ッ」

咆哮と共にその体から青い魔力の様な物を滾らせ赤い目を煌々と光

らせ奴は再び立ち上がった。

よく見れば先ほどの光のせいかな頭部の装甲の様な外皮がボロボロと崩れているのがわかる。

その姿からどうやら奴は相当お冠らしい。

「まだやる気？逃げればいいのに」

この人はこの人でスゲー余裕でいやがる。

本当にこの島はどうなってんだ……。

ラカンの冒険は次回へ続く……――――――

上陸xピンチx救援（後書き）

経った数日の冒険は始まった
最後の女性は一体何者なんだ……

島に着いてから体がだるい

風邪などではなく結界の影響

ラカンの敵意が小さいせいで結界の出力が低いのかそれとも本当に
効き目が低いのかは不明

魔王の島

観光できない観光名所。望遠魔法等で遠くから見るのが常
アルビレオの出た第？章から二百年近い時。ファーガスが島に住み
着いてからなら八百年が経つ。魔獣に対し常に飢えを与える島の性
質と魔法の素敵パワーにより独自の生態系を獲得した模様

雷を操る赤マントの大型虎魔獣

新種の魔獣、その名もヴァジュラ

自身の周囲に限り雷撃を操る事が出来る

ちなみに雷はマントから発生するらしい

巨体に似合わず俊敏、流石猫科といったところか

背中に突起、青い炎を出し氷を操る赤眼の青い竜

新種の竜、その名もカリギュラ。

背中にある二つの突起Ⅱブースターから青い炎を噴射し飛行する。

翼の代わり

両腕に刃が仕込まれており任意で展開する

自身の周囲に冷気を展開できる、青い炎は氷属性。生みだした冷気を槍として使用する、高度な知能を併せ持つ。

「星の鋒光」により頭部結合崩壊、ダウン後活性化。みたいな状態

ジャック・ラカン

本章の主人公？ ヘラス帝国出身の長寿な亜人族の青年

剣闘奴隷だったが自らの力で解放奴隷となった後に流れの傭兵剣士になった。

魔王の島には船で来たが途中で嵐（結界）にあい転覆、その後気合で泳ぎ荒波を越えて上陸した

窮地の所を謎の女性（笑）に助けられた

戦いX決着X散歩（前書き）

この人のデフォルトテンションがわからない

戦いX決着X散歩

俺の名はジャック・ラカン。流れの傭兵剣士だ。

晴れて自由を勝ち取った事で旅へと出た俺は好奇心から魔王の島へと乗り込んだ。

だが嵐の船旅と気合の泳ぎの末に上陸した島は何もかもが想像以上の常識外れ、化物の巣だった。

そして現れた青い竜、コイツには流石の俺も死を覚悟した。

だが、そんな時光と共に一人の女性が舞い降りた。

まさに俺にとっての救いの女神様だ。

そして今、怒り心頭の竜と彼女による戦いが幕を開けるところだぜッ！

800

「下がってて、すぐ終わらせるから」

大して年の差なんてなさそうなのに彼女は悠然と一步前に踏み出した。

それに対して俺の足は自然と一步下がる。

「……情けねえ」

まさか誰かに守られる日が来るなんて思いもしなかった……。

俺の事なんて気にも留めてねえみたいに彼女は、
「シリリス・シリウス・セイリオス 契約に従い 我に平伏せ 赤
き棘は汝の愛——」

詠唱を開始した。

「ルオオオオオッ」

再び声を上げた竜はその両腕を地につけた。
眼前、その口元に冷気が急速に収束して巨大な氷球を作りだした。
彼女はそれを見ながらも変わらず詠唱を続け自然に構えている。

「おいっ」

咄嗟に声をかけるがそんな事お構いなしで彼女は右手の指をくいっ、
と軽く動かした始めた。

奴の口から氷球となったブレスが発射される。
その瞬間、奴の首がいきなり向きを変え氷球は俺達から大きく逸れ
て飛んで行った。

「凄ええ……」

何をしたのかわからねえがたった片手、指を動かしただけで直に触
れてるわけでもないのに奴の攻撃を防いで見せたその力。俺には到
底できそうにない。

そんな事を思ってるうちに詠唱が終わる。

「————闇夜に咲き誇れ紅き薔薇よ　その愛を果たせ『罪の赤枝』」

彼女の手から赤い粉が撒かれた。

それが奴の体に触れた瞬間赤い粉は杭の様な棘を四方八方に生やし突き刺さった。

「ガアアアアア———ッ」

叫びと共に爪や両腕から生やした刃で体のそれを切り飛ばすが切っても切ってもそれは刺さり残った先端部から再び生え終わりを見せない。

そして再び両腕を着いたかと思うと背中突起から自身を包むように青い炎を放出し赤い棘を一掃した。

「ウウウ……ウオオオオオッ」

唸り声と共にバチバチとその右手に雷を集めながら竜は飛翔し周囲に残る赤い粉を吹き飛ばすかのように一度回転する。と、同時に冷たい冷気の渦が放たれ周囲の木々を凍らせながら薙ぎ崩した。

「後ろから出ないでっ！」

鋭い声で咄嗟に彼女の背へと隠れる様に身を滑らす。

情けねえ、俺はこんな……。

後ろから見る奴はその手の雷を突き出すようにこちらへ飛翔し迫る。接触、その寸前でまたしても彼女が手を動かしたのがわかる。

同時に奴の手が向きを変え体が左に流れ俺達から逸れた。

爆発した様な轟音。しかし彼女のおかげか着弾時の余波は全くない。改めてこの人は俺なんかより凄え人なんだと思い知らされる。

そんな事を思っているとじゃきんと、音を立て左腕から刃を展開した竜が今までにない速度でそれを振るってくる。

ダメだ、死ぬ。さっきまでならそう思ってただろう。

だが俺には不思議と自信があった。

目の前の彼女が慌てずそこにいるのがそう思わせたのかもしれない。

大丈夫、平気だと。

その期待に応える、という訳ではないんだろうが彼女はいつのまにか両手で持っていた剣を構え、

「奥義・二刀連撃斬魔斬鉄竜破斬」

言葉と共にただ振るった。

バァン。

弾けるような音と共に奴の出した左腕から胴体にかけて外皮は碎け落ちその刃は半ばで断たれ地に転がっていた。

それを見届けたかと思えば奴は7その体を地へと横たえた。どうやらこんだけのダメーじでも息はあるようだが……。

「は、はは……凄え……」

啞然とした乾いた笑いしか浮かばなかった。
だが俺はこの事を絶対に忘れないだろうと思う、それほどの衝撃が俺にはあった。

「大丈夫だった？」

振り返った彼女は初めにそんな心配の言葉をかけてきた。
さっきまで持ってた剣は出したとき同様に気づけば持ってなかった。

「ああ、あんたのおかげで俺は無事だ。すまねえ、助かった」

素直にそう思った。命の恩人だ。

「いいよいいよ、それであなたはなんでこの島にいるのかな？」

何事も無かったかのように彼女は話しかけてきた。

「その……俺は、ここにファーガス・フェイタラストがいますと思っ
て……」

「彼の賞金目当て？」

彼女は笑顔のままそう言った。

「いや、違う。そう言うんじゃないってただファーガスって奴を見て
みたかったんだ」

「は？何それ、そんなことの為にこんな事してたの？」

彼女は今までとは違う呆れたような表情を見せる。
俺なりに本気なんだが変な事言ったかね？

「ああ。んで、もしできるなら話を聞きたかったんだ」

「話？」

「おう。これまでであった戦いの話とかあんまり人が知らないような話かな」

「なんで？」

「俺はもつと強くなりてえんだ。今みたいに守られてるだけなんてのは我慢できねえ、性に合わねえしよ。どうせなら俺も一緒に戦いてえ。それに強ええ奴と戦うのはワクワクして面白いだろ。んでフアーガスみたいな長く生きてる奴なら相当強ええだろうしいろいろ知ってんだろ、みたいなの……」

「ふーん。面白い事言うね」

まあ女のこの人には拳で語り合ったりなんて事はわからないかもしれないがな……。

「そうか？まあそうかもな……ところでアンタは何でここにいるんだ？賞金か？それとも修行かなんかか？」

こんだけ強けりゃやっぱ武者修行の旅とかそんなのなのかね？もしくは倒しに来た、とか。

「散歩」

「へ？」

「だから、散歩」

「ちよっと出歩いてぶらぶらする？」

「そう、散歩」

いろんな意味で凄え人だ……。

「じゃあここによく来るのか？」

「んーん。来るっていうか……」

「そう、か……」

じゃあフアーガスがいるかどうかは知らな……、

「住んでるから「来る」って言うのは違うかな？」

「え？」

「ここに住んでるの」

「な、え？」

「フアーガスに会いたいんでしょ？ いいよ、案内してあげる」

「え、ちょ……」

「ほら、早く行くよ？」

「は、ああ……わかつ、た……？」

おいおい、ちょっと待てよ。どういう事だ？

住んでる？この島に？この人が？

案内する？フアーガスの所に？この人が？

この人が？

この人が！？

いったい全体どうなってんだこの島は……。

ラカンの冒険はもう少し続く……――――

戦いX決着X散歩（後書き）

この女性は何者なんだ……

『罪の赤枝』

赤い粉を触媒として女性が使用した魔法

詠唱は「契約に従い 我に平伏せ 赤き棘は汝の愛 その狂愛と高潔なる忠誠をもって今再び死骸の森を晒せ 闇夜に咲き誇れ紅き薔薇よ その愛を果たせ」

作中では描写上一部カットされているが詠唱はちゃんとしている

赤い粉が対象に触れると相手の魔力などのエネルギーを糧に肥大化、四方八方に棘、杭を形成し突き刺さり根を張る。払われても一部でも残っていればそこから再び棘、枝が伸び肥大化する。

量と大きさに比例してエネルギー吸収量が増えるため放置しておく

と骨の髄まで吸い尽くされることになる。
エネルギー減少に加え激痛が走るという趣味の悪い魔法。まるで島に展開しされている牢獄結界の様である。

「果たせ」は成し遂げる方と終わらせる方、両方の意味が込められている

奥義・二刀連撃斬魔斬鉄竜破斬

女性が使った剣技。奥義らしくその威力は青竜を一撃で重傷に追い込む程。

旧世界のとある剣術にある斬魔剣、斬鉄閃、竜破斬の三つを掛け合わせた複合剣技

ちなみにラカンが剣と表現したが刀

青竜

前回に続いて出た皆大好きカリギュラさん。もどき

本来は使用できるのは氷のみだがその高い能力から冷氣により発生した氷の粒を使用することで雷も発生、使用できるバグ具合。

左腕から胴にかけて重傷。けど生きてる

どれだけタフなのか……

ジャック・ラカン

強くなる事でより強い人と戦う事を望んでいるらしいが……

「楽しい」と言っている辺り戦闘狂の気があるのかもしれない

謎の女性

刀剣による格闘戦、呪文による射撃戦どちらもできるらしい

始動キーは「シーリス・シリウス・セイリオス」

島に住んでるらしくファーストガスを知っているらしい

旧世界の剣術をも使用できる。何者なんだ……

笑いX名前X登場（前書き）

これはラカンのせいか……

この章に限り始まりの部分がほぼ同じ

笑いX名前X登場

よお、俺の名前はジャック・ラカン。流れの傭兵剣士さ。
解放奴隷になった俺は旅に出ることにした。

そして向かったのは彼の名高き魔王の島。

荒れる海に不思議な森と数々の魔獣。

彷徨う俺の前に現れたのは圧倒的な力を持った青い竜。

そこで出会った一人の女性。

俺の窮地に颯爽と現れて青い竜を瞬殺したその姿はまさに戦女神。

そんな彼女はこの島に住んでいて俺をファergus・フェイタラスタの所まで案内してくれるらしい。

はっきり言おう、この島はおかしい。常識が無い魔境だ。

彼女は言った。

「散歩」「ここに住んでる」

ここに住んでて散歩だってよ、散歩。信じられるか？この島で散歩だぞ？

気軽にお散歩してそのついでに竜をぶっ飛ばして人助けしてだとき……ねえーよ。

この島に住んでる奴はそんな軽い気持ちでこの森に出て来れるのか……。

いや、待てよ。この島に住んではそういう風になれるって事か？
こりやおもしろえかもしれねえな……。

「へへ……」

「どうしたの？」

おっと、笑いがこみ上げるのを抑えきれなかった。
これはまずい、変な奴だと思われちまう。

「いや、なんでもねえ。大丈夫だ」

「そう、変なの」

既に時遅しっていうのはこう言う事なのかね……？

いやまだ挽回できるはずだ。

なぜなら俺はジャック・ラカン。

奴隷と言う底辺から自由を掴みとった男、これぐらいじゃへこたれないぜつ。

「むふふ」

「本当に大丈夫？変な物とか食べたりしてない？」

「んぐ……大丈夫だ。ちょっとファーガスってのがどんなのか気になりつつも楽しみでワクワクしてる。そんな少年のような心を忘れない男だぜ？俺は」

「……そう？ならいいけど。ファーガスはね、根暗？つていより鉄面皮？でね——」

く、何故か裏目に出ているような気がしてならないぜ……。

大人しくしておくか。

この時既に、

「突然笑ったかと思えば変な事言ったり静かになったり変なの、けど面白いからいいや」

などと手遅れの事を彼女に思われている事を本人は知らない。

「あー……それで、あんた名前は？俺はジャック・ラカン、傭兵剣士をやってる」

「うん？私はクレマンズだよさっき言った通りここに住んでるの。私の事、っていうか私がこの島にいる事とかは他の人に秘密にしておいてくれると嬉しいかな？」

「秘密に？まあそりゃ構わないが……？」

「少し事情があってね。それにこの島と私が関係してるって言うといろいろ面倒そうじゃない？」

「ああ、それもそうか。わかったぜ。秘密にしとく」
「うん。ありがとう」

まあ確かに何十、何百年の間出て来た奴どころか入った奴もいないって言われてるようなところに住んでるだなんて言われてもな……。

「たまには歩くのもいいね」

唐突に彼女はのんびりとそんな事を言い出した

「歩くのも、っていつもはどうしてるんだ？」

「飛んでるに決まってるじゃない」

そんな不思議そうな顔されても普通この島で空なんて飛んだら魔獣の餌食に……いや、この人、クレマンズならそれもないのか？

「なら飛んで帰ればいいんじゃないか？」

「あなた飛べるの？迷子にならない？死なないで来れる？」

「ぐ、それを言われると厳しいもんがあるぜ」

この島の現状を知った今何も言い返せないだろ……。

「案内するって言ったんだからちゃんと案内するよ」

そう言って彼女は気楽に真っ直ぐ俺を導いて歩く。

そう、真っ直ぐだ。どう言う訳かこの迷路みたいな森を彼女は真っ直ぐ進んでく。まるで森が通そうとしてるみたいに……。

俺の苦労はなんだったんだか……。本当にわけがわからん……。

「さあ、見えたよ。あれが通称【魔王の城】だよ」

そう言っただけ彼女が指差した先には確かに城があった。

魔王の城なんて言うもんだからもっとおどろおどろしいものかと思っただけなんて事は無い普通の城だ。

こんな島にあっても外観は綺麗なもんだ。

「へえ、いいな。俺もこんなところに一度は住みたいもんだぜ」

「別にいいんじゃない？部屋は余ってるし。入っちゃいけないところもあるけど。って言いかさ、この島に来てからなんともないの？」

「あん？どういう事だ？」

「何日いるのか知らないけど、日に日に力が無くなってくとか、怪我の治りが遅いとかさ……。ないの？」

「まあ体がだるいのはあるがそりゃこんなヤバイ島にいたら誰でもなるだろ？まあ確かに傷の治りが遅いのはあるがその辺は気合いで何とかなるしな」

まあ最初に風邪引いたみたいだからその影響もあるんだろうけどな。

「どうにもならないと思うんだけど……。まあいいやきつとそういう体質とか能力とかって事で納得しておこう……」

「ん？何かあるのか？」

「まあ君は気にしなくてもいいよ。この島の防衛も十全じゃないって事なんだろうね」

「はあ？まあいいならいいけどよ……」

これだけ到達困難な状態で十全じゃないってどういう事なんだか……。

俺なんかしたか？

「たっだいまー。ファーガスー？お客さんだよー」

開けっぱなしの門を過ぎ正面の扉を開いてエントランスへ声を響かせつつ彼女は中に入って行った。

一応客？の俺はここで待ってるべきか？

「来ないのー？」

と思ったらどうやら入ってもいいらしい。

「おう、お邪魔するぜ」

しかし中も綺麗なもんだ。

「何人ぐらいここに住んでんだ？」

「今は私とファーガスだけだね」

「今は？」

ってことはやっぱり魔法が掛かってるのか。まあ当然だよな……。

「うん、たまーにエヴァが来るくらいかな？」

「エヴァ？」

「そう、聞いたことない？ ダークエヴァンジェル【闇の福音】って」

「なっ、奴がファーガスの弟子って噂は聞いた事あるが本当なのか？！」

関係を疑う声もあるが本当だったのか……。っていうか本当にこの

人なにもんだ？

「そうだよー？結構いい子なんだから、かわいいし」

「そう、なのか……」

「うんうん。最近来ないけどどうしてるんだろうね、知ってる？」

「いや、知らねえけどよ……」

そんな仲良さそうに言われても困るぜ……。

ていうか世間のイメージとは随分違う感じるのは気のせいかな？

なんて会話をしながら俺たちが正面の階段をのぼりはじめた時だった。

「で、そいつは誰だ？」

そいつは突然現れた。

今から上がろうとしていた階段の上。

目の前の彼女のような黒衣に金の髪。

竜とはまた違ったヤバさを感じる男。

こいつが伝説のファーガス・フェイタラストか？

ヤベえ……緊張してきた……。

どうすりゃいいんだ。とりあえずここは挨拶か？

遂に魔王の城へと足を踏み入れたジャック・ラカン。

彼の冒険は遂に終わりを迎えるのか……――――――

笑いX名前X登場（後書き）

バラけた前髪がふと一本視界に入り何となくよく見たら枝毛でした、どうしましょう。作者です

前書きについては作者の少しでも目立ちたくない具合をわかってくれればわかるでしょう。評価されないのが救いですね。

十全じゃないらしい島の防衛

ラカンのだるさや怪我の治りの遅さと関係があるらしい

ジャック・ラカン

亜人の青年。若干変な奴と思われている。まだちゃんと飛べない
治癒速度を気合でなんとかしたらしい

緊張の度合いは最高潮

謎の女性改めクレマンヌ

フアーガスと闇の福音は共通の知り合いらしい

面白い人見つけたと思ってる

フアーガス・フェイタラスト

魔島、魔城の主にして生きる伝説

対面X休息X食事

おっす、俺の名はジャック・ラカン。解放奴隷として自由を謳歌する傭兵だ。

異常で溢れた魔王の島。

魔獣相手に本気で生死を掛けたサバイバル。

そこで出会った命の恩人クレマンズ。

彼女に連れられ魔王の城へ着いた俺。

そして遂に俺はファーガス・フェイタラストと対面した。
だがこの緊張感ただじゃ終わらない感じがするぜ……。

俺の緊張なんて露知らず目の前のクレマンズは奴に話しかけた。

「この人はジャック・ラカン。さっき知ったんだけど結界が全然効かないみたい」

しかも気軽に世間話するようなフランクさで……。

「は？ どういう意味だ？」

ファーガス、と思われしき男は一瞬呆けたみたいだが直ぐに俺に鋭い視線を向けて来た。

話に着いて行けないが俺が何かしたらしい、いや本当に何の話だ？
てか、やけに砕けた話し方だ。仲がいいのか？

「はあ、まあいい。後で考える。それでジャック・ラカン、何の話が聞きたいんだ？」

「あ、その……って言うか本当にファーガス・フェイタラスト？伝説の賞金首？」

いや、その前に何で俺があんたに話を聞きたいって事を知ってるんだ、とか聞きたい事はあるんだがまずは本人か確認しないといけないだろ。

まあこの島には自分とファーガスしかいないってさっき彼女が言ったんだからファーガス本人であることは間違いないんだろうけど……ああ、もう何がヤバいかって当然島もヤバいんだが俺の状況もヤバい。

俺は今どうなってやがる……。

「伝説かどうかは知らんが確かに賞金首でファーガス・フェイタラストと名乗っている」

目の前に伝説がいる。

俺の事を何とも思わないのかそれともいつでも対処できるという事なのか構えるわけでもなくただ自然とそこにいる。

これが魔王、魔人と言われる男か……。

「会えて光栄だ。あんたの話ならなんでもいいんだ。やっぱ戦いの

事が聞きたいがあんたが生きてきた中で興味を惹かれ事とか面白かった事何でもっ。ダメか？」

そうだ、これが言いたかった。

もし出来れば弟子にしてもraitaiがそれはまだ早い、俺は駆け引きもできる男ジャック・ラカンだぜ。

「ふふ……はははははは————……。そんな事を言うのはお前が最初で最後だろうな。面白いな、本当に……喜べ客人として入城を許可する。疲れているだろう？湯を用意するから待て。クレマンズ、適当な部屋に連れて行ってやれ」

それだけ言うとファーガスは歩いてさっさと消えてしまった。

「はいはい。一名様ごあんなーい。さあ行くよ。良かったね、気に入られたよ」

「お、おう……世話になる」

彼女の言葉を信じるならどうやら俺は気に入られたみたいだ。笑われた時はどうしようかと思ったが大丈夫だったらしい。

「ふう、あんな緊張は初めてだぜ……」

「ふふ、そうなの？全然そんな風に見えなかった」

お、意外と好印象？この調子でファーガス……さん？の好感度も上昇させてみせるぜッ。

そんで、

「あとは……」

「うん？」

「いや、できれば弟子になりてーな、ってな」

「弟子？誰の？私？」

「あんたでもいいができればファーガスの弟子になりてえ」

「ふーん……聞いておいてあげようか？」

「本当かつ？いや、でもやっぱ自分で言った方が……」

魅力的な話だがこういうのはやっぱ自分でやんのが礼儀ってもんだろ？

「ふふふ、いい心構えだね。応援はしてあげるよ」

「おう、ありがとよ」

「さて、ここがあなたの部屋ね。取りあえず勝手に出歩かない事、部屋の物はどうしてくれたって構わないから好きにして。それで何かあったらベルを鳴らしてね。わかったかな？」

「おう、大丈夫だ。ありがとよ」

「うん。じゃあ私は行くからまたねー」

案内してくれた彼女は笑顔のまま手を振りながら元来た道に戻って行った。

んで、それを見届けた後部屋に入ったわけだが、

「いい部屋だな……」

金ぴかで豪華、って感じじゃなくてむしろ洗練されて落ち着いた感じがする部屋だ。

俺みたいな奴隷上りがこんな部屋に泊まれるだなんてな、昔じゃ考えもつかなかったぜ……。

ここの待遇がいいってだけかもしれないけどな。

「しかしなんだ……俺、疲れてんだな……」

落ち着いた途端凄い勢いでこれまでにない疲れと睡魔が襲って来たのを感じる。

とりあえず、横に……。

ジャック・ラカンがその疲労から瞬く間に眠りに落ちた頃。
城内、厨房にて。

「あの人『ファーガス』の弟子になりたいんだって」

「ファーガスの弟子？」

湯船に湯が溜まるのを待つ間二人は夕食を作っていた。

「そう、してあげる？」

くるとトカゲやら何やらが詰まった鍋の中身を混ぜながらクレマンスは問う。

「まあ悪いようにするつもりはないが……弟子か。ふむ、お前はど
う思っている」

「んー、悪い人じゃないと思うよ。面白いし。今だって寝てるし、

緊張感がないって言うか、私達が敵だったり、とか思ったりしないのかな？」

隣で野菜や野草を刻む男を見つつスープの味見をする。

「大物だな。それに確かに面白い、だが話を聞いてからだろう」

「そう。あ、塩とって」

「ああ、そうだよ。ほら」

「薄い？」

味の確認をとりつつ調理は着々と進む。

「いいんじゃないか？時間もいい頃だろう。そろそろお前は奴を起こして湯に入れてこい」

「はいはい。後は任せた」

「任された」

鍋の火を止めた彼女は楽しそうに厨房から出て行った。

意気揚々と向かったクレマン스가ジャック・ラカンを起こすのに苦労するのはまた別の話。

「うまいっ」

唐突にこんな事言っても驚かれるだけかもしれないが何がうまいかってこの飯だ。

いろんな話を聞くのも大事だが今はこっちが先決だ。

言っちゃ悪いがこんな辺鄙な場所でこんな美味しい飯が食えるとは思ってなかった。

ここ数日の生活を考えれば尚更だ。

「そうか、好きなだけ食え」

苦笑気味に向かい側に座るファーガスが言う。

間違いない、ファーガスはいい奴だ。そうに決まってるぜ。

ファーガスに近い方で右側の席に座るクレマンズも苦笑してるがそんなの関係ねえ。

トカゲや魔獣の肉だとかって聞いた時は冷や汗もんだったがこれはいける。

好きなだけ滞在していいって言うし俺ここに住んじやってもいいんじゃない？

とか呑気に考えていた時だ。

「そうだ、弟子になりたいそうだな」

何気なく放ったファーガスの一言。

瞬間、俺の周りだけ空気が死んだ。いや、錯覚なんだが俺の動きが止まったのは間違いない。

周囲の空気が重く冷え込んだみてえに温かみが無くなって灯ってるランプも目の前で湯気を上げてる料理もまるで色をなくしたみてえだ。

クレマンズの方を見ればそんなの不见かのようにニコニコ笑ってやがる。

おいおい、こりゃいきなりだが腹くるしかないかね？

遂にジャック・ラカンの冒険は終わりへとなるのか、次回へ続く…

…――――

対面X休息X食事（後書き）

ジャック・ラカン

真面目な面とお気楽な面が両立？している奴。

自覚が無いだけで疲れは相当溜まっていたいたらしい。
思いきって弟子になろうとか言いだした。

やはり島内に入った人の状態としてはおかしいらしい。

クレマンس

フアーガスとは気さくに話せる関係らしい。

ちょっと弟子とかとってみたいと思った。

料理が出来る。

フアーガス・フェイタラスタ

とりあえず伝説。

料理作ったりと意外と普通っぽい、でも伝説

弟子を取ってもいいと思ったりしてる伝説

なんか大笑いした、でも伝説

伝説っぽい威圧を放ったらしい。腐っても伝説

過去X思いX越える壁（前書き）

ルビが悪い

過去X思いX越える壁

よう、俺の名はジャック・ラカン。傭兵剣士だ。

魔王の島に来て数日、九死に一生を経たぜ。

クレマンンスに出会って無事城まで来れたのは幸運だった。

部屋に風呂、そして食事も最高だし文句なし。

しかし遂に本題を語る時が来ちゃった。

俺、大丈夫かな？

「弟子になりたいそうだな」

ああ、そうだちゃんと言うしかねえよな。

俺の思いを……。

「どうした、違うのか？」

「いや、そうだ。俺をあんたの弟子にしてほしい」

「弟子になって何を知りたい？何を得たい？」

「力が欲しい」

そうだ俺は力が欲しい。

「力、だと？」

途端に奴の目が鋭くなる、だがそんなんじゃ負けねえ。負けられねえんだ。

「そうだ」

「力にも種類がある。お前の欲しい力とは何だ」

「誰にも負けねえ力、武力だ」

「なら無理だ」

「なんで……っ」

そこで、立とうとして気がついた。

体が、動かせえ……。

「現にお前は今、私を目の前に動けやしない。そんなお前が私に教えを請うたところでお前は私に勝てん。わかるか？お前の言う『誰にも負けねえ力』とやらは私の前に意味を成さないからだ」

「俺は、もう……誰にも縛られたくねえ、自由に、その為に強くなりてえんだ。そのためには力が……」

「ほう。縛られず自由に、か。そこだけなら共感を覚えなくもない。訳を言ってみろ」

そこでやっと体が動かせることに安堵した。

もう誓約で強制されるみたいに縛られるのは受けたくねえ……。

「俺は……少し前まで剣闘奴隷だったんだ。ガキだった時は舐められたし馬鹿にもされた。媚び諂うのは屈辱だった、負けるのが嫌だった、死にたくなかった。全部失って底辺に落ちたのは俺が馬鹿で

弱いのがいけなかった……」

そうだ、無知でも無力でもいけねえんだ。
もうあんな思いをしないために俺は……。

「剣闘士として頂点に立てば自由になれるって知った。だから俺はそんな自分と決別するために血反吐を吐きながら強くなった。んで自由になった。でも、不安なんだよっ、いつかまた俺はあの頃に戻っちまうんじゃないかって。そりゃ強い奴と戦うのが楽しくないって言ったら嘘かもしれないねえ。だけどまだ楽しいより怖ええ方が強ええんだ。負けたらまた……ってな。だから俺は負ける怖さなんかには負けない戦いを楽しめるだけの強さを、理不尽な死に縛られないだけの強さが、自由に好き勝手やって死ねるだけの強さが欲しいんだよっ、囚われないだけの強さがっ!!」

その為に俺は誰にも負けない強くならなくちゃならねえ……。

「……ダメか？」

「私みたいな存在でない限り誰もがいつかは死ぬ」

「……そうだな」

「その時、満足できるかできないか。それは問題だろう」

「ああ」

「死のない私でさえ問題だと思っている」

「ん？ ああ……そうなのか」

どういうこった？ 話が、話の流れが変わった、のか？

「ついでに目指すなら最強などと言うまやかしではなく不敗を目指

せ」

「お、おう」

それで結局俺の話は……？

「素直じゃないあ。ごちそうさま」

「はあ……お前は空気を読め」

悪い、俺もそう思うぞ。

「要するに弟子にしてあげるって事でしょ？」

「え？」

本当かよ？

「少し違う」

「え、違うの？少し？」

「ああ、違う。ジャック・ラカン」

「あ、ああ」

「この城にいる限り食事や何やらの面倒は見てやる。許可した場所なら好きに城内を歩いてもいいし森の中で修行するのも野垂れ死ぬのも勝手だ。そして好きな時に私にかかって来るといい。相手をしてやる。加減するかどうかはわからんがな。だが、お前が私をどう思おうが私はお前を弟子とは認めん。私はお前の超えるべき壁、敵であり続ける」

「そりゃ、どういう……」

「お前が私を、伝説とまで言われているらしい私を超えた時、お前は私以上に自由に振る舞い死ぬ事が出来る存在だと言う事だ。貴様の悲願とも言えるその思いを叶えたいなら倒し超えて見せろ、私を」同時に放たれた圧倒的でいて挑発するような気迫。

その存在感は本気なんてのからは程遠いんだろが俺には十分すぎる威力だぜ。

だけどな……、

「へへ……いつでも良いって言ったよなっ。師匠っ」

俺はやるぜっ！

不意を打ったつもりだが、

「だからお前は」

拳に手が添えられいなされる。

「弟子ではないと」

そのまま投げられ、

「言っただろ」

壁にっ——、

「ぐるぺんっ……」

流石師匠だぜ……がくっ。

「師匠ではない。食事ぐらい静かにさせろ……」

「二人が喋ってる間にもう食べちゃったよっ」

「知るか。馬鹿の残したのでも食べていろ」

「んー、しょうがない。ねえ、その後ケーキ食べていい?」

「はぁ……起きなければその馬鹿の分も食べていいぞ」

「本当? やったー」

んぐ、早く起きなければ俺の飯が、ケーキも食いたい……。

く、くそう……いつか超えてやるぜ……へへ……。

だがやっぱ気になるのはこの二人って一体どういう関係なんだ?

「ん? 私とフアーガス?」

心を読んだみたいにクレマン스가俺の飯を食いながら応える
って、俺の飯っ。

「あ、まだそれ食べてないぞ。じゃなくてなんで言いたい事わかるんだ?」

「なんとなく状況から察した、みたいな? 早く食べてみんなでケーキだよ」

「あー、まあいいや、で?」

「驚くよ?」

「師匠の子供とかっ?!」

「だから師匠ではないと……こいつが私の子? はっ、それはない」

「うわっ、鼻で笑わなくなっただっていいじゃないっ。私だってクレスが父親とかやだよっ」

思わず立ち上がるほど嫌なのかよっ!?

というか今クレスってそう言ったよな? 状況的に師匠がクレスってことだよな?

「クレス?」

「あー……いや事情があってね、ちゃんと説明するよ。クレスが」

「お前の責任だろう。お前がしろ」

「ぐぬぬ、わかったよ……まずクレスって言うのはね……」

こうして事の説明が始まった訳だが、

「ってことは眉唾情報の黒髪っていうのは……」

「そうそう、んで私はクレスが……」

「ほー、なるほど。お、これ旨い」

それは衝撃だがこのパイ包み旨いな。

「それは私が作った」

「え、師匠が? やっぱ長く生きてるとこう言う事も……」

こう言う事もできるんだからやっぱ師匠も家事はできるってことだろうな。

「だから師匠ではないと……」

「聞してる?」

「おう、聞してるぜ。要は師匠の魔法で、ってことは……」

「そう、この身体は作りものなんだよ。ちなみにクレスとダークエヴァン【闇の福音】は本当に師弟関係でね。彼女が……」

「そりゃ凄えな。でも人としてちゃんと機能してるんだろ、なら問題ないな」

しかしあの【闇の福音】ダークエヴァンジェルが姉弟子なんて想像できねえな……。

「確かに機能してるけど何が問題無いわけ？」

「え、いやまあそりゃいい事じゃねーか」

「く、まさかジャック・ラカン貴様……くく……」

「えー何、クレスわかったの？ 教えてよ」

「ちょ、師匠、別に俺はそんな……」

出会って数時間、既にこのように会話がなされているのはきつとジャックの性格からくるものだろう。

そして、これから彼の自ら望んで行う過酷な日常が幕を開けるのである。

こうしてジャック・ラカンの短い冒険は無事？ 終わりを迎えたのであった――――

過去X思いX越える壁（後書き）

毎度の如く言葉尻が切れている中途の文は脳内補完してください。

次から新章。

ついにあれが始まる。かもしれない。

誰にも負けねえ力

嘗てエヴァンジェリンが欲し師と論じた事。

死ぬ時満足できるかどうかは問題。

「最後が良ければ全部ハッピー」嘗てユン君はそう言った。

自由にして言いゝ越えるべき壁としてゝ

某魔界の闘神とその息子の様な状態

ファーガスはクレス

これらの事を含めこの章内においては説明されないものが多い。

闇の福音

伝説の弟子は伝説の吸血鬼

ジャック・ラカン

奴隷になったのには相応の理由が当然あった。

屈辱と後悔の過去であり、過去が戻らないものだ知っている。
家事関係のスキルは奴隷時代の賜物。

自称弟子になった。

欲したのは「自由」

クレマン스에思う事があるらしい。

クレマン스

「空気読めるよっ」

食いしん坊キャラになりつつある。だがスタイルはいい。

フアーガス・フェイタラスタ

またの名をクレス。黒髪碧眼という眉唾とされる情報が出ているが
本当だった。

自称弟子が出来た。

クレマン스に対するラカンの思いに何か気付いたらしい。

戦争（前書き）

どうでもいいですが章タイトルは「駆けて」と「懸けて」をかけて
ます。

戦争

昨今大小様々な学び舎が並び学園都市とまで言われる麻帆良。その中でも今だ多くの木々を残す地域にその家はあった。

「悪いなさよ、当分『向こう』にいることになりそうだ」

家の主であるクレスがそう言った方向には誰もいない。

否、足がなく半透明でふよふよと浮く幽霊が一人。

「あんまり心配はしてませんけど気を付けてださいね」

「お前こそあまりドジをするなよ」

「最近はどうでもないですっ」

「ふ、そうか。……では、行ってくるよ」

そう言ってクレスは家を出るのであった。

魔法界において連合と帝国の争いは辺境においての極小規模だがほぼ毎日起こる小競り合い程度の事がこの数百年間行われてきた。それが今変ってきている。

艦船や鬼神兵と言った大規模戦力を投入し帝国が進行を開始したのである。

しかし気にしているのはそれではなく、

「面倒を起こしてなければいいのだが……」

身内の事だ。

この地の住処の事を知らないエヴァンジェリンから連絡がないのは当然として、討たれたと言う話もないと言う事はいまだ健在だと言う事。

便りがないのは無事な証拠、とはこの事か。

問題はクレマンズである。

数年、場合によっては数十年に一度しか会いに来ない彼女は別段有名な訳でもないので向こうから会いに来るかこちらから接触しなければ状態の把握などできないのである。

「頼むから面倒事には関わってくれるなよ……」

同一とは思えない奔放さをもつ彼女が気になってしょうがないのである。

そんな思いを抱きつつクレスは人々に交じりオスティアへと転移するのであった。

「おや、クレスではないですか。久しぶりですね」

自らの城に入っすぐフードローブを纏った男が本を抱えながら笑顔と共に声をかけてきた。

「なぜお前がここにいるアルビレオ・イマ。だいたい今はファーガスだ」

「細かい事はいいではないですか。ここは快適ですし、どうせほとんど誰もいないのですからいいでしょう？」

「はあ……まあいい。クレマンズが何処にいるか知らないか？」

クレスは歩きながら目下の問題をアルビレオへと聞いてみる。

「彼女でしたら数日前に帝国へ行くと言ってそれっきりですね」

「そうか、場所がわかればまだいいさ。……それで戦況の方はどうなんだ」

「そうですね……。些か進軍速度が遅い気がしますますが概ね問題無く帝国はその圧倒的な軍事力で領土を広げています」

「速度が遅い？」

「ええ、そのせいで連合の迎撃、防衛準備が整った頃に戦闘となる事が多いようで。そのせいで戦場の被害はより激化しているようです」

談話室に入るなり抱えていた本をテーブルに置きながらアルビレオは言う。

「ふむ、何か考えがあるのだろうか……」

「でしょうね、でなければ今になって攻め込んだりはしないでしょう。私ももう少ししたら連合の方へ行こうかと思っています」

「好きにしろ。私はお前のことなどどうでもいい」

「おや、釣れないですね。それで貴方は戦場へ？」

アルビレオはそう言うのと元から用意してあったのか紅茶をカップへと注ぎ口へ運ぶ。

「場合によってはそれもありうるだろうが私に構ってくるような奴はいないだろうさ。当分ここでのんびりしているよ」

「それはそれは、もし戦場であつたらお手柔らかにお願いしますよ。そもそも敵になってほしくないですが……」

何とも言えない笑みでそういつつアルビレオは次に本を手にとった。

「ふむ。それで？」

「はい？」

「エヴァはどうした、お前はあれを追いかけばかりだと思ったのだが……？」

「……少し誤解があるようですがとりあえずキティは静かな場所を探すと言ってどこか行きましたよ。旧世界にでも行ったのかもしれませんが。まあ欲を言えば着いて行きたかったですが」

手に取った本を戻し笑顔を消し無駄に真剣な表情を見せる。

「はあ、もういい私は部屋にいる。好きにしろ」

吐き捨てるような嘆息と共にクレスは自室へと向かって行った。

数週間後。

帝国領内某所。

つい先日遂に始まった戦争に置いて帝国はその力をいかななく発揮し勝利に沸いているせいか活気が失われるような事にはなっていないかった。

そんな夜でも賑やかな街中を一人の女性が歩いていた。

クレスがいろんな意味で心配しているクレマンスその人である。

「やあ、ジャック。こんな所でなにしてるのかな？」

クレマンスは数分前に偶然見つけてからなんとなく後を付けていた男へとなんとなく声を掛ける。

「へっ、さっきから誰がつけてるかと思えばクレマンスか。いやあ実はな、この俺にどうしても、っていう依頼があってそれを受けて来たところだ。っていうお前は何でここに？」

「まあ私は最近騒がしいから面白そうな事ないかなー、なんてね。」

それでジャックを見つけたからついね……で、その依頼ってどんなの？面白そう？」

楽しみで期待を膨らませる様にクレマン스는聞く。

「あん？あーまあなんでも最近帝国軍を負かしてるらしい連合の奴らが相手らしいからな。楽しめるはずさ」

「へー、私も行きたいなー、とか言ってみたり」

「お前が出て来たら俺が戦えねえだろが」

「まあまあ、私は最初見てるだけにするから、ね？」

「前もそう言ってるよなっ、本当に守る気あんのかよっ？」

「あるある。君の師匠の名前にかけてもいい」

「せめて自分の事にかけるよ……。まあいい、嘘だったら師匠に言いつけるからな」

「はいはい。大丈夫だって。信用ないのかな私」

「どうだろうなー。っとこれがそいつらの情報だ」

何処から取り出したのか紙に内容を書いて渡す。

「どれどれ？情報一、剣士、生真面目で色気に弱い。情報二、子供魔法使い、見た目に反し熟練の老獪。情報三、フードローブの魔法使い、存在が胡散臭い参謀役、重力系。情報四、赤毛の魔法使い、無敵……剣士の事ぐらいしか分からないじゃない、しかも最後の無敵って……」

「なっ、面白そうだろ！」

「面白いかもしれないけどなんか馬鹿っぽい……。それに三番目って……」

「まあいいじゃねえか。どうせ行くんだろ？」

「んーまあ暇だしねえ」

こうしてジャック・ラカンとクレマンズの二人による『赤き翼』の討伐が行われる事となった。

それとほぼ時を同じくする頃。

「ん『目』が……。やれやれ義理堅い私に感謝しろよアテナにアイナ」

面倒そうに言いつつ口には僅かな笑みを浮かべながらクレスは椅子から立つとどこかへと、本人でさえ分からず転移するのであった。

こうして全ての舞台は着実に整い始めるのであった――――

戦争（後書き）

？章、または最終章かもしれない。

ジャンルはあいとゆうきのおとぎばなしとか

麻帆良

戦時中は戦争に関しない緩衝地域的な扱いだったが戦後は学園都市として扱われ始めている。

『赤き翼』

連合の所有する戦力。

剣士一人に魔法使い三人のパーティー。

各地で帝国を破り盛り返す働きぶりらしい。

相坂さよ

おっちょこちょい、もといどじっ子属性は消えていないらしい。

留守を任されたお留守番幽霊。

アルビレオ・イマ

エヴァンジェリンが旧世界に行ってしまったため城で一人のんびりしていた。

連合側に行くらしい。

ジャック・ラカン

自称「無敗の傭兵剣士」

帝国軍の邪魔をする「赤き翼」の討伐依頼を受ける。

クレマンズ

クレスの半身にして自由人。

面白い事がないかと勝利に沸く帝国へ。

弟子っぽい男ジャック・ラカンと出会い「赤き翼」の討伐をするこ
ととなる。

クレス

魔人ファーガス・フェイタラスタその人。

さよに留守を頼み麻帆良を発ち魔法界へ。

何者かに呼ばれどこかへ転移した。

赤き翼（前書き）

はちじゅーわですって。

赤き翼

連合領 最前線から幾許かの森林台地。

そこに『赤き翼』その面々の姿があった。

「んっふっふっこいつが旧世界は日本の鍋料理って奴かあ。じゃ、早速肉を……」

赤毛の少年が肉を箸で器用に掴み鍋に入れた。

「あっ！ナギ、おまっ……何先に肉を入れてるんだよっ」

それを見た眼鏡の男性が赤毛の少年、ナギを咎めた。

「トカゲの肉でも旨いのかのう？」

それを横目で見つつ白髪の少年がそんな事を言い出す。

「そうだよお鍋は入れる順番があるんだからね。先に野菜だよ野菜。それとトカゲのお肉はもっとちゃんと煮込んだりした方がおいしい

んだよ」

その言葉に一人の女性が割って入る。

「そうだぞナギ。野菜を先に入れるんだ。この人が正しい」

「ほう、トカゲは煮込んだ方が良いのか。それは知らなんだ、お主よくそんな事知つとるの」

「まあサバイバル経験が結構あるからね。アルも野菜を食べなさい」

「おや、これはどうも。ふふ、しかし……詠春、知っていますよ。」

日本では貴方の様な者を『鍋將軍』と言い習わすそうですね」

『鍋將軍』のフレーズに一同衝撃が走る。

「ナベ・シヨーグン!？」

「つ、強そうじゃの……」

「私もそれは初めてだよ……」

「待て、それは鍋奉行じゃ……って、貴方はいったいつ」

ようやくのことで眼鏡の男、詠春が自分たちの面子ではない女性の存在を確認した。

「はっ、この姉ちゃん誰だよっ」

「そうじゃったっ」

「ふふふふふ」

驚く二人、そしてアルビレオは謎の笑みをこぼす。

「んー、わらひはくれふあんふって……」

女性は緊張感なく食材を一生懸命に頬張っている。

その姿に一同は一気にやる気を削がれたのか、

「……いや、食べてからでいい」

げんなりした様子で詠春が呟いた。

「ふおう？」

適当に返事を返しつつ女性は再び鍋へと箸を伸ばした。

「まあいいけどよ……おっと、姉ちゃんこの肉は俺のだけ？」

「んぐんぐ。いいじゃないちょっとくらい譲ってよ。君は野菜を食べなさい」

「そうだぞナギ野菜も食べろ」

「そうじゃな、野菜も食べねば強くはなれんぞ」

「ぐ、お師匠まで……」

「そうですよナギ。あまり我がまま言うとか鍋將軍の怒りに触れてしまいますよ」

「ちえっ、わかったよ。けど俺の分の肉も取っというて————ッ」

その瞬間ふてくされていたナギの目が鋭く光り身を引くように立ちあがる。

同時に詠春以外の三人もナギのように身を引きつつ立ちあがる。

立ち上がった瞬間空から降ってきた一振りの大剣が鍋の真横、コンロに直撃し突き刺さる。

何事かと啞然とする詠春を余所に衝撃で飛びあがった鍋の中身が散った。

その瞬間を見逃さず立ち上がった四人は的確に肉だけを箸で掴み口へ運ぶ。まさに一瞬の早業。

中身を撒き散らした鍋はそのままひっくり返し詠春の頭に軽い音を立てかぶさった。

「食事中失礼ッ！俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！いつちよやろうゼッ」

大声と共に崖の上に褐色の大男が剣を担ぎ現れた。

「何じゃ？あのバカは」

「帝国の、って訳じゃなさそうだな。姉ちゃんや詠しゅ……むお！？」

振り返ったナギが見たのは箸を片手に鍋を頭に被りながら体に出汁と具を浴びてフフフフと暗い笑みを浮かべながら振るえる詠春の姿だった。

「フ……食べ物で粗末にする者は……」

振るえと笑みを消し詠春が口を開き冷たい声が響く。

「どーしたー来ねーのかぁー。来ねーならこっちから……」

応答がないせいかジャック・ラカンは片手で剣を叩きながら煽り、

「いッ……」

行くぜ、その言葉は紡がれることなく、

「斬る」

一瞬で肉薄しラカンの持つ剣を両断する詠春の姿。

「おほ、こりゃ……」

驚きを露わにするラカンに対し詠春は振り向きざまにもう一太刀放つがそれは中ほどから断たれた剣を振るラカンにより逸らされ崖を切り崩した。

「お？ 詠春の攻撃凄いでるぜ」

その様子を見ながら未だに肉を頬張るナギが呟いた。

「あの大男、知っていますよ。全員、いやナギ以外は知ってるんじゃないんですか？ ちよっと前に……」

「南で話題になった傭兵剣士だね。剣闘世界じゃ特に有名人なんだよ」

「おお、わしも聞いたことあるぞ。何でも最強無敗だとか言われてるらしいの」

「へえ、最強か、おもしれえ……」

そんな話をしているうちに魔法具を使わた詠春が気絶し倒れた。

「フ……ホイ、一丁上がり」

ラカンがその動きを止めると同時にそこへ雷が落ちる。

「ぬんっ」

掛け声と同時にそれをかわしラカンは無傷でポーズをとる余裕さえ見せ着地する。

「おう出たな。情報その4、赤毛の魔法使は弱点なし、特徴『無敵』」

「てめえら手エ出すなよ」

俺がやる、やりたい、と言いナギが前に出た。

「言われずとも」

「バカの相手はバカにさせるのが一番じゃ」

「おー任せたよーがんばれー」

詠春を引っ張りながら後方に下がり三者三様ナギに任せる。

「奇遇だな小僧。俺も南じゃ無敗と滅法噂の男だ。敵無しと負けなし、勝負と行こうぜ」

「へっ、いいのかよおっさん。剣なしで」

「心配すんな、俺は素手の方が強え」

こうして馬鹿同士の戦いが始まった。

「それでお主は何者じゃ？」

「私？私はクレマンヌ。あの馬鹿の仲間、って言うか友達って言うか……」

そう答えたクレマンヌに少年は警戒心を高め構えを取るが、

「おや、私の事は友達とは言ってくれないのですか」

「なんじゃアル、知り合いか」

アルビレオの一言に構えを解く。

警戒心はそのままのようだが……。

「友達？ただの知り合いかな？」

「あなたも長い付き合いだと言うのに釣れないですね」

「まあアルの事はいいとしてあのバカの仲間なのじゃろ？」

「私はただの見学だよ」

笑みを浮かベクレマンヌは今日のところは、と付け加える。

「あなたと戦うのは気が引けるのですがね……。ただで済みそうにありませんし」

「ほう、アルがそう言うとはお主相当出来るのか」

「どうなんだろうねえ。まあ気合いで全部どうにかなるとか言って本当にどうにかしてるあそこの馬鹿とここ数年いい勝負してる事を考えるとそれなりには戦えるんじゃないのかな？」

「なんじゃお主もバグか……」

疲れたと言わんばかりの少年が呟いた。

「うん？何の事？まあいつか。それより君は何て名前なのかな？」

「おお、わしはゼクトじゃ。一応あそこにいるこっちのバカの師をしとる」

「へえ、あれの……大変だろうね」

「おおっ、わかってくれるか」

「こっちにもあれがいるからね」

「お互い苦労しとるの」

そやってゼクトとクレマンズが互いに共感を得ているところで、

「っう……そうだっ、あいつはっ……」

気絶していた詠春が目を覚まし勢いよく起き上がった。

「ナギが戦っていますよ」

「そう、か……。私もまだまだな……」

「人間なら日々精進あるのみだよ」

「む、あなたもいたのか」

「私はクレマンズ。あの馬鹿の連れ、よろしく」

クレマンズは酷く軽い口調で周囲を破壊しながらナギと戦うラカン
を指差す。

「は、はあ……敵、なんだよな？」

詠春は釈然としない様子でアルビレオへと顔を向ける。

「とりあえず今日は見学だそうです」

「そう……って、おい待て。それはおかしいだろ。こちらの偵察と
言う訳だろ？ならここで……」

「こやつもバグだそうじゃ……」

「は？ああ……そうか。ならしょうがない……のか？」

ゼクトの言葉を聞くと詠春は何か諦めたようにうなだれた。

この後十二時間に亘りナギとラカンの戦いが続く事になるのを今は
誰も知らない……――――

赤き翼（後書き）

稀有な方が多いらしくお気に入りとかやらが100件を超えたらしい。

『赤き翼』

連合最精鋭と言える集団。その戦闘力は一個大隊に勝るとか何とか。

『鍋將軍』

本当は鍋奉行の事。

鍋物を扱う際における最高にして最強の権力をもった存在。

この称号を与えられた者の支配する鍋に失敗は許されず敗北はない。
絶対の法則にして真理。

「わらひはくれふあんふって……」 「ふおう？」

「私はクレマンズって言うんだよ」 「そう？」 と言おうとした結果。
食べながら喋ってはいけません。

「人間なら日々精進」

素体が人形であり魂自体も変化のないクレマンズは衰えはすれど鍛えたところで一定以上は筋力などがつかない。それゆえの発言と言える。

十二時間戦闘

原作より短い。

ラカンが原作に比べ若干スペックアップしている事が原因。
紙二十重くらいの僅差でラカンが勝った。

ナギ・スプリングフィールド

赤き翼。情報その四。特徴無敵。

旧世界から来た赤毛の少年。強大な魔力と呪文を操る。
バカの一人。

近衛詠春

赤き翼。情報その一。生真面目で色気に弱い。

旧世界から来た黒髪青年。冷静な常識人にして鋭き剣技のサムライ。

鍋將軍でもある。

フィリウス・ゼクト

赤き翼。情報その二。見た目に反した熟練。

魔法世界人。年齢不詳。攻撃や防御に補助とバランス良く高度な魔法を操る。

常識人。ナギの師でもある。

アルビレオ・イマ

赤き翼。情報その三。胡散臭い参謀役。

魔法世界人。年齢不詳、古本。長年の知識と重力系と言う珍しい魔法を駆使する。

一応常識人ではあるがよほど切迫した状況や真面目な時でない限り

は煽る側であり愉快犯。

ジャック・ラカン

傭兵剣士。赤き翼討伐に来た。
バカの一人。

クレマンس

本来の目的はラカンと一緒に赤き翼の討伐であるが初回見学の約束をしているため戦闘には加わらず。

実は一番鍋を楽しんでいた人。

ラカンとは自称「いい勝負」ができる實力らしいが定かではない。

敵の名は（前書き）

V S.
クレマンス
ルビ

敵の名は

「よお、ナギ・スプリングフィールドッ！今日こそきっちり完勝してやるぜッ」

そんな掛け声と共に今日もジャック・ラカンが全身に闘気を滾らせ『一人』で戦いを挑むのであった。

「へっ、来やがったか。こっちこそお前を倒してやるぜ、覚悟しなっ！」

呼応するかのようにバチバチと雷化した魔力を放ちながらナギは空を駆ける。

「それで、今日『も』見学ですか？」

雷鳴や爆音を背にアルビレオは静かにたたずむクレマンسへ話しかけた。

「まあジャックも楽しそうだし。見てるだけでもそこそこ面白いからいいかな、なんて」

薄い笑みを浮かべて彼女は答えた。

「お主も大概じゃの……」

「そうかな？」

「敵である私達に囲まれて笑顔を浮かべながら会話してる奴なんてそうはいないと思うぞ？」

「ほら、私が本気出したら一捻りだし？」

ゼクトと詠春の言葉に対しクレマン스는首を傾げながら挑発とも言える事を平気で言っただけだ。

「ほう、それは……」

「言うじゃないか……」

一気に好戦的な表情へと変わった二人とふふん、と不敵な笑みを浮かべるクレマン스。

「しかし本当にそうなる可能性もありそうなのが怖いところです」

割って入るかのようにアルビレオが口を開いた。

「なんだアル、彼女の肩を持つのか？」

「それほど、と言う事かの？」

「手の内全て知っている、と言う訳ではないですが何分長い付き合いですからね」

「長い付き合い？」

「そう言えばお主とあのバカは帝国側じゃったな。長寿な種族かの？」

「私？私はただの不老だよ？」

「なっ、ただのって……」

「これはまた、やはりバグじゃな……」

驚く詠春とは違いどこか納得したようにゼクトは頷く。

「まあ特殊なのは事実だからねえ。そんなに驚かないでよ」

「む、すまん。こっちに來てからそれなりになるがいまだに驚く事ばかりでな……」

「あーそっか。神鳴流は向こうの劍技だもんね。うんうん」

「……なぜ俺の流派を？」

「私、向こうにも家があるし」

「なんと……」

「お主は何処の出なんじゃ？」

「一応向こうかな？」

「おや、それは初耳ですね。では彼も？」

「うん、そうだよ」

「ん？彼って言うのは誰なんだ？」

新たな人物の話題が出たところで、

「おっ、師匠がどうかしたのか？」

ナギと戦ってたはずのラカンが突然現れた。

その姿は焦げ跡や血などが付き御世辞にもきれいとは言い難いものである。

「うおい、いきなり出てくるな驚くだろ」

「ふふふ、今日は驚いてばかりですね」

「全然嬉しくないぞ」

「と言うかナギの奴はどうしたのじゃ？」

「ん？あいつなら……」

「おーい、おっさん何処行くんだよ。まだ終わってないぜー？」

ラカンと同じようにところどころ服が破れ汚れた姿でナギが空を飛んで来た。

「いや、師匠の話となれば俺が加わるのは当然だろう」

無駄に元気よくラカンは言う。

「俺抜きで話すなんて許せないぜ」

「ジャックの師匠？へえ、どんな奴なんだ？」

「へっ、聞いて驚きやがれ。なんと……」

「フアーガス・フェイタラストだよ」

その瞬間ゼクトと詠春の時間が止まる。

ナギはナギで、

「フアーガス……ん？聞いた事あるような……」

などと首をひねっている。

クレマンズと旧知であり既に知っているアルビレオはそんなナギを見ながらふふふふ、とお得意の笑みを浮かべている。

ラカンだけは、

「おい、クレマンズ人のセリフ取るんじゃないよっ」

そんな文句をクレマンズへと向けていた。

「いいじゃない別に。彼はジャックの事を弟子なんて思ってないし。いつもボロボロにやられてただけなんだし」

「それを言うんじゃないよっ。それにそのおかげで今のこの強え俺になったんだからいいじゃないか」

「まあ本人がそれで良いなら良いけどね」

「くっ、納得いかねえ……」

『自称』弟子という事を言われ続けるラカンは苦い顔をやめられずにいる。

「で、本当なのか？」

そこに立ち直った詠春が確認の為にアルビレオへ問う。

「の、そうですね。そんな話を聞いた覚えがありますよ。彼の魔島で」

「魔島……ああつ、ファーガス・フェイタラスタつてあれか、凄え賞金首つて言う」

「お主は今まで考えてたと言うのか……」

「いや、お師匠、そんな事言われてもな……俺覚えたりするの苦手だし」

「そう言う問題ではないじゃろ。この鳥頭めが……」

うんざりしたように言うゼクトを無視し、

「なあなあその話もっと聞かせてくれよ」

ナギはラカンへと絡んでいく。

「へっ、いいぜ。俺が師匠に関する話を聞かせてやる。まず師匠の島だ。あの島に上陸するだけでも一苦勞でな……」

この後意気投合し数度の邂逅を終える頃にジャック・ラカンは『赤き翼』へと加入する事となる。

そして、

「ふふふー、裏切り者ジャック・ラカン。君を含めた『赤き翼』の討伐命令が下ったよ」

面白そうな笑みを浮かべ腕を組みながらクレマン스는そう宣言した。

「おいおいクレマン스、いくらお前でも俺たち全員を相手に出来ると思ってるのか？」

剣を担ぎながらラカンは半ばあきれる様に言う。

「やってみなくちゃ分からない。さあお姉さんに掛かって来なさい」

クレマン스는雷を纏う壮麗な銀の細剣を手に取った。

「あの剣、なんじゃ？」

剣を見たゼクトがラカンとアルビレオに聞く。

「私も知りませんね。彼女が武器を持つところを見た事がないもので……」

「俺も知らん。あんなもん見たことないぜ」

「剣士として剣もだが腕前も気になるところだ……」

「へっ、敵だってんならやるだけだぜ。行くぜ『赤き翼』出撃だ！」

ナギの掛け声を機に各々が飛び出す。

同時に、

「残念」

クレマンズの愉快そうな声が響いた。

「何だこれッ」

「なんじゃ……ッ」

「これは……」

宙へ飛び出したナギにゼクト、そしてアルビレオの体が止まったかと思うと突然バランスを崩し地面へと落ちる。

落ちてすぐさま三人は再び飛び立とうとするがまたもや地へと引かれ一定範囲でしか動けなくなる。

その隙を逃すはずもなく音による見えない衝撃で残りの二人を牽制するクレマンズは、

「電撃に注意『死の舞踏』」
トーテンタンツ

細剣から全方位へ放たれた雷が『赤き翼』の面々を襲う。

自由に動けるラカンに詠春とは違いほぼ身動きの取れない三人はそれを浴びる事となる。

呻きながらも障壁を張り耐える三人。

だが何故かゼクトとアルビレオの障壁は大きく削られついにゼクトが雷を受け崩れ落ちる。

「ゼクトッ！」

「お師匠！」

たった一撃でゼクトが倒れた事に驚いたのかナギとアルビレオの聲が響く

その中で、

「へえ、その人もしかして……」

攻撃を仕掛けたはずのクレマン스는僅かに何か思案する。

「おらあ、よそ見して怪我しても知らねえぞッ」

「はあッ、雷鳴剣！」

「してないしてない」

左右から迫る攻撃に対し、

「嘘だろ……」

「く……」

ざりざりと靴底を滑らせ後退しながらも左手でラカンの拳を右の細剣で詠春の帯電した刀を受け止める。

「ジャック、こんな手加減した力じゃ私に勝てないよ？ 詠春君もその程度の雷じゃ私の『戦雷の聖剣』スリース・ワルキューレは越えられないよ」

楽しそうな表情を崩さずに言い、

「はッ」

気合一闪、二人を弾き飛ばした。

まだ戦いは始まったばかりである……――

敵の名は（後書き）

クレマンズさんが強すぎる話

戦雷の聖剣と死の舞踏

雷鳴剣の雷と聖剣の雷ではその質に違いがありほぼ同量では聖剣が勝つ。

量はともかく質だけでいえば聖剣は雷属性の最高位であるのは間違いない。

以前の説明通り魔法世界人に使用した場合効果は飛躍的に上昇する。その為ゼクト、アルビレオに対し威力の上昇が図られた。

描写はないがラカンにも雷撃も威力が上昇していたがラカンが彼女の視覚外にいた事と自由に動けると言う事でこれスルー、回避している。

ただクレスもクレマンズも「死者の生を断つ」が能力であると思っ
ているため正確にこの力を把握していない。

そのためゼクトは不死やクレマンズと同じ人形など何らかの事情により本来であれば既に死しているはずであるにもかかわらず生きている人間だと思っている。

アルビレオのことは既に知っているので驚かない。ラカンは後方に近い位置にいた為視認出来ていない。

ここで強化された雷に襲われるラカンを目撃していれば剣の能力に疑問や新たな検知などを得られたかもしれない。

クレマンズ

余裕に見えるが正直いっぱいっぱい。
最初の雷でアルビレオだけでも落としたかった、結果ゼクトがおちたので良いとした。

クレマンス(前書き)

一応ルビ

クレマンズ

クレマンズとの戦闘が始まってすぐ。

ラカンと詠春が弾き飛ばされるのをナギはただ見ているしかなかった。

「くそっ、滅茶苦茶強えじゃねえかよ……」

そう呟くナギに、

「大丈夫ですかナギ」

ゼクトに回復魔法をかけながらアルビレオが話しかけてきた。

「アル、お前どうやって……」

「動けない正体は糸です。身体のどこかに糸が付けられているはず
です」

「糸？くそ、そういう事かよ。やってくれるぜ……」

悪態を吐くとナギは体を調べ始めた。

そのころ。

「魔法使いタイプだと思ってたがどうやら違うようだな」

「けっ、師匠本人は魔法使いだって言ってたがどう見たって魔法剣士だったしな……。本気で行くぜ」

ラカンと詠春の二人も認識を改めていた。

「どんどん行くよ シーリス・シリウス・セイリオス 出でよ勇敢なりしもの——」

「させるかよッ」

詠唱を止めるため飛び出たラカンは勢いをそのままにその拳を振り抜く。

だがゆるりと逸らされた腕はそのまま掴まれラカンの身が宙を舞う。

「——星の光をその身に宿し矢となり敵を討て 『黒耀の蝶』」

気した風もなく呪文は完成しクレマンスの周囲には黒く輝く数多の蝶が現れる。

「それじゃあ初めてファーガスに会った時と同じだよジャック」

「く、師匠と同じ動きなんてそうそうできるもんじゃ……」

「言っておくけど私は彼が出来る事のほぼ全てを同じ精度で出来る」

「な、に……」

驚愕するラカン。

それは当然だろう。何せ全てにおいて師と同じ技量であると言っているのだ。

伝説の賞金首と同じ技量。到底信じられるものではない。

「まあ全部じゃないけどね」

安心してと、言いつつ周囲を揺蕩う蝶をラカンへ向かわせる。

そこに、

「どけジャックっ！『雷の暴風』」

ナギの声に即座に反応しラカンは跳び退る。

寸前まで彼がいたその場を稲妻を纏った暴風が蝶を巻き込み爆発させながら通過した。

「蝶が爆発するとは……」

「あれは初見なら見た目に惑わされるぞ……」

アルビレオの呟きに刀を構えた詠春が答えた。

「悪い、助かった」

「へっ、らしくないぜおっさん。どうしたんだよ」

「本人が言うに出来る事は全てが師匠と同じレベルだそうだ」

「はあ？なんだよそれ。じゃあファーガスを相手にしてるってことじゃねえか」

「勝てるのかもしれないえが勝てる気がしないぜ……」

「えらく弱気じゃねえか」

「うっせ、トラウマみたいなもんだ」

さんざん負け続けてきたせいかラカンには勝てるヴィジョンが見えずにいる。

「ならまあ俺がさくつと倒して最強だってことだな。そこで見てな」
「ちっ、阿呆が……俺もやるに決まってるだろ」
「そうでなくっちゃな。じゃあ行くぜっ！」

「みんな元気だなあ……」

「その余裕、羨ましいですねっ」

クレマンズの咄きに対しアルビレオが上空から重力球を放つ。

「二刀連撃斬光閃」

新たに一振り刀を取り出し片方が洋刀と言う変則な二刀で放たれた二筋の光は重力球とぶつかりそれを相殺する。

同時に、

「その技、神鳴流かつ！」

詠春が刃をぶつけてくる。

「そう、これはファーストガスが神鳴流と出会ってからの八百年を超える研鑽の成果だよっ」

「くっ、これは……」

迷いなく振られる二刀はぎやりと音を立てながら詠春の体に傷をつくっていく。

「やらせるかよっ！ 一気に決めるッ 『千の雷』」

詠春が下がるのを見計らったかのようにクレマンズを中心に轟雷が

降り注ぎ煙を上げる。

それに続くように、

「ついでだ、持ってけッ、ラカンインパクト!!」

極限まで集束された気がラカンから放たれ雷が降るその中心へと轟音を上げ着弾する。

「今のならどうだ？」

「ナギ、それは彼女が無事だといってるようなものですよ」

「師匠なら……」

「そう言う事も言わなくていいぞラカン」

「そうじゃぞバカ共そう言う事は言わなくても良い」

「気付いたのかお師匠」

「うむ、面目ない」

「いえ、あの雷は何か特殊だったようですし……」

衝撃によりもうもうと煙が舞う中で赤き翼は全員がその場で事の成り行きを見守っていた。

そして煙が晴れ始めた頃。

「あー……」

呻くような声に全員が身を固くする。

数秒後。

「死ぬかと思った……」

腕から肩、背中へと服は焼き切れ弾けたかのようになくなり露わになった肌は至る所で裂け、さらに赤黒く焼けただれ左の指先は真っ黒く炭化している様にも見える。

そんな身体は未だに熱を持っているのか血煙りをも僅かに上げている。

だが、それで彼女はそこに立っていた。

「おいおい、あれだけの攻撃喰らってそれだけかよ……」

その姿にナギが呆れたような声を出す。

「それだけって……こんな怪我初めてだよ……」

「いえ、あの規模から考えれば十分軽いと思いますよ」

若干笑みを引き攣らせながらアルビレオが言う。
それに賛同する様に、

「「うむうむ」」

ゼクトと詠春が頷いている。

「だがこれなら師匠に勝てるってことだよな？」

「おう、俺たちなら敵無しって事だよな」

ラカンの言葉にナギが、

「俺たちが最強だぜ」

嬉しそうに言うが、

「ファーストは復元レベルでの超速再生できるから今のでもぴんぴんしてると思うよ？」

そんな声が全てを打ち砕いた。

それによりラカンは、

「んな馬鹿な」

膝をつきその隣でナギは、

「ずりー、俺もそう言う能力欲しいぜ……」

ふてくされた。

残る三人は、

「本物のバグじゃ……」

「バグですね……」

「バグだな……」

揃って発せられた声はむなしく更地と化した大地に消えて行った。

「まあまあ私だって咄嗟に剣を盾と避雷針にしなければ危なかったし。まあ荒削りだけどいいチームだよ、うん」

そう言いながらクレマンは左右へ少し離れた位置で地面に刺さる剣をそれぞれ抜いた。

「ああ、流石に『戦雷の聖剣』スルーズ・ワルキューレは無事でもこっちの刀はもう駄目だ

ね……」

無銘の刀はラカンの攻撃を逸らしたのに使われたせいか刀身が崩れておりもう使えそうにはなかった。

雷の聖剣は避雷針として使われただけなのか目立った損傷などは無く上手い事破れた服の中に隠されていた。

「その剣も気になりますがそれよりも腕は痛くないのですか？」

「うん？ ああこれ？ 便利な機能持ってるんだよ私の体。痛覚の遮断、とかね」

「なるほど……それよりそんな真面目な顔してどうしたのですか詠春」

「ん、いや……八百年の研鑽と言っていたのがな。遠いと思ったただけだ。それと家にある古い歴史書に西洋人らしき人物が出てくるのを思い出してな」

「うん、ファーガスのことだね」

「複数出てくるのは？ それも彼が？ 女性もいたようだが……」

「ファーガスは他にも姿を持ってるんだよ。あと当時の友人が一人、それと一応私の事かな」

クレマン스는哀愁を滲ませる笑い浮かべながらそう言った。

「やはり半生の書をつくってくれませんかね？」

「絶対に嫌」

断固とした意思でクレマン스는拒否をする。

「そうじゃぞアル無理強いはよくない」

「ゼクトでもいいのですよ？」

「わしも嫌じゃ」

心底嫌そうな顔でゼクトも拒否をする。

「今回は諦めましょう」

「そんなことよりクレマンズの姉ちゃんは今からどうすんだよ？
よければ俺たちと一緒に来ようぜ」

「お、そりゃいいな」

「悪いけど私は一回家に帰るよ休みたいし」

「そうか？怪我ならアルが治してくれるぜ？」

な？とナギはアルビレオの方を向く。

「まあいいですが……」

「遠慮しておくよ。それに私が入ったら出番無くなっちゃうよ？」

「はっ、確かに」

「それはまずい」

「俺が目立たない」

「あん？なんだ小僧やるか？」

「いいぜおっさん。いい加減白黒つけようぜ」

ナギとラカンが拳を構え、

「静かにしとれバカども」

「そうだぞこれ以上暴れたって何にもならないだろ」

ゼクトと詠春に諫められすぐに沈静化した。

「まあ暇になったら魔王の島にでも来なよ。誰もいないかもただど
いれば歓迎するから」

そう言い残しクレマン스는己の影へと身を沈めていくのであった。

こうしてクレマン스と言うまさかの敵を退けた赤き翼の一行は新たな戦地へと向かうのであった。

魔王の城、エントランスホール。

「流石に、無理があったかなあ……」

端にある燭台の影から出て一步目を踏み出した時点で彼女の身体は傾ぎ抵抗なくどしやりと、床に倒れ伏した。

「少し、寝よう」

治療を施す事無く彼女はそのまま静かに寝息を立て始めるのであった。

再び彼女が立ち上がれまでしばしの時を有することとなる――――

クレマンヌ（後書き）

クレマンヌと言う女は強がりらしい。

ファーガスの話

分類としては魔法使い。

再生の話は本当なので性質が悪い

聖剣

発生させる雷の質、ランクが高い故に雷属性に対しては非常に優秀な避雷針として機能できる。

またそのような酷使に耐えるだけの頑強さも持ち合わせている。

便利な機能

痛覚遮断が行える他にもあるらしいが詳細は不明
機能がある事から初代の素体ではないらしい。

半生の書

アルビレオの趣味。アーティファクトでもある。

ゼクトは作っていない様子。

古い歴史書

文字通りのもの。

神鳴流道場に残るもので詠春はそこから僅かながら情報を得ている

らしい。

そんなものを見ている詠春の勤勉さがうかがえる。

無理した戦闘の大雑把な中身

最初にラカンの攻撃を受け流さずそのまま止めた時点で左手に異常。十全に糸と剣を扱えなくなる。

そのため呪文に移行するが雷の暴風で消滅。

二刀を強化しつつ全力で扱ってなんとか詠春を圧倒。

千の雷は両手の剣で流していたがラカンインパクトに刀を捧げることで逸らし同時にほとんどの雷を聖剣で引きつけつつ両方の剣を手放し後は両手で耐えるだけ。

結果刀はズタボロ、体は重傷。

クレマンズ

人形だからピンピンしている様に見えるが普通の身体だったら両腕はもう使い物にならないレベル

余裕を持っているように見せて退場する事に成功するも一人倒れるはめになる。

当分は動けないかもしれない。

運命の出会い

時は遡りクレマンンスとジャック・ラカンが『赤き翼』の討伐を決めた頃。

ウェスペルタティア王国首都オスティア。
王宮内、空き部屋。

そこにクレスの姿はあった。

「お前が今代の王女か？」

暗い室内、出現してすぐに彼はそう言い放った。

「っ、そうじゃ妾がアリカ・アナルキア・エンテオフュシア。ウェスペルタティアの王女じゃ。そなたがファ……クレス殿？本当に？」

信じられないと言った様子で僅かにうろたえるも王女としての威厳

か意地か彼女はすぐさま平然を装った。

「ああその通りだよ。この時勢、あまり外には出たくなかったが古き約は違えん。それで私に何の用だ」

「そ、そうじゃった。妾に手を貸してほしい」

「だから呼んだのだろう？その内容を聞いている」

「う、そうじゃな。……妾はこの戦争の止めたい。だが周囲が争いを進める中では動くにしても一人ではできぬし誰を信じていいのかも分からぬ。だからもし伝承に聞くそなたという存在が実在するのなら……と、思ったのじゃ」

「なるほど。縫る思いというやつか。悪くない。意思の強さや行動力、確かにお前は私の知る『王女』だよ。だがな、私と言う素性のわからぬ不審者がお前のそばにいてはお前が不審がられるだけだぞ」

「そう、じゃな……ではまず妾がどうかして街にでも出て……」

「待て、嫌な予感がする。それは却下だ。まずこれを……」

王女が街に出て、という話はクレスにとっては苦い思い出しかない。それ故かそれはすぐさま却下されその代わりと、クレスは新しい指輪を取り出し一度指でいじると王女に手渡す。

「新しい指輪？」

「指輪は石を砕く事で私への知らせとなるが他に私と特殊な念話を可能にする効果がある。今その有効範囲を適当に広げた。私は街に下るからその機能を使え。何かあればまた私を呼べばいい」

「なるほど……。感謝します。これで妾は……」

戦えると、王女は力強く頷いて見せた。

それから言うもの、

「クレス殿。信用できそうな者が一人見つかったのじゃが――」

「のうクレス殿、どうやら一部の者がとある店で密談を行っているらしい。できればその内容を――」

「どうやら本国側と裏で繋がった者が政庁内にいるようじゃ――」

「この前そなたが調べてくれた政府高官の件なのじゃが――」

「クレス殿の言っていた元老院議員じゃが、奴は以前にこの国で――
――」

「そ、そのだなクレス殿。この前侍女がくれーぷ？とか言う食べ物が流行っていると噂を――」

「そうか帝国でも似たような動きがあるらしいと言うのじゃな。なら――」

と、概ねにおいて戦争を止めるべく尽力する王女にクレスは使われ奔走する事となった。

そして数週間、数か月ぶりに二人はその顔を合わせる事となった。戦争を止めようとする動きは悉く阻止され続けようやく浮かび上がったのは一つの事実。

戦争継続を望む者が王国だけではなく連合内にそれも結構な数が確かに存在すると言う事だった。

「やはり、全ては繋がって……？」

「だろうな。でなければここまで煽る者の出現やスムーズに開戦とはならないだろう」

「妾は本国に行こうかと思うのじゃがどうだろうか……」

「確かに国内ではこの辺りが限界だろうな」

「無論クレス殿にも同行を頼みたい」

「……了解した。そこで私に代わって動ける者でも見つけてくれ」

「む……まあいい。では後日」

短いやり取りの後にクレスは現れた時と同様に転移の光を放ち消え、「貴方がどれだけ妾を支え、助け、信を得たかわかっておらんはずはないだろう……だから妾は……」

光を失った部屋にそんな呟きだけが残された。

しかし数日後王国とMMを繋ぐグレートブリッジが帝国の手によって陥落し王女の首都行きは延期となる。

そしてグレートブリッジは敵と同じ戦術を用いると言う奇策と『赤き翼』という精鋭部隊による大規模な反攻作戦により奪還される事となった。

「最近『千の呪文の男』と呼ばれる奴が率いる『赤き翼』とかいう連中が活躍しているらしい。知っているか？」

「千の呪文の男？」

「ああ、何でも雷系の呪文を得意とし敵の悉くを打倒しているらしい。先のグレートブリッジ奪還戦もそいつらの奮戦が大きいらしいぞ。ここ最近の連勝の要因だな」

「雷の……ふむ、そう言えば帝国によるオスティア進行の際に救援として駆けつけ帝国を退けたのがそんな名だったはずじゃ。そいつらが？」

「そうだろうな、本来は前線部隊だそうだが少し前まで訳あってアルギュレー方面へと送られていたらしい。その後激戦が予想されるグレートブリッジでの戦いに備え戦力補填の為に再度前線へ呼ばれたらしい。そしてそのたった五人の最精鋭部隊が突破口を開き勝利へ導いたそうだ」

「たった五人と？ 確かですか？」

「確かだ。都合良くグレートブリッジも通れるようになった事だし興味があるなら首都へ行くついでに一度その連中に会ってみるか？」

「む、それは……クレス殿はどう思われる？」

「少人数でそれだけの力を持っているんだ。味方にできれば大きいのは間違いないだろう。だが決めるのはお前だアリカ」

「……会おう。きっとそれが良いのじゃ……」

何かを決断するかのように王女は頷くのであった。

「ただ……」

「ん？何だ」

「その時は上手く計らうから妾について来てくれませぬか？」

「それぐらいなら受けてやる。だからその不安そうな顔はやめても
つと毅然としている」

「そ、そんな顔しておらぬわっ」

「くくく、その調子だ。頑張れよ」

「う、うむ。ではまた」

こうして遂に王女の首都行きが決行される事となった。

連合国首都メガロセンブリア、某所。

「何だよガトウ。わざわざ本国首都まで呼び出してさ」

赤き翼のリーダー、千の呪文の男と呼ばれる赤髪の魔法使いナギ・
スプリングフィールドは来て早々にそう言った。

「会ってほしい人がいる。協力者だ」

ガトウと呼ばれた眼鏡にスーツと言うスタイルで煙草を燻らせる男がそう答える。

「協力者？」

「そうだ」

聞き返すナギにガトウが短く答えると同時に、

「マクギル元老議員！」

ナギの後ろに控えていた赤き翼の一員にしてサマライマスターと呼ばれる旧世界の剣士、青山詠春の驚く声が響く。

それにより視線を集めるのは丁度階段を上がり部屋へと入ってきた議員服に身を包む壮年の男性元老議員マクギル。

しかしマクギルは、

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ」

そう言って自身がつい先ほど入ってきた階段を見やる。

同時にカツカツと階段を上る音が聞こえ、

「ウェスペルタティア王国、アリカ王女じゃ」

紹介と同意に背後に一人の男性を従えフードマントを羽織った女性が姿を現した。

これが後に大きな影響を与える出会いだとはこの時誰も知るわけがなかったのである――――

運命の出会い（後書き）

誰との出会いが運命なのか。

原作がどうかはわかりませんがこの作品内の戦争の流れとしては、
第一次オスティア侵攻↓ナギ、アスナと出会う↓グレートブリッジ
陥落↓第二次オスティア侵攻↓赤き翼グレートブリッジ奪還↓赤き
翼が首都で王女と出会う。

真の狙いはオスティアだが外聞的、一般的にはMMの陥落が帝国の
目標であるという前提があると言う事で考えれば、
MMを目指す上で通常通り陸地進行をすれば必然的に第一次オステ
ィア侵攻が発生。そこに初期の赤き翼が登場しそれを阻止。その後
大規模転移により一気にグレートブリッジを得た帝国がMMへの侵
攻より先に補給路などの為に後方の確保として第二次オスティア侵
攻を開始。しかし赤き翼の活躍でグレートブリッジが奪還され中途
で失敗。と言うのが妥当だと思われる。

アリカがずっとオスティアにいたのかいつからMMにいたのかと言
うのはわからないのでこの作品ではグレートブリッジ奪還後MMに
移動したという流れになっている。

ナギ・スプリングフィールド

赤き翼のリーダー。赤毛の少年。千の呪文の男。

青山詠春

赤き翼の苦勞人。黒髪の背年。サムライマスター。

ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーク

元捜査官のヘビースモーカー。

赤き翼内では新参りなる。情報の収集、解析担当。戦闘もできる。

マクギル元老院議員

MM元老院の中でも戦争停止を考える穏健派。

ガトウを使い赤き翼を呼びよせアリカと邂逅させる橋渡しの役目になった。

アリカ・アナルキア・エンテオフュシア

古き約、その証たる盟約の指輪を使うことでクレス呼びよせた。

その意思、行動力は歴代王女を思わせクレスに『王女』だと認めさせた。

ファーガスと言おうと思ったがクレスと言い直したした。

街に下り一計を案じクレスを自身の近くに引き込もうかと考えたが一蹴された。

調査中に若干私情が見えた気がする。人並みに好奇心はあると言う事。

出会ってから数カ月、その在り方や自身への何気ない気使いなどを含めクレスには一定以上の信用と信頼などを置いているが抱く感情がそれだけかは定かでない。

クレス

盟約に従い召喚に応じ力を貸している。といったところ。

王女と街で遭遇、というシチュエーションはもう勘弁して欲しいと

思っている。

ある程度気にかけていたりするが深く関わる事を良しとしていないという思いは当然ある。

出来る事なら関わる事がない方が良いとさえ思っているのは以前から続く考えである。

それぞれの（前書き）

今年最後ですね。

それぞれの

赤き翼の面々が王女アリカと出会って数時間。

「アリカ姫……か」

遠目に見える王女を見つけた詠春が呟くように言う。

「ん？どうした詠春」

それに気付いたのかナギが話しかけた。

「いや、姫もあるがあの護衛の男」

「ああ、クレスつつったつけ？あの黒尽くめ」

「姫の護衛をたった一人の男がしていると言うのはどうもな……」

「そう言われればそうだな……でも結構仲良さ気じゃね？」

そう言うナギの視線の先には微笑を浮かべながらクレスと話す王女の姿。

クレスの方はほとんどその表情を変えず冷めた印象であるが……。

「なあ、ジャック……って何二人でコソコソしてんだよ」

ラカンへと話を振ったナギだが後ろを振り向くと先ほどまでナギを

からかってい彼はアルビレオと何か話をしていた。

「あ？ あーそうだなー。 お前ももつとイチャイチャするしかねえな」
話しかけられている事に気付いたラカンはどこか投げやりな返事を返した。

「なんだよイチャイチャって。 と言うかよどうかしたのか？」
「確かにどうしたんだ？ お前とアルの組み合わせだなんて珍しい」
どうやら詠春も何か思う事があるらしい。

「いえナギをあの御姫様にどう近づけたものかと考えておりました」
「おう、そうだそうだ」
「げっ、何で俺があのおっかない姫さんに近づかなきゃなんねえんだよ」

「いや、間違っではないだろうが意味が違うんじゃない？」
ナギの受難は始まったばかりである。

丁度ナギ達が王女達について話している頃。
その向かい側。

「完全なる世界か……」
「知っておるのか？」
「因縁がある」

「因縁？」

「昔の事だがな。私と関わる事らしい」

「らしい、とな？自分の事なのじゃろ？そなたにしては珍しい言い方じゃな」

それが気になったのかどこか不思議そうな表情で王女はクレスを見つめる。

「私にだってわからない事はある。それが自分の事でもな」

「ふふ、そうなのか？」

「おかしいか？」

「気に障ったのならすまぬ。だがクレス殿もやはり人であると思えてなんだかな」

「完全、完璧など存在しないさ」

「完全なる世界、の……」

クレスの言葉に対してなのかどこか含みを持たせるようにアリカは呟いた。

「奴らが関わっている以上私も動く。安全な首都とはいえ危険はつきものだ。ある程度出歩いてもいいだろうがあゝの連中から護衛を出してもらえ」

「クレス殿ではダメか？」

「私でもいいが常にいるとは限らんし何よりあいつらの方が目立つ」
「目立つ？ふ、む……困になれと？」

「そう受け取ってもらって構わん。『赤き翼』は集団としても個人としても相当腕が立つ。いざと成れば指輪で私も呼べる。だから安心しろ」

「そう言う事ならよい。任せる」

「任された。さて、今日はもう休め」

「クレス殿は？」

「知人と会う」

「そうか。では……」

確認するように頷くと王女は己の部屋へと向かって行った。
それを確認してからクレスもその場から動くのであった。

「それで、まさか本当にお前たちとはな……」

場所を変えたクレスが景色を見たままそう言った。

「師匠こそ何でいんだよ。しかも王女様なんかと」

「あなたは関わらないとばかり思っていたのですが……」

現れたのはジャック・ラカンとアルビレオ・イマの二人。

「私にも事情があつてな」

「まあ深くは聞かねえけどよ。んな事より言いたいののはクレマンス
の事だぜ」

「ええ、彼女には苦勞させられました」

口を開き出たのはここにはいない女性への文句であった。

「ん？あいつと会ったのか？」

「最初は俺と一緒にだったんだが……」

幾らか苦々しい顔をしつつラカンが事情を説明をし始める。

「なるほどな。それが原因で地方に飛ばされたか。面白そうな事を
してたものだな」

「おいおい、言ってる事があの女と同じだぜ……」

「さすが似た者同士と言った感じですね……」

くくくと、笑うクレスの流石ししょーと脱力するラカンと呆れたよ
うな表情のアルビレオ。

「まあ城にある物と怪我の具合を考えるにまだまともに動けはしな
いだろうからその間は静かにしているだろうさ」

「普通なら一生ものの傷なのですがね……」

「ほう、あいつに一生ものの傷か、いい度胸じゃないか。なあ？」

そう言ったクレスの声音は酷く冷たかった。

急激に周囲の温度が下がったかのようにさえ錯覚させるほどである。

「俺はしーらね」

ラカンはすぐさま数歩下がりあらぬ方向を見つめ始める。

「い、いえ冗談、と言うか言葉の綾と言うかですね。結果的とはいえ決してそのような事にはなっていないわけですし……」

「ふ、冗談だ」

「……そう言う冗談ははやめて下さい。体に悪い」

静かなる怒気を瞬く間に霧散させたクレスは小さく笑う。

その変化にアルビレオはふうと、安堵のため息を吐き、

「ジャックも見捨てるとは酷い。同じ仲間じゃないですか」

「うっせ、それとこれとは別問題なんだよっ」

「まあ落ちつけ」

お前が言うなと言う二人の視線をクレスは気にせず、

「私も『完全なる世界』には因縁がある。私も独自に動くつもりだ。その間のアリの護衛を誰か頼みたい」

「なるほど。それならばナギに任せましょうか」

「そうだなあ。お姫様みたいなのと一緒も面白えかもしれないが俺もバカンス楽しみてえしな……」

「ではナギ・スプリングフィールドに頼んでみるとする」

「こちらからも話しておきます」

「おう、けしかけとくぜ」

「ふっ、ほどほどにしておけ。あと私は師匠ではない。じゃあな……」

それだけ言い残しクレスは去って行った。

「相変わらずのようですね」

「確かに。だが変な冗談はやめて欲しいぜ」

「ふふ、確かに」

その場に二人の溜息が深く木霊するのであった。

翌日。

アルビレオやラカンに言われ出て来たナギの前には以前見た通り冷めた印象を漂わすクレスの姿。

「あつと……クレス？だよな。名前」

「ああそうだ。ナギ・スプリングフィールド」

「あー……護衛の話、だよな？なんでなんだ？」

ちらりと、ナギはクレスの少し後ろで静かにたたずむアリカを見た。

「共通の敵『完全なる世界』それに私も少し思うところがあったな。独自に動きたいとアリカ姫に言ったら許しが出たので私の代わりに護衛をする人物を探していた。そこで先日顔合わせをした名高き『赤き翼』と言う訳だ。昨夜アルビレオ・イマに相談したのだが……」
「あ、ああ、アルからも聞いてるけどよ。何で俺なんだ？他の奴でも……」

僅かに苦手ですよ、という表情でナギが疑問を口にしたところで、
「私や詠春達は捜査がありますしラカンはこう言う事に向かないでしょう？バカンスを楽しむぜとか言って早々にどこか行ってしまいましたしね」

音も無くナギの真横にアルビレオが現れた。

「うわっ、いきなり出てくるなよアル。まあ一応わかったけどよ……」

「それにあなたが一番年齢的に近いでしょう？」

「あーもうっ、わかったよ。やればいいんだろ？けど俺、礼儀作法なんか知らねえぜ？」

「全て分かった上であなたなのですよ。ナギ」

「なんだそりゃ？まあいいならいいさ。いいぜクレス代わってやるよ」

「すまん。こちらの都合で」

「良いってことよ。それに頭使うのは苦手だし……。そっちは任せるぜ」

へへっと、照れくさそうにナギは頭を掻きながらそう言って請け負った。

「では頼んだ。アリカ姫も後を頼みます」

クレスは礼儀正しく腰を折り一礼するとさっさと部屋を出て行ってしまった。

「さて、ナギ。私ももう行かなくてはならないので失礼しますよ」

続くようにアルビレオも出て行ってしまう。

「おい、アルっ……。はあ、まあなんだこれからよろしくな姫さん」「うむ」

残された二人の間には何とも言えない沈黙がただ広がるのであった

……

それぞれの（後書き）

後僅か、皆様よいお年を。

「近づける」の意味

物理的、精神的。

心の距離、体の距離。

ナギ・スプリングフィールド

代理で護衛を任された。

おっかない姫さんと二人きり、どうしていいかわからない。

青山詠春

クレスと言った一人の護衛に何か思うところがあるらしい。

ジャック・ラカン

原作と違いアリカに手を出してはいない。その心は
クレスの事を知る一人。

アルビオレ・イマ

珍しくからかわれる側だったが内容が身体に悪かった。
クレスの事を知る一人。

アリカ

本当はクレスにいて欲しいが仕方ないとも思っている。

クレス

相変わらず黒尽くめらしい。

演技ではあるが珍しく怒った風を見せる。クレマン스는大事。対外的とは言え丁寧な言葉や礼など珍しい姿を見せた人。

休日、朝帰り（前書き）

あけましておめでとうございます。
新年早々タイトルがなんかアレですね。

休日、朝帰り

ナギ・スプリングフィールドが王女アリカの護衛となってから一月近く。

「よお、姫さん。今日はどうするんだ？」

「うむ、外に出ようかと思う」

「おっ、いいね。ここんとこずっと籠りっきりだったしやっぱたまには外に出たいよな」

ニカッつと、光るような笑顔でナギが言う。

ナギの持ち前の性格ゆえか出会った当初のような気まずい雰囲気は既に無かった。

「そうと決まれば早速行こうぜっ」

待ちきれないのかアリカの腕を掴み颯爽とナギは外へ飛び出す。

「ちよ、やめッ……引っ張るでないっ」

それに引かれアリカも文句を言いつつ外へと出て行った。

「いやあ、やっぱ外は活気があっていいよな。ほら姫さん食べるだろ？」

そういつてナギは手に持ったものをベンチに座るアリカへと渡す。

「む、なんじゃこれは？」

「何ってソフトクリームだろ？」

何言ってるんだ？という表情でナギはアリカの隣に座りながら見つめる。

「知らぬ。そふと？」

「ソフトクリームも知らねえのか？これはソ・フ・ト・クリーム！」

「ソフ、ト……クリー……クリ？くりーん？」

「ぐわっ、マジかよ。演技じゃねえよな？どこまで箱入りなんだよ……」

「し、しかたあるまい。王宮以外は知らぬのじゃ……。じゃがクレープなら知っとるぞ」

「なんでクレープ知っててソフトクリーム知らねえんだよっ！」

言い返すかのような勢いで知っている事もあるとアリカは胸を張るが意外性故の衝撃かナギはおいっと、アリカに突っ込みをいれつつ身を乗り出し転げる様にベンチから落ちた。

「い、以前クレス殿が買ってきてくれたのじゃ」

その様子に驚きつつもどこか恥ずかしいのかどもりながらアリカが

答えた。

「へえ、あのクレスがねえ……結構意外だな」

本当に意外そうにナギは座りなおしつつ呟くようにそう言う。

「そうかの？」

「そうだろ。いつも仏頂面って言うか冷めてるって言うか……。でもなんでクレスは『クレス殿』なんだ？護衛なんだろう？」

「事情があつてな私から手伝って欲しいとお願ひしたのじゃ。本来は護衛でも何でも無い旅人、の様なものじゃ」

「そうなのか？旅人かぁ……なんかいいなそう言うの」

故郷を飛び出してから旅とは言えないような放浪生活を送ってきたナギからすればそれは羨ましいようなものなのだろう。
羨望とも言える表情でナギは言う。

「そう言うものか？」

「そうなんだよ。って、そうじゃなくて……あーもう、もっと姫さんは外の事を、楽しい事を知るべきだってんだよ」

「しかしそれは……」

「うっせえ知るか。今度あんたを本格的なデートに連れてってやるぜ！」

「デートとはなんじゃ？」

「ぐ、そこからかよ……。手繋いで仲良く散歩すんだよ。んで飯食ったりして楽しく過ごすんだ」

「ほ、ほう？それはなかなか……楽しげじゃの？」

アリカはいまいちその様子が浮かばないのか半ば疑問系で答える。

「……よし、約束だ。いつかきつと京都に連れてってやる。旧世界なら俺達を知ってる奴もいねえしよ。そうだな……アスナちゃんも連れて三人でさ、絶対だぜ姫さん」

「む……それは……」

「いいだろ？他の奴らも一緒に向こうに行ったりしてさ、クレスの野郎を笑わせてやろうぜ？考えただけで楽しくなりそうじゃねえか」
「ああ、それは……もし本当にそんな事ができたら楽しいだろうな……」

「もし、じゃなくて本当にやるんだよ。俺はやると言ったらやる男だぜ？信じな」

どこからくるのか溢れるような自信に満ちあ顔でナギは宣言する。

「ふ、そうか。なら少しくらいは期待して……」

言葉通り期待してか、叶わぬと思っている幻想を夢見てかアリカが穏やかに口を開いた時、

「ッ、姫さんっ！」

咄嗟にナギが叫びアリカを抱きかかえるとその場を離れた。

次の瞬間、

ズ、ドオン。

爆煙を上げ先ほどまでいたベンチ一帯が炎に包まれた。

「大丈夫か姫さん」

「うむ」

ナギの声にアリカは冷静に返事をする。

「くそっこんな街中であんなデカイ魔法使いやがって。死人出てねえだろうな」

「やはり今は……」

「ああ、奴らの刺客だろ。アンタと俺、どっちを狙ったかは知らねえけどな……。けど、ようやく尻尾を出したな。逃がさねえぞ!!」

追尾魔法もかけてやったし、とナギは拳を握りいつになくやる気を見せる。

「よしっ、姫さんは皆のトコ帰ってろ。俺は奴らの本拠地をぶっ潰し……」

捲し立てる様に言葉を紡ぐナギがそのまま進もうとするとところをアリカがローブを掴み引きとめた。

「私も行こう」

「ああ？何言って……」

「ここに私を一人残しておく方が危険だとわからぬか愚か者が。それに私の魔法は役に立つぞ？忘れたか鳥頭」

「……ハッ、いいぜ姫さんついて来な！けど怪我しても知らねえからなっ」

「ふん、いざとなればクレスを呼ぶ方法があるわ」

「なんだよそれ、そんなことできるのか？契約か何かか？」

「違う、が、魔法具である事には変わりはない。いいから行くぞ先導しろ」

「おう、しっかり着いて来いよっ」

言うと同時にナギは駆けだした。

そのすぐ後ろを追うようにアリカはナギの背につくと首に掛けた鎖、それに繋がれた指輪を握りしめながら駆けるのであった。

「……で。貴様は一昼夜アリカ王女殿下を連れ回した挙げ句、その敵本拠地とやらを壊滅させてきたのか！！どんな夜遊びだそれはっ！！」

青筋を浮かべた詠春がナギを怒鳴りつける。

公園で犯人の追跡を開始したナギ達はそのままだ付をまたぎながらも犯人の入った本拠地を見つけ襲撃。壊滅へと追い込み朝方帰って来たのである。

「まあ……後は警察に任せただけ」

体を煤などで汚しながらも無傷のナギは居心地が悪そうに頭を掻く。しかし詠春の怒りは収まる事を知らず、

「敵の下部組織を潰しても意味は無いっ！何のために秘密裏に調査してると思ってるんだっ！大体、万が一王女殿下にお怪我でも会ったらどうする気だっ！」

「姫さんノリノリだったぜー？楽しかったとか言ってたし」

「嘘をつけっ！どうせ貴様が無理やり連れ回したんだろう！姫にこ

んなご迷惑をおかけするとはどうお詫びすればよいか、国際問題級の事態として取り上げられたてもおかしくは……」

「いや……そ、それにもしものなにかあたらクレスを呼ぶための魔法具があるから大丈夫だって姫さんが……」

詠春の愚痴が混ざりつつある説教を遮りナギが言いわけを始めたところで、

「詠春さーん」

明るい声が響いた。

赤き翼で元捜査官のガトウに着き後方で捜査を手伝っているタカミチ少年がゼクトと共に部屋へ入ってきたのである。

興奮気味のタカミチとゼクトが言うには先ほど廊下で出会った『コワイ冷血お姫様』が笑いかけてきてナギに礼を伝えて欲しいと言ったそうだ。

それを聞いた詠春は恥ずかしいやら何やら複雑な様子で顔を赤くし口をつぐみ静かに振るえる。

そんな詠春の姿を当人のすぐ後ろでクツクツと笑うアルビレオを尻目にナギは、

「それに……ちゃんと証拠も見つけて来たぜ」

懐から一枚のスクロール、手紙を取り出し開いた。

そこには映し出されたのは『完全なる世界』と関係が疑われているMMのナンバー2である執政官の姿。

詠春やガトウ曰く証拠といって提出すれば戦争を終わらせることので

きる一品、である。

斯くして終戦へむけてマクギル元老議員と赤き翼が会談を行うのに先んじて王女アリカはその護衛クレスと共に小型船に乗りこみ帝国第三皇女と接触するため空へと旅立つのであった。

これが更なる苦難の幕開けでとなる事など知らずに……――

休日、朝帰り（後書き）

この章も半分と言ったところですよ。

ソフトクリームの件

クレープの名はこの為だけに出したと言っても過言ではない。

追尾魔法

この場面以外原作には欠片も登場しない。はず
咄嗟にそんなものを掛けたナギの实力は凄いのだろうがナギがそんな魔法を使える事の方が驚きである。

タカミチ少年

初登場。

少年探偵団らしい。団？

ナギ

やるときはやる男。

アリカ

『コワイ冷血お姫様』 普段の様子はそんな感じ。
帝国第三皇女と会う為クレスと共に旅立った。

暗転（前書き）

一つルビ

暗転

主戦場からは遠い、とは言っても他の戦線にほど近いアルギュレー大平原、某所。

「そなたがウエスペルタティアのアリカ王女かの」

「そうじゃ。そういう主が帝国第三皇女テオドラか」

互いに供を一人ずつ従え二人の貴女はその場に降り立った。

「……なるほど。この戦をすぐに終わらせる事ができると、その準備があるとな」

「ああ、じゃが奴ら『完全なる世界』による妨害が無いとは到底思えぬ」

「それに抗い奴らの悪事を証明する為にここで停戦の合意を、と言う訳か？」

「そうじゃ、帝国と争うことなど我らは望んでおらぬ」

「それはこちらとて同じ。わかったのじゃ妾もその案に乗ろう。互いに世界の平和を……」

状況の説明後短い会話を経て帝国の皇女テオドラがその手を差し伸べた。

「うむ、世界の平和を……」

それに応じアリカも手を伸ばし握手をする。

「うむ」

互いに頷きあい正式な調印を行おうかと言うくだりになったところで、

「さすがにそれは困るんですねえ」

軽い調子で響いたそんな声と共に大地が炎に包まれた。

同時に護衛二人がそれぞれの主のもとへと駆けよる。

「これはっ」

「炎が……」

周囲を囲い壁となるように炎は広がり次第に頭上を、空を覆い始める。

「これでは逃げられぬぞ……」

「っ……クレス！」

「わかっている、少し待て。こちらで打ち破る、そっちは二人の守りを固めろ」

「了解した」

クレスの言葉に名も知れぬ護衛は頷くと貴女二人を覆うように炎熱遮断の結界を張り周囲の警戒に入る。
それと同時にクレスは詠唱を開始した。

「タン・レスタン・アルター・アンタレス 契約に従い 我に従え
氷の女王 来たれ気高き……——」

唱え始めた途端に炎が波打ち、

「その始動キー……私は知っている。あなた、姿は違うがファースですっ、やっと思つけたっ！」

歓喜を混ぜた狂笑ともいえる程に笑い声を上げ炎の中から一つの影がうまれる。

「っ……——魂よ 恒久の氷柱 氷柱の剣 罪を貫く氷の刃
嵐を纏いて我が障害を排せ 『恒久の氷剣』」

その姿に一瞬クレスへ動揺が走るが途絶えることなく詠唱を終える。

「何故貴様がここにいるっ、答えろカーシーっ！」

人の形となった炎を睨みつつも手を空へかざしクレスは術を放った。
蒼く輝く氷剣が冷たく鋭い暴風を纏い頭上を覆う炎の檻へと飛翔する。

「以前言っただけですよ 『完全なる世界』です。私がいるのは当然でしょう？ あなただってどこか私と会えると思っただからこの戦争に関わった、そうじゃないのですかっ、ファース？」

カーシーはクレス意外は眼中にないともいうかのように氷剣を無視し話し続ける。

「考えなかった訳ではない。だが、こんな所で会うとは思わなかったさ。もっと大掛かりな舞台でも用意するのだと思っていたからな」
クレスが口を閉ざすと同時に氷剣が纏う冷気の荒波が炎を凍てつかせる。

それを待っていたかのように氷の刃は壁に突き刺さり壁を穿ち外への道をつくった。

「先に行け、あいつは私が仕留める」

「じゃが……」

「案ずるな。あいつと戦い負けた事は無い」

「すまぬ。任せたぞ」

凍った炎の残骸がバリバリと碎け降り注ぐ中、障壁を展開した護衛に連れられ皇女テオドラと王女アリカは外へと脱出した。

「動かないのか？」

「邪魔者がいてはあなたと死合えないでしょう？それに……実は私一人ではないですしね」

「ちっ……手間を取らせる」

「あはははは、いいじゃないですか偶然とは言え再会を喜びましょう。まあ今日は前哨戦といったところですがね」

嬉しそうににやにやとカーシーはそう言いながらナイフへと火を灯す。

「前回のようにはいきませんよっ」

シッと、空気を焼き裂きながらカーシーはナイフを振るう。

『魔崩の槍』の刃を使ったナイフは障壁をない物かのように切裂く。そして炎熱効果、燃焼により高度な耐熱魔法等の強化が無ければ人の体は愚か鉄の壁でさえ容易く焼き斬る凶刃でもある。

「こう近くてはご自慢の大層な術は詠唱できないですよね」

アハハハと、笑いながら凶刃がその勢いを落とすことなく幾度となく振るわれる。

「っ、好きに言えばいいさ」

強化を施した刀でクレスは応戦しつつ魔力糸を這わせ忍ばせるがある程度近づけたところで一斉に燃え上がりその意図を果たす前に燃え消えた。

「おやあ？何か小細工でもしようとしたんですかね？それは残念でしたね、アハハハハ——」

言葉から察するにどうやら自動で炎が動いてるらしくそれに気付いたカーシーは面白そうに笑う。

クレスは踏んだ場数、経験、会得した術式の多くは屋外、広範囲での対多が多くを占める。

経験で補っている部分があるが、どちらかと言えばこのような閉鎖的な空間での近接戦は苦手と言えた。

「アハっ、やはり接近戦で正解のようですね」

いい事を知ったとでもいうかのようにカーシーの笑みは一層濃くなっていく。

「……だから何だと言う。私は貴様を倒すそれだけだ」

糸が意味を成さない以上片手を遊ばせておく事に意味は無く二刀となったクレスは大きく攻めへと転じる。

対するカーシーは炎で刀身を増しているとは言え今も昔もナイフ一本。

そしてどちらもその体は決して普通のものではない。

いくら炎を纏っているようにがクレスの傷は瞬時に再生されクレスの剣も炎の体には傷を与えられない。

血が流れる分クレスが不利とも言えるが……。

「奥義・凍甚斬空斬魔閃ッ」

蒼い気を纏いカーシーへと放たれた斬撃は切断面を凍らせながら彼の片腕を切り飛ばした。

「まさかっ……」

「ふん。油断大敵と言う奴だ。奥義・二刀同撃凍華繚乱」

前面へと一直線に放たれる冷気を纏った衝撃はカーシーを襲いその体を吹き飛ばす。

「アハッ、アハハハハ……そうですね。あなたがこの程度の訳がない……」

笑みをこぼすカーシーは体を燃え盛らせ攻撃を防いだらしいがその姿は片腕に次ぎその半分がなくなっていた。

「あは、は……今回は一応の目的も果たしましたし退くとしましようかね。決戦の舞台、楽しみにしててくださいね」

そんな姿でありながら更に大量の炎を噴出し目を眩ませたかと思うとそれが落ち着く頃には彼の姿は完全に消え失せていた。

術者が消えたのをきっかけに炎の檻もその姿を揺らしゆつくりと消え始める。

それを待たずクレスは外へと飛び出るがそこには既に誰の姿もありはしなかった。

「ちっ。なぜアリカは指輪を使わん……使う前に気を失いでもしたか？」

指輪は秘匿性を上げ、検査などから逃れるため台座の石を碎かない限りその効果を發揮しないのである。

悪態を吐きつつクレスはどうしたものかと考える。

「こちらがこのざまと言う事は赤き翼あいつらも無事ではないだろうな……良くて指名手配と言ったところか。ふむ、それは私もか……？」

ふむと、もう一度溜息を吐き、

「指輪の反応があるまでは赤き翼の行方を追うか……」

それだけ呟くとクレスはどこかへと転移するのであった。

かくして指名手配となった赤き翼の一行とクレスは帝国と連合から追われることと成る。

そして已然貴女二人も行方不明となったまま……――――

暗転（後書き）

貴女二人を攫ったのは……？

原作でも名前すら出てこない不遇の雷君がいたとかいなかったとか。この作品でも扱いはそんなものです。

『恒久の氷剣』

詠唱は「契約に従い 我に従え 氷の女王 来たれ気高き魂よ 恒久の氷柱 氷柱の剣 罪を貫く氷の刃 嵐を纏いて我が障害を排せ」
『舞い降りる氷棺』よりも強大な氷剣を出現させる。『燃え盛る炎の神剣』の氷バージョンと言ったところ。

詠唱はE F B

奥義・凍甚斬空斬魔閃

紅蓮拳が炎、雷光と雷鳴が雷なら水ないし氷もあっていいじゃないかと言う事で「凍甚剣」

そこにいつも通りの混合技の組み合わせ。

奥義・二刀同撃凍華繚乱

百花繚乱と凍甚剣の組み合わせ。

連撃Ⅱ連続ではなく同撃Ⅱ同時攻撃。

隙を補う連撃ではなく単純に二倍の同撃

赤き翼

指名手配になったらしい。

カーシー

偶然の出会い。

本番はまだ先らしい。

皇女テオドラと王女アリカ

行方不明、絶賛気絶中？

クレス

『クレス』まで指名手配になってしまい困っている。

女の勘と

クレスがアリカ姫の行方を探し始めて三日。

遂に指輪の反応を察知する事となる。

しかし……、

「反応が鈍いな。対魔処理された空間にでも入れられたか……」

正確な位置を把握できずにいた。

それ故にピンポイントでの転移もできずタルシス大陸の外れにある遺跡群を虱潰しに日数を掛け練り歩くこととなる。

ちなみに赤き翼はクレスが調査を開始した数日後から目撃情報が途絶えている。

本日の遺跡巡り、もとい調査も終わり日が落ちる中で帰路につこうかと言う時。

「やはりここはある所が近いな……」

ふとそんな事を思いクレスはその位置からでは見えないとわかっていてもその方向を見てしまう。

この地に来てから既に一週間ほぼ毎日、ふとした瞬間にそちらを見つてしまう。

近くて遠いアルシア山を……。

「ルクレツィア……」

思う度にまるで傍にいると言うかのようにトクリと自身の中で魔核が脈を打つような気配を感じクレスは溜息を吐く。

そして自分がまだにどれだけ彼女の事を思っているか再認識させられる。

実際彼女は残滓と言え自身の中にいるのだが彼女が消えたあの地を思わずにはいられない。

いつの間にか俯きがちになっていたクレスはふと顔を上げ周囲に視線を巡らした。

同時に、

「やつほー久しぶりだねクレス。こんな所でなにしてるの？」

クレマン스가夕日を背に現れた。

「ああ、久しぶりだな。だがお前、こそここで何をしている？」

「んー、ちょっと人探しをね……」

クレマンズは一言言うところか怪訝そうな顔でクレスをじっと、見つめ出した。

「どうした？」

「うん、あの人の事でも考えてたのかな、って……」

「何故そう思う」

「女の勘、かな？」

半ば冗談めかすように言うクレマンスにクレスは、

「ふっ、ならしょうがないな」

鼻で笑いつつ観念するかのように小さく首を振りつつ小さな笑みを浮かべた。

「そっか。きつとあの人もクレスのこと思ってるよ」

「それも女の勘か？」

「まあね。で、結局クレスは何してるの？」

「お前と同じ人探しだ」

「奇遇だね。もしかしてそれって偉い人？」

「まさかお前………探しているのは帝国の皇女か？」

「正解！って言う事はクレスは連合の王女様だかな」

「そうだ。しかしお前負傷して引き籠ってるんじゃないのか？」

そこでクレスは確認するかのようにクレマンスの全身を見る。

すると長い袖に隠れているが彼女の両の手首のあたりに軽く包帯が巻かれているのが見えた。

「あーその事知ってるんだ。そうなんだけどね。だいぶ良くなったからふらっと外に出たら何かわからないうちに皇女様の搜索頼まれちゃって」

てへへと、彼女は何故か照れたように笑った。

「は？」

クレスにしては珍しく間の抜けた声が発せられた。

「なんかジャックの抜けた穴埋めをしばらくしてたら覚えられちゃったみたいでさ」

困っちゃうよね。と言いながらにへらと笑う。

「はぁ……まあいい。で、なぜここだと？」

「皇女様が行方不明になったって言う話と赤き翼の事件の話を聞いてね。それでピーンときて、赤き翼の目撃情報と移動した方向からこっちなかなー。みたいな。と言うかクレスの方にはあの指輪があるんじゃないの？」

「どうやら相応に処理された場所にいるらしくてな。正確な場所まではわからんのだよ。このマリネリス一帯で使えそうな場所限定してあと探していないのは最奥部ぐらいだ」

「じゃあきつと……」

「きつと？」

「一番奥の『夜の迷宮』だよっ」

「ふむ……何故そう思う？」

溜息を混ぜつつクレスは自信ありげに言う彼女へ聞き返す。

「悪の組織なんてそんなものじゃない？名前もなんか暗いし。それにさ……」

「……それに？」

今度は幾らか疲れたような調子でクレスは聞き返した。

「あの時『ストレガ』はそこにいたよね？」

「……」

「どうかな？行ってみようよ」

「……そうだな。だが明日にしよう。日も落ちるしいろいろと疲れた……」

「了解。まあそんな急ぐ必要性も今のところ感じないしね」

赤き翼の最後の目撃とこれまでの移動方向。

敵の目的に王女らの利用価値。

それらの材料からまだ平気であろうと言う事からの判断でもある。精神的にクレスが疲れたと言うのも事実ではあるが……。

「そう言えば……カーシーに会った」

「っ……そう」

「その時は偶然でちゃんとした決戦の舞台を用意するだそうだ」

「もう、終わるよね……」

「終わらせるさ」

翌日。

「っ、クレスじゃねえかつ……。お前がいながらなんでっ！」

「やめなさいナギ。無事でしたかクレス心配しましたよ」

出会った途端にナギがクレスへと掴みかかろうとするのをアルビレオが抑える。

「まったく……。ナギがすまんの」

「いや、いいさ。守れなかったのは事実だ。すまんな」

ゼクトの言葉にクレスは正直に謝罪を口にした。

「はっ、それだけ敵はやべえて事だろ」

「そうだな。俺達が調べた限りでもそれははっきりしている」

燃えるってもんだろ。と言うラカンの言葉にガトウが同調する。

「それで王女殿下の場所は特定できたのか？」

「そうですよ。全員そろったんですし行動を起こしましょう」

詠春とタカミチの言葉に、

「そうだな。悪かったなクレス。一緒に姫さんを助けようぜ」

一瞬バツが悪そうな顔をするもすぐにいつもの笑みを浮かべナギは言った。

「ああ。それで場所なんだがな……」

クレスが口を開いたところで、

「おいクレスー、やっぱり私の言う通りだったよー」

笑みを浮かべたクレマンスが駆け寄って来た。

「あれ？赤き翼諸君……と、誰？」

「全員赤き翼だ」

「そうなの？人数増えたんだ。へー」

クレスの説明にクレマンスはガトウとタカミチをマジマジと見つめ始める。

「って、ちょっと待てよっ。なんでクレマンスの姉ちゃんがいるんだよっ。怪我は？」

クレマンスの登場に一同固まっていたがようやく動き出しナギが代表するかの様に最初に口を開いた。

「第三皇女様の搜索をしててね。クレスとぼったり。んで、怪我は殆ど治ったよ。初めましてだね、私はクレマンスこれからよろしく」

大雑把な説明をしつつナギに包帯の巻かれた腕を見せながら彼女はガトウとタカミチに自己紹介をした。

「ああ、話は聞いている。なんでも五人相手に負けなかったとか……。ガトウだ、よろしくな」

「は、初めまして。タカミチですっ、よろしくお願いします」

「いや、俺の質問に答えろよっ。ってかクレスと知り合いなのか？

それに帝国の皇女？」

「え？ あー……まあとりあえず説明はお姫様を助けてからいっぺん
について事で。目指す場所は最奥の『夜の迷宮』だよ。さあ行こうっ」

クレスをちらりと見やったあとと言いたい事だけ言うと彼女は踵を返
しさっさと目的地に向かい駆けだした。

「あっ、おい、ちょっと待てよ……」

それを追いかけるナギが走り出す。

そしてそれを追うように全員が駆けだすのであった。

短い別れを経て再会の時はすぐそこに迫っていた――――

女の勘と（後書き）

女の勘はカオス理論をも凌駕するとか何とか。
物語も終盤、私の命も終盤。どうも作者です。

『夜の迷宮』

ストレガもいた思い出の場所。
一番奥らしい。イベントにはぴったりか

赤き翼

逃亡生活のなかいつ情報集めたりしてたのか気になるところ。

クレマンズ

ザ・女の勘。

怪我は殆ど治った。

クレス

未だに彼女の事を思い続ける。

役者は集いて

がらりと、壁が崩れ薄暗い部屋の中へと大きく光が射し込む。
その中に一つの影。

「遅いではないかクレ……」

安堵感を滲ませながら呟くように囚われていた王女、アリカは言葉を紡ぎかけすぐにそれをやめた。

「よお、来たぜ姫さん。クレスじゃなくて悪かったな」

「ふん……遅いぞ我が騎士」

壁を打ち破り現れたのは彼女の口から出たクレスではなく赤き翼のリーダー、ナギ・スプリングフィールドだった。

ナギの言葉に若干の不機嫌さを滲ませながらアリカは彼へと言葉をかけ直すのであった。

「お二人とも早く。正面で他の奴らが時間を稼いでいますので今のうちに」

先の会話を流すように詠春が声をかけた。

「クレスの奴もそっちにいるぜ」

そんなナギの声を聞きつつアリカと同じく囚われていた帝国の皇女テオドラは外へと脱出を果たしたのであった。

その後大陸を北上、別れていた面々との合流を、ついでにクレマンズの簡単な紹介を果たし一路赤き翼の隠れ家のあるオリンポス山へ向かう事となる。

「なんじゃ、これが噂の『赤き翼』の隠れ家か！どんな所かと思えば掘立小屋ではないか！」

到着するなりそう言ったのはテオドラ皇女であるが、不満げな物言いととは別にその顔は幾分わくわくしているのが見てとれる。

どうやら『隠れ家』という言葉かまたは実物か、はたまたその両方に見た目相応の好奇心が働いているらしい。

「俺ら逃亡者に何期待してんだよこのジャリはよ」

けっと、ラカンが皇女の言葉に青筋を立てると、

「何だ貴様、無礼であろう」

それにテオドラも反応し程度の低い口喧嘩が始まった。

口喧嘩を続ける二人を無い物かのように、

「さーて姫さん、これから……と行く前にクレスの話を聞きたいんだがみんなどうだ？」

そう言っただけは周りへと視線を向けた。

それに対し一人アリカが、

「クレス殿の話、じゃと？」

訝しげにその目を尖らせナギを見つめる。

「それは私も気になるな」

「うむ、確かにの」

「まあ気にならないと言ったら嘘になるな」

「ぼ、僕も、です……」

詠春を始めゼクト、ガトウ、タカミチとその意を露わにしていく。

「姫さんはもちろんクレマン스의姉ちゃんもアルもジャックも知ってるんだろ？なら俺たちにだっていいじゃねえか」

「気付いていたのですか？」

その発言にアルが驚嘆と感嘆が混ざったような声を上げる。

「へっ、最初っからじゃねーけどな……俺たち仲間だろっ」

ちっと、自分で言って照れたのかナギは恥ずかしそうに舌打ちしつつそっぽを向いた。

「く、くく……は、はははははは——」

「あは、いやあ面白いね。あははははは——」

「何だよっ、俺は真面目に言ってるだよっ」

笑うんじゃねえと、顔を赤くしながらナギは二人へと吠えつつそれでもにやにやと笑うクレマンズへと睨みをきかす。

「だって私達のこと仲間だって。そんなの初めてで新鮮で面白くて。いや、馬鹿にしてるわけじゃないんだよ」

「いや、悪いな。こいつの言うとおり馬鹿にしたわけではない。仲間、か……ふむ、ナギ・スプリングフィールド」

「おう」

「いいだろう。話してやる」

「良いのかクレス殿」

「私が良いと言っている。とりあえずお前はこっちに来い」

アリカに了承を告げるとクレマンズを自分の方へ手招いた。それに従いクレマンズも素直に傍に近寄った。

「ふむ、しかしまず何から話すか……」

「なら私の事とか？」

「何処から話しても大して変わらんだろうしな。それでもいいがな……」

そして一度頷き、

「これから話す事は他言無用で頼むぞ。あと全て事実だ」

そう前置きをした。

「賞金首ファーガス・フェイタラストを知っているな？」

「ジャックの師匠だろ？」

「それは変身の幻影魔法を使った私だ」

「はあ？ クレスがファーガスでファーガスがジャックの師匠って事はクレスがジャックの師匠って事かよっ？ マジかジャック」

「ん？ ああ、そうだな確かに師匠だぜ」

「師になった覚えはないがな……」

「へっ、それでも俺はあんたの弟子を名乗るぜっ」

驚くナギといまだに否定するクレスに諦めないラカン。
どうやらいつのまにか皇女との争いは集結したらしい。

それを見つつ、

「なるほどの、話すとボロが出るから滅多に喋らなかったと言う事か」

「なるほどなあ。ジャックが静かだったのはそう言う事か」

などとゼクトと詠春が納得したように呟く。

二人の言うとおりであまり喋るとラカンが師匠、と言ってしまう恐れがあった為に自重していたのである。

「つてことはファーストであるアンタは不老不死って事か？」

「まあそうなるな。そしてクレマンヌもそうなる」

ガトウの疑問に答えつつクレスがクレマンヌの事へと話をつなげた。

「それは、どういう事じゃ？吸血鬼で言う眷族の様なものか？」

どこか落ち着きなくアリカが口を挟んだ。

「そうではない。まず、こいつは私と同じ存在だ」

「は？同じ？」

意外な事に最初に疑問を口にしたのは詠春だった。

「言うなれば生また時も場所も性別も違うが魂が双子と言ったところだ」

「魂、ですか？」

クレマンヌの事は詳しく話していないせいかアルビレオも口を挟む。

「そうだ、本来ありえない存在。異質にして同質、表裏一体の鏡、
そう言う存在だ」

「悪い、良く意味がわからねー」

静かにしていたナギが口を開くがどうやらはさっぱりな状態だったらしい。

「例えば鏡に写った自分があるだろう？それが自分の意思をもって動きだしたらそうだ？」

「何か変な気分かも、ですね」

遠慮がちに、神妙そうにタカミチが言う。

「私にとってのそれがクレマンズだ」

「私にとってのクレスだね」

「まあ要するに不思議な奴なんだなっ」

一人納得したように言うナギだがその言葉からやはり理解はしていない事がうかがえる。

「まあそれでいいならいいが……。彼女が死んだ時にその魂は私と合わり私達は一つになった」

「は？死んだ、ってここにいるじゃねえか」

話題がクレマンズへと移ったせいも過去に命を救われてから彼女に懐いているラカンがナギより先に反応を示す。

「賞金首となった私は追手を欺く為に姿を変える事にした。特異な術式と私の中にある彼女の魂を利用してな。そして私の中にもう一つの意味としてクレマンズが生まれた。その後、ここ三百年程度前の話だがそれを人形へと移し別々に行動できるようにした結果……」

「ここにいてわけ」

「三百年？まさかあの時の光と魔力は……」

「そうだ。お前があの日、城であったこいつは人形に映った直後だった」

「なるほど……」

長年の疑問が解消されたとしてもいづかのようにアルビレオがふふふとお得意の笑みを浮かべる。

「待つんじゃない、こんなにしっかりとしとるのにこやつは人形と言うのか？」

「体が人形ってだけで意思是、ちゃんとした魂があるけどね」

「痛覚の遮断などができるというのは……」

「人形だからだね。仮に壊れても新しいのを用意してもらえればそれで済むし。体を維持できなくなったとしてもその間はクレスの中に戻るだけだから」

テオドラと詠春の間にさらりと答えるクレマンズだが自分がとんでもなく非常識な事を言っている自覚は無いらしい。

その様子からそれが普通だと言う事なのだろうと詠春やガトウと言った面々は内心頷く。

「規格外とはこの事か。さすが八百年を超えて生き、帝都守護聖獣と渡り合ったかこがるだけの事はあるということじゃのう……」

幼い容姿ながらもどこか達観し納得したようにテオドラも頷いた。

「さすがにお子様でも師匠の凄さは理解できるってことか」

「なんじゃと？ お主イマイチ妾の事を理解しておらぬようじゃな……」

そんな安く軽い言葉から再びラカンとテオドラはじゃれあい始めた。

「姫さんは全部知ってたのか？」

「クレマンズ殿の……」

「呼び捨てでいいよー。クレスの事も」

「クレマンズのことは初耳じゃったがの。クレス、殿の事は知っていた。代々この指輪と共にクレス殿の事が王家、王女に伝わっているのじゃよ」

「そう、なのか」

呼び捨てで良いと言われたが初対面のクレマンズはともかくクレスをすぐさま呼び捨てにできなかったらしい。
そんなアリカにどこか思案気にナギが頷いた。

「アリカ、新しいものだ。持っている」

「うむ」

「なあ、クレス。ちょっといいか？」

「どうした」

「いいからいいから」

すぐに考え事は終わったのかナギはクレスがアリカへ新しい指輪を渡し終わるのを見てから声を掛けた。

こっちで話そうぜとナギはクレスを連れて少し離れた位置で密談を始めるのであった。

こうして王女たちの救出は無事に行われここに帝国、連合両方から追われる者達が集結したのであった――――

役者は集いて（後書き）

赤き翼の隠れ家

荒野に立っている時点で隠れてはいない。

人が立ち入らない様な僻地的な意味では隠れていると言ってもいいのかもしれない。

仲間

過去において明確に『仲間』と言った存在は居なかった。

細かく考えず纏めれば全員仲間と言えるかもしれないが、

ドロシーは道連れであり（クレスからすれば）最高の友、心友。

ユンは単純に友達。アテナは理解者。

アイナはそれ以前の存在。

エヴァは娘の様な妹で弟子。

そしてルクレッツィアは思い人（両想い）であり、

クレマン스는鏡、共同体。

不老不死

クレマン스가不老不死である事について赤き翼のメンバーは本人から聞いていたためアリカが口を挟む事となった。

変な気分かも

タカミチの言葉。

クレスが初めてクレマンスに会った時の感想は「気味が悪い」

要するに不思議な奴

ナギの言葉。

別に間違っではないが説明にはなっていない。

人形の体

体を維持できない様な場合魂はクレスに戻るだろうが同時に移植されていた仮想人格の方は所詮術式であるため損壊状況次第では戻ったとしても欠損しているか戻れず壊れてしまう可能性もある。

壊れてしまった場合再び仮想人格の形成を行わなければならない。

しっかりしてるのにうんぬんでゼクトが人形なのかと聞くが彼の場合造物主ないしその使途的な意味合いでの人形と言うのが先入観、前知識であるため他の人より食いつきが良かったという話し。

ナギ

クレスになにか話がある模様。

アリカ

助けに来るのはクレスであるところかで期待していた。

クレマンス

秘密を明かす

クレス

少しばかりその身を語る

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3860s/>

どこまでも。それが約束

2012年1月13日00時58分発行